

# 宿 向 山 遺 跡

一般国道159号線押水バイパスに係る  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1987

石川県立埋蔵文化財センター



# 宿 向 山 遺 跡

一般国道159号線押水バイパスに係る  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1987

石川県立埋蔵文化財センター





宿向山遺跡全景1(北から)



宿向山遺跡全景2(北から)



## 例 言

1. 本書は、石川県羽咋郡押水町宿地内に所在する宿向山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、一般国道159号線の押水バイパス改築工事に係るもので、建設省北陸地方建設局金沢工事々務所との委託契約に基づき、昭和57、58年度に石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 遺跡の調査期間、面積および発掘担当者は次の通りである。  
昭和57年10月5日～昭和57年12月22日 面積 700㎡  
石川県立埋蔵文化財センター 主事米沢義光（現松任農業高校教諭）  
昭和58年6月1日～昭和58年12月17日 面積4,300㎡  
石川県立埋蔵文化財センター 臨時任用講師藤田邦雄（現同センター主事） 囑託土上正男
4. 本遺跡の発掘調査にあたっては次の方々の御教示、御協力を受けた。  
押水町教育委員会社会教育課、同町水道課、村井一郎（石川考古学研究会評議員）、村井伸行（押水町社会教育課主事）、押水町宿、竹生野、麦生、今浜、南吉田、門前、上田、宝達、小川、北川尻、志雄町柳瀬、出浜有志、宮下栄仁（石川県立埋蔵文化財センター調査員）、福谷祐敬（同センター長期研修生）
5. 本遺跡出土の遺物整理作業は石川県埋蔵文化財整理協会に委託し、土器復元は荒木繁行氏の協力を得た。
6. 本書の編集、図版作製は久田正弘、松山和彦（以上同センター職員）、本田秀生（同センター調査員）、戸田樹の協力を得て藤田、宮下が担当した。
7. 出土遺物の写真撮影は横山貴広（同センター調査員）が担当した。
8. 本書の執筆担当は次の通りであり、文末に執筆者名を記入した。  
藤田邦雄 II 2、III 1～3・5・6-(3)・(5)、IV  
北野博司 I 1・2  
松山和彦 III 6-(1)、IV  
宮下栄仁 III 2～4・6-(4)、IV  
米沢義光 II 1、III 2・3・6-(2)、IV  
村井伸行 IV
9. 本書で扱う方位は磁北を示しており、レベルの数値は絶対高である。
10. 図版中の土器の縮尺は $\frac{1}{3}$ である。また図版中の遺物番号は本文挿図中の遺物番号に一致する。（図版78、79の遺物番号は本文168頁の表番号に一致する。）
11. 本書における参考文献は巻末に掲げた。
12. 本調査によって得られた資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保存管理に当たっている。

# 目 次

例 言

	頁
I 遺跡の位置と環境 .....	1
1 位置と地理的環境 .....	1
2 歴史的環境 .....	2
II 調査に至る経緯と経過 .....	6
1 調査に至る経緯 .....	6
2 調査の経過（日誌抄） .....	8
III 遺構と遺物 .....	12
1 概 要 .....	12
2 竪穴住居址 .....	16
3 土坑、溝、ピット .....	59
4 掘立柱建物 .....	78
5 土 塁 .....	82
6 包含層、その他の遺物 .....	82
(1) 旧石器時代 .....	82
(2) 縄文時代の遺物と石器 .....	87
(3) 弥生時代～古墳時代 .....	92
(4) 奈良時代～平安時代 .....	98
(5) 金属製品 .....	120
IV まとめ .....	122

## 挿 図 目 次

	頁
第1図 押水町の位置……………	1
第2図 周辺の遺跡……………	4
第3図 バイパス跡線図……………	7
第4図 宿向山遺跡主要遺構全体図…	13, 14
第5図 調査区グリット配置図……………	15
第6図 1号住居址、1号土坑実測図……………	17
第7図 1号住居址出土土器実測図……………	17
第8図 1号土坑出土遺物実測図……………	18
第9図 2号住居址、4号土坑実測図……………	19
第10図 2号住居址、4号土坑出土土器実 測図……………	20
第11図 3号住居址実測図……………	22
第12、13図 3号住居址出土遺物実測図 ……………	24, 25
第14図 4号住居址実測図……………	27
第15図 4号住居址出土土器実測図……………	27
第16図 5号住居址、5号土坑実測図……………	28
第17、18図 5号住居址出土遺物実測図 ……………	30, 31
第19図 5号土坑出土遺物実測図……………	32
第20図 6・11、7号住居址実測図…	35, 36
第21、22図 6号住居址出土土器実測図 ……………	37, 38
第23、24図 7号住居址出土遺物実測図 ……………	39, 40
第25図 8、9・10号住居址実測図…	43, 44
第26～29図 8号住居址出土土器実測図 ……………	47～50
第30、31図 8、9号住居址出土遺物実 測図……………	51, 52
第32図 12号住居址実測図……………	54
第33図 12号住居址出土土器実測図……………	54
第34図 14号住居址実測図……………	55
第35、36図 14号住居址出土遺物実測図 ……………	57, 58
第37図 13号住居址実測図……………	60
第38、39図 13号住居址出土土器実測図 ……………	60, 61
第40図 1号溝、2号土坑実測図……………	62
第41図 1号溝、2号土坑出土土器実測図 ……………	63
第42図 3号土坑実測図……………	65
第43図 6号土坑実測図……………	65
第44図 6号土坑出土土器実測図……………	65
第45図 8号土坑実測図……………	65
第46図 9号土坑実測図……………	65
第47図 9号土坑出土土器実測図……………	65
第48図 7号土坑実測図……………	66
第49図 7号土坑出土土器実測図……………	66
第50図 10号土坑実測図……………	68
第51図 11号土坑実測図……………	68
第52図 12号土坑実測図……………	68
第53図 14号土坑実測図……………	68
第54図 13号土坑実測図……………	70
第55図 13号土坑出土土器実測図……………	70
第56図 15号土坑実測図……………	70
第57図 16号土坑実測図……………	70
第58図 17号土坑実測図……………	70
第59図 18号土坑実測図……………	70
第60図 10号土坑出土土器実測図……………	71
第61図 15号土坑出土土器実測図……………	71
第62図 19号土坑実測図……………	72
第63図 20号土坑実測図……………	72
第64図 20号土坑出土土器実測図……………	72
第65図 21号土坑実測図……………	74
第66図 22号土坑実測図……………	74
第67図 23号土坑実測図……………	74
第68図 21号土坑出土土器実測図……………	74
第69図 24号土坑実測図……………	75

第70図	24号土坑出土土器実測図	75
第71図	8、9号住居址上面遺構実測図	77
第72図	25号土坑土層断面図	77
第73図	8、9号住居址上面遺構出土遺物 実測図	77
第74図	3号溝、12号溝出土土器実測図	78
第75図	ピット出土遺物実測図	79
第76図	1号掘立柱建物、2号掘立柱建物 実測図	80
第77図	3号掘立柱建物実測図	81
第78図	土塁実測図	83
第79、80図	旧石器実測図	85、86
第81図	縄文式土器実測図	88
第82～84図	石器実測図	89～91
第85図	D14区黒色盛土層出土遺物実測図	93
第86～89図	包含層出土遺物実測図	94～97
第90図	南北調査区地割図	99
第91～93図	北側調査区出土土器実測図	101～103
第94～104図	南側調査区出土遺物実測図	106～119
第105図	包含層、24号溝出土金属製品 実測図	121
第106～109図	土器分類一覧図	126～132
第110図	末森城跡内縄張り範囲予想図	136

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡周辺の航空写真
図版 2～13	垂直写真
図版14～36	遺構写真
図版37～79	遺物写真

## 表 目 次

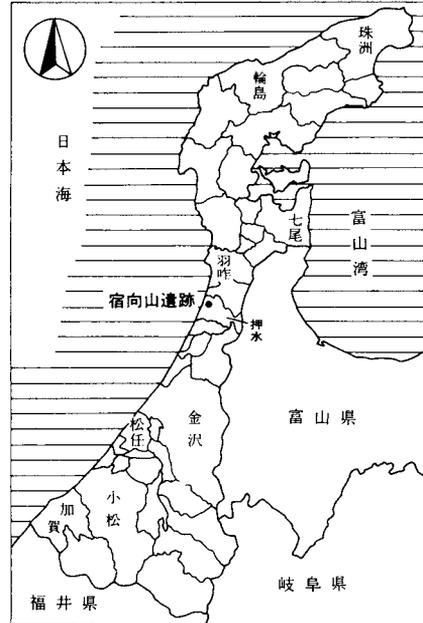
第1表	周辺遺跡地名表	5
	遺物一覧表	
	土器観察表	137～166
	石器一覧表	167
	金属器、鉄滓一覧表	168

# I 遺跡の位置と環境

## 1 位置と地理的環境

石川県は、日本海に突出した能登半島とその南西に広がる加賀地域とに二分される。宿向山遺跡はその境界に近い、能登南部の羽咋郡押水町宿地内、金沢から国鉄七尾線で約1時間、押水町宝達駅と志雄町敷波駅のほぼ中間に位置する。

押水町は、富山県との県界に沿い能登半島の脊梁をなす石動・宝達山地の南西部に位置し、総面積53.73km<sup>2</sup>の広さを有する。海岸線は単調で、それに沿って分布する外列砂丘、その内側には標高約40mと発達した中列砂丘、内列砂丘が散在し、国鉄七尾線の走る中央部は潟湖の埋積した小規模な沖積低地（押水平野）となり、東半は比較的急峻な宝達山系の山並が連なる。ここから流れ出す諸河川は急流が多く、宝達川は県下随一の天井川として知られ、前田川・大坪川も類似した特徴を示して山麓部では扇状地を形成する一方、相見川・大海川と共に海岸部では古砂丘・新砂丘を浸食作用により寸断して日本海にそそいでいる。



第1図 押水町の位置

能登の最高峰＝宝達山（標高637.4m）は花崗岩類・飛驒変成岩類よりなり、古来、宝の産する山として“宝達”山と呼ばれてきた。中でも金の算出は有名で、最盛期の天正～慶長年間には全国から坑夫が集まり12箇所の坑道が掘られたという。また宝達山の螢石は、結晶の大きいことと淡緑色の美しさにおいても著名である。ほかにも石灰岩が産する。薬草ではオウレン・マタタビ・センブリなどが生育し、特に葛根から加工した宝達葛は有名である。

この地域は、北は押水町宿（相見川流域）から南は高松町瀬戸・中沼（大海川流域）までが押水低地を介した一つの地理的なまとまりとして捉えられるが、ここに報告する宿向山遺跡はその北東辺、宿・竹生野遺跡群（仮称）の一角に位置する。当地は宝達山地と海岸砂丘が最も迫った地点で、古来、加賀から能登（邑知地溝帯）へ通ずる交通の要衝となってきた。遺跡は宝達山地から派生した末森山（標高138m）の西麓、標高約40m前後の海成段丘上に立地する。周囲は急斜面に囲まれ、周辺水田面との比高は約30mを測る。通称“テラヤシキ”、調査前の現状は山地である。狭小な平野でありながら、排水不良の低湿地と灌漑を必要とする扇状地を合わせもち、貫流する河川が、平常は乾いて河床が露呈しているにもかかわらずひと度豪雨があると奔流のごとく暴れまわるといった状況から考えて、平野部は少なくとも古代以前においては住居不適の地であったことが想像できる。

（北野）

## 2 歴史的環境

旧石器時代 石川県下で、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての石器、もしくはその可能性の高い石器が出土した遺跡は僅かに11例が知られるに過ぎない（北陸旧石器文化研究会1986）。そのうち3遺跡は押水町に所在しており、なかでも御館遺跡は、昭和35年、秋田喜一氏によって石川県で初めてその存在が確認された学史的に重要な遺跡である。現在押水町では、御館遺跡・正友はちじがり遺跡（秋田1964）・免田一本松遺跡（1986県埋文センター調査）の南部の一群と、宿東山遺跡（1985・86県埋文センター調査）・宿向山遺跡・竹生野遺跡（越坂1983）の北部の一群の2グループ、6遺跡が確認されている。何れも沖積地に突き出した洪積台地（御館は更新世末の旧河川堆積層）上に立地し、この時期の遺跡のあり方を示している。

縄文時代 遺跡は西に開けた宝達山山麓の緩斜面を中心に、各水系ごとにまとまり（4グループ）をもって存在し、中期以降は内列砂丘上にも進出する。

早期～前期には、押型文土器を伴う高松町八野遺跡が大海川の支流野寺川沿いに存在する（1986津田耕吉氏発見）。ほかには、宝達川上流の標高約300mの高所に立地する宝達きのめ谷遺跡（秋田1969）、宿向山遺跡、宿東山遺跡などがあり、その立地は先土器時代とはさほど変わらず、規模も小さいようである。前期末～中期前葉には、宿東山遺跡（相見川グループ）、上田地頭方遺跡（秋田1954）（宝達・大坪川グループ）、東間さかて山遺跡（嵯峨井・松永・村井1965）（前田川グループ）、北川尻すわ山遺跡（秋田1956）（砂丘）があり、分布からみれば、このころには各水系を単位としたまとまりが既に形成されていたのではないかと考えられる。中期末から後期には、紺屋町ほんでん遺跡（嵯峨井・村井1969・70）や上田うまばち遺跡（高堀・西野1983）で集落跡が確認されており、各河川が平野部へ出る位置に拠点的なムラが形成されたものとみられる。晩期は、東間たけのこし遺跡が知られるにすぎない。

弥生時代 後期以前の遺跡には竹生野トリゲ山遺跡（谷・西野1967）・北川尻オサノ山遺跡（村井1966）・高松町中沼C遺跡（町教委1985・86調査）がある。ともに内列砂丘上に立地する中期の遺跡で当地域における水稻農耕の確実な開始期を示すとともに、後者では竪穴住居跡も確認されており該期の集落立地のあり方を示唆している。竹生野付近では太形蛤刃石斧の出土が伝えられている（相見小学校蔵）。後期後半には遺跡数も増え、相見川水系の宿・竹生野遺跡群、前田川・大坪川水系の冬野・免田一本松（県埋文センター1986調査）・御館下遺跡（浜岡1968）、上田出西山（三浦1980）・堂田遺跡、大海川水系左岸の中沼C・二ツ屋遺跡（浜岡・吉岡1962）の3グループが形成される。この3グループのあり方は、生産基盤となる沖積低地のあり方にも規制されている（大きくは宝達川の以北と以南で、後者を旧大海潟周辺の1グループとして捉えることもできる）。

古墳時代 前期～後期を通して集落立地は弥生時代後期のそれを引き継ぎ、古墳群も各グループで継起的に営造される。

北群では、前期に宿東山古墳群、中期には埴輪を伴う河原三ツ子塚古墳群、中期末から後期には全長56.5mの前方後円墳をふくむ竹生野天皇山古墳群、後期末には山崎横穴古墳群が存在す

る。南群では、前期から中期に冬野小塚古墳群、埴輪を伴う森本（冬野）大塚古墳（橋本1966）、後期には横穴式石室墳からなる東間宝殿山古墳群（秋田1935）、後期末には坪山横穴古墳群などが存在する。大海川左岸においても二ッ屋古墳群（高松町大海公民館1971）等の後期古墳群がいくつか存在する。

後期古墳は各水系の上流よりと大海川左岸の砂丘に集まる傾向があるが、なかでも前田川水系は東間宝殿山古墳群やいくつかの横穴古墳群（坪山・紺屋町）が集まり、他のグループに対しての優位性を窺える。そのことは、当地域に於ける須恵器生産の開始（紺屋町ムカイノ窯跡ほか7世紀代の窯跡群）がこの群内で始まったことと決して無関係ではあり得なかったと推察され、同時に地方窯の成立の契機とその被葬者集団との関わりを示すものとして興味深い。

奈良・平安時代 該期の遺跡のあり方の特色は、砂丘地への進出が顕著になることと、旧大海潟縁辺部に一つのまとまりが見られることである。

宿・竹生野遺跡群では、台地上のみならず砂丘地にその分布を広げ、8世紀～11世紀まで古代を通じてほぼ連続と集落が営まれる。相見川と宝達川に挟まれた押水平野中央部の砂丘上（麦生・小川）でも遺跡が増加する。南部では旧大海潟を見おろす位置に、1979年発掘調査（同遺跡調査団）がなされ、8世紀前葉～中葉の27棟の竪穴住居と3棟の掘立柱建物が検出された北川尻ホシバ山遺跡が存在する。本遺跡は、和銅開珞や銅製鉸具を出土した竪穴住居があり、一定量の墨書土器と掘立柱の倉庫様建物を伴う集落で、関東地方などでみられる東国的な律令村落の一類型として興味深い。旧大海潟の周辺に点在する遺跡群は、律令制下の“大海郷”の母体となるものであろう。

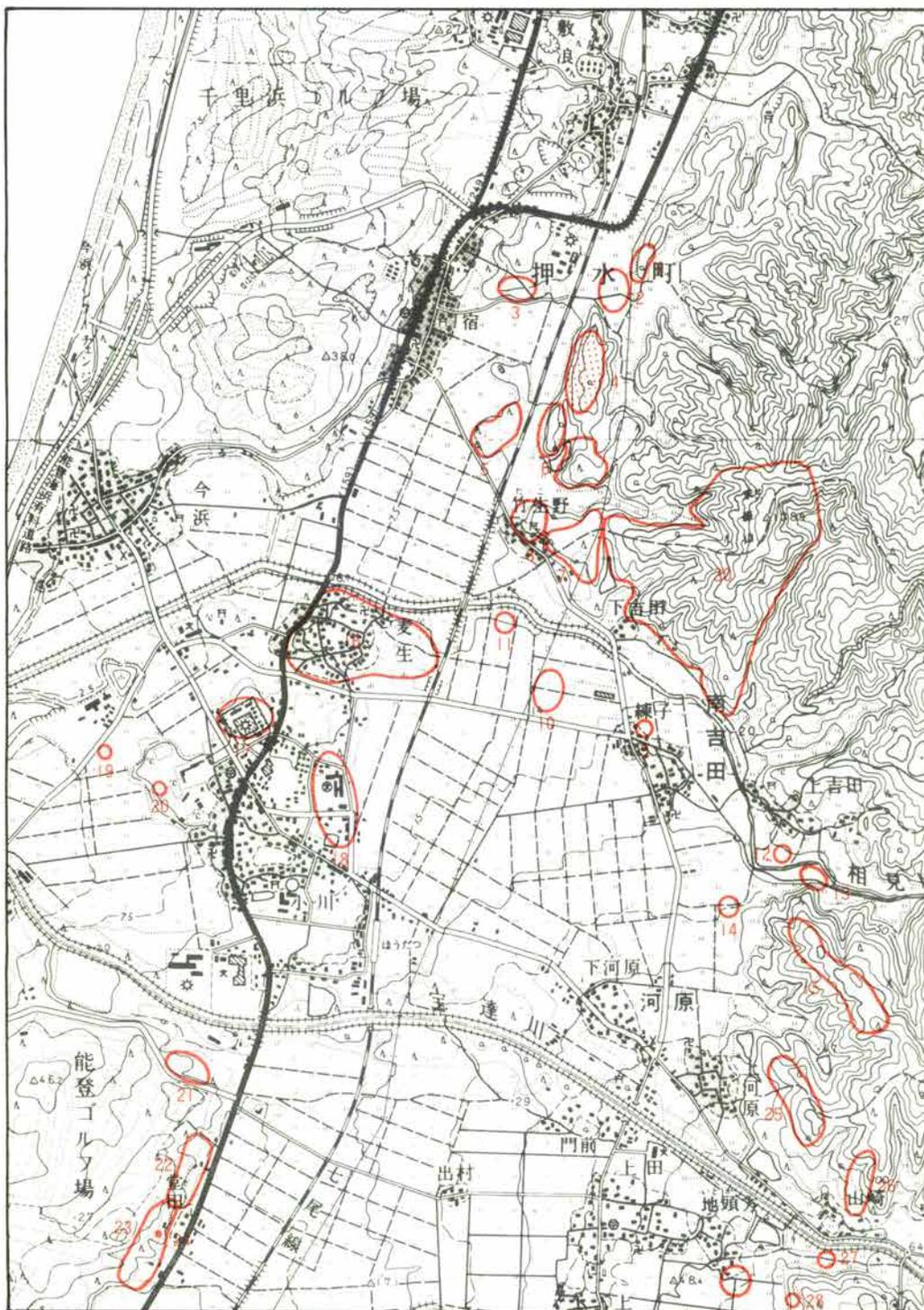
中世以降 現在判明している中世及び近世初頭の遺跡は極めて少なく、末森城跡と御館館跡を除けば、墳墓遺跡と遺物散布地が数カ所確認されているにすぎない。

末森城跡は、宿・竹生野遺跡群の背後、標高138mの末森山にあって加能越三国の国境に位置する戦略上極めて重要な山城である。天正十二年（1584）、越中にあった佐々成政と加賀の前田利家との間で北陸の覇権をかけて争われた「末森合戦」の舞台となったところである。御館館跡は近世初期に十村役をつとめた岡部氏の居館と伝承されてきたもので、二重の堀を有する複郭式の長方形館と推定されている。主要部の保存状態は良好である。

以上の概観からも分かるように、本遺跡周辺はいつの時代においても常に押水地域の中でひとつの核となる遺跡群であった。それは先にも述べたように、地理的に交通の要衝にあることがもっとも大きな要因としてあげられ、ほかにも相見川流域にあって生産基盤となる比較的安定した低地を抱えていたことなどが考えられる。

宝達山に抱かれたこの押水の里は、石川県の考古学界の大先達、秋田喜一はじめ嵯峨井亮、村井一郎といった人物を輩出し、考古学にゆかりの深いところである。この3人に共通するのは、考古学にとって最も重要なフィールドワークをその活動の基本とすることである。それはこの地が考古学を志すものを魅了する歴史的な自然環境を具備しているからにはかならない。この環境・風土が後世永く伝えられることを願うとともにここに紹介した遺跡もその多くは3氏の調査活動の成果であることをあらためて明記しておきたい。

（北野）



第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

No.	枝No.	名 称	所 在 地	種 別	時 代	備 考
1		宿エゾエ山中世墳墓群	押水町宿	墳 墓	中 世	径1～3m高さ1～1.5m の2基以上
2		宿エゾエ遺跡	” ”	包 含 地	奈良・平安	
3		宿ホシバ山遺跡	” ”	”	不 詳	
4		宿向山遺跡	” ”	包 含 地	旧石器～江戸	昭和57年、58年県教委調査
5		竹生野トリゲヤマ遺跡	” ”	包 含 地	弥生、平安	
6		宿東山遺跡	” ”	包含地、古墳	旧石器～奈良	昭和60年、61年県教委調査
7		竹生野遺跡	押水町竹生野	包 含 地	旧石器～中世	昭和54年、57年県教委調査
8	1	竹生野天皇山1号墳	” ” (テンノウザン)	古 墳	古 墳	前方後円墳 長軸50m
	2	” 2号墳	” ” ( ” )	”	”	
	3	” 3号墳	” ” ( ” )	”	”	
9		南吉田穴田遺跡	押水町南吉田(アナダ)	包 含 地	不 詳	
10		南吉田葛山遺跡	” ” (クズヤマ)	”	”	昭和56年県教委調査
11		麦生かわだ遺跡	押水町麦生(カワダ)	”	”	
12		南吉田古屋敷遺跡	押水町南吉田(フルヤシキ)	”	”	
13		南吉田堂の庭遺跡	” ” (ドウノニワ)	”	”	
14		南吉田堂の後遺跡	” ” (ドウノウシロ)	”	”	
15		南吉田向山中世墳墓群	” ”	墳 墓	中 世	
16	1	麦生五枚田遺跡	押水町麦生(ゴマイダ)	包 含 地	不 詳	
	2	麦生てらお遺跡	” ” (テラオ)	”	”	
	3	麦生ござばたけ遺跡	” ” (ゴザバタケ)	”	不 詳	
17		今浜新保山遺跡	押水町今浜	”	縄 文	
18		今浜墓田山遺跡	” ” (ハカタヤマ)	”	奈良～平安	
19		今浜A遺跡	” ”	”	不 詳	
20		今浜B遺跡	” ”	”	”	
21		小川A遺跡	押水町小川	”	”	
22		堂田遺跡	押水町堂田	”	奈良～平安	
23		上田出西山遺跡	押水町上田出(ニシヤマ)	”	縄文～平安	昭和54年、昭和58年～60年 町教委調査
24		米出ドダヤマ中世墳墓群	押水町米出(ドダヤマ)	墳 墓	中 世	
25	1	河原三つ子塚1号墳	押水町河原(ミツゴツカ)	古 墳	古 墳	円墳径20m高さ5m、6基 以上の古墳群
	2	” 2号墳	” ” ( ” )	”	”	
	3	” 3号墳	” ” ( ” )	”	”	
	4	” 4号墳	” ”	”	”	
	5	” 5号墳	” ”	”	”	
	6	” 6号墳	” ”	”	”	
26	1	山崎1号横穴	押水町山崎	古 墳	古 墳	
	2	” 2号横穴	” ”	”	”	
	3	” 3号横穴	” ”	”	”	
	4	” 4号横穴	” ”	”	”	
	5	” 5号横穴	” ”	”	”	
27		上田永畑遺跡	押水町上田	包 含 地	不 詳	
28		上田狐塚古墳	” ”	古 墳	古 墳	円墳
29		上田地頭方遺跡	” ”	包 含 地	縄 文	
30		末森城跡	押水町下吉田	城 跡	中 世	昭和61年町教委分布調査

## Ⅱ 調査に至る経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

宿向山遺跡の調査は、一般国道159号線押水バイパス改築工事に伴う緊急発掘調査によるものである。

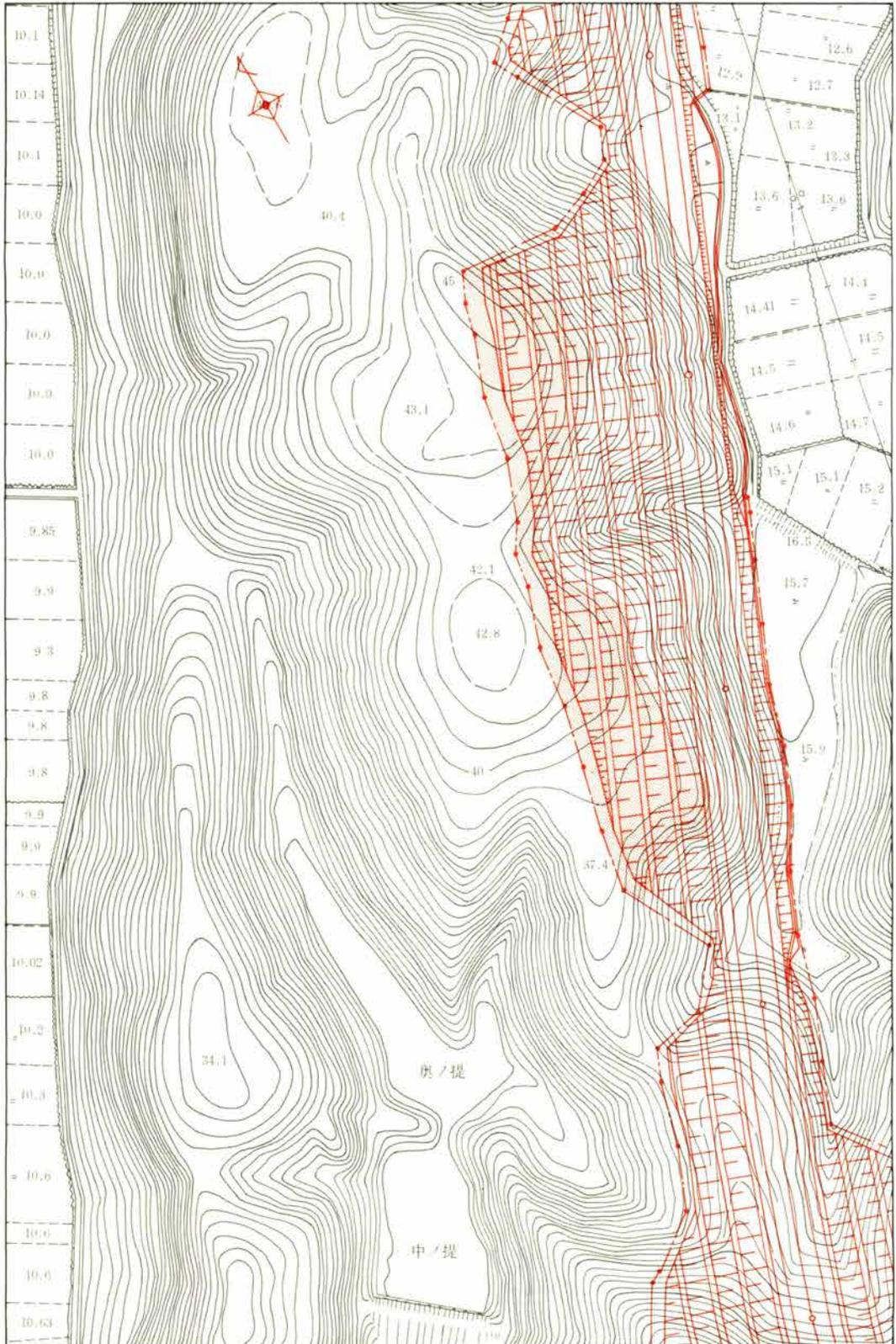
近年、口能登の石川県羽咋郡志雄町から河北郡高松町間を通る一般国道159号線の交通渋滞は著しい。これを緩和するため一般国道159号線のバイパス機能を持つものとして、同国道の山側に新たにバイパスを設置するもので、その設置区間は押水町宿から高松町ニッ屋間の7.06kmである。これまで押水バイパス関連の埋蔵文化財の調査は、昭和54年竹生野遺跡第1次調査、昭和56年南吉田葛山遺跡、昭和57年竹生野遺跡第2次調査、宿東山砦跡（本遺跡仮称）第1次調査、昭和58年度宿向山遺跡第2次調査、昭和60年度宿東山古墳群、昭和61年度冬野遺跡、免田一本松遺跡等が調査されている。

さて、当遺跡の発見は、昭和53年に建設省金沢工事々務所からの分布調査依頼により、当時の文化財保護課の田島主事・平田主事（現在県立埋蔵文化財センター調査研究専門員）の両名が、同路線間を踏査した結果、その存在が判明したものである。遺跡の性格としては末森城関係の遺跡と考えられていた。

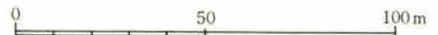
その後、バイパス工事の進展に伴い、昭和57年に建設省金沢工事々務所から県立埋蔵文化財センターへ調査依頼が提出された。調査に先立ち範囲確認と調査費積算のための分布調査が必要で、建設省金沢工事々務所と協議の結果、分布調査の費用はすでに調査を実施している竹生野遺跡第2次調査の調査費の中で使用することが了解された。分布調査は同バイパス用地の立木の伐採終了後の同年7月30日から同年8月7日まで実施した。それは同バイパス用地内の丘陵上の平坦部に6本のトレンチを設定して行った。その結果、丘陵上の平坦面からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構と遺物が多数検出され、遺跡範囲も当初推定されていたものよりも南側に拡がり、路線内の遺跡の推定面積は約5000㎡であることが判明した。

第1次調査は同年10月5日から開始した。調査では丘陵上の調査区へ発掘機材等を搬入するため、重機で丘陵斜面を切り開いての仮の道作りから始まった。その後重機で表土及び木根の除去作業が続いた。作業員を投入しての遺構検出では、隣接する竹生野遺跡の調査と平行したため、作業員の確保が難しかった。そのため当初約2000㎡の表土を除去したが遺構の数も多く、調査は難渋した。その結果、当初予定した約1/3の約700㎡が調査できたにすぎず、天候不良のため同年12月22日で一応中止した。

第2次調査は残りの調査区について行い、昭和58年6月1日から同年12月17日まで実施した。調査が広範囲（約4,300㎡）に渡るため、航空測量調査が採用され第1回目は10月1日、第2回目は12月8日に実施された。バイパス建設工事と併行する形で調査は進められたが、我々の度重なる無理な願いを常に受け入れてくれた治山社の方々に感謝申しあげたい。（米沢）



第3図 バイパス路線図 (S=1/2,000)



## 2 調査の経過（日誌抄）

### 第1次調査（昭和57年度）

10月5日（火）～6日（水） 晴

用地外樹木除去作業。調査区内切株の抜根作業。

10月7日（木）～12日（火） 晴

B～D 1、2区の表土及び表土下部掘り下げ作業。併せて地山面での遺構検出作業開始。

10月22日（金） 晴

C 3、D 3・4区で検出した遺構に石灰を入れる。

10月26日（火） 晴

D 1区の再度遺構検出及び清掃作業。

10月27日（水） 晴

調査区清掃後写真撮影。1号住居址、1号溝掘り下げ作業開始。

11月2日（火） 晴

1号住居跡遺物出土状況の写真撮影。

11月6日（土） 晴

1、2号土坑、2、3号住居址掘り下げ作業開始。

11月13日（土）～15日（月） 晴

バック・ホー等による取り付け道路修復作業。

11月16日（火） 曇

4号住居址の一部と3号土坑掘り下げ作業開始。

11月26日（金） 曇

2、3号住居址、4号土坑出土遺物の実測及びレベル記入作業。

12月3日（金） 晴

2号住居址周辺の遺構精査及び写真撮影。3号住居址平面図実測及びレベル記入作業。

12月9日（木） 曇のち雨

調査区全域のピット掘り下げ作業開始。

12月14日（火） 曇

3号住居址P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>実測。1、2号溝土層断面図実測作業。

12月16日（木） 曇のち雨

C、D 2区平面実測作業開始。

12月20日（月） 曇

遺跡全体写真撮影、D 2・3区平面実測図レベル記入作業。

12月22日（水） 曇

発掘機材搬出。ピット内遺物取り上げ作業。本日をもって昭和57年度の現地調査を終了する。

## 第2次調査（昭和58年度）

6月1日（水） 晴

プレハブ設営。臨時電話の仮電柱を設置し、調査区内の下草刈作業。

6月2日（木） 晴

発掘機材搬入。昨年度調査の連続で10mグリッドを設定する。

6月10日（金） 晴

A～D 4・5区の平面プラン検出作業。住居址6～7棟、溝1条、土坑数基が確認される。

6月14日（火）～15（水） 晴

調査区中央部の土塁状遺構の表土除去作業。

6月20日（月）～24日（金） 晴のち曇

バック・ホーによる土塁以南第2調査区の表土除去作業。5号住居址掘り下げ作業開始。

7月1日（金） 曇

5号住居址遺物実測、取り上げ作業。

7月12日（火）～14日（木） 晴

土塁内精査により多数のピット及び数基の土坑が確認される。

7月26日（火） 雨時々曇

6、7号住居址掘り下げ作業開始。

8月3日（水） 晴

8、9号住居址掘り下げ作業開始。

8月6日（土） 晴

土塁内平面プランを確認し、写真撮影を行う。

8月20日（土） 曇時々晴

6号住居址の床面清掃及び写真撮影を行う。調査区の南北セクションベルト除去作業開始。

8月29日（月）～31日（水） 晴

5～8号住居址掘り下げ及び遺物取り上げ作業。また第2調査区表土下層除去作業開始。

9月6日（火） 晴

8、9号住居址焼土面掘り下げ作業中、管玉出土。

9月10日（土） 晴

5～9号住居址内のピット、土坑等の土層断面図実測開始。

9月19日（月） 晴

第1回目の航空測量に際しての調査区清掃作業開始。

9月27日（火） 曇のち雨

航空測量会社による航測基準点準備作業。

10月1日（土） 晴時々曇

第1回航空測量実施。

10月4日（火） 晴のち曇

土塁断ち割り作業の後土塁取りはずし開始。

10月14日（金） 曇時々晴

土塁内を地山面まで掘り下げ、遺構検出作業。

10月19日（水） 晴時々曇

土塁内遺構検出作業中、新たに2棟の住居址平面プランを確認。

10月20日（木） 晴時々曇

第2調査区の表土下層除去作業を終え、遺構検出作業開始。

10月31日（月） 曇一時雨

8～10号住居址土層断面図実測及写真撮影。

11月7日（月） 曇一時雨

8、9号住居址貼床面下の10号住居址掘り下げ作業。

11月9日（水）～10日（木） 晴時々曇

土塁内の南北、東西土層断面図線引き・実測作業及び写真撮影。

11月15日（火） 晴時々曇

12、13号住居址掘り下げ作業開始。

11月22日（火） 曇時々晴れ

12～14号住居址掘り下げ及び住居址内遺構検出作業。

11月29日（火） 晴

13号住居址内でカマドを検出。

12月2日（金） 晴時々曇

13、14号住居址土層断面図実測及び取りはずし作業。

12月5日（月） 曇のち雨

第2回目の航空測量に際しての調査区清掃作業開始。

12月8日（木） 晴のち曇

第2回航空測量実施。

12月9日（金） 晴時々曇

発掘機材・用具等搬出。

12月10日（土） 曇

プレハブ撤去。

12月15日（木） 曇一時晴

A19区土器溜りの遺物取り上げ作業。

12月16日（金）～17日（土） 曇時々雪

12号住居址土層断面図実測作業。第2調査区遺内のピット番号確認作業。本日をもって昭和58年度の現地調査を終了する。

（藤田）

宿向山遺跡の発掘調査を進めるに当たって、次の方々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

山田豊作、米沢信夫、山田正治、山田三治、米沢和雄、米沢あやの、山田きのへ、山田キヨイ、今井照美、米沢外美子、湯上とめ、福田富士子

松田外行、定免作二、定免信次郎、高野時男、松田邦次、田畑英信、定免きよ子、定免みゆき、田畑寿、原田京子、瀬戸政子、定免たきの、定免国子、松田きみ子、田畑圭子

松井かほる、本田松子、山口春野、柴田君子、中村信子、藤島ときの、山口綾子、荒井とみ子、本多道、荒井礼子、松井静江、上田元美

柏野辰雄、近岡守、田村良博、倉辺昌樹、中橋ふみ子、藤井清子、越野重治

松原栄次郎、岡本実、渋谷とし子、杉本一男、中田弘二

上牧ちよの、上本よし子、上本光子、作本ふみ子

角見きよい、船崎貞子、松浦ちよ、粟原とみ、備後栄子、北みさを



作業風景

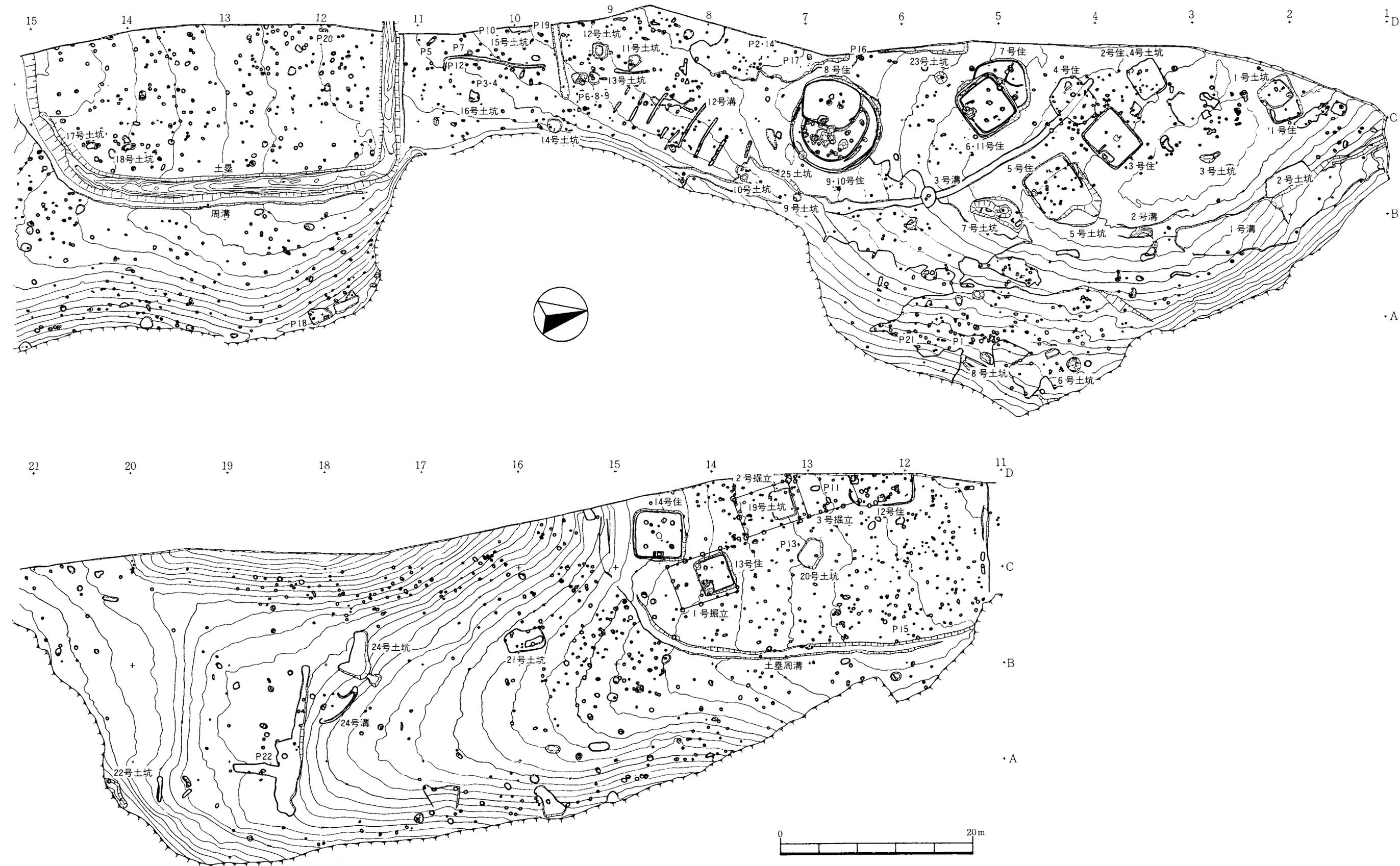
### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1 概要

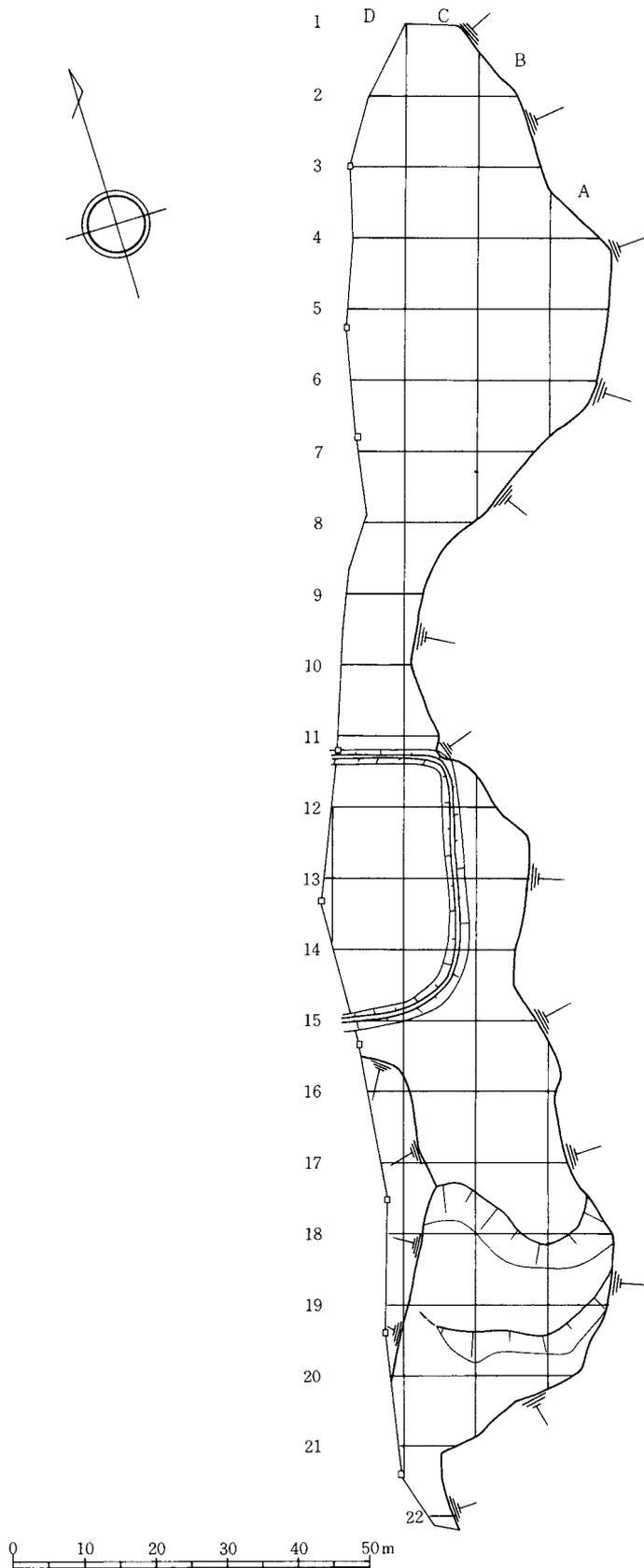
宿向山遺跡の発掘調査は昭和57年度～58年度（1982～1983）にかけて行われた。遺跡は押水町バイパス計画路線の丘陵平坦地に存在することが分布調査によって確認されており、調査区全長は約200m、調査面積は第1次、2次合わせて約5,000㎡という大規模なものであった。調査区を設定するに当たってはまず南北方向を直線で結ぶ基線Cラインを設定し、その北端から10m間隔に区画杭を設け、それを基準として東西に10m方眼のグリッドを組んでいった。グリッド番号は南北方向に1～22、東西方向にA～Dとした。

通称“テラヤシキ”と呼ばれる当遺跡の特徴は、第一に宝達山系の末森山より派生した海拔40m、比高差30mの丘陵上に立地しているということであろう。当初は調査区中央に巡る土塁が目され、末森城に関連する遺跡として捉えられていたが、面調査を行うことによって他の様々なことが分かってきた。遺構としては先ず竪穴住居址14棟が挙げられよう。奈良時代と思われる1棟（13号住居址）を除き他は全て弥生時代～古墳時代のものであるが4号住居址は不確定要素が多く、住居址として特定しない方がよいかもしい。方形と円形の二種類が確認されており、特に9号住居址は径10m近くを測る大型住居である。土坑も7区～10区を中心に数多く検出されているが、本編では遺物の出土があった土坑のみを紹介するに止まった。1号、4号、5号土坑はそれぞれの住居址と切り合い関係を持つものである。6号、9号土坑は、内に焼土壁が残っており、土坑内において何らかの目的で火が使用されたことを物語っている。溝は遺構全体から見ると決して多くなく、また出土遺物も1号溝を除きほとんどが細片である。D7・8区からは東西に軸を持ち等間隔に並ぶ8本程の溝が検出されている。ピットは文字通り無数に散在しているがこの中には自然樹木痕も相当数含まれていると思われる。しかし調査時点では本来のピットと樹木痕の区別はつかなかったことを断っておきたい。掘立柱建物は1号～3号までが確認された。特に興味深いのは1号掘立柱建物であり、13号住居址に重なるようにして建てられている。13号住居址は平面プランを検出できない程丁寧に埋められており、住居址の廃絶と掘立柱建物築造の時間幅は極めて短いように思われる。土塁は末森城関係の遺構として考えている。旧地形が南に傾斜しているため土塁を構築するに当たってはかなりの土を動かしており、それが調査区南側で遺構が激減する主原因ともなっている。なお土塁内上層ではグリッド番号はM1～M8を使用している。（第78図参照）

遺物は旧石器時代～江戸時代までのものを幅広く包含しているが最も量が多いのは弥生時代～古墳時代で次いで奈良時代～平安時代となる。しかし奈良・平安時代の遺構は極めて少なく、遺物のほとんどが包含層から出土している。なお表土下部層、地山直上層、土塁盛土層、落ち込み層、斜面流土層からの遺物は全て包含層の遺物として取り扱った。（藤田）



第4图 宿向山遺跡主要遺構全体图 (S=1/400)



第5図 調査区グリッド配置図 (S=1/1,000)

## 2 竪穴住居址

### 1号住居址、1号土坑

#### 遺構 (第6図 図版16)

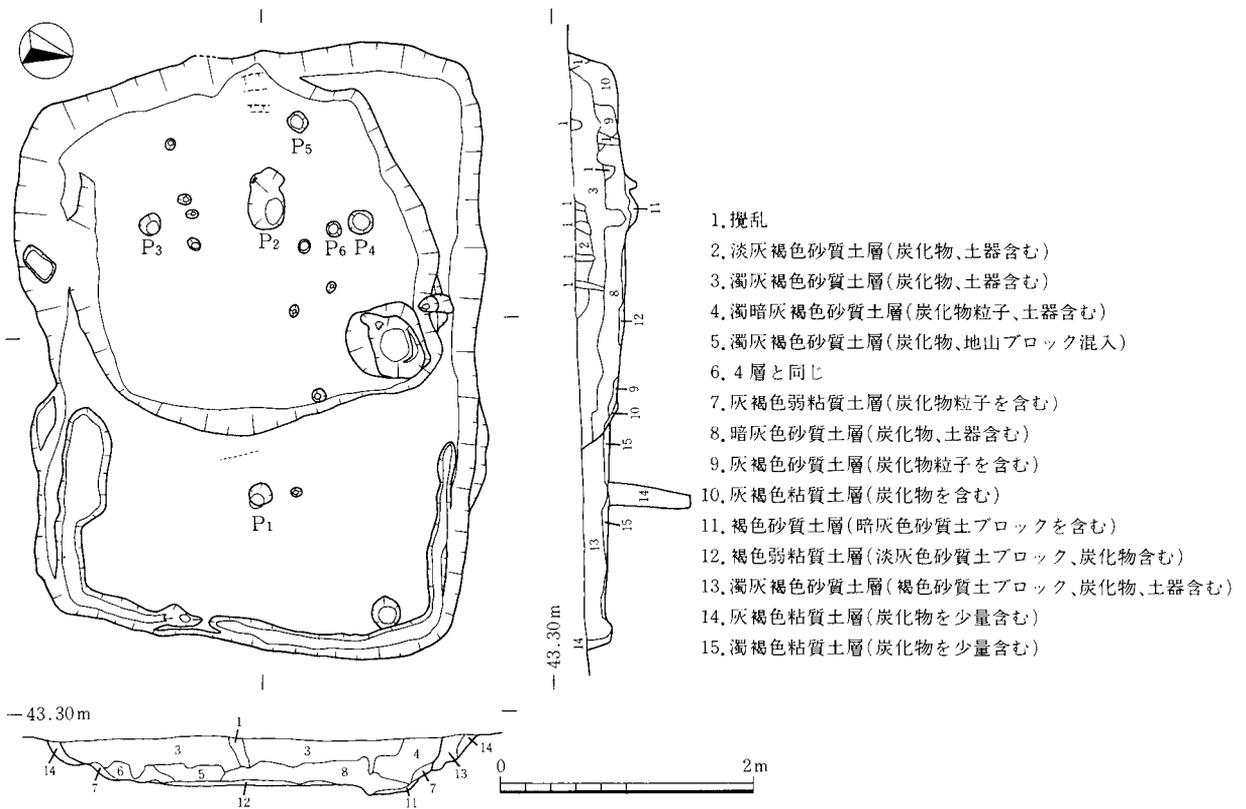
C1~2区、D1~2区にかけて検出された。住居址は地山面の汚れのため検出が困難であった。平面プランは台形を呈し、長辺は400~450cm、短辺300cm、深さ15~25cmを測る。主軸方位はN-81°5'-E。推定床面積は11.3㎡を測る。住居址の東・南・北壁際に幅10~35cm、深さ6~7cmの壁溝があるが、それぞれ途切れている。主柱穴は2本と推定される。P<sub>1</sub>は上端径20cm、下端径13cm、深さ65cmを測り、下端が北西方向へ斜めに入っている。P<sub>2</sub>は上部を1号土坑に削られて大きくなっている。上端径50~30cm、下端径40×25cmの楕円形で、垂直に立ち上がっている。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の柱間距離は約200cmを測る。住居址北壁際には方形土坑が存在する。深さ約67cm、底部径26×23cmで平坦となり、底部より10cmに小さな平坦面がある。この土坑は上部を1号土坑に削られているが、いわゆる特殊ピットである可能性が高い。1号土坑は1号住居址が埋った後に掘り込まれている。この土坑は土層観察から判明したもので、そのプランは隅丸方形と推定される。底面には径10~20cmのピットが10数個存在している。その深さも10cm前後のものとなっている。覆土中からは多くの遺物が出土している。

#### 1号住居址遺物 (第7図 図版37)

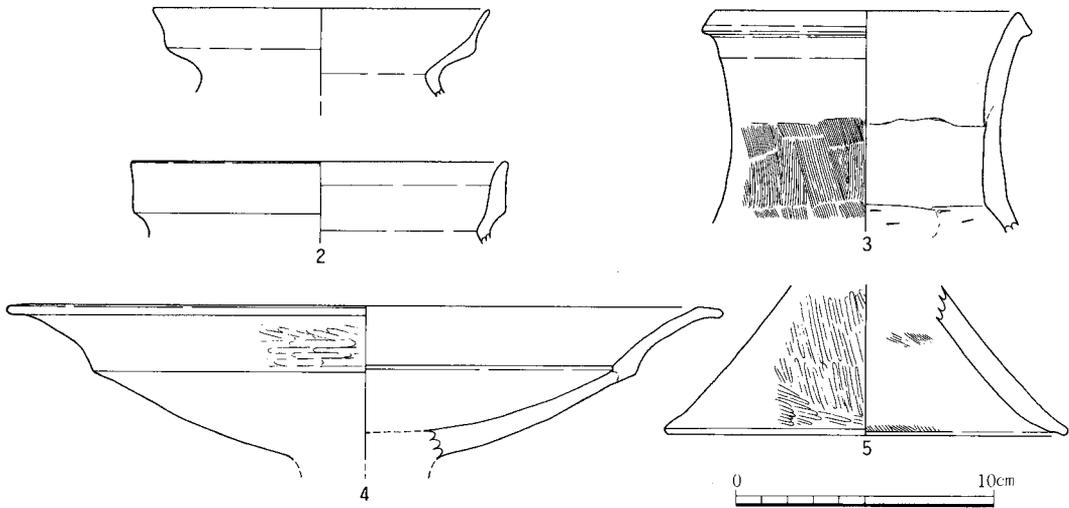
1、2は有段口縁の甕であるが、内面部の段はなくなり「く」の字に近い。1の方は口縁部の器肉は薄くなっている。口径は13.3cmを測る。胎土には粗い石英等の砂粒とシャーモットを含んでいる。2は口径14.8cmを測る。胎土は1と同じである。3は長頸壺で、外反ぎみに頸部が立ち上がり、口縁部は肥厚している。頸部外面は縦位方向のハケ調整をしてから、横位方向にヨコナデ調整している。内面には接合痕も残っている。口径11.7cmを測る。胎土には粗い砂粒と共にシャーモットや海綿骨片を含んでいる。4は高坏の坏部で、口径26.4cmを測る。口縁部内面端に平坦な面を形成している。胎土は精選されているが、シャーモットや海綿骨片を含んでいる。5は高坏か器台の脚部である。胎土は精選され少量の海綿骨片を含んでいる。

#### 1号土坑遺物 (第8図 図版37)

1、2は有段口縁の甕である。1は口縁部内面に強いヨコナデを施し、端部は外反する。2は大型甕の口縁部で、擬凹線を持つ。端部は先細りに仕上げ、胎土には粗い石英等の砂粒を含む。3は口縁部が「く」の字に外反し、肩部の張る壺である。口径は15.2cm、推定器高は27.2cmを測る。胴部外面はヘラミガキをし、内面はハケ調整をしている。胎土は精選された石英等の砂粒とシャーモットを含んでいる。5は有段口縁の壺で、胴部は球形でもやや肩部の張るものと推定される。口縁部外面はヘラミガキをしている。胎土は精選されている。6~8は高坏や器台の脚部である。9は細頸の壺で、外面には化粧土が薄く塗られ、その上から赤彩されている。胎土は精選されやや粗い砂粒と海綿骨片を含んでいる。10は壺の底部である。11、12は球形の土錘である。13は鉄製品で鎌かと推定される。スクリーントーン部には木片が付着している。



第6図 1号住居址、1号土坑実測図 (S = 1/60)

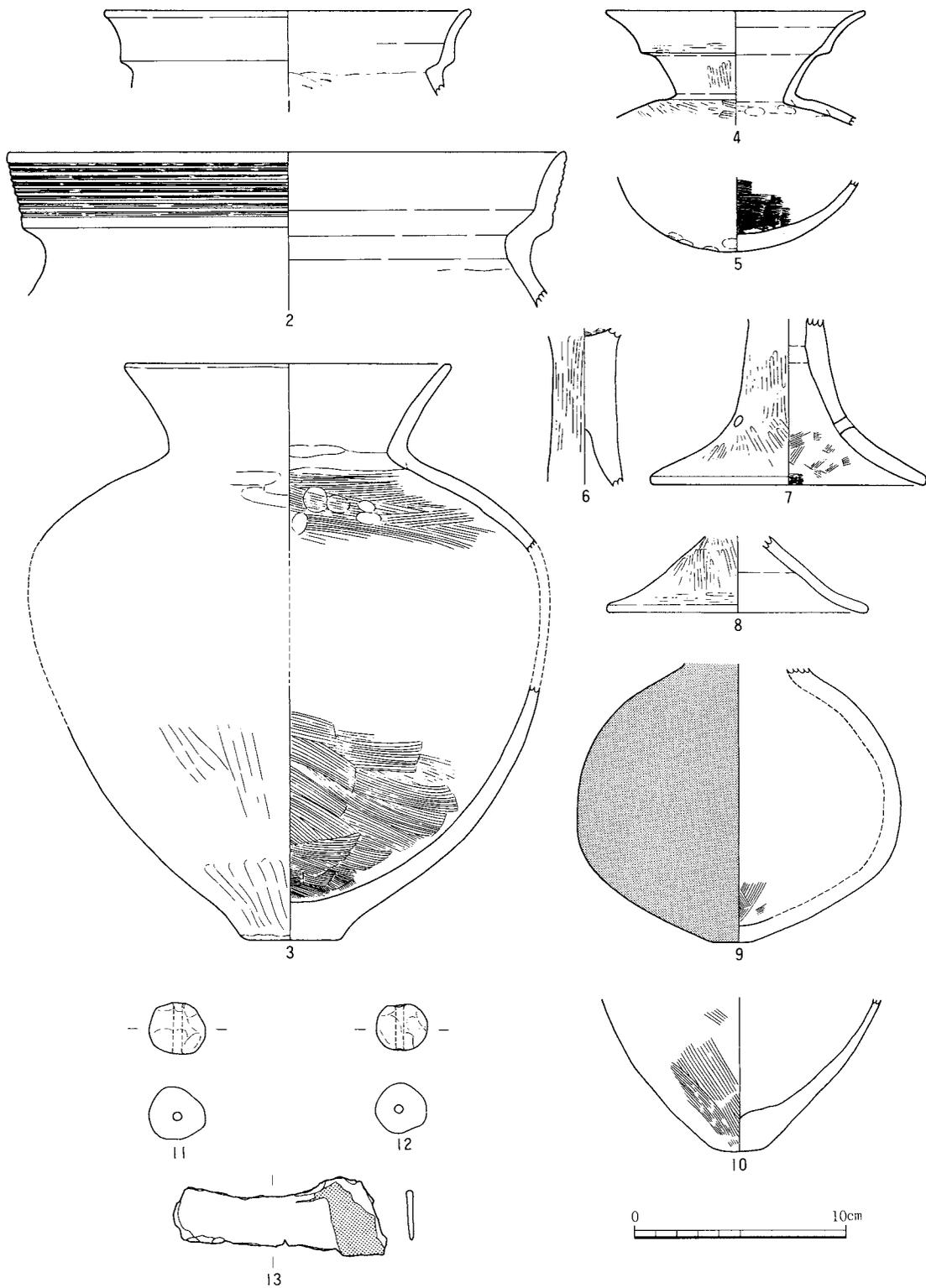


第7図 1号住居址出土土器実測図 (S = 1/3)

2号住居址、4号土坑

遺構 (第9図 図版16)

D3区から検出された。住居址は一辺300~350cm、深さ20cmを測る。平面プランは隅丸方形

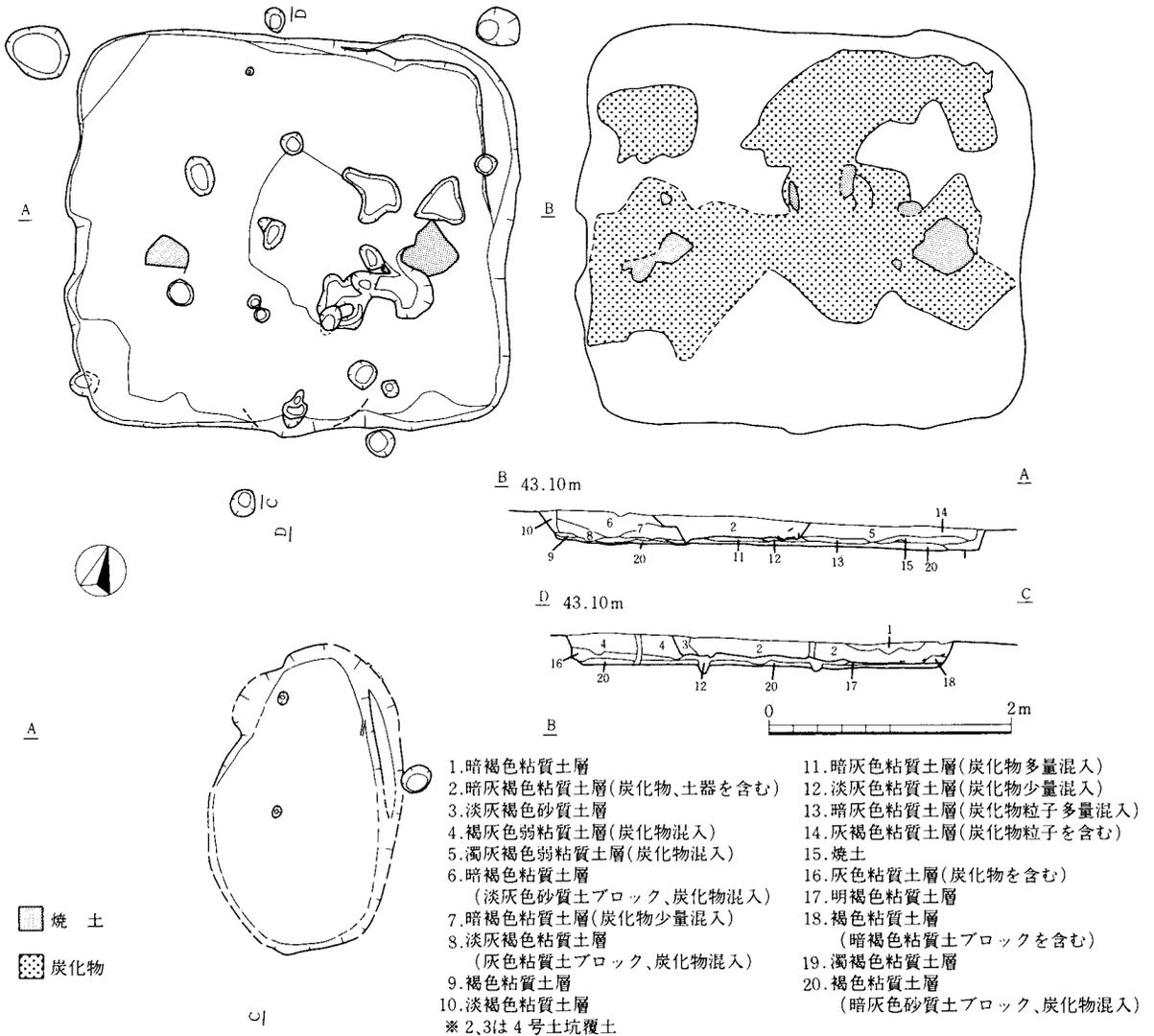


第8図 1号土坑出土遺物実測図 (S = 1/3)

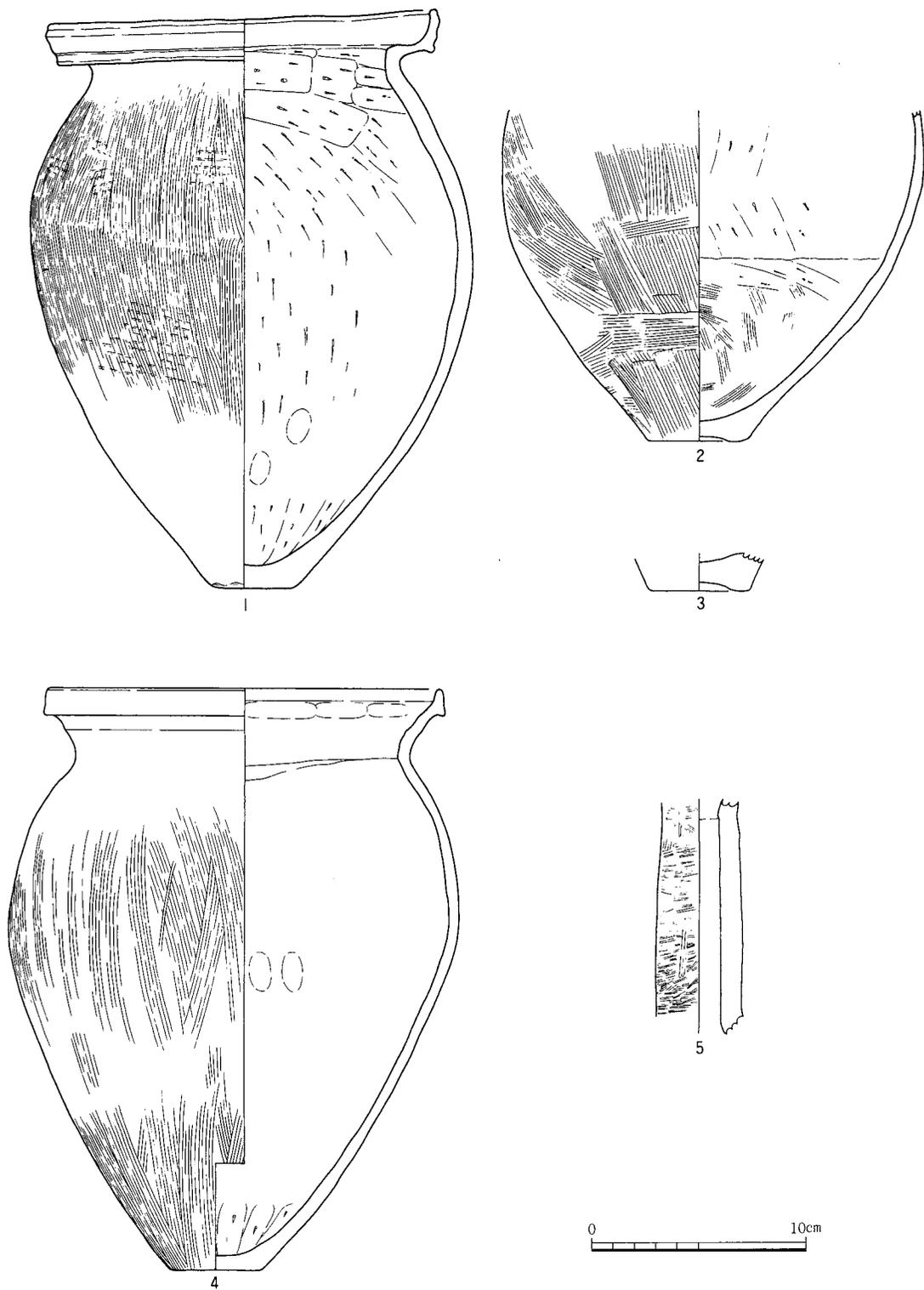
で、主軸方向はN-73°5'-Eで、推定床面積は10.0㎡である。壁際には壁溝は存在せず、床面には薄く貼床がなされている。覆土下部(床面直上)には炭化物を多量に含んだ土層と焼土が検出された。住居址を廃棄する際に何らかの行為をしたものであろう。住居址北東コーナーには、床面より一段高いテラス状の平坦面が存在している。床面には径約10~30cm前後のピットが10個近く存在するが、支柱穴は明確ではない。4号土坑は2号住居址が埋った後に掘り込まれている。この土坑は土層観察から判明したもので、そのプランは楕円形になるものと推定される。東壁では二段になりテラス状の平坦面を作っている。

2号住居址遺物 (第10図 図版38)

2号住居址から出土した遺物は少ない。1は有段口縁の甕で、甕B類に該当する。口径18cm、器高27cmを測る。口縁部の内外面は強いヨコナデ調整をしている。胴部はやや歪んで左右対称ではない。内面はヘラケズリをしているが、器壁は厚くなっている。外面には成形時の平行叩きを



第9図 2号住居址、4号土坑実測図 (S = 1/60)



第10图 2号住居址(1~3)、4号土坑(4,5)出土土器实测图 (S = 1/2)

加えてから縦位のハケ調整をしている。平行叩きの残るものは唯一これだけである。胎土は良好で粗い砂粒を含んでいる。2、3も甕の胴部と底部である。

#### 4号土坑遺物 (第10図 図版38)

4号土坑から出土した遺物は少ない。4は口径18.4cm、器高27.1cmを測る。甕C<sub>2</sub>類に該当する。胴部外面にはハケ調整している。内面はヘラケズリしているようであるが、磨耗のため不明である。5は高坏か器台の棒状脚である。

### 3号住居址

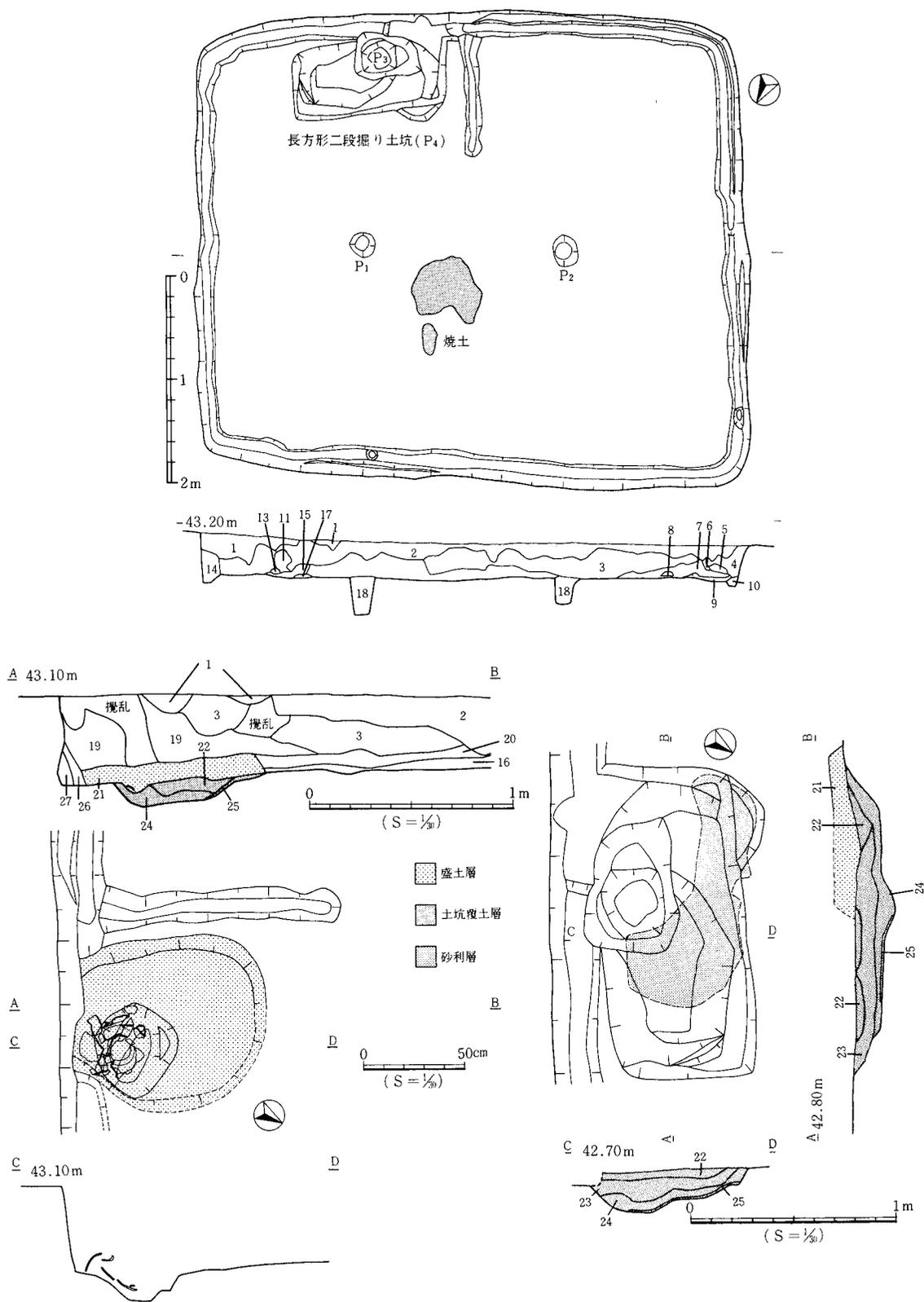
#### 遺構 (第11図 図版17)

C3～4区、D3区にまたがる形で検出された。遺存状況は極めて良好で、長辺約540cm、短辺約450cm、深さ35～40cmを測る。短辺の西壁部が東壁部より若干長いが平面プランは隅丸長方形を呈している。主軸方向はN-63°5'-E。推定床面積は約20㎡である。壁の掘り込み角度は急で直角に近い。西壁から南壁にかけてと北壁の一部壁面には、壁に沿って幅数cmの平坦面が残っていた。壁溝は幅15～20cm、深さ6～7cm程度で、南壁中央より東側の長方形二段掘り土坑の部分で途切れている。ここから床面中央部に向って直角に、長さ約120cm、幅約15cm、深さ約5cmの浅い溝が作られていた。床面は平坦で硬くしめられている。床面から検出された柱穴は2個で、住居址の主軸線上に乗っている。P<sub>1</sub>は上端径約23×30cm、下端径約16cm、深さ24cm、P<sub>2</sub>は上端径約22cm、下端径約12×14cm、深さ約35cmを測る。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の柱間距離は約200cmを測る。炉址は地床炉で、住居址主軸線よりやや北西にあり、かなり焼けている。

長方形二段掘り土坑(P<sub>4</sub>)は、3号住居址の土層観察用ベルトに一部かかり、床面を精査したところ長方形プランとこのプランの内外から約1～2cmほどの砂利が存在していることで確認された。これまでいわゆる特殊ピットと呼ばれていた遺構である。この土坑検出面ですでに甕(第13図22)が顔を出しており、土坑との関連性を注意しながら調査を進めた。

その結果、この甕は長方形二段掘り土坑(P<sub>4</sub>)が床面と同一レベルまで埋め戻された後、内部に小さな平坦面のあるP<sub>3</sub>(径約50～40cm、深さ約17cmで楕円形)が掘られ、その中に埋納し、灰褐色粘質土(第11図土層断面図21層)で埋められていた可能性が高い。この盛土層は床面上に高さ約10cm、一辺約80～90cm四方に広がっていたものと推定される。ただ、その性格は不明である。

さて、長方形二段掘り土坑(P<sub>4</sub>)であるが、内部には平坦面があり、壁側に片寄ってピット状の掘り込みがある。この土坑の大きさは長辺150cm、短辺80cm、深さは平坦面で約12～22cm、ピット状の掘り込み底部で約42cmを測る。土坑は床面から掘り込まれており、底部を砂利敷きとしその一部が床面にも広がっている。その上に汚れて暗い灰褐色粘質土や褐色粘質土を入れている。さらにその上部には粘性の強い褐色強粘質土を入れ、最終的に床面レベルまで埋め戻している。つまり、この覆土は土坑を作る時に出土掘削土(地山)で埋め戻していないことが特徴である。住居址壁溝が土坑覆土の一部を切って作られており、この切り合い関係から土坑は住居址構



第11図 3号住居址実測図 (S = 1/50)

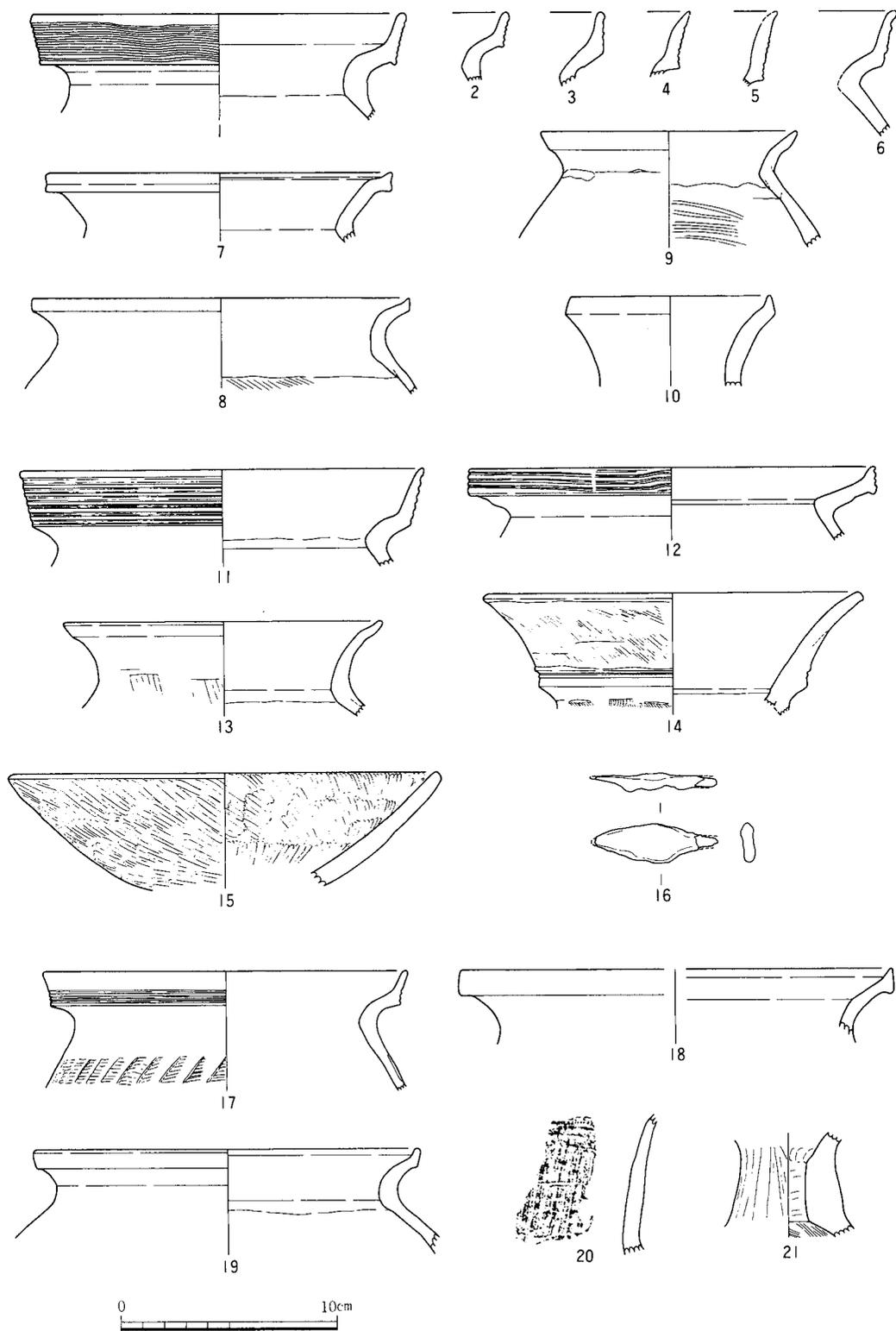
築時の短時間内に作られ、再び埋め戻されたものである。このことが他の住居址から検出されたいわゆる特殊ピットが、住居使用時も開口していたのと大きく違う点といえる。なお、この土坑（P<sub>4</sub>）から出土した土器には29、30がある。

### 3号住居址・長方形二段掘り土坑（P<sub>4</sub>）土層

1層濁淡灰褐色砂質土（炭化物混入） 2層灰褐色砂質土（暗褐色粘質土ブロック、炭化物多量に混入）  
3層暗褐色粘質土（淡灰色砂質土ブロック多量に、炭化物混入） 4層暗灰色弱粘質土（暗褐色粘質土ブロックを少量、炭化物混入） 5層暗褐色弱粘質土 6層3層と同じ 7層灰色砂質土（暗褐色粘質土ブロック、炭化物多量に混入） 8層暗褐色強粘質土（炭化物少量混入） 9層暗褐色粘質土（淡灰色砂質土ブロックを少量、微細な炭化物混入） 10層淡灰褐色粘質土 11層淡灰褐色粘質土（褐色粘質土ブロック、炭化物少量混入） 12層淡灰褐色砂質土 13層暗灰色砂質土（灰褐色砂質土ブロック混入） 14層暗灰褐色砂質土（褐色粘質土ブロック多量に混入） 15層灰褐色粘質土（褐色粘質土ブロック、炭化物混入） 16層暗灰褐色弱粘質土（暗褐色粘質土ブロック多量、褐色粘質土ブロック少量、炭化物多量に混入。土は硬くしまっている。） 17層灰褐色弱粘質土 18層灰褐色粘質土（微細な炭化物混入） 19層暗褐色粘質土（淡白褐色粘質土のブロック、炭化物混入） 20層16層よりやや明るい 21層灰褐色粘質土（褐色地山ブロック、焼土ブロック、炭化物混入） 22層褐色強粘質土（褐色地山ブロック、炭化物混入） 23層褐色粘質土（褐色地山ブロック、炭化物混入。土は汚れて暗い） 24層灰褐色弱粘質土（褐色地山ブロック、炭化物混入。23層より汚れて暗い） 25層砂利層 26層暗褐色粘質土（地山のやや汚れたブロック、淡灰色粘質土ブロック混入） 27層灰褐色粘質土

### 遺物（第12、13図 図版39、40）

3号住居址出土の土器については、第1次調査概報で床面と覆土下層及び一部覆土中層からのものについて報告してある。ここではその土器を覆土上層、中層、下層、床面・長方形二段掘り土坑（P<sub>4</sub>）に分けて図示してあるが、上層と中層は概略を説明するのに止め、主眼を下層以下のものに絞りたい。上層の1～6は口縁形態は各種のものがあるが、擬凹線を持っているのが特徴である。形態的に古いものと新しいものが認められる。それと口縁端部を肥厚させる7、端部をつまみ上げる8、甕以外では壺の10も端部をつまみ上げている。9は外面を肥厚させているが「く」の字口縁に近いものとなっている。中層でも11、12は口縁部の形態は異なるが擬凹線が施されている。13は上層の10とやや近いようなものとなっている。14は口径16.9cmを測る壺の口縁である。15は高坏の坏部で、口径19.9cm、器壁は0.8～0.9cmの厚手のものとなっている。胎土は精選されているが、焼成はあまく不良である。器面には薄く化粧土を塗り、丁寧にヘラミガキしている。色調は外面が褐色を（一部に黒斑あり）、内面は褐色と茶褐色を呈している。他には鉄鏃も1点出土している。下層では17の擬凹線を持つものと18、19の幅の狭い口縁部を持つものやヘラ記号を持つ20の長頸壺の頸部がある。21は器台で胎土、焼成は良好で、色調は褐色を呈している。床面からのものは23～28、31、32である。22は長方形二段掘り土坑（P<sub>4</sub>）を切って作ったP<sub>3</sub>から出土している。口径17cm、底径5cm、器高22.1cmを測る。器形は大きく歪み、部分的に肩部が張っている。胎土には粗い砂粒とシャーモットを含み、焼成は良好である。外面は粗い櫛状の工具で調整し、内面は底部あたりはハケ調整し、その上は板状具と指頭圧痕を加えている。調整手法の違いから底部から胴下部までを先に作り、順次粘土帯を積み上げたものであろう。32もこれと類似する甕の底部で、外面はヘラケズリを加えた後、粗いハケ調整をしている。



第12図 3号住居址上層(1~10)、中層(11~16)、下層(17~21)出土遺物実測図 (S = 1/3)



第13图 3号住居址床面(23~28、31、32)、P<sub>3</sub>(22)、P<sub>4</sub>(29、30)出土土器实测图 (S = 1/3)

内面も底部と胴下部の間に接合痕があり、その上下でハケ目に違いがある。台付甕では24がある。口径10.1cm、底径6.8cm、器高14.9cmを測る。口縁部は小さいながらも有段口縁で、ヨコナデ調整している。外面はハケ調整、内面は指頭圧痕を加えている。25も底部に台が付くものと推定されるが、胎土、焼成が24よりも良好で、口縁端部が内湾していることから鉢の可能性もある。外面は丁寧なヘラミガキを、内面は樹脂状の付着物があり口縁部の一部にヘラミガキが見える以外は不明である。台部には6とP、出土の7がある。形態的には少し異なっている。壺には23がある。「く」の字に外反し、胴部が球形を呈すものと推定される。頸部から口縁部にかけての外面はヘラ状具で削り上げ、口縁部は指頭によるナデ調整をしている。胴部外面は磨耗しているが、内面は指頭による押圧とナデ調整をしている。焼成はあまい。高坏では27と28のものがある。28は口縁はやや内湾ぎみに立ち上がり、坏部下端に稜を持つタイプである。推定口径は26cmを測る。坏部内面には粗い楡状具による沈線が存在している。脚部は高く内湾ぎみに開き、脚径15cmを測る。この土器は遺存状況が悪く脆くなっている。11は小型高坏で、口径10.4cmを測る。坏部下端に稜を持っている。坏部は直線的に外傾しているが、器面の調整は不明である。胎土は良好といえる。26は口径14.3cm、脚径9.9cm、器高12.6cmを測る。一番の特徴は坏部が半球形であり、口縁も水平に延び、端部もナデ調整で水平に延ばしている。下端には断面三角形の突帯を貼付している。坏部の内外面は丁寧にヘラミガキしている。脚部は中央部でやや膨らみ、裾部から緩く外反し端部で若干反っている。透し穴下部には台形状の突帯を貼付している。胎土、焼成は良好で、色調は褐色を呈している。(米沢)

#### 4号住居址

##### 遺構 (第14図 図版3)

2、3、6号住居址に囲まれ、他の住居址と同様に東西方向に長軸を持つが、全体の掘り込みが浅く、不定形のため住居址とは断定し難い。覆土は全体に褐色系で炭化物が混入する。長軸は480cm、短軸は400cmを測り、中央部分を3号溝が南北に走る。また遺構内西方には径70cm～90cm、深さ30cmの焼土ピットが位置する。覆土内には煉瓦状の焼土塊、炭化木が多量に混入するが、ピット自身が直接火を受けた痕跡は確認できない。住居址より後出の単独ピット遺構と推察できる。

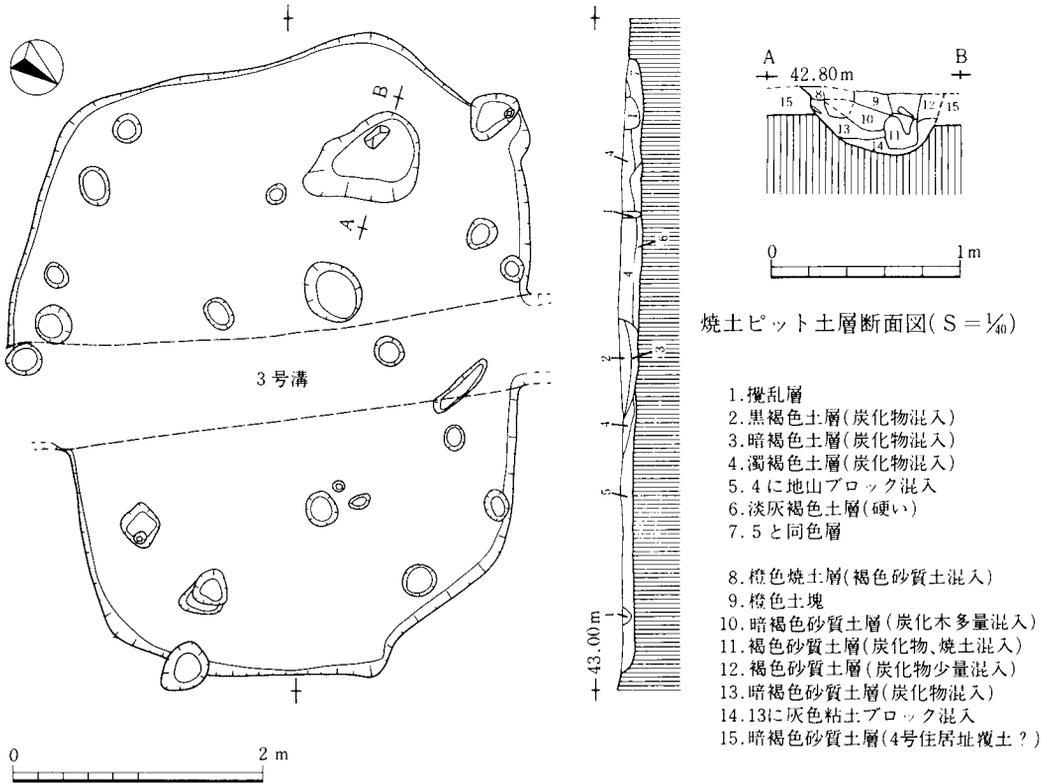
##### 遺物 (第15図 図版41)

遺物量は少なく、実測し得た土器は1点である。推定口径21.6cmを測るE類の甕形土器で、口縁部下端に特徴的な稜を持つ。また胎土中には、1mm以下の海綿骨片が多量に含まれる。

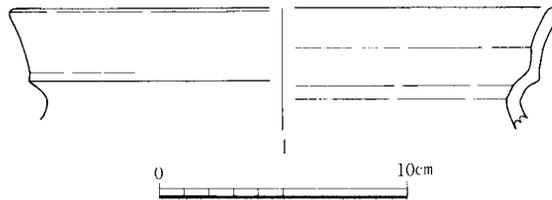
#### 5号住居址、5号土坑

##### 遺構 (第16図 図版21)

C4区で検出された5号住居址は隅円方形を呈し、N-62°-Eに主軸を持つ。約520cm×490cmの規模を持ち、深さは30cm～40cm、推定床面積は25.5㎡(7.7坪)を測る。南西側に残る5号住



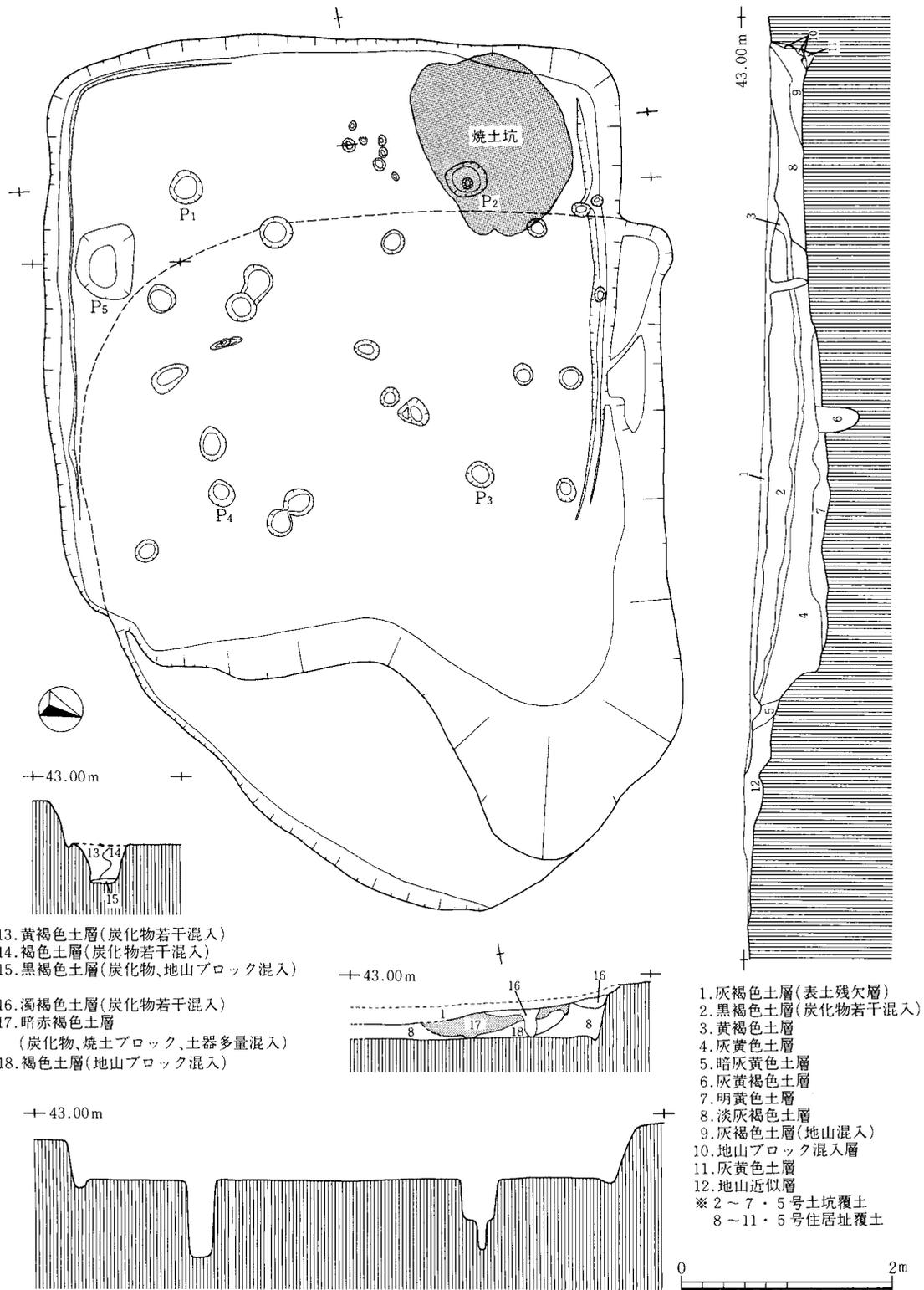
第14図 4号住居址実測図(  $S = \frac{1}{60}$  )



第15図 4号住居址出土土器実測図(  $S = \frac{1}{3}$  )

居址の平面プランは容易に検出できたが、5号土坑との切り合い部分は平面上では確認できず、土層観察によって推定線を入れるに止まった。4個と思われる支柱穴の深さは72cm ( $P_1$ )、66cm ( $P_2$ )、22cm ( $P_3$ )、27cm ( $P_4$ )を測る。 $P_3$ 、 $P_4$ は5号土坑に削られたため浅い数値をとる。柱間距離は270cm ( $P_1 - P_2$ )、270cm ( $P_2 - P_3$ )、250cm ( $P_3 - P_4$ )、280cm ( $P_4 - P_1$ )を測る。周溝は幅、深さ共に10cm前後で住居址内を巡るが東側では5号土坑に削られ、また西側では徐々に狭く、浅くなり自然消滅する形をとっている。 $P_5$ は歪んだ台形を成し、深さ35cmを測る。このピットが生活時空いていたか、埋まっていたかは観察土層を住居址上層から残さなかったため明らかではないが、土層断面図13層~15層のピット覆土が自然堆積をしていない点に注目したい。また住居址北西隅には170cm×140cm、深さ20cm前後を測る窪みがあり、多量の焼土と土器が住居址外から投げ込まれるような形で廃棄(?)されていた。

5号土坑は長軸で約660cm、深さ50cm~60cmを測る不定形の土坑で、5号住居址の床面を掘り込んで作られている。土坑東側の覆土(土層断面図12層)は地山土に大変近く、平面プランが捉えにくかったため、掘り過ぎの可能性もある。なお遺構廃絶順序は5号住居址→焼土坑→5号土坑と推測できる。



第16図 5号住居址、5号土坑実測図 (S = 1/60)

#### 5号住居址遺物 (第17、18図 図版41、42)

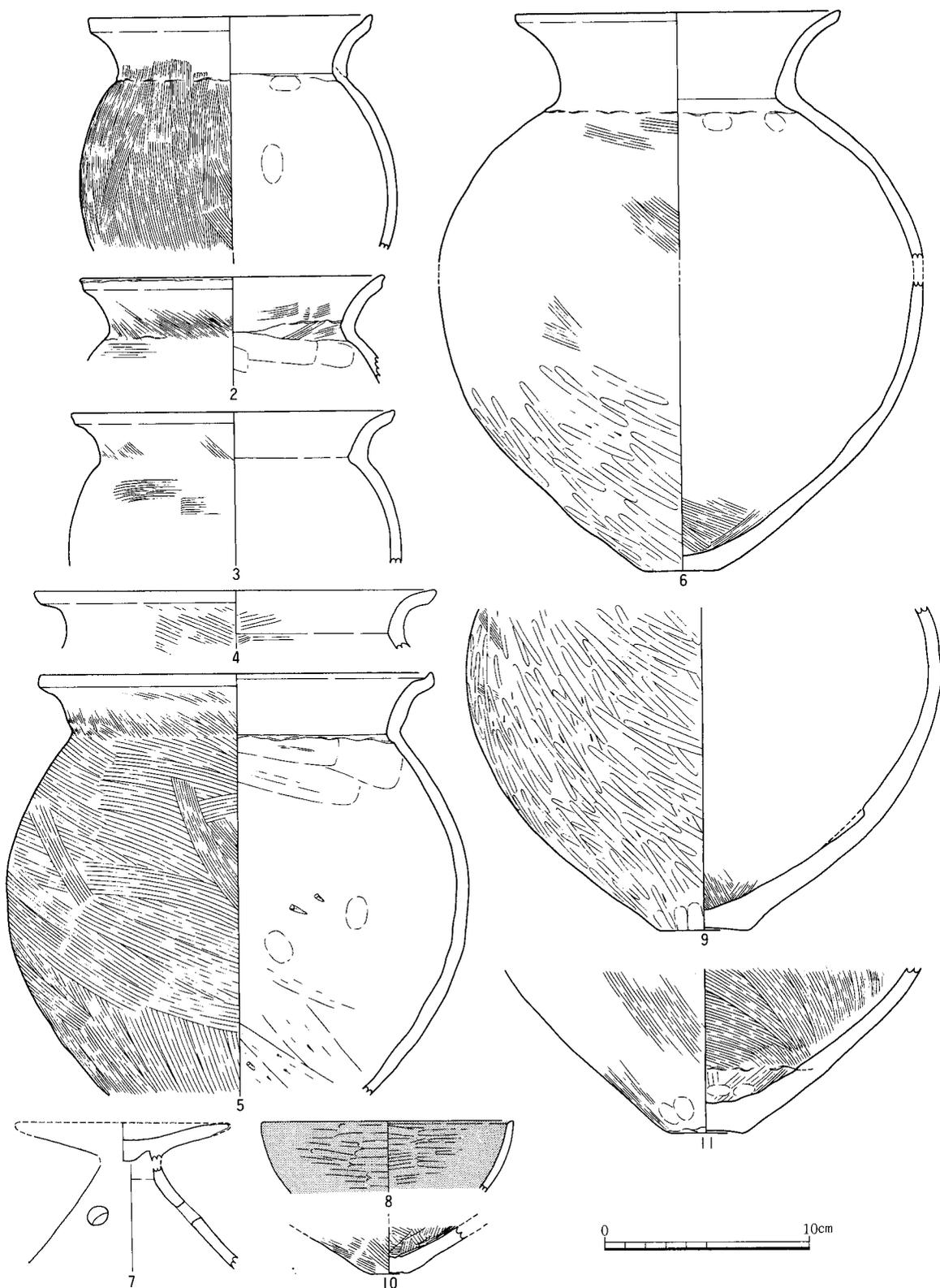
上層として取り上げた1～11は、ほとんどが焼土坑(土層断面図17層)からの出土遺物である。1～5は「く」の字口縁を持つF類の甕形土器で口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデする。1は口径13.6cmを測り、体部外面には縦方向の細かいハケ調整を施す。2は口縁上端部をつまみ上げ、外側に折り曲げるようにして肥厚させている。4は屈曲の強い頸部を持ち、胎土には黒雲母が混じる。5は口径19.0cmを測り、1～4に較べ口縁端部をつまみ上げを強調する。体部外面には横方向と縦方向のハケ調整が施され、内面下方には下から上へのヘラケズリ調整が見られる。また内外面の一部が赤橙色を呈しているが、これはおそらく焼成前に発色の異なる土が表面に付着したためと思われる。6は「く」の字口縁を持つL<sub>2</sub>類の壺形土器で口径15.6cm、底径3.6cm、復元高27cmを測る。胴部最大径を中位よりやや上方に持ち、体部下半には雑なヘラミガキ調整を施す。7は浅い受部を持つ小型器台でF<sub>3</sub>類に分類した。復元口径は10.5cmを測る。内外面ともに摩耗が著しいが脚部外面に一部ヘラミガキ調整が残る。胎土は精選されており砂粒は極めて少ない。3個の透穴を持つ。8は碗形を呈する小型土器でE<sub>2</sub>類に分類した。砂粒はほとんど含まず、焼成も良好で内外面に精緻なヘラミガキを施す。胎土中の海綿骨片の含みは少ないが、シャーモットの多さが目に付く資料である。9は底径4.3cmを測る壺形土器の体部である。おそらくL類に含まれるものであろう。10、11は砂粒を多く含む底部片である。11の内面には、5と同様の赤橙色痕が見られる。1～4の外面には煤が付着する。

12～27は土層断面図8、9層レベル42、50m前後からの出土遺物である。12～14は口縁帯外面に擬凹線を持つA<sub>1</sub>類の甕形土器である。14は口径21.6cmを測り、口縁内面にはほとんど段を持たない。15～18は「く」の字口縁を持つ甕形土器。17は口縁端部を丸くおさめる。18は口径16.4cmを測る。頸部の屈曲が強く、口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデする。体部は扁平な球状を呈するが底部を欠く。19は円筒状の高坏脚柱部である。一部に赤橙色痕が残る。20は受部内面と脚部外面に赤彩が認められる器台形土器。砂粒は少なく外面をヘラミガキで仕上げる。3個1組の透穴を一对(計6個)持つと思われる。21は有段口縁を持つ鉢形土器。底部を欠くが台付になる可能性もある。20と同様に砂粒が少なく内外面に赤彩が施される。22はF類に分類した鉢形土器。全体に器壁が厚く底部の厚みは1.5cmを測る。23～27は底部片で25は丸底を呈する。12～16、27の外面には煤が付着する。また15、19の胎土中には海綿骨片の含みは見られない。

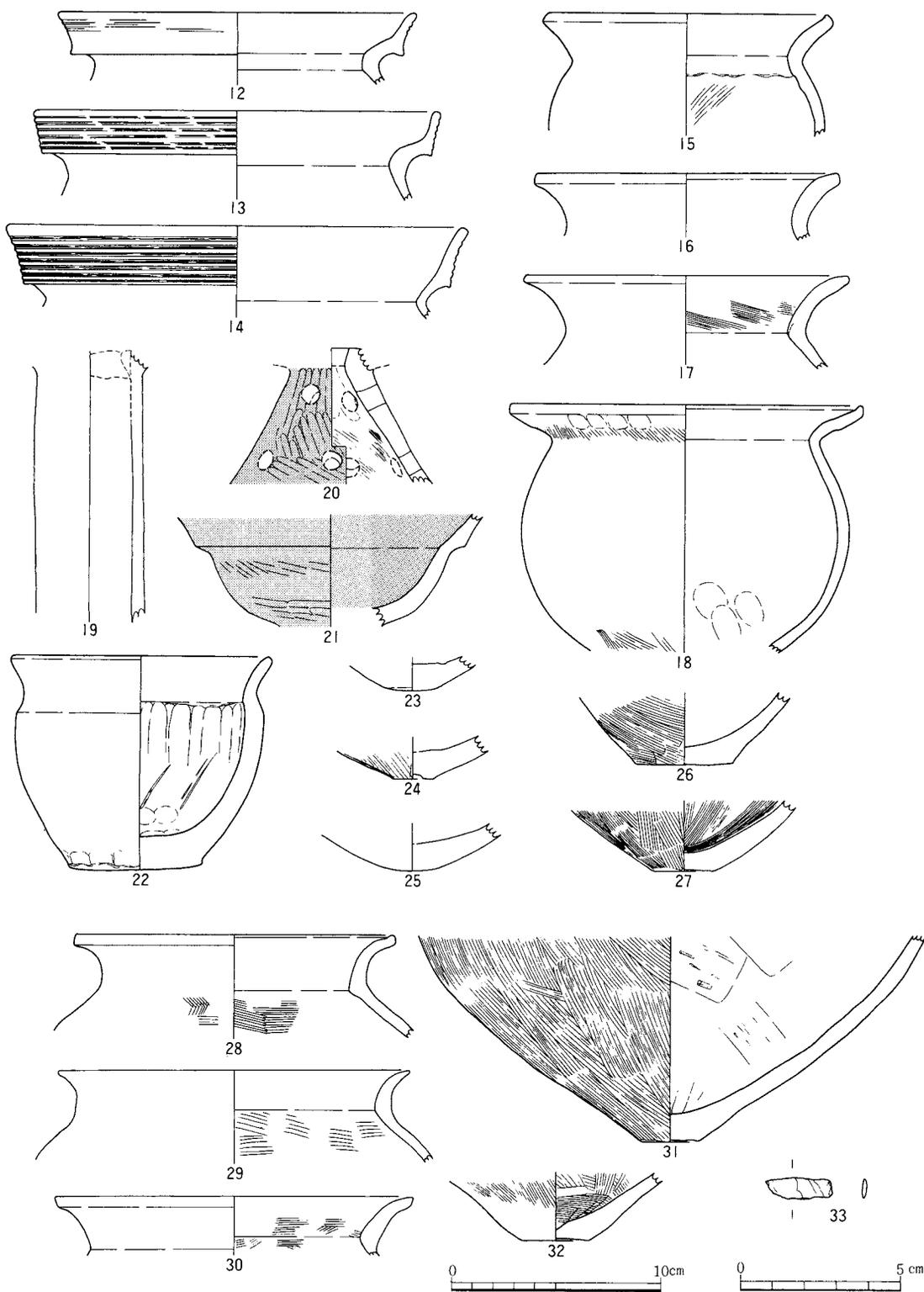
28～31は層序の判別ができない5号住居址覆土内出土の遺物である。28は胎土中に1mm～2mmのシャーモットを多く含む。29は口縁端部を外反させながら先細りに仕上げる。30の外面には焼成前に発色の異なる土が付着したと思われる赤橙色痕が見られる。31は底径2.7cmを測る自立できない狭小な底部を持つ。32はP<sub>5</sub>より出土した底部片であり、内外面にハケ調整を施す。28～32の外面には煤が付着する。33は住居址床面に近いレベルで見つかった鉄製品である。片刃の刃部を持つと思われ、現長2.05cm、幅0.7cm、厚さ0.15cmを測る。大変脆く、用途は不明である。

#### 5号土坑遺物 (第19図 図版43)

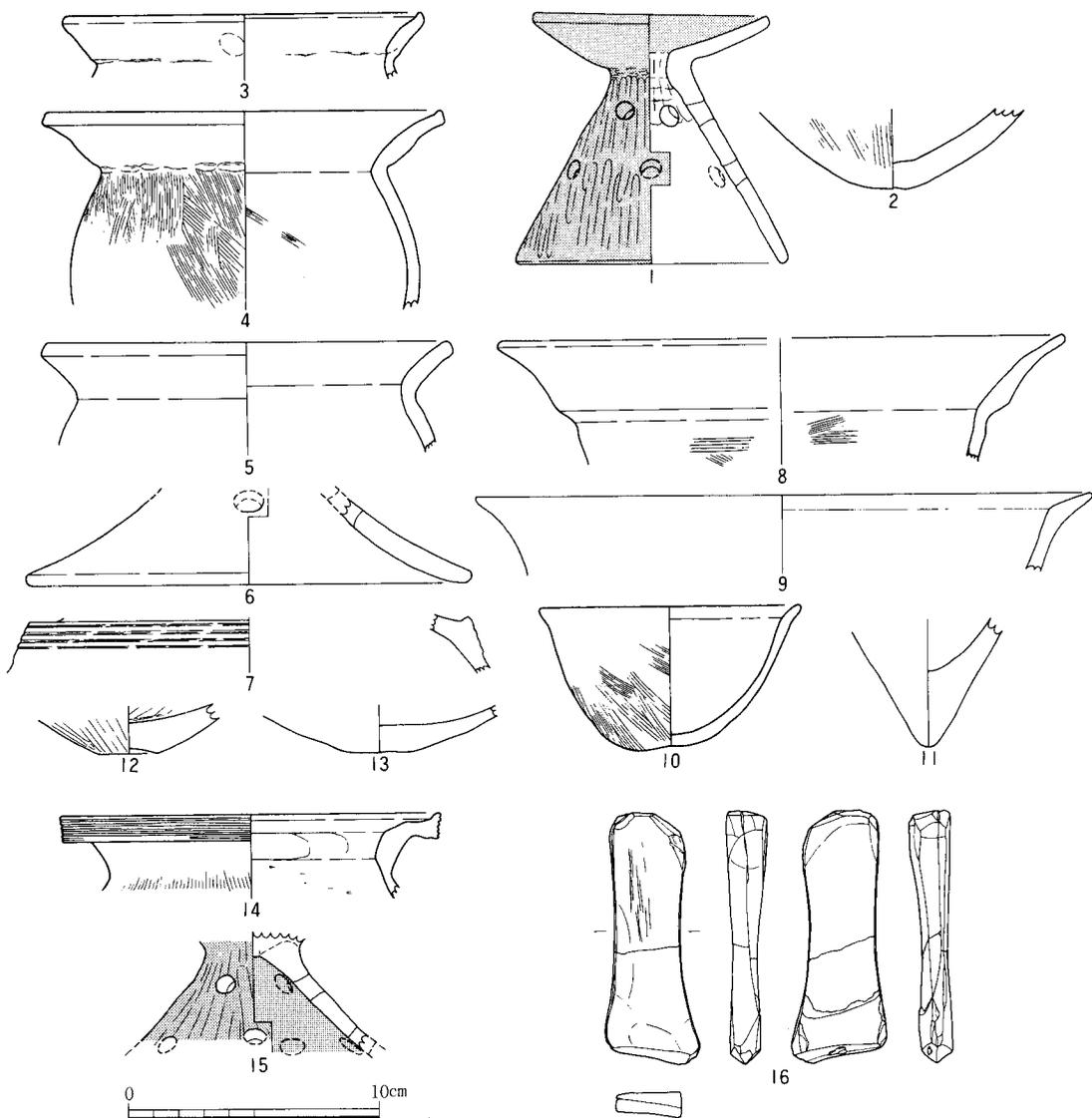
1はF<sub>2</sub>類に分類した器台形土器。口径9.3cm、脚部径10.6cm、器高9.9cmを測り、外面と受部内面に赤彩およびヘラミガキ調整を施す。第17図20と同様に砂粒が少なく、3個1組の透穴



第17图 5号住居址上層(1~11)出土土器实测图 (S=1/3)



第18図 5号住居址下層(12~27, 33)、覆土(28~31)、P<sub>5</sub>(32)出土遺物実測図(S = 1/3, 33は S = 1/2)



第19図 5号土坑上層(1,2)、下層(3~13,16)、覆土(14,15)出土遺物実測図 (S=1/3)

を1対持つが、胎土中の海綿骨片の量は少ない。2は1mm~2mmの砂粒を多く含む底部片。1、2は土層断面図2層からの出土遺物である。

3~13は主に土層断面図3、4層レベルからの出土遺物である。3~5は「く」の字口縁の甕形土器。3は口縁端部をつまみ上げるが端面は持たない。4は口縁外面に指押さえ痕が残る。体部には縦方向の細かいハケ調整を施す。5は直線的に開く口縁を持ち、弱い端面を持つ。6は透穴を持つラップ状の脚部である。7は擬凹線を持つ脚部片。胎土は白っぽく1mm前後の砂粒を多く含む。器台形土器の受部になる可能性がある。8は推定口径22.4cmを測るA<sub>2</sub>類の鉢形土器。外反して伸びる有段状の口縁端部を持つ。9は口縁端部に上向きの面を持つ高坏形土器の坏部片と思われる。10、11はそれぞれF<sub>2</sub>類、I類に分類した鉢形土器。10は口径10.3cm、器高5.7cm

を測る。口縁付近で緩く外反し、外面全体に不定方向のハケ調整を施す。12は外面をヘラミガキ調整し、外底部に窪みを持つ。5、8は外面に煤が付着する。また5、7、11、13は胎土中に海綿骨片をほとんど含まない。

14は狭い口縁帯外面に擬凹線を施すD<sub>1</sub>類の壺形土器。肩部内面にはヘラケズリ調整が見られる。15は1とよく似た調整・透穴を持つ小型器台であるが、脚部内面にも赤彩痕が見られ、また受部から脚部へ抜ける孔を持たない。16は四方に研面のある砥石で断面は長方形を呈する。材質は粘板岩質と思われる、5号土坑下層からの出土遺物である。また実測図にはないが、緑色凝灰岩の管玉原石および未製品がそれぞれ1点づつ下層から出土している。

## 6・11、7号住居址

### 6・11号住居址 (第20図 図版22)

CD4・5区で検出された3棟の住居址は大きく2時期に分けられる。隅円方形を呈する6・11号住居址は7号住居址を切り込んで構築されており、主軸はN-63°-Eと1号~5号住居址に近い値をとる。6号住居址は11号住居址を改築拡張したもので、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の支柱穴とP<sub>6</sub>の一部を11号住居址と共有する。590cm×530cmの規模を持ち、深さ30cm、床面積は24.9㎡(7.5坪)を測る。支柱穴の深さは68cm(P<sub>1</sub>)、64cm(P<sub>2</sub>)、68cm(P<sub>3</sub>)、61cm(P<sub>4</sub>)、柱間距離は210cm(P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>)、250cm(P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>)、200cm(P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>)、240cm(P<sub>4</sub>-P<sub>1</sub>)をそれぞれ測る。住居址中央部には浅い炉址(土層断面図40層)が残り、周溝は幅15cm~20cm、深さ10cmで住居址内を全周する。また住居址南壁に沿って検出されたP<sub>6</sub>は中央部が30cm、両側が5cmの深さを持つ方形の二段掘りピットで11号住居址に伴うP<sub>6</sub>を修復、再利用したものと思われる。南北に長軸を持つP<sub>6</sub>は6号住居址の貼床の際に床面と同じ土で埋められているが(土層断面図17層)、17層より下層は既に埋まっていた可能性が高く、素掘りのままで使用されていたと思われるP<sub>6</sub>とは多少異なりを見せている。なお11号住居址の床面積は18.8㎡(5.7坪)を測り、拡張後の6号住居址床面積の約75%を占めている。また6号住居址の床全体を蔽う16層は発掘当時は生活面の汚れと見ていたが、多量の炭化物や焼土が含まれていることから、焼失に伴う堆積層の可能性も考えられる。

### 遺物 (第21、22図 図版43、44)

1~6は土層断面図33層付近からの出土遺物である。1は内傾する狭い口縁帯を持つ甕形土器。口縁外面はヨコナデにより緩く凹み、体部内面には縦方向のヘラケズリが見られる。2は頸部に強い屈曲を持ち、口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデして面を作る。甕形土器F<sub>3</sub>類に分類されよう。3は外反して伸びる有段口縁を持つ。口縁部上方外面には指押さえ痕が残る。4は口縁端部に粘土紐を貼付して有段状に見せた壺形土器か。5は鈕部上面に凹みを持たないB<sub>2</sub>類の蓋形土器と思われる。2、3の外面には煤が付着する。

7~16は主に土層断面図10、16層レベルからの出土遺物である。7、8は口縁帯外面に擬凹線を施す。8は白っぽい胎土を持つ。9、10は「く」の字口縁を持つF<sub>4</sub>類の甕形土器。口縁端部

を強いヨコナデによって肥厚させ面を作る。11は口径26.2cmを測るL<sub>1</sub>類の壺形土器。外面には焼成前に発色の異なる土が付着したと思われる赤橙色痕が見られる。12、13はI<sub>2</sub>類の壺形土器であるが、焼成、胎土は全く異なるものである。12は砂粒の少ない精選された胎土を用いるが、内には多量の海綿骨片とシャーモットが含まれている。外面は赤彩を意識してか淡橙色に仕上げ、雑なヘラミガキ調整を施す。13は口径21.6cmを測り、外面と口縁部内面に赤彩を施す。焼成は良好で砂粒の含みも少なく、胎土中には海綿骨片は認められない。15は底部に孔を穿つ有孔鉢形土器か。10、11、14の外面には煤が付着する。また8、13、15の胎土中には海綿骨片の含みは見られない。

17は口縁端部をつまみ上げて緩くヨコナデした壺形土器の口縁部片。18は外傾して直線的に開く口縁を持ち端部は丸くおさめる。19はL<sub>1</sub>類の壺形土器で口縁部内外面にハケ調整が見られる。20は笠状に開く有段脚を持つ。21は口縁上端部を外側に折り曲げることによって端部を玉縁状に仕上げている。25は外面にヘラミガキ、赤彩痕が見られる。

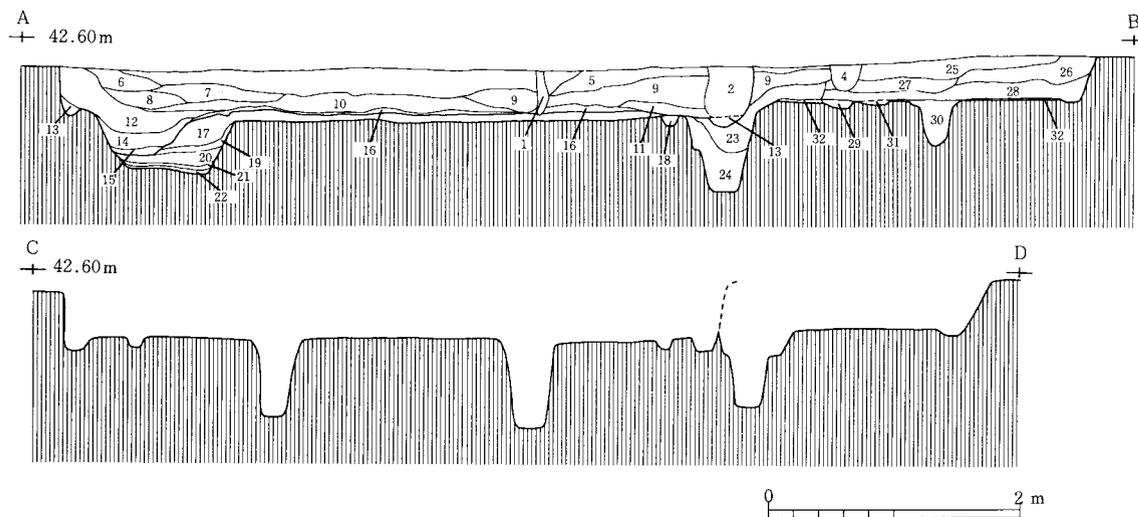
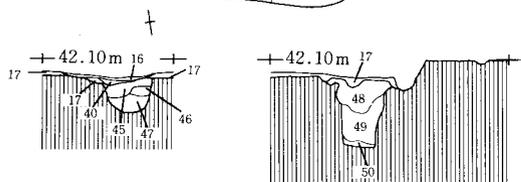
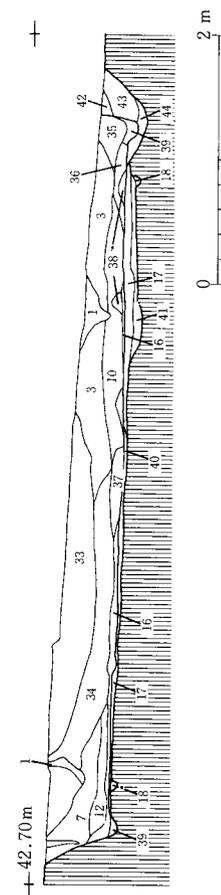
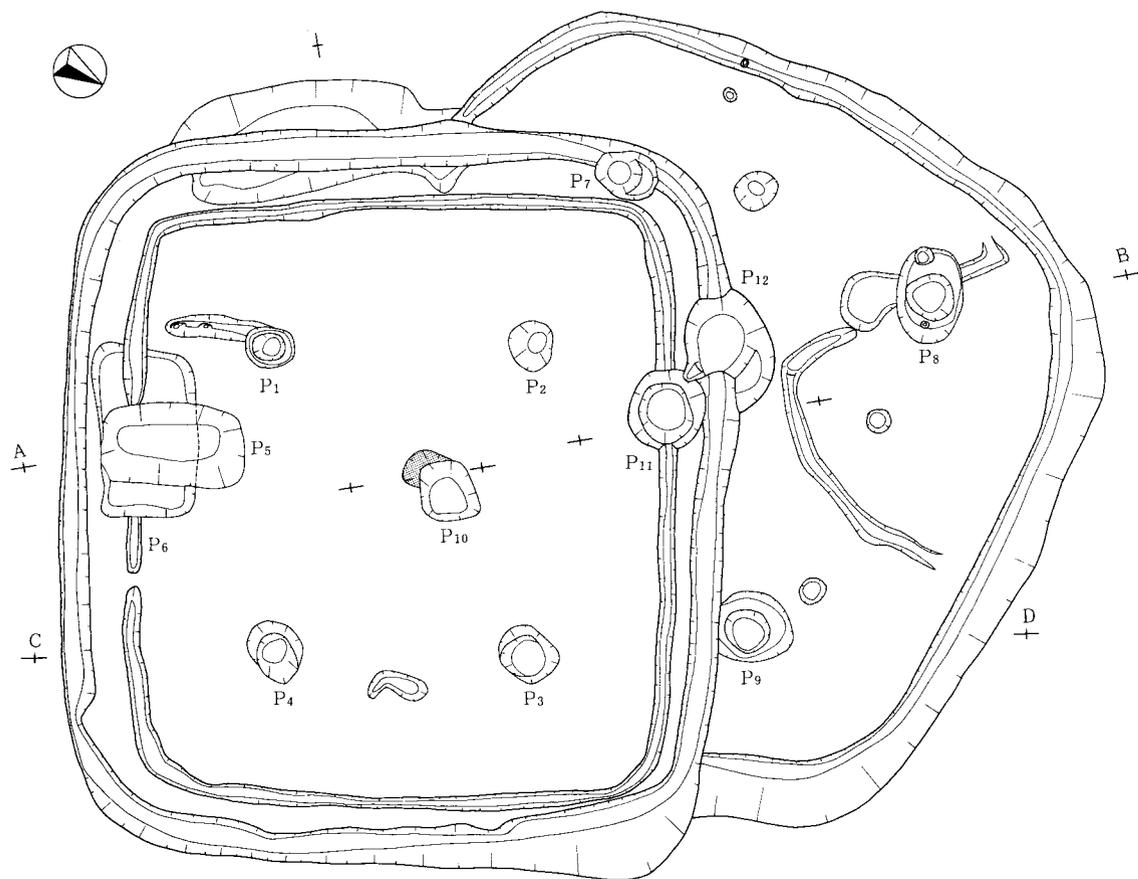
26は支柱穴P<sub>3</sub>出土の無文有段口縁片。27、28は「く」の字口縁の甕形土器。27はP<sub>8</sub>、28は支柱穴P<sub>4</sub>から出土している。29は口径16.6cmを測るH<sub>1</sub>類の壺形土器。口縁部下端に稜を持つ山陰系の遺物であろうか。30、35は土層断面図17層（6号住居址貼床内）出土の脚台部、底部である。31は「く」の字口縁を持つ壺形土器L類になると思われる。21、24、26、29の外面には煤が付着する。また20の胎土中には海綿骨片は見られない。

#### 7号住居址（第20図 図版22）

6号住居址よりも丸みを帯びた隅円方形を呈し、主軸をN-87°-Eに持つ。推定規模および床面積は、590cm×580cm、25m<sup>2</sup>（7.6坪）で、深さは35cmを測る。支柱穴は6・11号住居址と同じく4個で深さは41cm（P<sub>7</sub>）、50cm（P<sub>8</sub>）、60cm（P<sub>9</sub>）、39cm（P<sub>10</sub>）、柱間距離は270cm（P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>）、300cm（P<sub>8</sub>-P<sub>9</sub>）、270cm（P<sub>9</sub>-P<sub>10</sub>）、300cm（P<sub>10</sub>-P<sub>7</sub>）をそれぞれ測る。周溝は幅15cm、深さは5cmと浅い。P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>は二段掘りのピットであり、P<sub>8</sub>の周辺には浅い溝状遺構の痕跡が残る。住居址中央には深さ55cm~60cmを測るP<sub>11</sub>、P<sub>12</sub>があり、覆土内には土器、炭化物、焼土が混入している。特にP<sub>12</sub>の24層からは第24図28、30、31が出土している。機能的には深い穴に灰をつめて使用する灰穴炉（都出1985）と思われるが、両者の切り合い関係が判然とせず、併存していた可能性も考えられる。なお7号住居址には建て替えの痕跡は見られなかった。

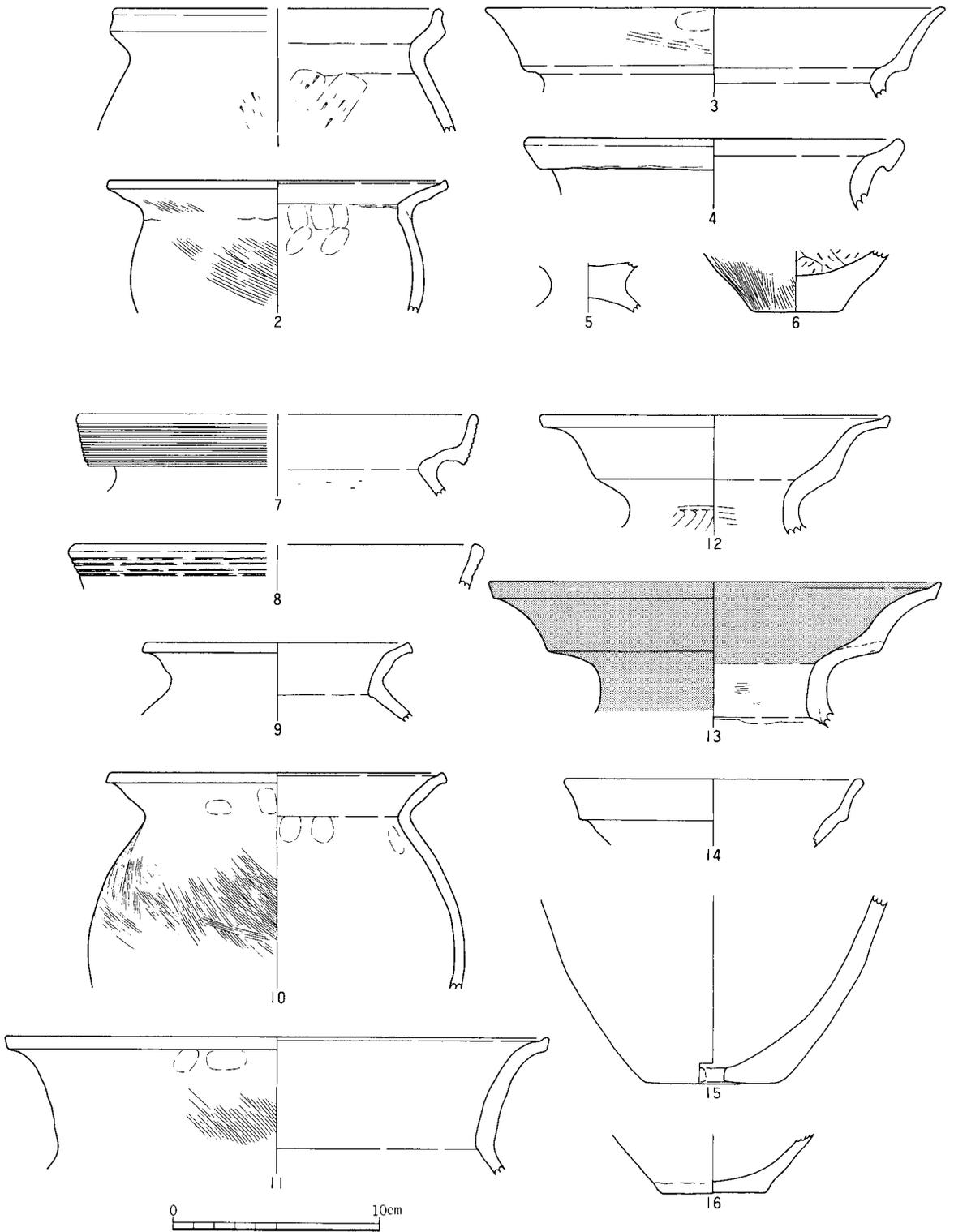
#### 遺物（第23、24図 図版45、46）

1~14は主に土層断面図25、26層レベルからの出土遺物である。1は外傾する狭い口縁帯に6条の擬凹線を持ち、肩部には簾条文を施す。2は口縁外面の擬凹線を2段に描き分けている。1回目は下半分に強い調子で文様を描き、2回目は上半分に凹みの浅い線状の文様を描く。3~5はそれぞれM類、C<sub>1</sub>類、A<sub>1</sub>類に分類した壺形土器。3は口径14.6cmを測り、口縁端部を粘土紐の貼付によって肥厚させる。4は口径17.6cmを測る。外反して伸びる口頸部に擬凹線を施す有段口縁を持つ。5は口径16.8cmを測る。有段口縁を持ち、長く伸びる頸部は緩やかに外反して体部へと続く。また胎土中には黒雲母が混じる。6は器台形土器の受部片か。外面にはハケ状具による1次調整痕が顕著に見られる。内面には赤彩痕が残るがおそらく外面にも同様の加色があった

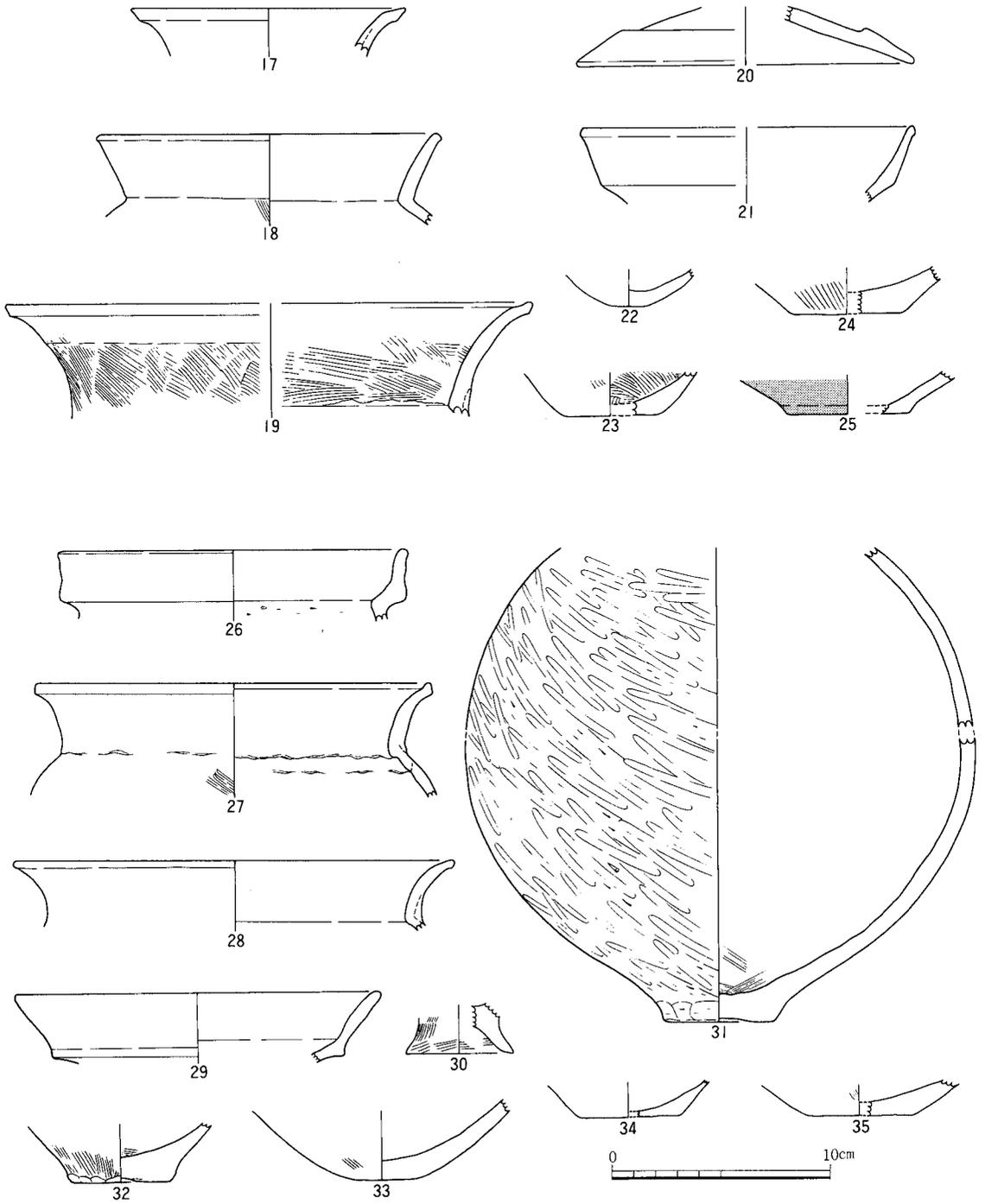


- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| 1. 攪乱層                 | 26. 濁褐色土層               |
| 2. 暗褐色土層(炭化物、焼土混入)     | 27. 黒褐色土層(土器、炭化物多量混入)   |
| 3. 灰褐色土層(炭化物、砂塊混入)     | 28. 濁黄褐色土層              |
| 4. 暗褐色土層               | 29. 灰褐色土層(地山ブロック混入)     |
| 5. 濁褐色土層(炭化物混入)        | 30. 28よりやや濁る            |
| 6. 濁黄褐色土層              | 31. 濁褐色土層               |
| 7. 褐色砂質土層(炭化物混入)       | 32. 濁黄褐色土層              |
| 8. 暗褐色土層(炭化物混入)        | 33. 灰褐色土層(炭化物混入)        |
| 9. 暗黄褐色土層(炭化物混入)       | 34. 明褐色土層(炭化物、地山ブロック混入) |
| 10. 濁灰色土層(地山ブロック混入)    | 35. 黄褐色土層               |
| 11. 濁黄褐色砂質土層(炭化物混入)    | 36. 濁黄褐色土層              |
| 12. 濁灰褐色土層(地山ブロック混入)   | 37. 濁灰色土層(地山ブロック混入)     |
| 13. 暗灰褐色土層(炭化物、焼土混入)   | 38. 地山土に10層混入           |
| 14. 暗灰褐色土層(黄褐色砂混入)     | 39. 灰褐色土層(地山ブロック混入)     |
| 15. 暗褐色土層              | 40. 褐色土層(焼土ブロック混入)      |
| 16. 暗灰褐色土層(炭化物多量、焼土混入) | 41. 地山土に淡灰褐色土混入         |
| 17. 黄褐色土層(6号住居址貼床)     | 42. 淡褐色土層               |
| 18. 灰褐色土層(地山ブロック混入)    | 43. 淡黄褐色土層              |
| 19. 濁黄褐色土層(硬い)         | 44. 淡灰褐色土層              |
| 20. 黄褐色土層              | 45. 黄褐色土層               |
| 21. 暗褐色土層(地山土混入)       | 46. 地山土層                |
| 22. 濁黄褐色土層             | 47. 黄褐色土層               |
| 23. 濁暗灰褐色土層(地山ブロック混入)  | 48. 暗灰褐色土層(土器、炭化物、焼土混入) |
| 24. 23に土器、炭化物、焼土混入     | 49. 灰褐色土層(炭化物混入)        |
| 25. 暗黄灰色土層             | 50. 黒褐色土層(炭化物混入)        |

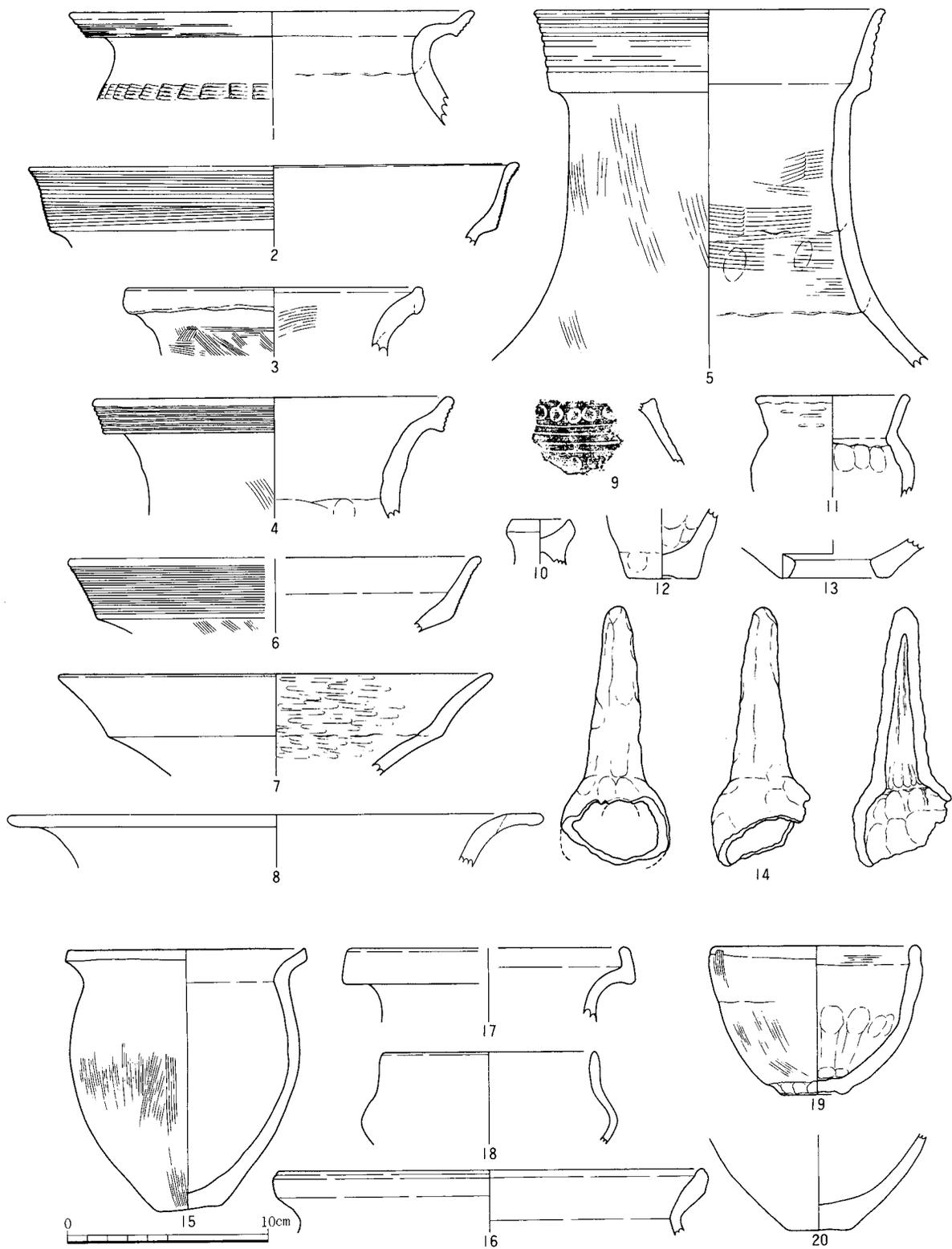
第20図 6・11、7号住居址実測図 (S=1/60)



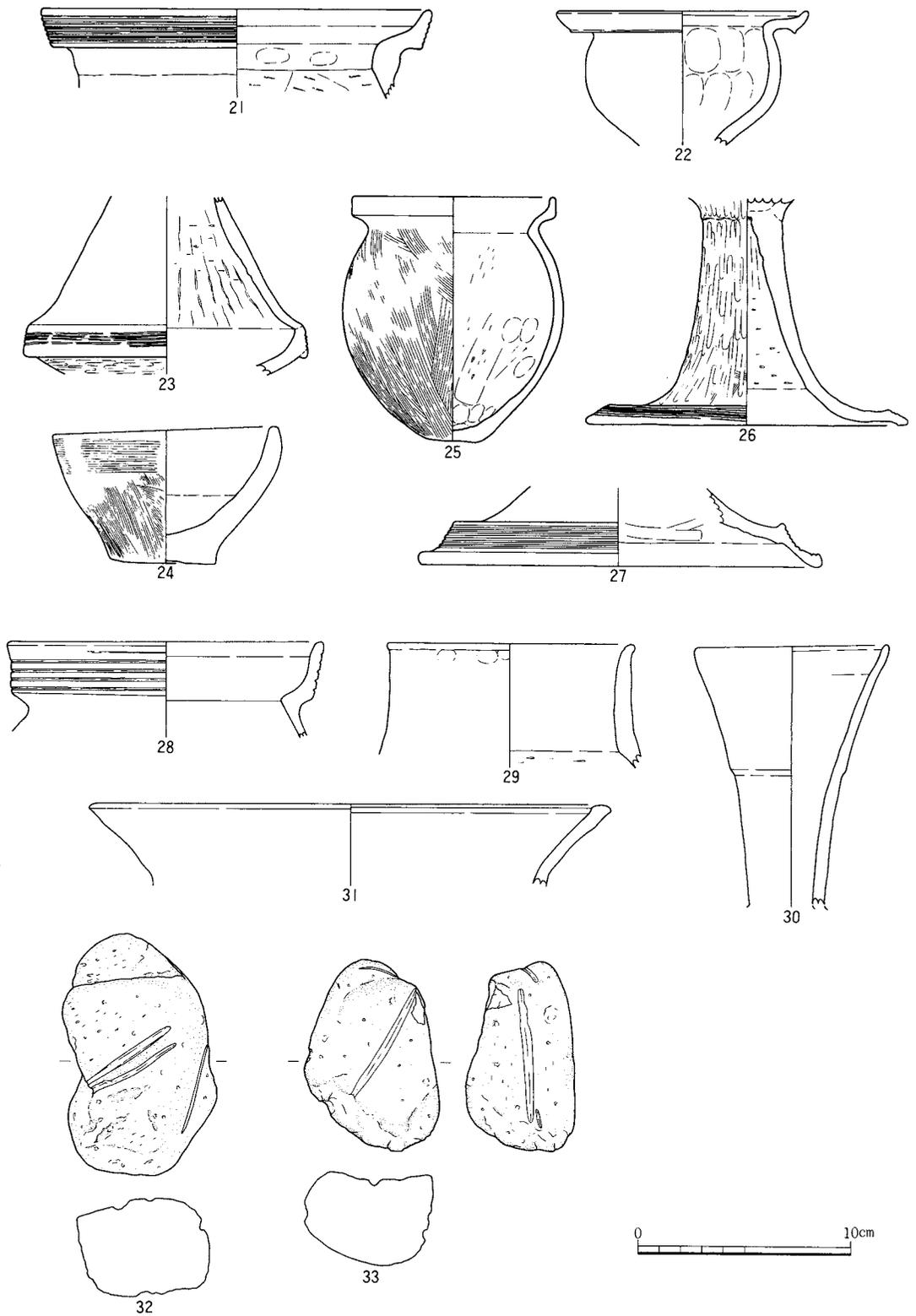
第21图 6号住居址上層(1~6)、下層(7~16)出土土器実測図 (S=1/3)



第22図 6号住居址覆土(17~25)、床面(29、31~34)、貼床面(30、35)、ピット(26~28)出土土器実測図(S = 1/3)



第23图 7号住居址上層(1~14)、下層(15~20)出土土器实测图(S=1/3)



第24図 7号住居址覆土(21,22)、床面(23~27)、ピット(28~31)、下層(32,33)、出土遺物実測図(S = 1/3)

と思われる。7は口径21.6cmを測るE類の器台形土器。脚部を欠くが、外反して伸びる有段状の受部を持つ。8は口縁端部に水平な面を持ち、坏部の屈曲する高坏形土器と思われる。胎土中には少量ながら黒雲母が混じる。9は器台形土器の有段脚部片か。径約7mmの円形スタンプ文が2段に巡り、間に4条の凹線状文を挟む。また外面には赤彩痕がみられる。10は鈕部径3cmを測るA<sub>1</sub>類の蓋形土器。体部は欠くが鈕部上面は凹み、先端は内傾して面を持つ。11は「く」の字口縁を持つ小型壺形土器で口径7.1cmを測る。14は杓子状土製品。頭部を球状に作り、柄部と同様に中空に仕上げる。なお5、8は胎土中にほとんど海綿骨片を含まない。

15～20は土層断面図28層レベルからの出土遺物である。15は「く」の字口縁を持ち口縁端部をヨコナデして面を作る。体部には縦方向のハケ調整を施す。16は口径21.1cmを測るD類の甕形土器。口縁帯外面全体に粘土(板)を貼付し、口縁全体を肥厚させる。18は口径10.5cmを測るD<sub>2</sub>類の鉢形土器。体部から直立気味に立ち上がる口縁部を持ち、器壁は薄く仕上げる。19は緩やかに内湾する体部を持つ。底部は平底を呈するが、外底部に粘土を輪状に貼り付け高台風に仕上げる。15、16は外面に煤が付着し、20の底部は胎土中にほとんど海綿骨片を含まない。

21は口径18.2cmを測るD<sub>1</sub>類の壺形土器。直立気味に伸びる短い頸部と擬凹線を施す狭い口縁帯を持つ。口縁部内面には赤橙色痕が見られる。22は口径11.6cmを測るC類の鉢形土器。強く屈曲する頸部に外傾する狭い口縁帯が続く。

23～27は土層断面図32層直上からの出土遺物である。23はE<sub>1</sub>類に分類した台付装飾壺。長く伸びる口縁部とラッパ状に開く脚部を持つと思われる。外面には化粧土が塗られる。24は口径10.3cm、底径4.6cm、器高6.4cmを測るE類の鉢形土器。内湾する体部と厚い平底を持つ。外面には化粧土的な赤橙色痕が残る。25は狭い口縁帯を持つ有段の小型甕形土器。外面には縦方向のハケ調整、内面には下から上へのヘラケズリ調整が見られ、器壁は全体に薄く仕上げています。26は脚裾部が水平に広がる特徴を持つ高坏形土器。有段状に仕上げた端部には6条の擬凹線が巡る。外表面には極く薄い化粧土が塗られ、砂粒を蔽い隠している。27は擬凹線を施した有段脚部片で脚端部は丸く肥厚する。内外面には化粧土が塗られている。

28、30、31はP<sub>12</sub>、29はP<sub>8</sub>からの出土遺物である。28は有段口縁の甕形土器であるが、口縁外面を巡る6条の擬凹線は線状に鋭角的に描かれる。29は口径11.6cmを測るB<sub>5</sub>類の壺形土器。口頸部は直立気味に伸び、口縁上端部を僅かに外反させて止める。30は口径8.8cmを測るF類の壺形土器。口縁下端部に不明瞭な段を持つ。31は坏部の屈曲する高坏形土器と思われる。口縁端部には肥厚した面を持つ。22、25、28の外面には煤が付着する。32、33はそれぞれ56.0g、32.2gを量る下層出土の軽石である。両者ともに筋状の研ぎ痕(?)が数条認められる。

## 8、9・10号住居址

### 8号住居址 (第25図 図版24)

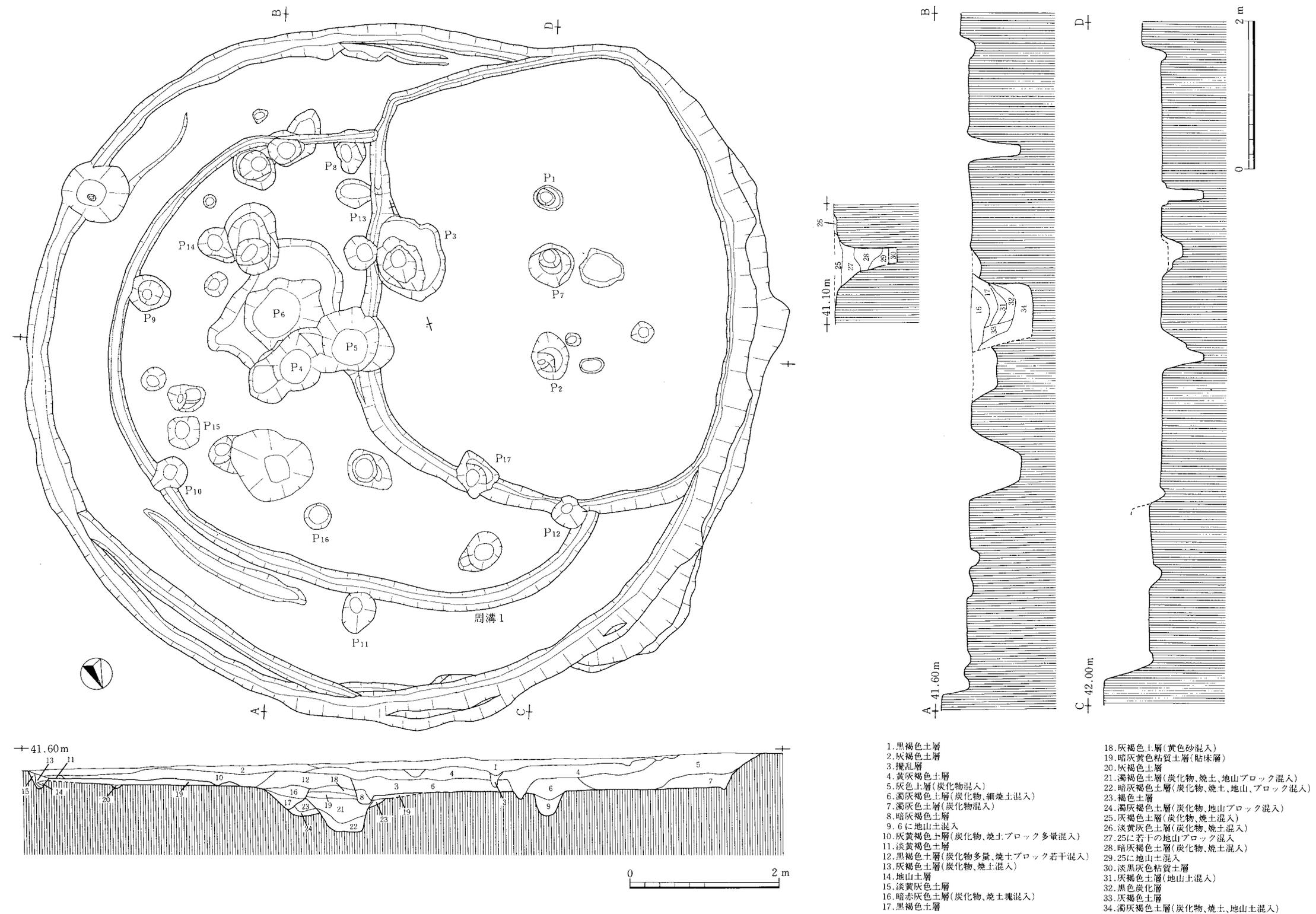
6、7号住居址の南で尾根幅が一時狭くなり始めるCD6・7区に位置し、図上からも分かるように9・10号住居址を切り込んで構築されている。西壁は9号住居址を再利用しており、その

ためか不整の隅円方形を呈する。630cm×520cmの規模を持ち、深さは40cm～45cm、床面積は約21㎡（6.4坪）を測る。主軸はN-27°-Eに持ち今までの1～6号住居址とは異なる値をとる。主柱穴は2個で深さはそれぞれ54cm（P<sub>1</sub>）、56cm（P<sub>2</sub>）、柱間距離は220cmを測る。P<sub>3</sub>は住居址東壁横に掘られた不整楕円形を呈する二段掘りピットで長軸120cm、短軸90cm、深さは最深部で84cm、西側テラス面で5cmを測る。覆土は土層断面図30層を除きすべてに焼土、炭化物が混入している。またP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>に挟まれたP<sub>7</sub>は上面に焼土が広がる炉址であるが、深めのピットを1度埋めて使用している形跡がある。

#### 遺物（第26～30図 図版47～50）

8号住居址上層遺物（1～29）は主に土層断面図1層および4層上層（標高41.30m～41.45m）から出土している。1～10は「く」の字口縁を持つF類の甕形土器である。1は肩部外面に弱い稜を持ち、胎土は赤橙褐色を呈する。4～7は口縁端部にヨコナデによる面を持つ。6は頸部に焼成後に穿ったと思われる半円形の孔が見られる。8の外外面および口縁部内面には赤彩に近い発色をする土が部分的に付着している。また口縁端部はつまみ上げ気味に丸くおさめる。10は口径18.4cm、底径2.9cm、器高25.5cmを測り、胴部最大径を上位に置く。口縁端部は軽くつまみ上げ、体部外面には斜方向のハケ調整を施す。11はL<sub>3</sub>類に分類した壺形土器。口径15.8cm、底径5.5cm、復元高27.5cmを測る。頸部には接合痕が見られ、胴部最大径は中位に持つ。12は器台形土器の脚部か。外面全体に擬凹線を施すが、その間隔にはバラツキが目立つ。14はF<sub>1</sub>類に分類した小型器台形土器。口径7.9cm、脚部径10.9cm、器高7.3cmを測る。比較的深い受部を持ち、脚端部には面取りを行う。15も小型器台の脚部と思われる。胎土中の砂粒の含みは少ない。16は鈕部径5.4cm、口径10.4cm、器高5.5cmを測るA<sub>2</sub>類の蓋形土器。鈕部上面に凹みはなく、器壁は全体に厚い。17はH類に分類した小型丸底壺で口縁端部を欠く。雑な作りで、体部内外面に指押さえ痕が見られる。20は底径3.0cmを測り、内面には炭化状の内容物が付着する。26は5mm大のシャームットを胎土中に多く含むが、外面に露出しているのは僅かでほとんどが内面に集中している。28の外外面は上から下へのヘラケズリ調整の後、雑なヘラミガキ調整を施す。9、10、27の外外面には煤が付着する。また1、12、21の胎土中には海綿骨片の含みは見られない。

下層として取り上げた30～44は土層断面図6、7層からの出土遺物である。30～32は無文の有段口縁を持つ甕形土器。30は肩が張らず、頸部外面を強くヨコナデする。31、32は外傾して開く口縁部を持ち口縁端部は丸くおさめる。33は口径10.0cmを測るK類の壺形土器。全体に歪んでおり、底部を打ち欠いたような痕跡が見られる。34は外反して伸びる有段口縁を持つ。口縁端部はつまみ上げるが面取りは行わない。35、36はB類の高坏形土器で脚部には4個の透穴が認められる。35は坏部下端を段状に仕上げ、36は外傾度の大きなラッパ状の脚部を持つ。37は中実の脚柱部。上方には坏部の剝離痕が見られる。38は外面に雑なヘラミガキ調整を施す。40、41はB類の蓋形土器。40は鈕部径4.1cm、裾部径11.4cm、器高6.2cmを測る。柱状の鈕端部に粘土紐を貼付して中央の凹みを作り、内湾しておさめる口縁端部は玉縁状に仕上げる。41は鈕部径3.6cm、裾部径16.7cm、器高5.8を測る。柱状の鈕部と裾の広がる体部を持ち、胎土中には白色の細砂粒が目立つ。42は口縁下端部の稜が不明瞭な壺形土器。口縁部は外反して開き、内外面にヘラミガキ



第25図 8、9・10号住居址実測図 (S = 1/60)

調整を施す。44は底径2.6cmを測る底部片であるが、外底部にヘラ描きの三又状文が見られる。30の外面と内面底部近くには煤が付着する。また35、41の胎土中には海綿骨片の含みは極めて少ない。

45～58は出土位置を層序的に捉えることのできなかつた遺物である。45、46は「く」の字口縁の甕形土器。45は体部から口縁部にかけての接合方法を2回に分けている。先ず短い頸部を外側から体部に貼り付け、次に口縁部を内側から頸部に接合している。口縁端部にはつまみ上げのヨコナデによる面を持つ。46の口縁部内面には横方向のハケ調整が見られる。口縁部外面には連続する指押さえ痕が残り、口縁端部は面を持たない。47は擬凹線を持つ口縁部片であるが、口縁下端部の面は内湾気味にくびれ部へ繋がる。48は小型器台の脚部か。内外面をヘラミガキ調整し、外面には赤彩を施す。49は外面にヘラミガキ調整が見られる脚台部。胎土は精選され砂粒の含みは非常に少ない。50、51は共に体部が内湾すると思われるB類の蓋形土器である。52は底径1.8cmを測る底部片であるが、外面上方には打ち欠いたような痕跡が部分的に残る。56の外面には縦方向のヘラミガキ調整が施され、外底部中央には円状の凹みが見られる。57は丸底の底部片であるが、内外面全体に粗いハケ調整を施す。46、47、52、57の外面には煤が付着する。また47の胎土中には海綿骨片の含みは極めて少ない。

59～63は下層出土の遺物の中でもより床面に近いものを取り上げてみた。59、60は口縁部下端に稜を持つH類の壺形土器である。口径はそれぞれ13.0cm、17.4cmを測り口縁端部には面取りを行う。61はL類に分類した「く」の字口縁の壺形土器。口縁部は直線的に開き、端部には明瞭な面を持たない。62は無文の有段口縁を持つ鉢形土器。口縁部内面には段を作らず、胎土中には多量の砂粒が混入する。63の内面には指か棒状の工具による器面のナデ上げが見られる。また胎土中の海綿骨片の含みは極めて少ない。

64はP<sub>3</sub>より出土した「く」の字口縁の甕形土器。頸部の屈曲が強く、口縁端部にはヨコナデによる面を持つ。65～68は8号住居址周溝からの出土遺物である。66は坏部を欠くが途中で緩く屈曲して開く脚部を持つ。裾部内面には横方向のハケ調整が施され、脚端部は粘土の貼り付けにより肥厚する。68は外底部に編物状の圧痕を有する底部片で、海綿骨片の含みは極めて少ない。

#### 9・10号住居址 (第25図 図版24)

両住居址ともにやや歪んだ円形を呈し、西側約3分の1は8号住居址による削平を受けている。径約650cmで内側を巡る周溝1は建て替え前の10号住居址に付くものであり、それらの上に暗灰黄色の粘質土を貼床して(土層断面図19層)9号住居址の拡張が行われている。東西にやや長い9号住居址は1,000cm×940cmの規模を持ち、深さは15cm～35cm、推定床面積は約74m<sup>2</sup>(22坪)を測る。周溝は幅20cm～45cm、深さ5cm～10cmで住居址内を巡る。支柱穴の特定は難しいが仮に6本柱を想定するとP<sub>7</sub>～P<sub>12</sub>が一番バランスがよく、深さは27cm(P<sub>7</sub>)、35cm(P<sub>8</sub>)、87cm(P<sub>9</sub>)、58cm(P<sub>10</sub>)、67cm(P<sub>11</sub>)、61cm(P<sub>12</sub>)、柱間距離は300cm(P<sub>7</sub>－P<sub>8</sub>)、270cm(P<sub>8</sub>－P<sub>9</sub>)、240cm(P<sub>9</sub>－P<sub>10</sub>)、300cm(P<sub>10</sub>－P<sub>11</sub>)、310cm(P<sub>11</sub>－P<sub>12</sub>)、340cm(P<sub>12</sub>－P<sub>7</sub>)を測る。またP<sub>8</sub>～P<sub>12</sub>全てが周溝1に接しているのも興味深い。住居址中心近くに大きく開くP<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>はいずれも覆土に炭化物と焼土が混入している。廃絶順序は土層断面図によりP<sub>4</sub>

→P<sub>5</sub>→P<sub>6</sub>と判断できる。P<sub>4</sub>（23、24層）は長軸で200cm、最深部で55cmを測る。P<sub>5</sub>（21、22層）は円形の平面プランを持ち径約80cm、深さ57cmを測る。21、22層ともに炭化物、焼土、地山ブロックが混入しており、21層上面に9号住居址拡張時に貼られた床面19層が認められることからP<sub>5</sub>は周溝1と併存する10号住居址の灰穴炉と考えたい。P<sub>6</sub>（16、17、31～34層）は長軸190cmを測る不整形の二段掘りピットであり、最深部で85cm、一段目のテラス面で10cmの深さを持つ。19層を掘り抜いて作られており、9号住居址に付く大型の灰穴炉と考えられる。なおP<sub>6</sub>覆土内からは第31図15～20が出土している。また10号住居址の主柱穴として、不完全ではあるがP<sub>13</sub>～P<sub>17</sub>をその一部として想定しておきたい。

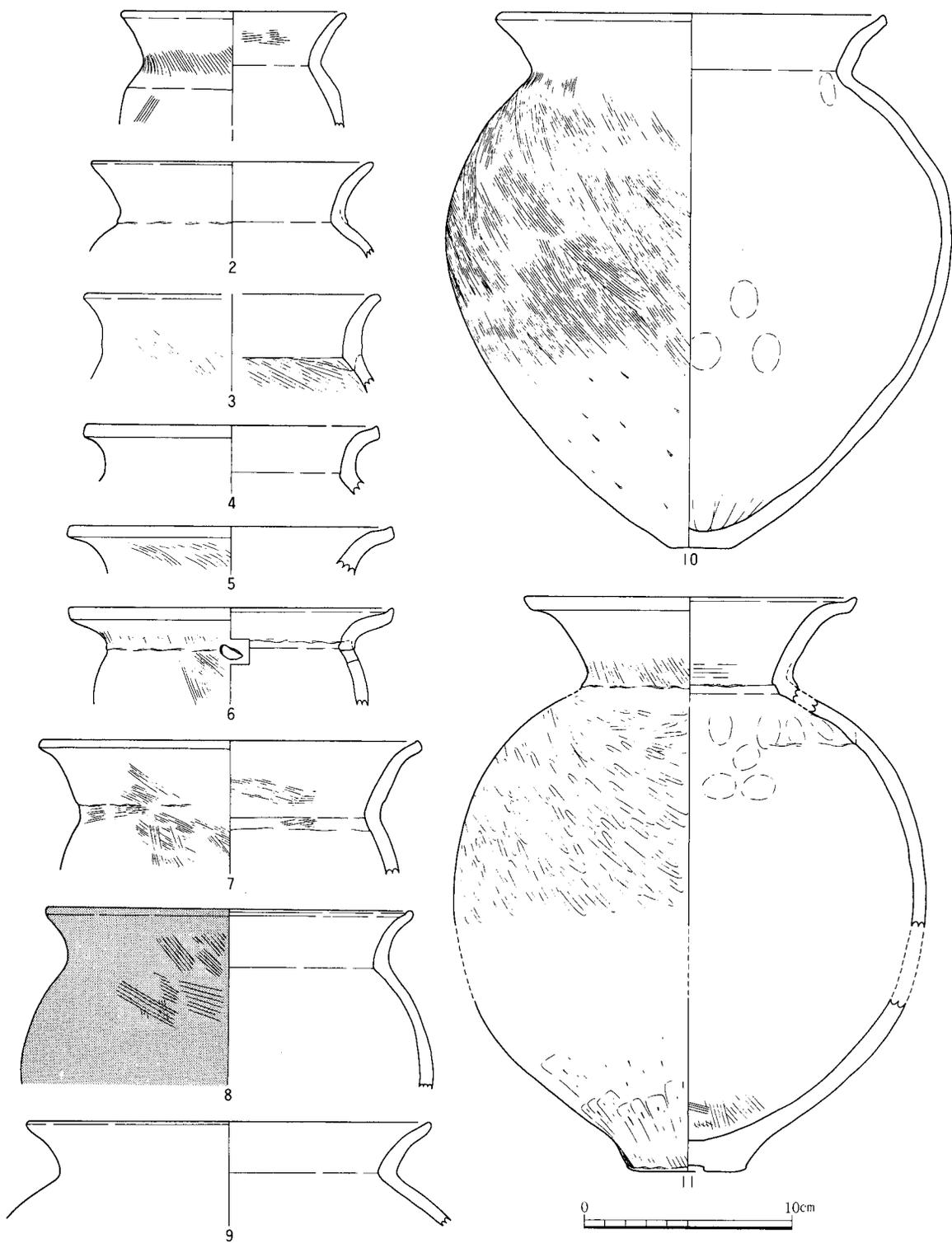
#### 遺物（第30、31図 図版51、52）

住居址の上面全体が後世の遺構（第71図）で削平されているために遺物量は少なく、層序的にも混入品が多いと考えられる。1～6は住居址の上面（標高41.50cm前後）で採集された遺物である。1はB<sub>4</sub>類の壺形土器で口径14.0を測る。直線的に開く口頸部を持ち、胴部最大径を上位に置く。2は有段口縁の壺形土器であるが口縁下端部の稜は弱く口縁部内面には明瞭な段を持たない。胴部最大径は口径の2倍近くを測る。3は小型器台の脚部か、ラップ状に開く脚部に4個の透穴を持つ。5は口径4.1cm、脚部径2.2cm、器高3.7cmを測る高坏形土器のミニチュア製品。全体に指押さえ痕が残る。

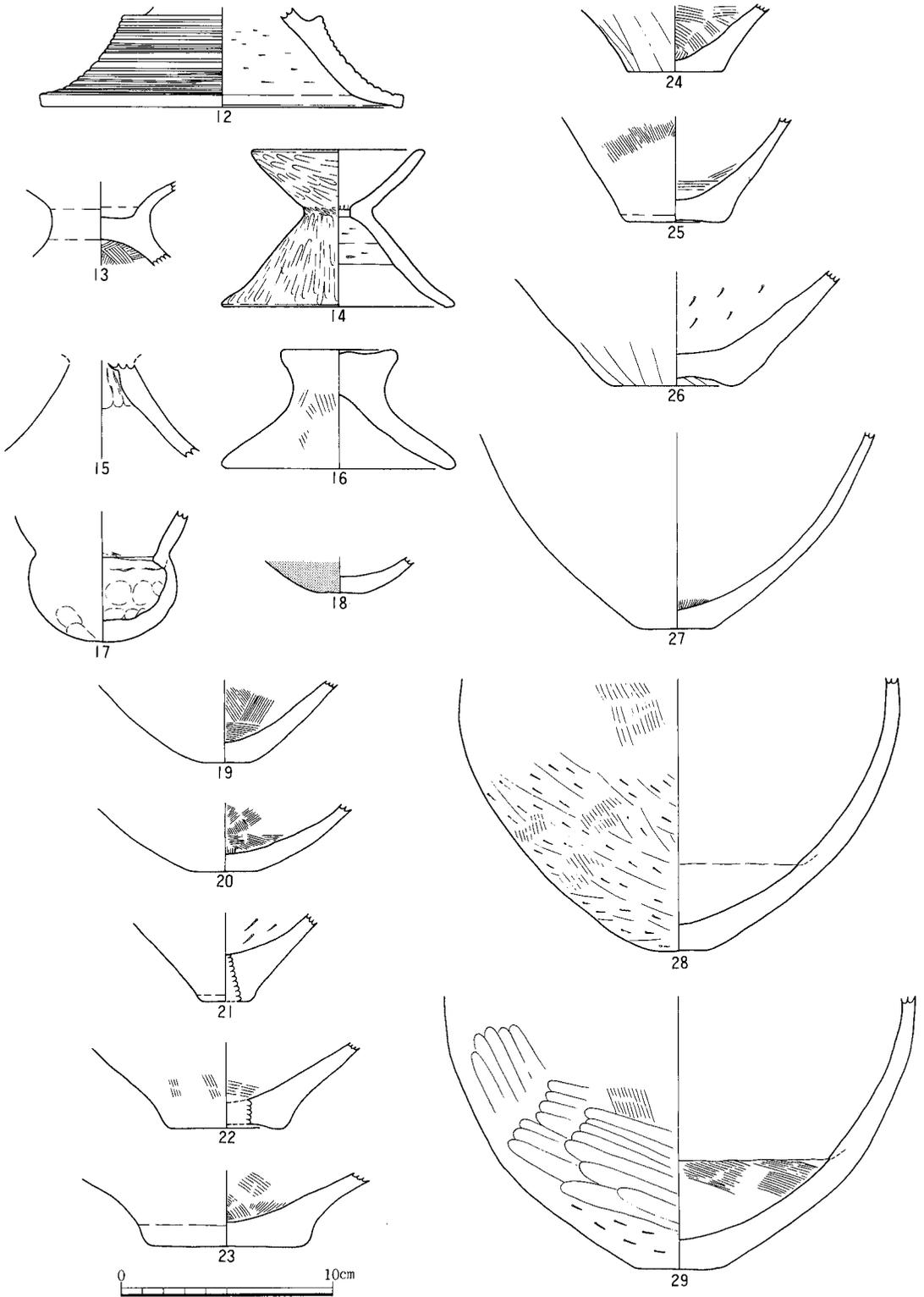
7、8は土層断面図10層レベルからの出土遺物である。7は外反して伸びる口頸部を持つ壺形土器。口縁部外面には粘土紐を突帯状に貼付する。9は口縁部外面全体に粘土（板）を貼付して口縁を肥厚させたD類の甕形土器と思われる。10は口径12.0cmを測るF<sub>4</sub>類の甕形土器。口縁端部をヨコナデして明瞭な面を作り、体部外面にはタタキ調整が施される。9、11の外面には煤が付着する。また7、8の胎土中には海綿骨片の含みは極めて少ない。

12はA類に分類した器台形土器。有段の受部と脚部を持ち、ヘラミガキ調整を施した外面器表には赤橙色痕が見られる。13は外面にヘラミガキ調整を施す底部片で、外底部は丸く湾曲する。14、21は9号住居址周溝から出土しており、同一個体と思われる。無文の有段口縁を持ち、口縁帯は伸びずに端部を丸くおさめる。15～20はP<sub>6</sub>からの出土遺物である。15は口縁部下端に粘土紐を貼付して有段状に仕上げたもの。16は口縁部上端で外反する無文の有段口縁を持つ。17は口径9.4cm、底径1.5cm、器高20.6cmを測るG類の細口有段口縁壺。直線的に開いて伸びる口縁部と扁平な球状を呈する体部を持つ。18は鈕部径4.6cmを測るB<sub>1</sub>類の蓋形土器で、鈕部下方には向かい合う1対の通し穴を持つ。19は外面をヘラミガキ調整、内面を横方向のハケ調整で仕上げている。口縁部ではなく脚台部になる可能性も考えられる。14、15、17、21の外面には煤が付着する。また15の胎土中には白色の細砂粒が目立ち、海綿骨片の含みは極めて少ない。

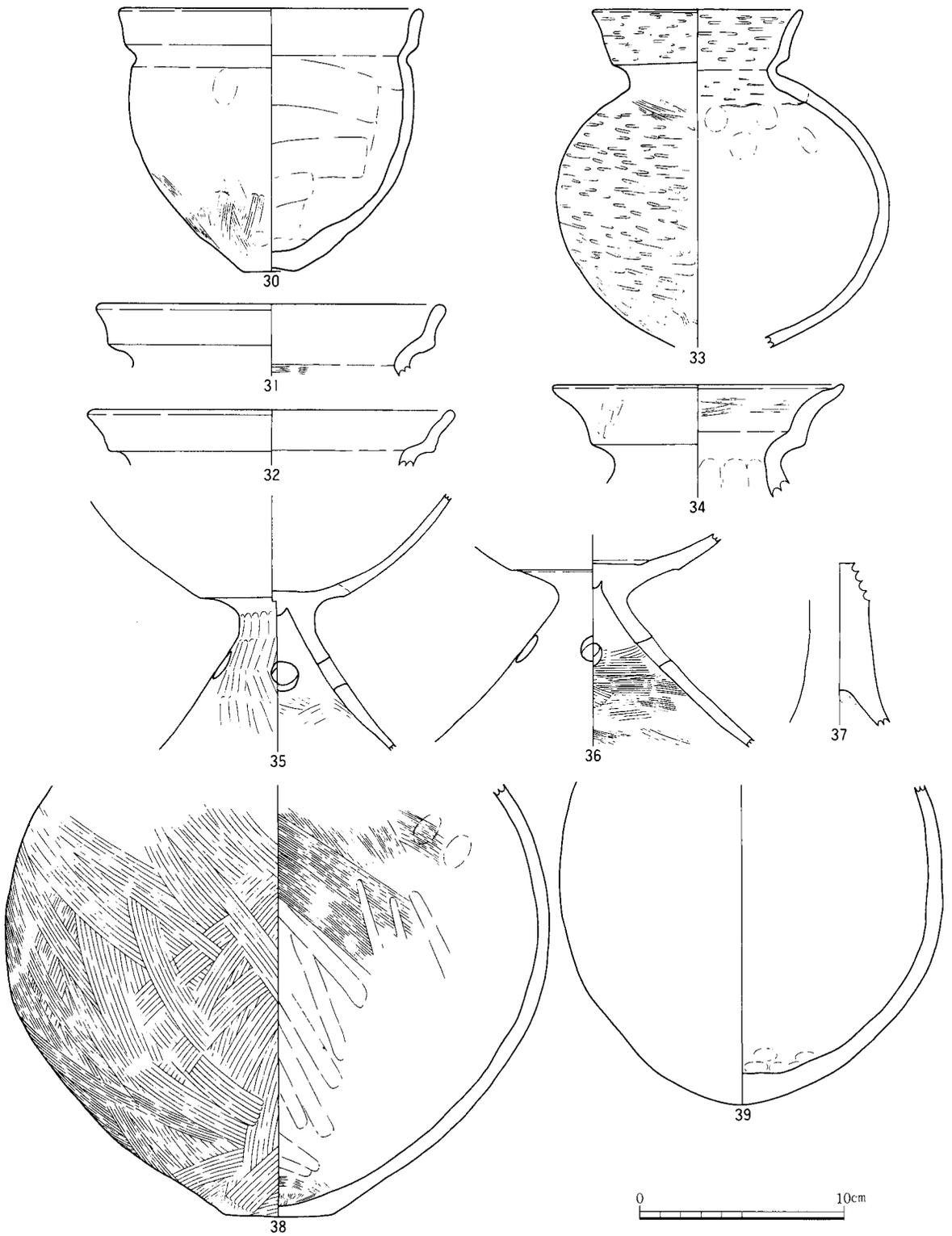
22、23は安山岩質、24は緑色凝灰岩の砥石である。25は全長5.1cm、刃幅1.8cm、茎部0.4cm×0.5cmを測る鉄鏃で重量は4.9gを量る。9号住居址床面から出土している。26は現長0.5cm、27は全長1.2cm、径0.3cmを測る9号住居址下層出土の管玉。28は全長1.5cm、径0.23cmを測る8号住居址下層出土の管玉で石質はいずれも緑色凝灰岩である。



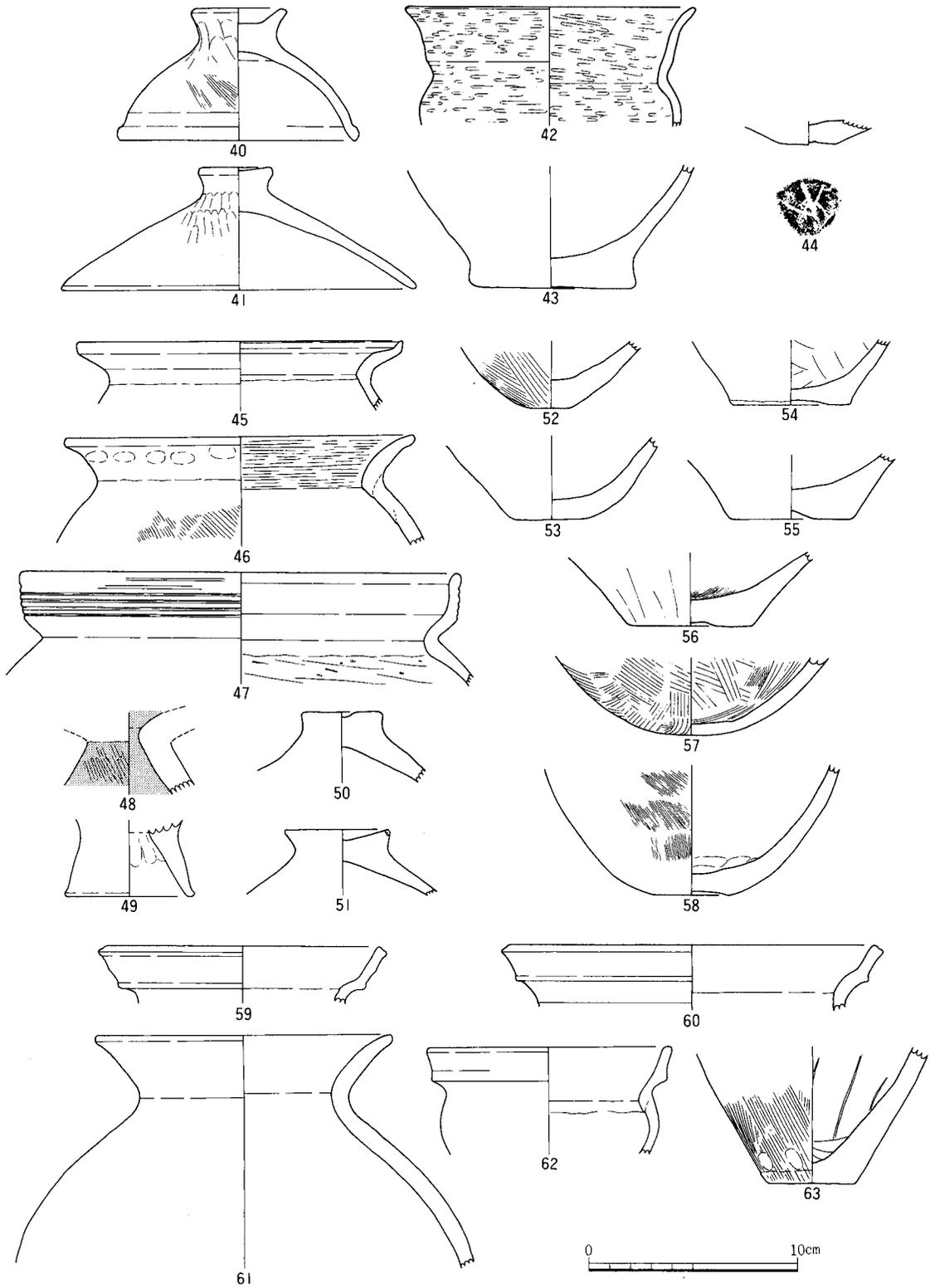
第26图 8号住居址上層(1~11)出土土器实测图 (S = 1/3)



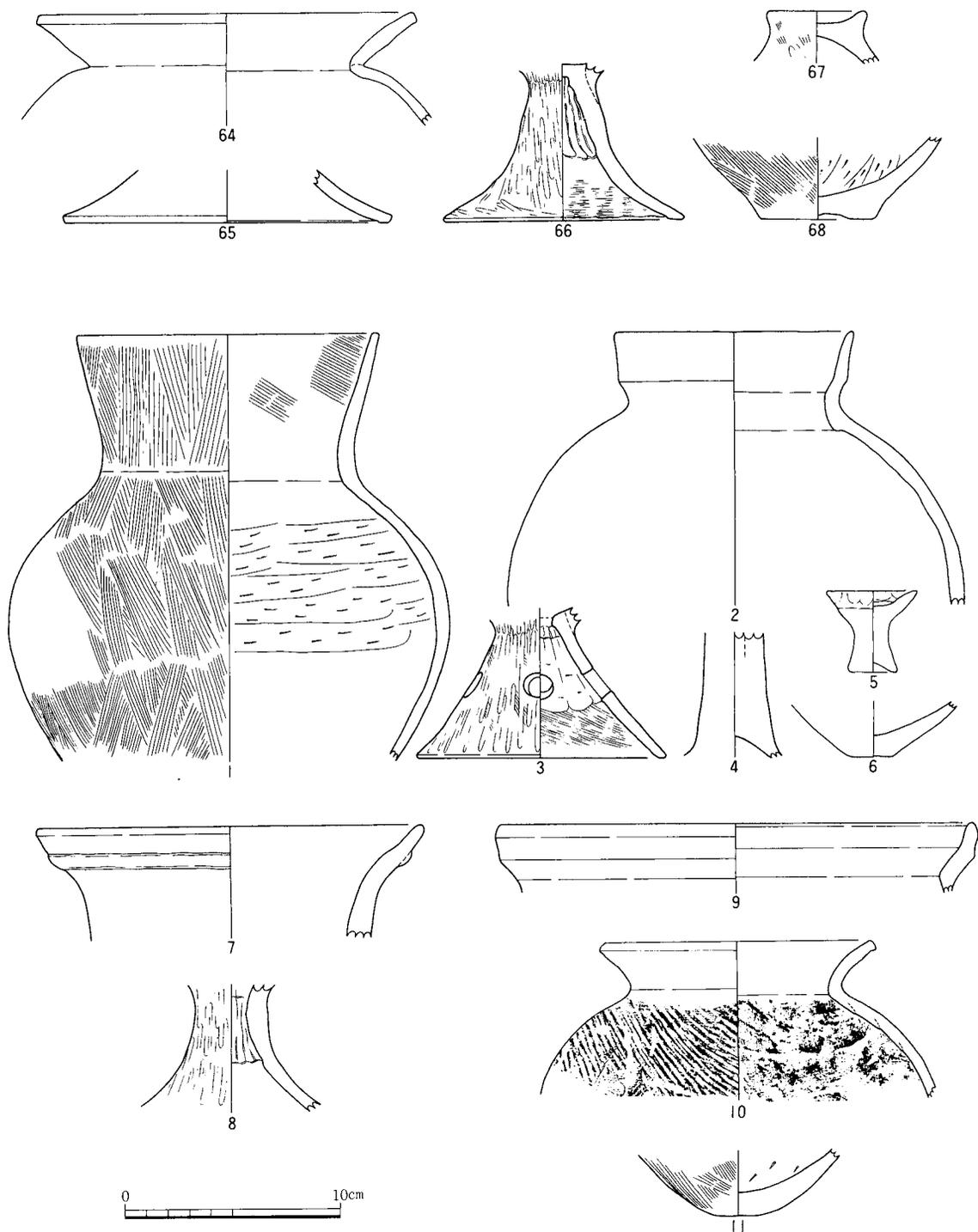
第27图 8号住居址上層(12~29)出土土器实测图 (S=1/3)



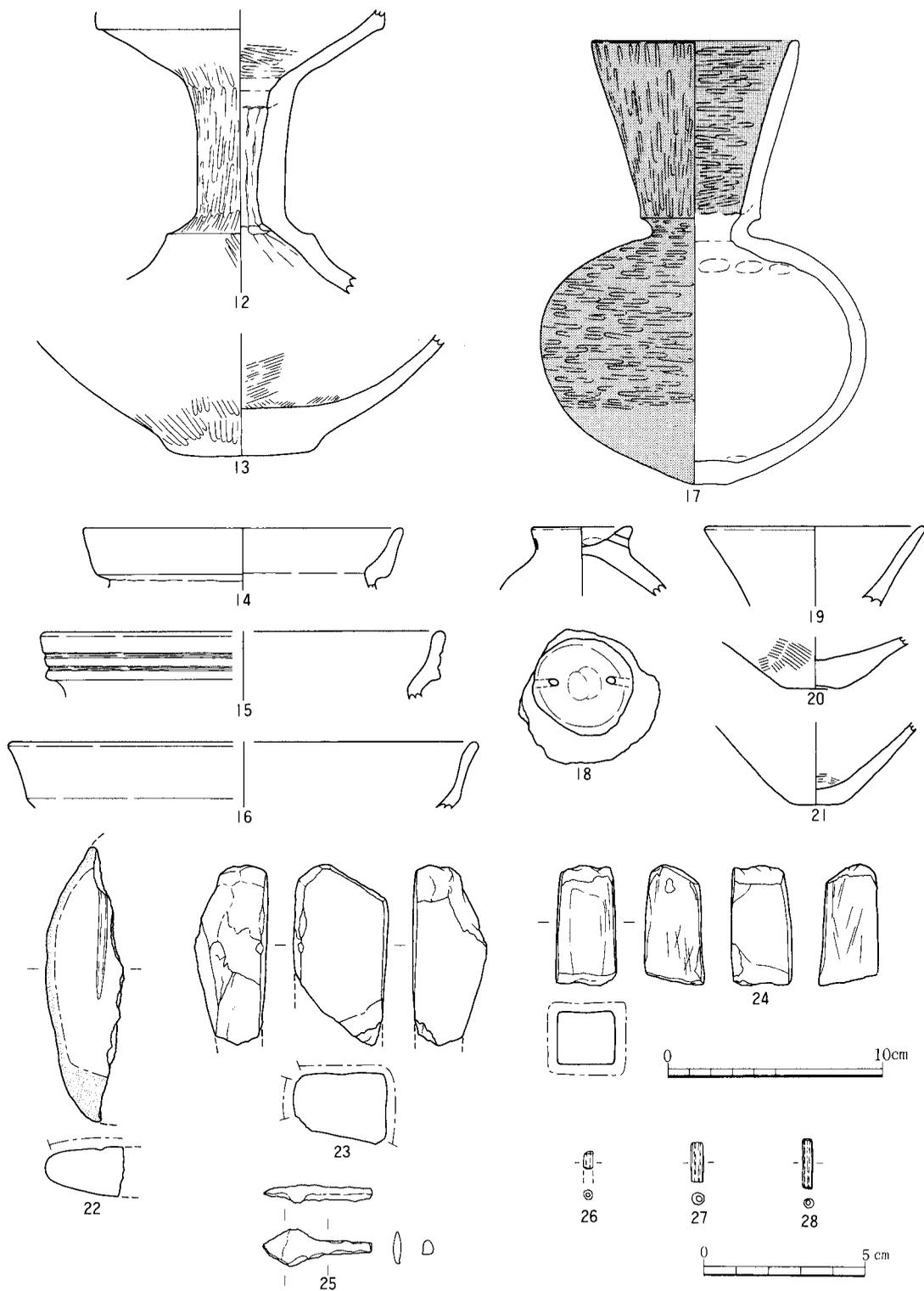
第28图 8号住居址下層(30~39)出土土器実測図(S=1/4)



第29图 8号住居址下層(40~44)、覆土(45~58)、床面(59~63)出土土器実測図(S = 1/3)



第30图 8号住居址P<sub>3</sub>(64)、周溝(65~68)、9号住居址上層(1~6)、下層(7、8)、覆土(9~11)出土土器実測図(S=1/3)



第31图 9号住居址床面(12、13)、周溝(14、21)、P<sub>6</sub>(15~20)出土土器实测图(S=1/3)  
 8号住居址覆土(24)、下層(23、28)、9号住居址覆土(22)、下層(26、27)、床面(25)出土遺物实测图  
 (S=1/3、26~28はS=1/2)

## 12号住居址

### 遺構 (第32図 図版25)

D11・12区で検出された12号住居址は西側半分が調査区から外れるために全掘することはできなかったが遺構平面プランは隅円方形を呈すと思われる。主軸はN-5°-Eに推定され、発掘調査規模は680cm×330cm、深さは20cm×35cm、床面積は20.1㎡(6.1坪)を測る。地山面・床面ともに西に傾斜しており、特に住居址西壁の立ち上がりは土が流れているためか捉えることはできなかった。これはおそらく後世における土塁構築時の攪乱層(土層断面図2層)が原因と思われる。また主柱穴の推定場所にはそれぞれ3個の同程度の深さを持つピットが並び、建て替えの可能性を示唆している。仮に図上でP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>としたものの計測値をとると深さはそれぞれ40cm、39cm、柱間距離は280cmを測る。周溝は幅、深さ共に10cm前後で住居址内を巡るが、P<sub>3</sub>東側で一時途切れその後は徐々に浅くなり消滅する。P<sub>3</sub>は不整形を呈する二段掘りのピットであり長軸95cm、短軸70cm、深さは最深部で50cm、北側のテラス面で8cmを測る。P<sub>4</sub>は住居址南壁に接すると思われる方形の二段掘りピットで調査幅は100cm×90cm、深さは最深部で41cm、北東側テラス面で4cm～8cmを測る。P<sub>4</sub>は土層断面図により、生活時には空いていたことが推察できるが、よく似た形態を持つ2つのピットが併存していたのか、それとも建て替えにより場所を変えたのかは確認できなかった。P<sub>5</sub>は土層断面図7層により、住居址の中心に位置する炉の一部であることが窺える。なおP<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>からは第32図1、2がそれぞれ出土している。

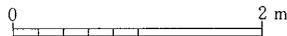
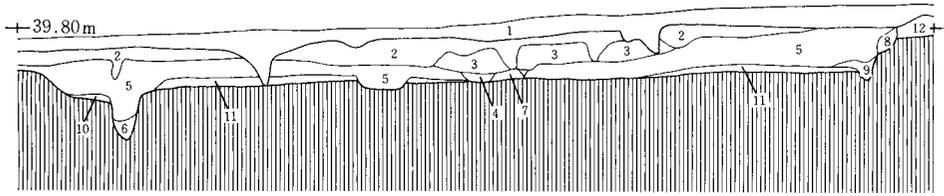
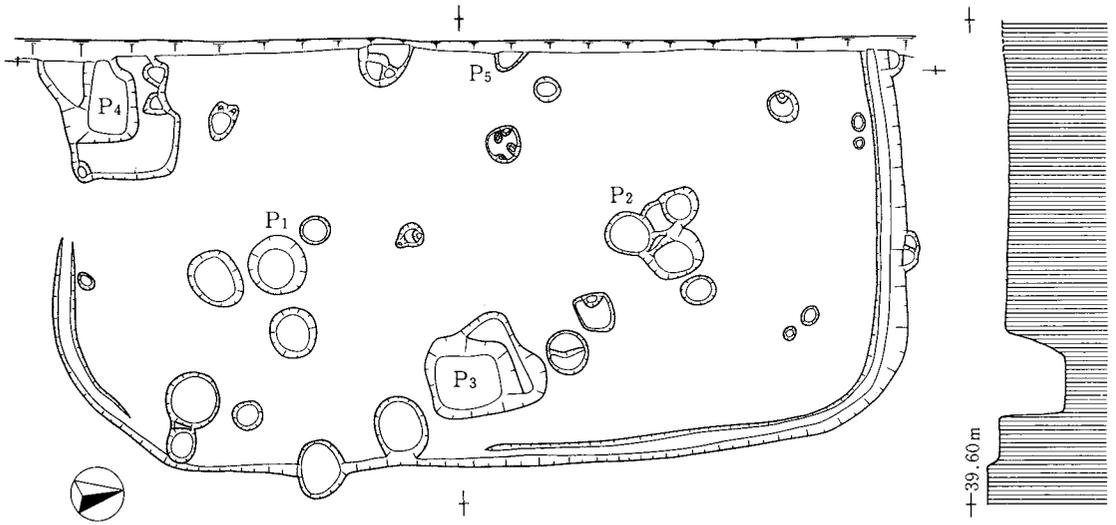
### 遺物 (第33図 図版52)

1、2はそれぞれP<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>、3～4は覆土からの出土遺物である。1は幅の狭い無文の口縁帯を持つ小型の甕形土器で、全体に歪みを生じている。底部を欠き体部外面には縦方向のハケ調整が施される。2は内外面に横方向の顕著なハケ調整を残し、外面には煤が付着する。またヨコナデされた口縁端部中央には1条の凹線状文がはいる。3は口縁端部をつまんで先細りに仕上げている。4は小型器台の受部である。胎土中の砂粒の含みは非常に少なく、外面には赤彩を施す。また口縁端部にはヨコナデによる不明瞭な面を持つ。5は胎土中に砂粒の含みが多い底部片であり、内底面には炭化状の内容物が付着している。

## 14号住居址

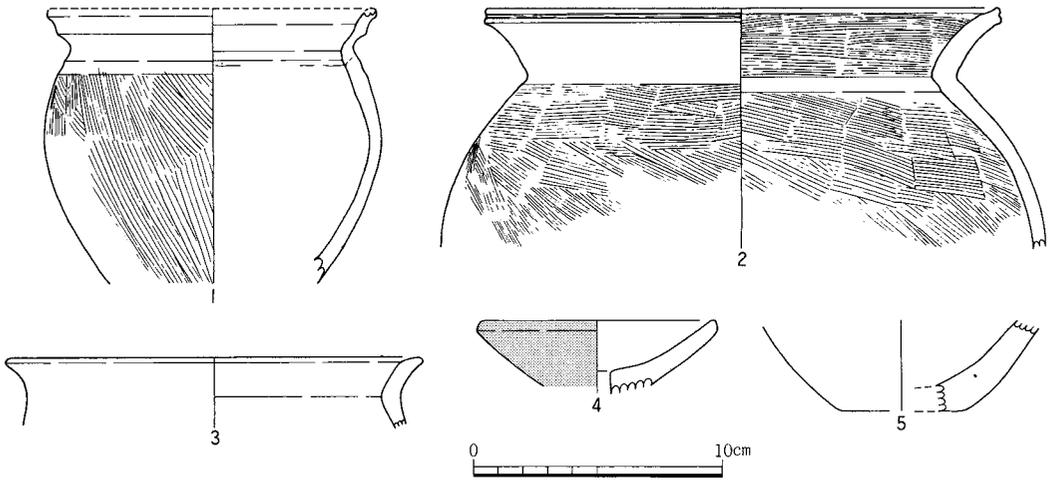
### 遺構 (第34図 図版27)

本遺跡の住居址遺構中最も南側のD14区に位置する。住居址上面には後世の土塁構築に伴う黒褐色の盛土整地土層が厚く堆積しており、土層断面図2層はその名残りと思われる。正方形の隅円方形を呈し、主軸はN-8°-Eと12号住居址に近い値をとる。550cm×520cmの規模を持ち、床面積は22.1㎡(6.7坪)、深さは南端で30cm、北端で55cmを測る。主柱穴は4個で深さはそれぞれ47cm(P<sub>1</sub>)、28cm(P<sub>2</sub>)、22cm(P<sub>3</sub>)、42cm(P<sub>4</sub>)、柱間距離は270cm(P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>)、250cm(P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>)、270cm(P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>)、250cm(P<sub>4</sub>-P<sub>1</sub>)、を測る。南側P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>が深く、旧地形の

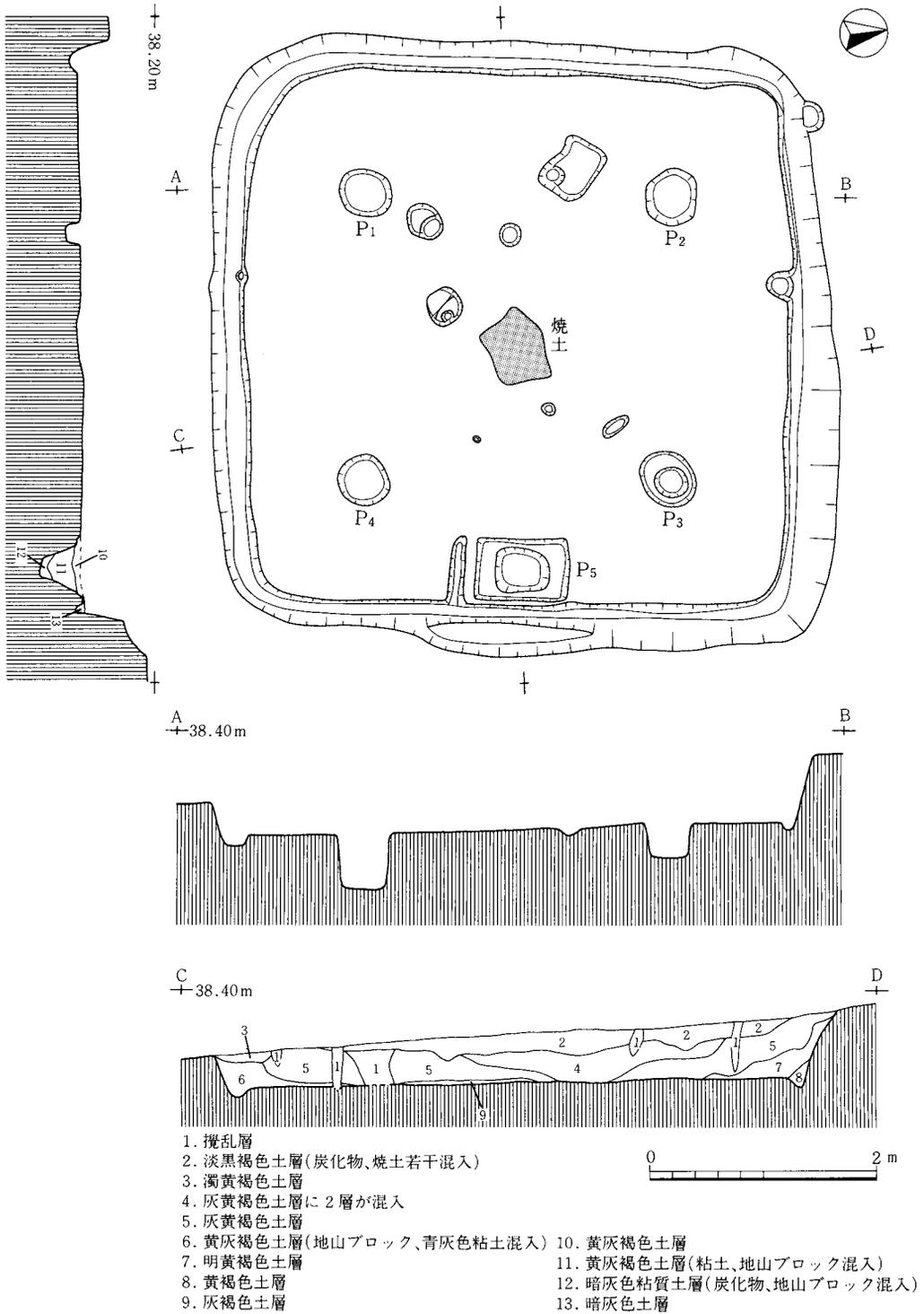


- |               |            |
|---------------|------------|
| 1. 濁褐色土層(表土)  | 7. 焼土層     |
| 2. 暗灰褐色土層     | 8. 黄灰色土層   |
| 3. 灰褐色土層      | 9. 濁黄褐色土層  |
| 4. 灰褐色土層に焼土混入 | 10. 黄褐色土層  |
| 5. 黄褐色土層      | 11. 黄灰褐色土層 |
| 6. 5に地山ブロック混入 | 12. 表土下部層  |

第32図 12号住居址実測図 (S = 1/50)



第33図 12号住居址ピット(1,2)、覆土(3~5) 出土土器実測図 (S = 1/3)



第34図 14号住居址実測図 (S = 1/60)

緩斜面上に構築されていた住居址であることが分かる。幅10cm～20cm、深さ10cm程度の周溝は途切れることなく住居址内を巡り、中央には浅い凹みを持つ地床炉が位置している。P<sub>5</sub>は東壁周溝横に掘られた方形の2段掘りピットで大きさは85cm×55cm、深さは中央最深部で36cm、回りのテラス面で4cm～7cmを測る。覆土は3層から成り上層の土層断面図10層は生活時に空いていたと思われるが、11、12層がどの段階で堆積したかは断定することはできない。またP<sub>5</sub>南には幅15cm、深さ5cm程の浅い溝が周溝に垂直して並ぶが、同様の溝は3号住居址、6号住居址内からも検出されており、住居址内遺構の性格を考える上で注目されるものである。

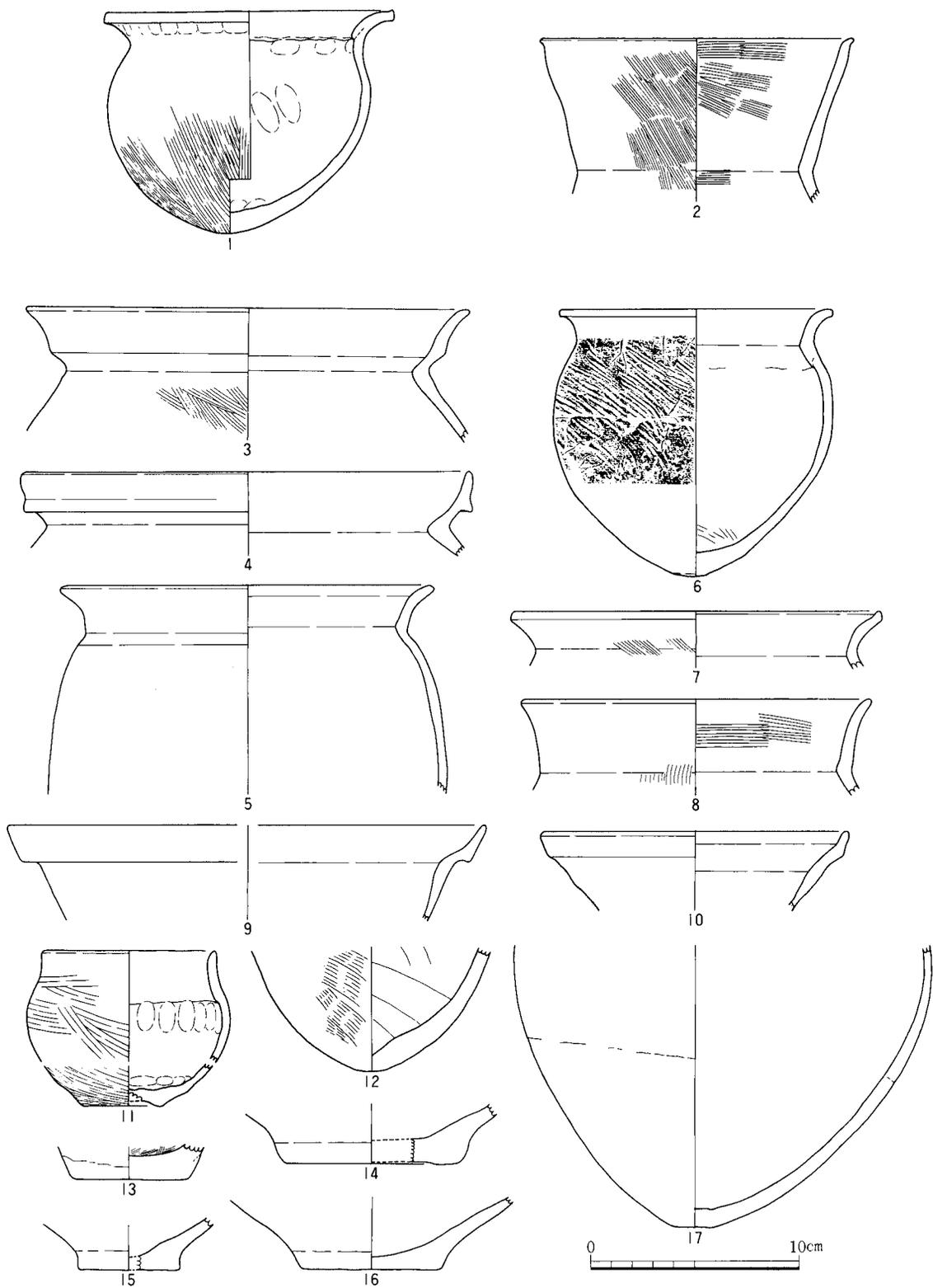
#### 遺物 (第35、36図 図版53、54)

1は口径13.8cm、底径1.2cm、器高12.7cmを測る。体部に歪みがあり、重心は常に一定方向へ片寄っている。「く」の字口縁の端部に面を持ち、外面には煤が付着する。体部外面のハケ調整は狭小な底部から放射線状に上方へ向かって施されている。2の口頸部は上方で緩く内湾し、外側へ弱くつまみ出す口縁端部を持つ。

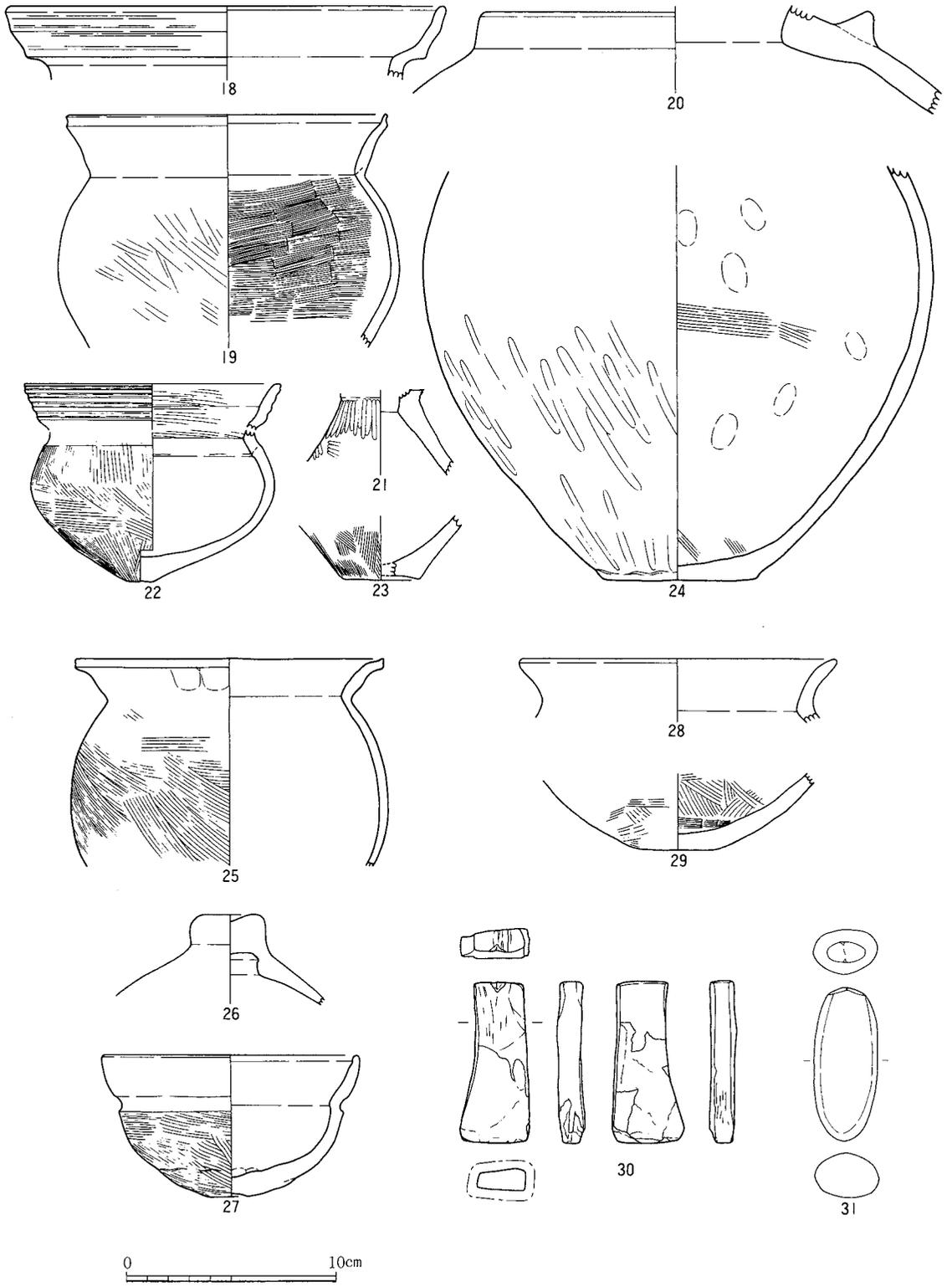
3は口径21.4cmを測るA<sub>2</sub>類の甕形土器。外反して開く外傾度の大きな口縁部を持つ。4は口縁下端部に粘土紐を貼付して有段状に仕上げている。5～8は「く」の字口縁の甕形土器。5は肩の張りが弱く体部外面に横方向の弱いハケ調整が施される。8は直立気味に伸びる口縁部を持ち、内面には横方向のハケ調整が見られる。9は推定口径23.0cmを測るA<sub>1</sub>類の鉢形土器。有段状の口縁帯は狭く、伸びない。10も狭い口縁帯を持つ鉢形土器と思われるが胎土中の海綿骨片の含みは極めて少ない。11は緩く外反する口縁部を持ち、体部内面には指押さえ痕が巡る。15は底部片として実測したが、蓋形土器になる可能性も考えられる。17は底径2.0cmを測り、内底面には炭化状の内容物が付着する。なお1、3、6、8、9、12、17の外面には煤が付着する。

18～24は出土層位の判然としない覆土からの出土遺物である。18は口縁部外面に粘土を貼り付け有段状に仕上げた甕形土器である。19は口縁端部を上方へつまみ上げるように引き出している。体部外面には斜方向、内面には横方向のハケ調整が施される。20はA<sub>2</sub>類に分類した大型の壺形土器。肩部には刻み目を持った断面三角形の突帯が巡る。21は小型器台の脚部片と思われる。明瞭ではないが外面に赤彩が施されていた可能性もある。22は口径12.0cm、底径1.3cm、復元高9.3cmを測るB<sub>1</sub>類の鉢形土器。弱い4条の擬凹線を施す有段状の口縁部と狭小な底部を持つ。18、19の外面には煤が付着する。

25は「く」の字口縁を持つ甕形土器で口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデして面を作る。外面には煤が付着し、胎土中の海綿骨片の含みは極めて少ない。26は鈕部上面に明瞭な凹みを持たないB<sub>2</sub>類の蓋形土器で内外面の摩耗が著しい。27は口径12.0cm、底径1.8cm、器高6.7cmを測るB<sub>2</sub>類の鉢形土器。内湾する無文の口縁帯を持ち、頸部には強いヨコナデ痕が残る。28、29はP<sub>5</sub>内からの出土遺物である。28は2段掘りピットの1段目(土層断面図10層)から出土している。緩やかに外反する「く」の字口縁を持ち、口縁端部は丸くおさめる。29は胎土中に砂粒を多く含み、内面には不定方向のハケ調整が施される。30、31は緑色凝灰岩質の石器である。30は四方に研面を持つ砥石、31は上端に擦痕の見られる用途不明品である。(藤田)



第35图 14号住居址上層(1,2)、下層(3~17)出土土器実測図 (S = 1/3)



第36图 14号住居址下層(31)、覆土(18~24,30)、床面(25~27)、P5(28,29)出土遺物実測図(S = 1/3)

## 13号住居址

### 遺構 (第37図 図版26)

C13・14、D13・14の4区にかけて検出された。N-78°-Eに主軸を持つ、400cm×370cmの東西方向に長方形を呈するカマドを持つ小規模な竪穴である。床面積は10.0㎡(3.1坪)で竪穴の深さは検出面から北側で56cm、南側で41cmを測る。支柱穴を4本持ち、深さは26cm(P<sub>1</sub>)、19cm(P<sub>2</sub>)、18cm(P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>)で、柱間距離は南北方向で180cm、東西方向で160cmを測る。南側側壁に沿って3間で4本の柱穴が並び、深さは25cm(P<sub>5</sub>)、13cm(P<sub>6</sub>)、18cm(P<sub>7</sub>)、19cm(P<sub>8</sub>)で柱間距離は100cm(P<sub>5</sub>-P<sub>6</sub>)、90cm(P<sub>6</sub>-P<sub>7</sub>)、110cm(P<sub>7</sub>-P<sub>8</sub>)を測る。東西と北側の側壁際には幅約15cm、深さ3~7cmの周溝が巡り、東側ではカマド付近で止まる。

カマドは南東隅に幅約110cm四方の方形状で、床面からの高さが3~7cmを測る盛土の基盤上に約20cm西に離れ、南壁に接して造られている。カマドの大きさは幅が推定で90cm、奥行90cmを測る。焼土と炭化物の拡がり第37図に示したとおりである。竪穴の覆土は地山が若干汚れたような黄褐色系のものが堆積し、後出する1号掘立柱建物との建て替えの際に、埋め戻されたものと推定される。

### 遺物 (第38、39図 図版55)

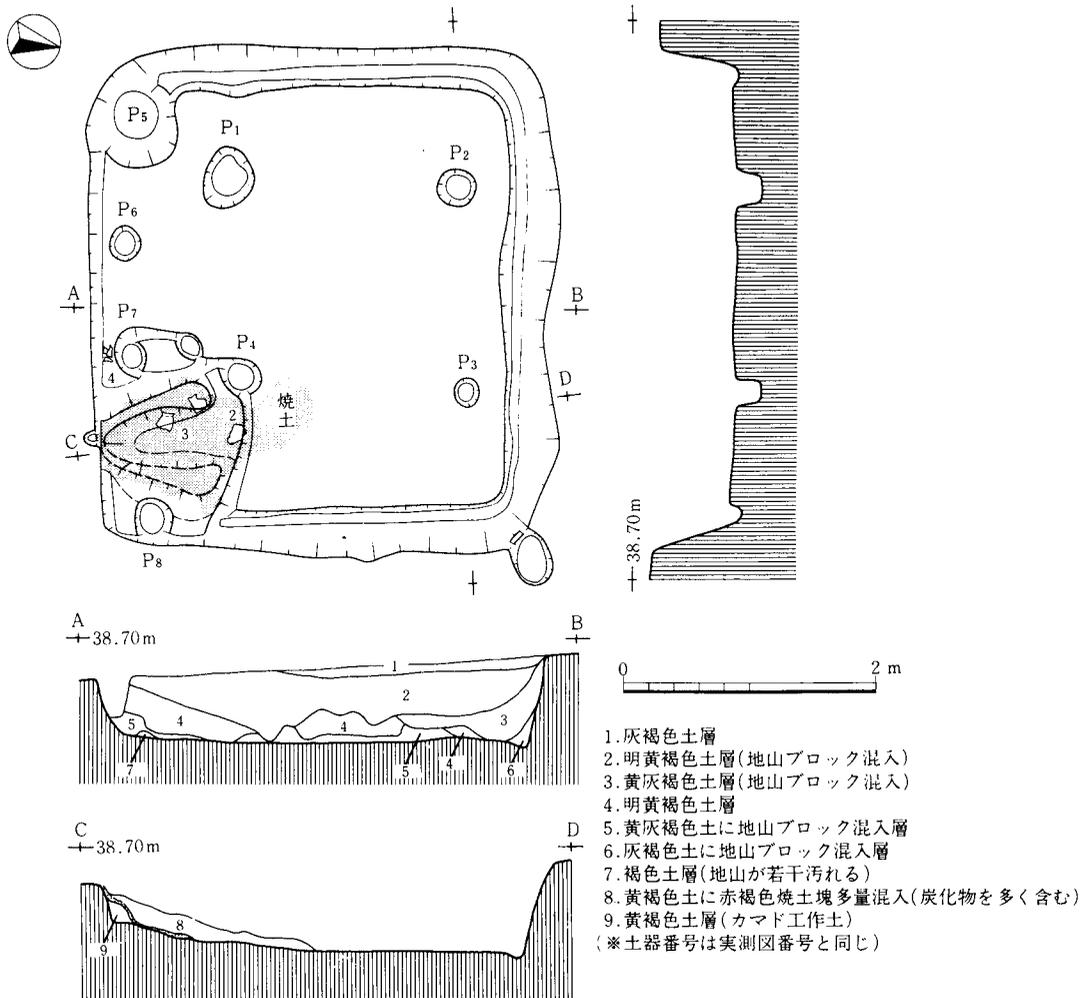
カマド付近か焼土面からの検出である。1は須恵器の有台坏で、底部と体部の境界が丸味を持って立ち上がり、口縁部で外反する。断面形状が方形をなす高台が直に付く。2は須恵器で把手付鉢である。底部と体部の境界が強い押圧で凹んでいる。体部内外面はカキ目調整が施され、把手部内外面には貼付の時の圧痕がある。外面体部下半にも圧痕が残る。3~4は土師器で、3は長胴の甕で、口縁部が外折して端部を上方へつまみ上げた形状をなす。胴部内外がタタキで、上部外面を撫で、内面にカキ目と撫で調整が施される。4はふくらみのある胴部に、大きく外折して端部を上方に引き上げ丸くおさめる口縁部が付く。胴部外面にカキ目調整が施され、下部に僅かにタタキ痕が見られる。5は埴形をなすもので4と同じような口縁部である。(宮下)

## 3 土坑、溝、ピット

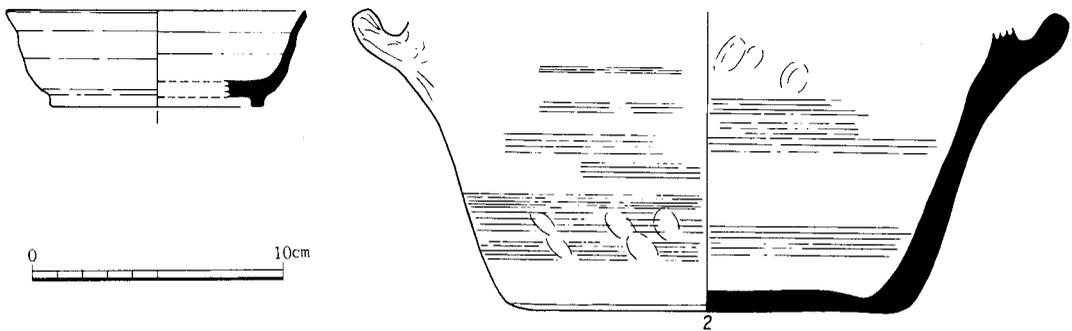
### 1号溝、2号土坑

#### 1号溝 (第40図 図版20)

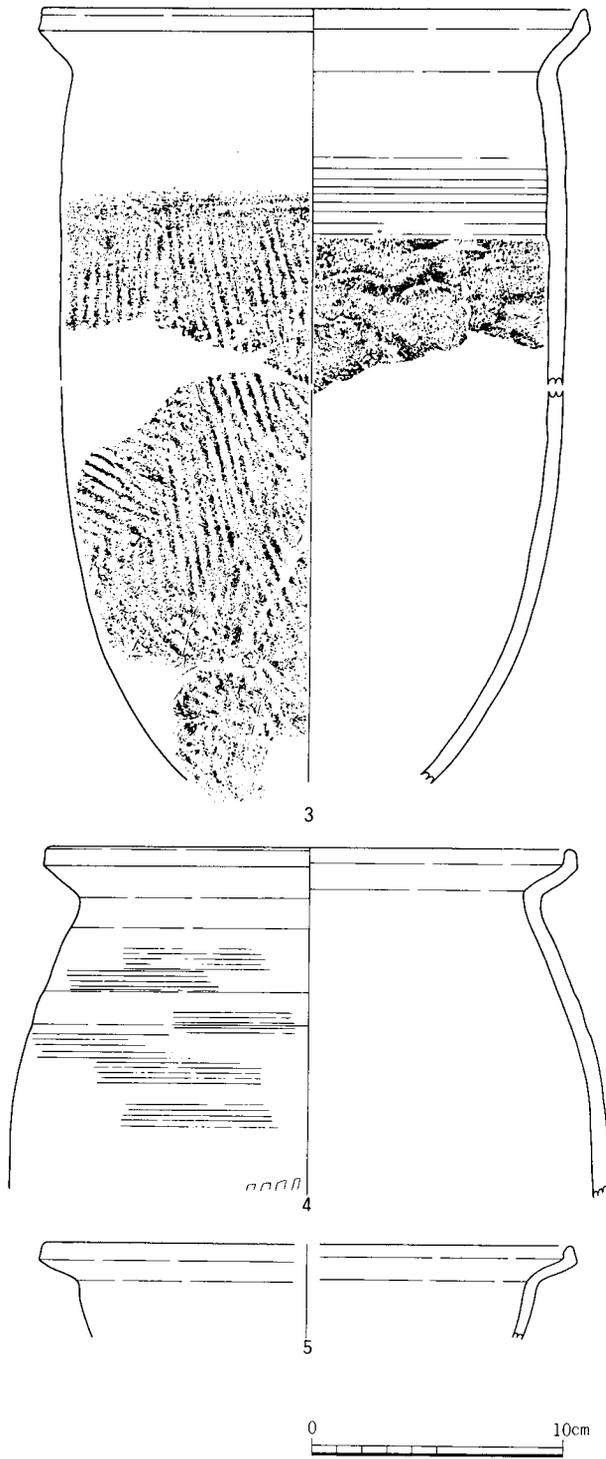
B1~3区、C1~2区にまたがる形で検出された。遺跡の存在する丘陵上の平坦部から東側斜面への変換点あたりに北から南方向へ延びている。長さは確認できたものでは約24mを測る。壁面をL字形の急角度に削って作り、底部はほぼ平坦になっている。深さはC1区では約1m近くを測るが、南側へ行くにしたがい浅くなり、最終的にはB3区で途切れている。この遺構はその存在する位置と形態から、溝というよりも丘陵下から丘陵上へ上るための道であった可能性が高い。



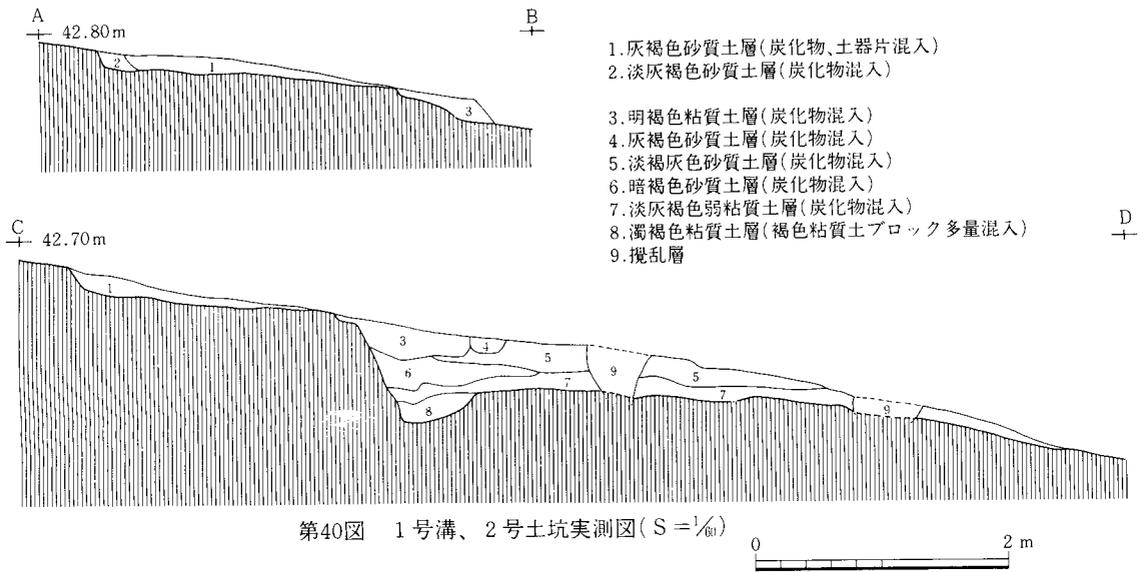
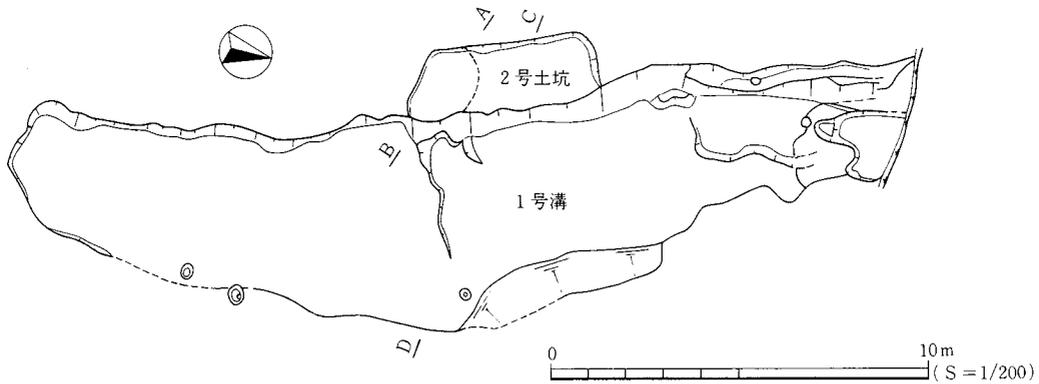
第37図 13号住居址実測図 (S = 1/60)



第38図 13号住居址出土土器実測図 (S = 1/2)



第39図 13号住居址出土土器実測図 (S = 1/3)



第40図 1号溝、2号土坑実測図 (S=1/60)

#### 遺物 (第41図 図版55)

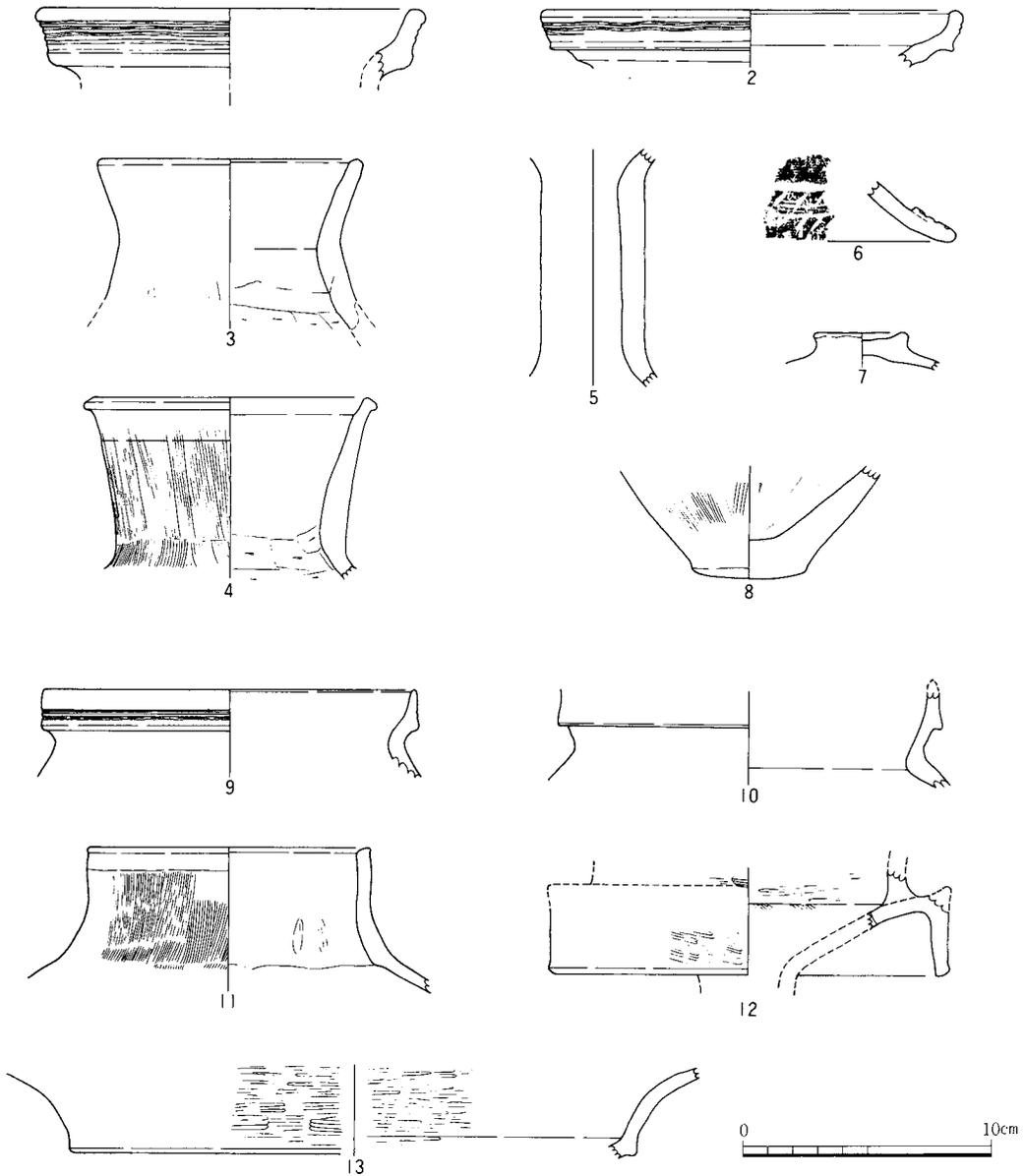
この遺構の覆土中からは縄文時代の土器・石器と弥生時代の土器が出土しているが、時期的には弥生時代の遺構である。弥生時代の土器には第41図1～8のものが出土している。1、2は有段口縁の甕で、口縁部には擬凹線を施している。3、4は壺の口縁部である。3は頸部から「く」の字に外反するものである。4は長頸壺タイプの口縁部で、端部はヨコナデ調整をして肥厚させている。頸部内面はヘラケズリしている。5は器台の棒状脚である。6は有台脚を持つ器台の脚端部で、外面端部を肥厚させ沈線による文様を持っている。7は蓋のつまみ部である。8は甕底部である。

#### 2号土坑 (第40図 図版20)

C1～2区から検出され、1号溝西壁に接して作られている。平面プランは台形で長さ520cm、幅180cm、深さ15cmを測る。斜面をL字状にカットして作り、底部は平坦になっている。ただし、実際の大きさは破線から南側部で、楕円形を呈していたものと推定される。

#### 遺物 (第41図 図版55)

ここからは甕、壺、高坏、器台が出土しているが、中でも注目したいのが、12の装飾器台の破片である。これは本遺跡では唯一の破片である。 (米沢)



第41図 1号溝(1~8)、2号土坑(9~13)出土土器実測図 (S=1/3)

3号土坑 (第42図 図版3)

1号住居址、3号住居址間のスペースの広い平地C2区に位置する。不整楕円形を呈する二段掘りの土坑であり長軸210cm、細軸85cm、深さは最深部で30cm、北側テラス面で8cmを測る。覆土は灰褐色砂質土の単層であり、内からは縄文式土器(第81図1)が出土している。また3号土坑南の1号溝付近からも数点の縄文式土器が確認されている。

#### 6号土坑 (第43、44図 図版30、56)

調査区の最も東側であるA4区の緩斜面に位置する。上端径150cm、下端径90cm、～100cm、深さ25cm～45cmを測り、床面には10cm前後の深さを持つ小穴が数個確認されている。覆土は2層から成り、2層目は炭化物を多量に混入した黒褐色土層となっている。また壁面には強い火力を受けてきたと思われる焼土壁(第43図スクリーン部分)が残っており、6号土坑内で火の使用があったことを裏付けている。

底径2.3cmを測る底部片が出土している。外面にはハケ調整が施され、胎土中には1mm～3mmの砂粒、海綿骨片が多量に含まれる。

#### 7号土坑 (第48、49図 図版30、56)

5号住居址、5号土坑の南隣りに位置し、平面プランは不整楕円形を呈する。長軸590cm、短軸250cm、深さは南側最深部で125cm、北側最深部で100cmを測る。覆土は7層から成り、全体にレンズ状に堆積している。また土層断面図第4層以上からは須恵器も出土しており、本土坑が新しい時期に再利用された可能性を示唆している。

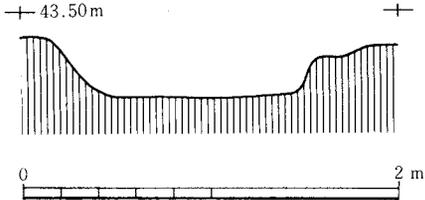
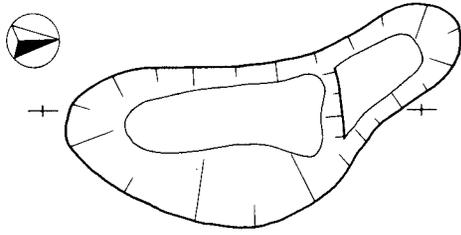
遺物は層的に捉えることはできなかったが7～8は前述のとおり上層部分から出土している。1は無文の狭い口縁帯を持つ甕形土器である。口縁内面には段を持たず、口縁端部は丸くおさめる。2は口縁端部に粘土紐を貼付して有段状に仕上げたC<sub>1</sub>類の甕形土器。頸部の屈曲が強く、短い口縁帯には3条の擬凹線が巡る。4は口縁部以下を欠くが、端部つまみ上げの有段口縁を持つI<sub>2</sub>類の壺形土器と思われる。5、6は小型器台になる脚部片か。7、8は須恵器の坏蓋である。天井部に平坦面をつくり、口縁部を横方向に伸ばし、端部を嘴状に内屈させておさめる。7がボタン形、8が擬宝珠形のつまみが付く。天井部はケズリ調整が施される。9は須恵器の坏で、内湾気味に立ち上がる体部で、器壁が厚い。体部と底部の境界が明瞭で、底部は粗雑な撫でつけでヘラ切り痕を残す。

#### 8号土坑 (第45図 図版5)

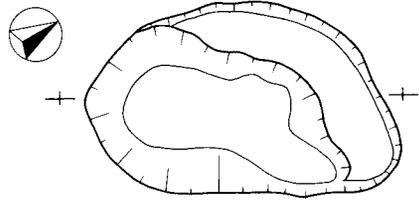
調査区東端のA5区に位置する楕円形の土坑で長径170cm、短径100cm、深さ70cm前後を測る。2段掘りを呈し、土坑北側には深さ15cmのテラス面が残る。また覆土内からは高坏形土器か器台形土器の脚部細片が出土している。

#### 9号土坑 (第46、47図 図版29、56)

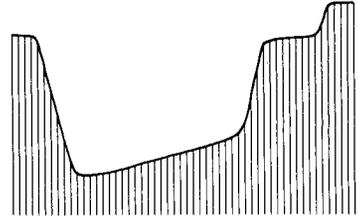
8、9、10号住居址の東、C7区に位置する円形の土坑で上端径80cm、下端径60cm～70cm、深さ30cmを測る。覆土全体に炭化物、焼土が混入しており、床面、壁面には強い火力を受けた痕跡



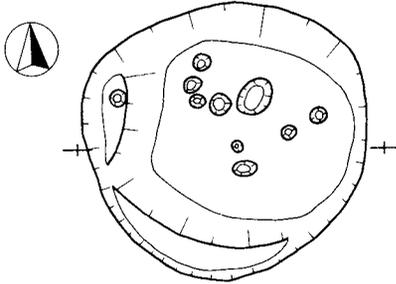
第42図 3号土坑実測図 (S = 1/40)



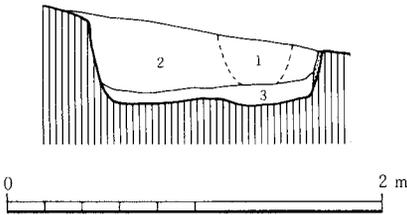
40.00m



第45図 8号土坑実測図 (S = 1/40)

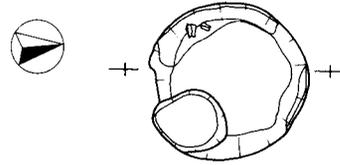


40.30m

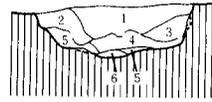


1. 褐色土層(ピット覆土)
2. 淡黄褐色土層
3. 黒褐色土層

第43図 6号土坑実測図 (S = 1/40)



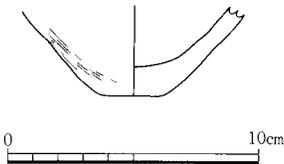
41.00m



0 2 m

1. 灰褐色土層(炭化物、焼土少量混入)
2. 黒灰褐色土層(炭化物多量、焼土少量混入)
3. 灰黄褐色土層(炭化物少量、焼土多量混入)
4. 2よりやや黒く、土器片混入
5. 黒色炭化層
6. 黒灰褐色土に地山土混入

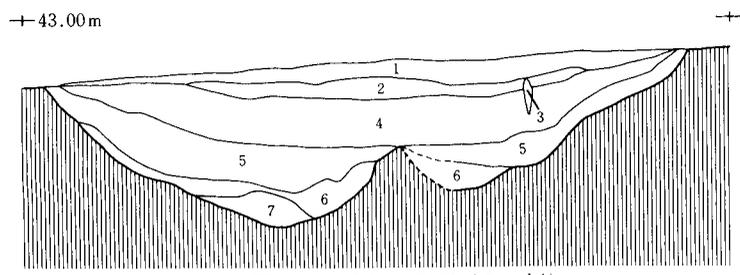
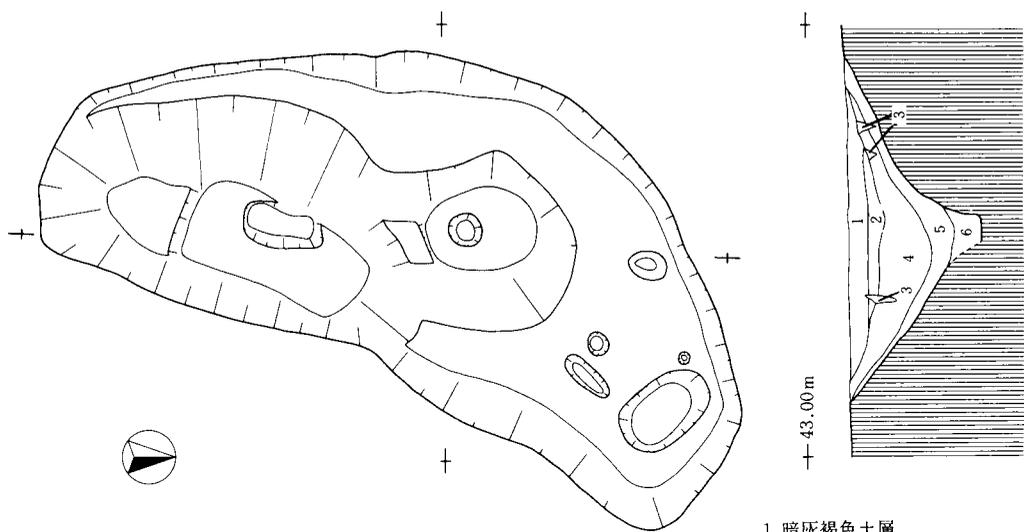
第46図 9号土坑実測図 (S = 1/40)



第44図 6号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)



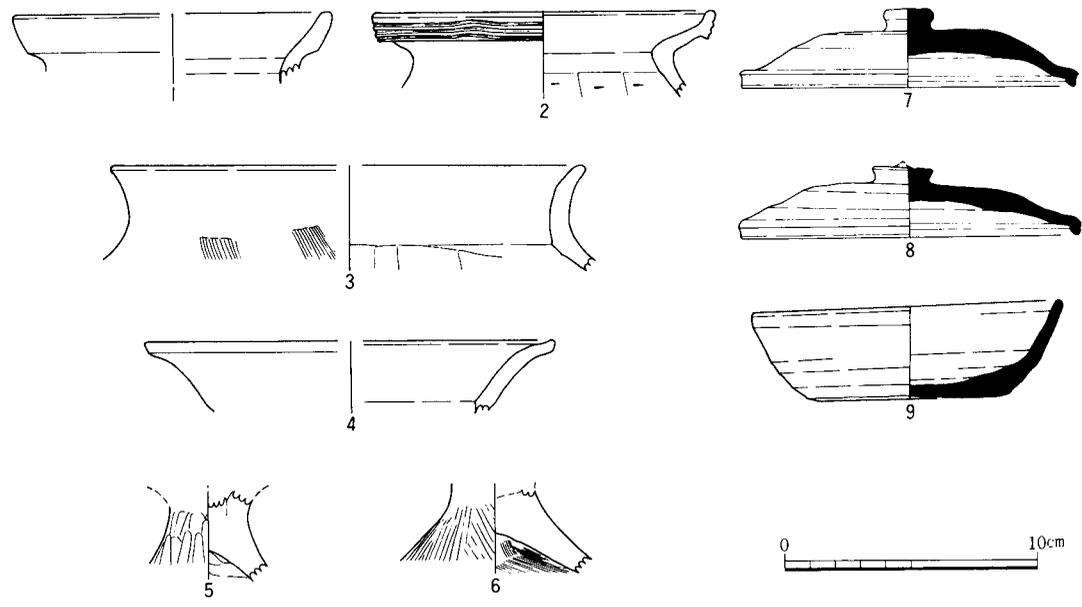
第47図 9号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)



- 1. 暗灰褐色土層
- 2. 黑褐色土層
- 3. 攪乱層
- 4. 黄灰色土層(炭化物混入)
- 5. 黄褐色土層
- 6. 灰黄褐色土層
- 7. 褐黄色土層(地山砂質土混入)



第48图 7号土坑实测图 (S = 1/60)



第49图 7号土坑出土土器实测图 (S = 1/3)

が残っている。尾根の東端にあることは6号土坑とも共通しており、焼土坑の性格を知る上で注目されるものである。

遺物としては口縁帯外面に弱い3条の擬凹線を施す甕形土器口縁部片と軽石が1点出土している。

#### 10号土坑 (第50、60図 図版30、56)

9号土坑の南側C7区に位置し、上面は北側から伸びてきている3号溝に1部削られている。二段掘りの不整楕円形を呈し長径180cm、短径110cm、深さは最深部が35cm、テラス面で10cm～20cmを測る。覆土は黄褐色の単層であり、遺物の含みは多い。

1～6は土層断面図2層からの出土遺物である。1、2は「く」の字口縁を持つF類の甕形土器。1は口縁端部を丸くおさめ、2は軽くつまみ上げてヨコナデ調整を施す。3は壺形土器の口縁部片と思われ、擬凹線を施した上に円形浮文を貼付する。4は器台形土器の脚部片。外面には縦方向のヘラミガキが施され、受部から脚部へ抜ける孔は筒状を呈する。小型器台か。5は把手と思われる。胎土中には砂粒を多く含む。6は外面にヘラミガキが見られる底部であるが、底部中央に開く孔は、故意に打ち欠いたような印象を受ける。2は外面に煤が付着する。また3～5の胎土中には海綿骨片の含みはほとんど見られない。

#### 11号土坑 (第51図 図版31)

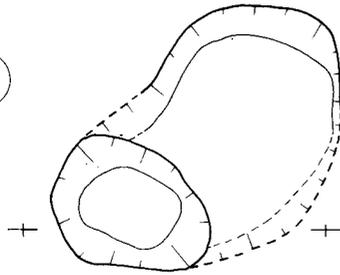
調査区中央部近くの尾根が一時狭くなるD8区に位置する。二段掘りの不整楕円形を呈し、長軸180cm、短軸130cm、深さは西側の最深部で46cm、東側のテラス面で5cm～10cmを測る。覆土は3層から成り2層の黄褐色土層には少量の炭化物が混入する。なおD7区～D10区には土坑と溝が集中しており、住居址を伴う居住域とは1線を画していたと思われる。

#### 12号土坑 (第52図 図版31)

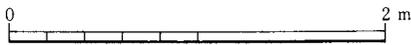
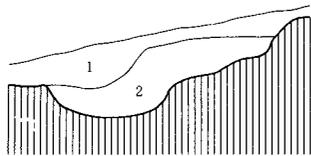
11号土坑の南D9区に位置する。二段掘りの不整形を呈し、長軸180cm、短軸160cm、深さは中央最深部で36cm、ドーナツ状の緩やかな傾斜を持つテラス面で10cm～20cmを測る。覆土は2層がレンズ状に堆積しており、1層の黄褐色土層、2層の淡黄褐色土層ともに少量の炭化物の混入が見られる。

#### 13号土坑 (第54、55図 図版32、56)

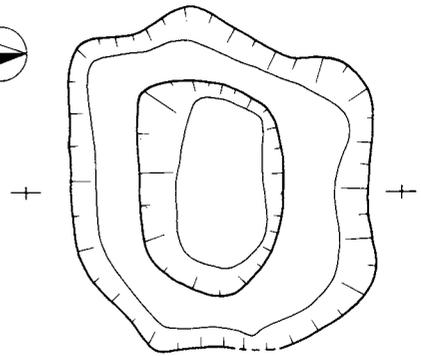
12号土坑の東に位置する円形の土坑で、縄文式土器が1点出土している。上端径130cm～140cm、下端径110cm～120cm、深さ10cm～15cmを測り、床面には10cm～20cmの深さを持つピットが2



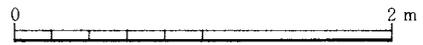
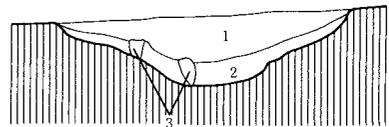
+ 41.00 m



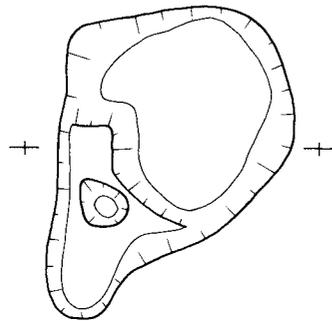
- 1. 黑褐色土層
  - 2. 黄褐色土層(土坑覆土)
- 第50图 10号土坑实测图 (S = 1/40)



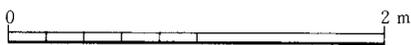
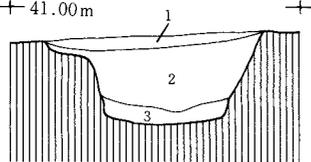
+ 41.00 m



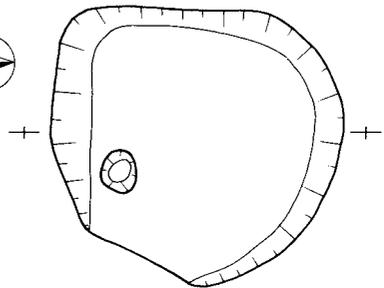
- 1. 黄褐色土層(炭化物少量混入)
  - 2. 淡黄褐色土層(炭化物少量混入)
  - 3. 攪乱層
- 第52图 12号土坑实测图 (S = 1/40)



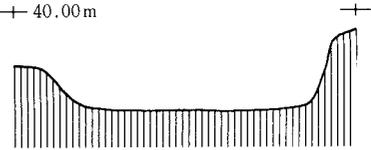
+ 41.00 m



- 1. 淡灰褐色土層
  - 2. 黄褐色土層(炭化物少量混入)
  - 3. 淡黄褐色土層
- 第51图 11号土坑实测图 (S = 1/40)



+ 40.00 m



- 第53图 14号土坑实测图 (S = 1/40)

個並んでいる。本遺跡からは縄文時代の遺物は数十点出土しているが、遺構で確認されているのは3号土坑と13号土坑のみである。

出土した遺物は底径16.4cmを測る深鉢片で体部外面には木目状襷糸文が施される。器壁は1.0cmとやや厚く、外底面には網代状圧痕が認められる。

#### 14号土坑 (第53図 図版4)

本遺跡中で最も尾根が細くなるC9区に位置する不整形の土坑である。上端径140cm～160、下端径120cm～140cm、深さ20cm～40cmを測る。床面南側には深さ20cmを測るピットを持ち、東側では遺構が流れたためか、上端と下端の区別がつかなくなってしまっている。

#### 15号土坑 (第56、61図 図版33、56)

D9・10区に位置する深さ10cm～15cmの浅い土坑で、西側が調査区から外れたため全掘することはできなかった。調査した部分での規模は長軸220cm、短軸50cmを測り、全体のプランは方形状を呈すると思われる。なお土坑南側の床面からは3個体の遺物が一括出土している。

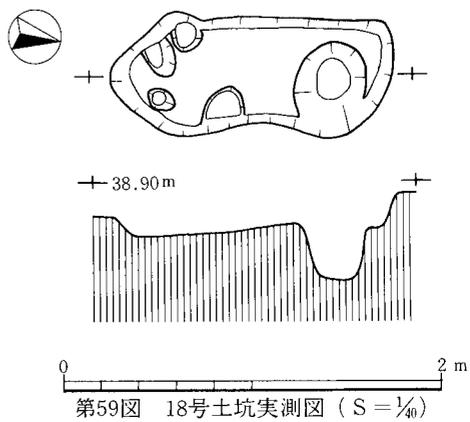
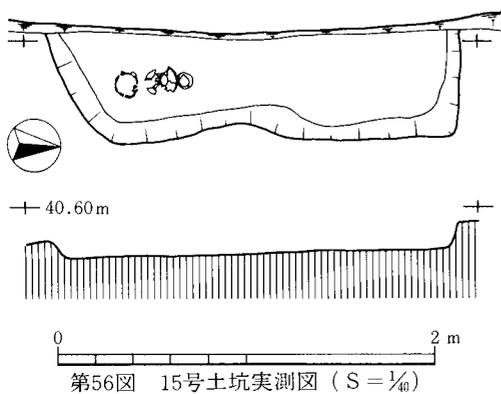
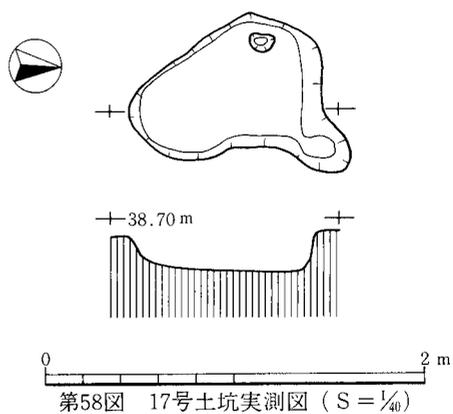
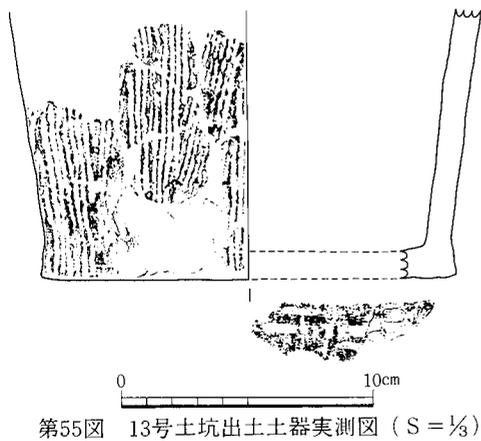
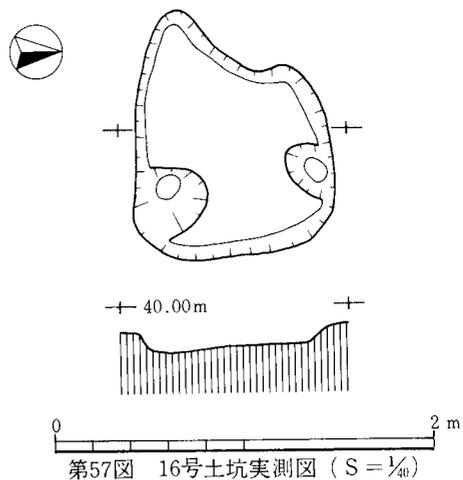
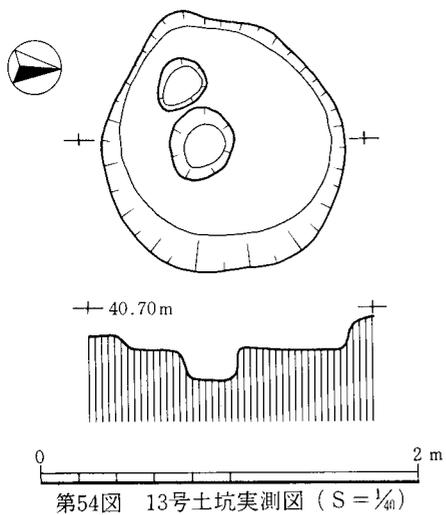
1は口径12.3cm、底径1.9cm、器高12.5cmを測る小型の甕形土器である。「く」の字口縁を持ち口縁端部はヨコナデにより若干肥厚する。外面にはハケ調整、内面には強いナデ調整が見られ、体部下方には焼成後に穿ったと思われる円形状の孔が1個認められる。2は口径14.4cm、脚部径11.9cm、器高10.9cmを測るB類の器台形土器である。口縁端部には粘土紐を貼り付け、ヨコナデによる面取りを行う。内外面ともに赤橙褐色を呈し、胎土中には多量の砂粒を含む。3は口径5.8cm、底径1.8cm、器高5.1cmを測るD<sub>1</sub>類の鉢形土器。胴部中央に最大径を持つ算盤玉形を成し、外面には赤彩痕が残る。胎土は淡白褐色を呈し、海綿骨片の含みは見られない。

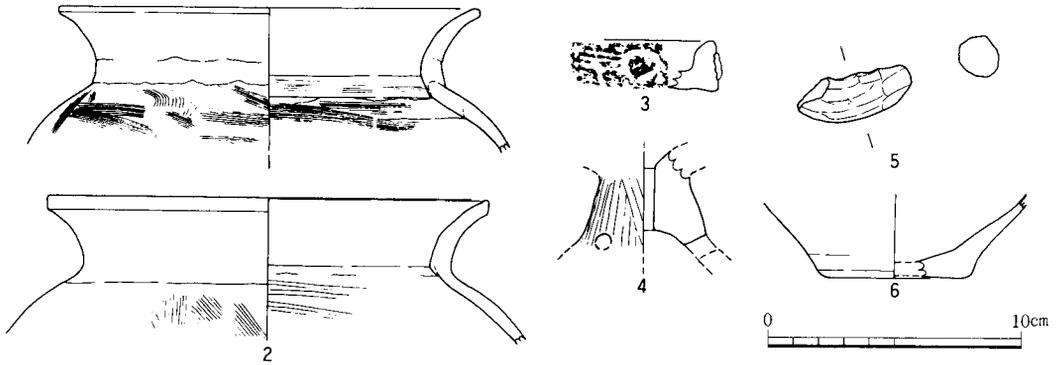
#### 16号土坑～18号土坑 (第57～59図 図版4、6)

D10区に位置する16号土坑は不整形を呈し、径100cm、深さ10cmを測る。また南北にはそれぞれ深さ20cm前後を測るピットが付く。17号土坑、18号土坑は土塁内のM7・8区に位置する。径、深さはそれぞれ100cm、20cm、150cm、15cm～20cmを測る。出土遺物はいずれも細片であるが、18号土坑からは須恵器片が検出されている。

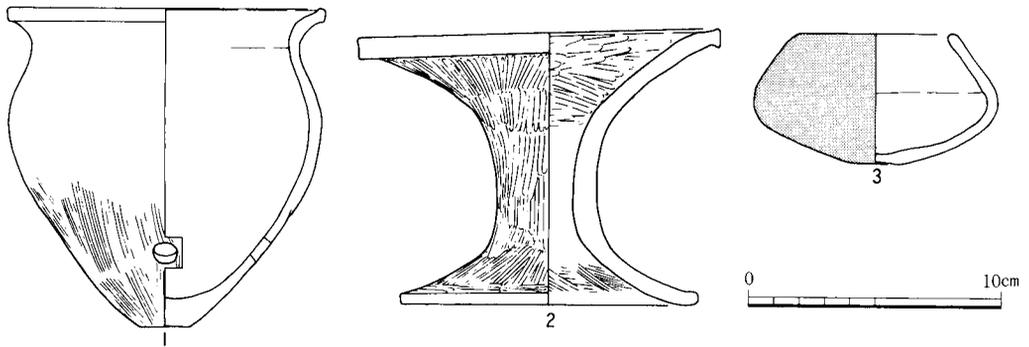
#### 19号土坑 (第62図 図版32)

土塁に伴う整地土層を除去して検出された遺構でD13区に位置している。方形を呈し、長軸300cm、短軸230cm、深さ10cm～15cmを測る。覆土上層には赤褐色を呈する焼土層と焼土混入層が見られ(土層断面図2、4層)、本土坑周辺での火の使用を窺わせている。また、19号土坑を覆う





第60図 10号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)



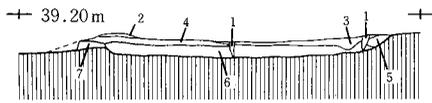
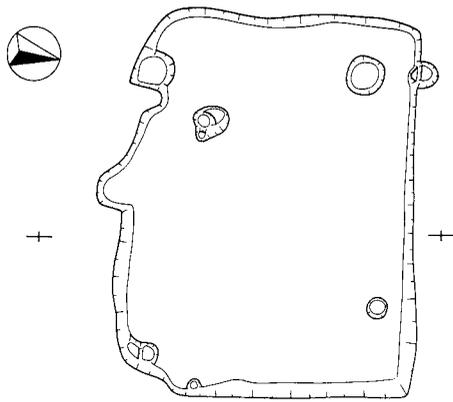
第61図 15号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)

形で2号掘立柱遺物(第76図)が建てられており、両者の関連性が注目される。遺物は実測できるものはなかったが、土師器、須恵器が出土している。

#### 20号土坑 (第63、64図 図版9、57)

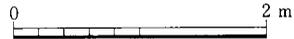
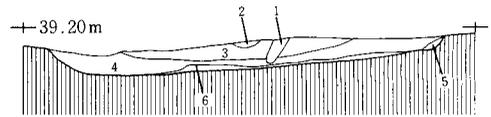
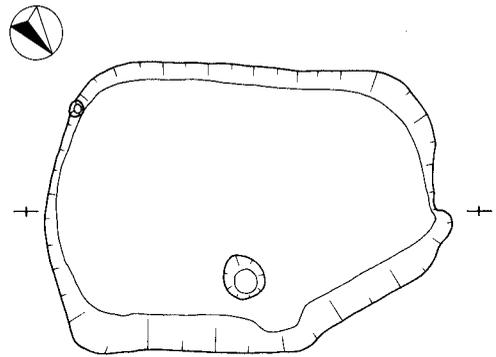
19号土坑と同じく整地土層の下から検出された遺構であり、D12・13区に位置する。不整形を呈し、長軸320cm、短軸230cm、深さ10cm~20cmを測る。覆土は灰色系の土層で占められ、北側床面には深さ20cmのピットを持つ。

出土遺物は比較的多く、6点が実測できた。1、3は「く」の字口縁を持つF類の甕形土器である。1は口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデする。3は口縁部を上方で強く屈曲させ、口縁端部にはヨコナデによる面を持つ。2は口縁上端部を強く外反させる無文の有段口縁甕である。4は口縁部外面に粘土紐を貼付して有段状に仕上げたM類に近い壺形土器か。5、6は同一個体と思われる壺形土器の体部片である。外面にはヘラミガキ調整が施され、胎土中の砂粒の含みは少ない。1~3の外面には煤が付着する。また2、4の胎土中には海綿骨片の含みは極めて少ない。



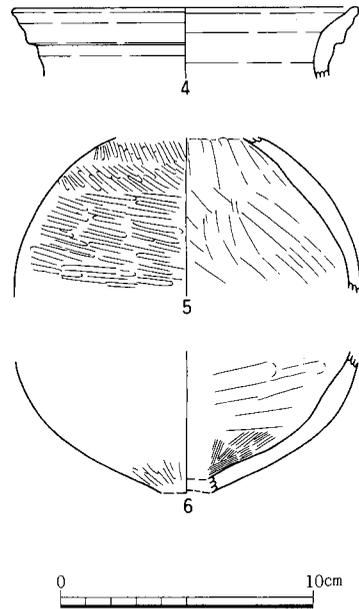
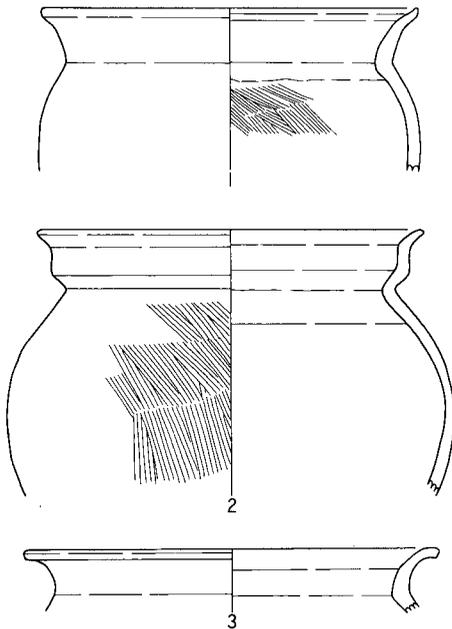
1. 攪乱層
2. 赤褐色土層(焼土層)
3. 灰褐色土層
4. 3に焼土混入
5. 濁灰褐色土層
6. 灰黄褐色土層
7. 表土下部層

第62図 19号土坑実測図 (S = 1/60)



1. 攪乱層
2. 灰色粘土層
3. 灰黄褐色土層
4. 灰褐色土層
5. 暗黄褐色土層
6. 4に地山ブロック混入

第63図 20号土坑実測図 (S = 1/60)



第64図 20号土坑出土土器実測図 (S = 1/3)

21号土坑 (第65、68図 図版10、57)

D15・16区に位置する不整形の土坑で長軸400cm、短軸250cm、深さ10cm～15cmを測る。土坑内に小土坑やピットが散在するがいずれも浅い。当遺跡では土塁以南の遺構が一般的に浅いがこれはおそらく土塁構築に関連する攪乱を受けたためと思われる。

遺物は壺形土器を主体として7点が実測できた。1～3はB類に分類した長頸壺である。1、3は外反して開く口頸部を持ち口縁端部は丸くおさめる。2は口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデするタイプで、端部には内傾する面を持つ。4は透穴1個が認められる高坏形土器の脚部であり、胎土中には黒雲母が散見される。5は底部中央に開く孔を内側から粘土を充填して仕上げており、外底面には充填されなかった分の凹みが残る。1と5は同一個体の可能性もある。3、6の外面には煤が付着する。また2～4、6の胎土中には海綿骨片の含みは無いが、あっても極めて少ない。

22号土坑 (第66図 図版13)

22号土坑は調査区の最東南端であるA20区の崖際に位置する。不整の長楕円形を呈し、長軸370cm、短軸100cm、深さ30cmを測る。遺構構築レベルは32m代と低く、調査区中央部のレベルとは10m近い落差がある。遺構内からは土師器、須恵器、鉄釘の細片が出土しているが、平坦部からの流れ込みの可能性が強い。

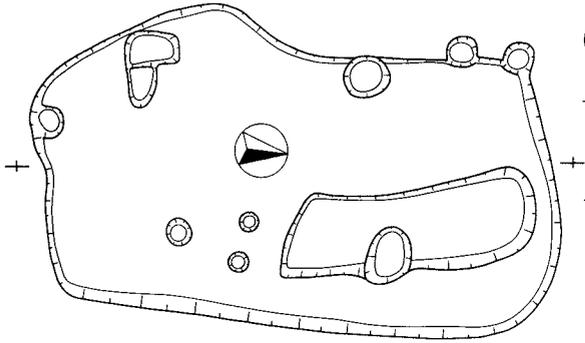
23号土坑 (第66図 図版5)

6、7号住居址の西D5区に位置する半掘の土坑である。調査部分での規模は長軸700cm、短軸50cm～100cm、深さ40cmを測る。発掘当初は竪穴住居址を意識して掘り進めていたが、西側が調査区から外れるため平面プランがつかめず、また遺物量も少なく周溝等も捉えられないため、大型の土坑として取り扱った。(藤田)

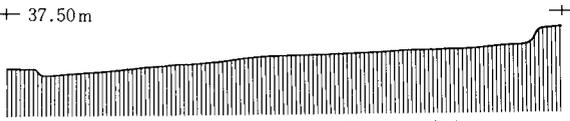
24号土坑 (第69、70図 図版12、57)

台地から南にゆるやかに傾斜して伸びる尾根上から、やや西に下がったB・C17区に位置する。変形の逆「L」字形をなし、東西が480cm、南北が330cm、幅130～180cmを測る。底面は平坦で、深さは北東側で約40cm、南側では6cmと浅い。北側に一段上がってとび出している土坑状のものは、24号土坑に付くものか否かの判断はできなかった。

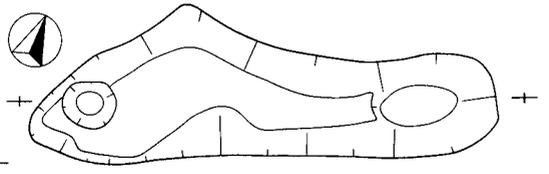
遺物は、1が外傾して直線的に伸びる口縁で、内面に黒色処理を施す内黒土器の塊である。2も内黒土器で鉢状をなすものである。やや外傾気味に立ち、口縁端部が真上からの軽い押えで狭い面をなしている。3は鉄斧である。他に土師器の細片が4点出土している。



+ 37.50m



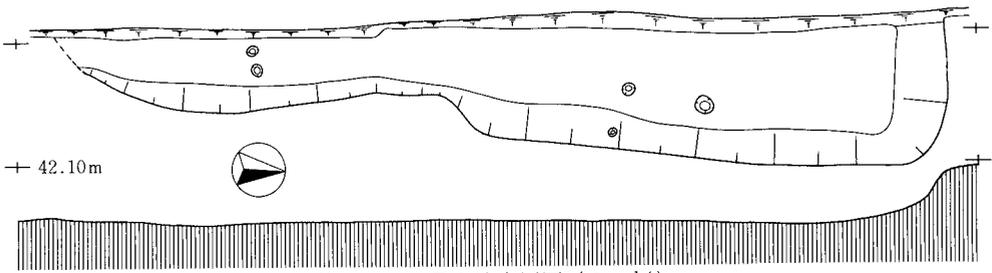
第65图 21号土坑实测图 (S = 1/60)



+ 32.50m



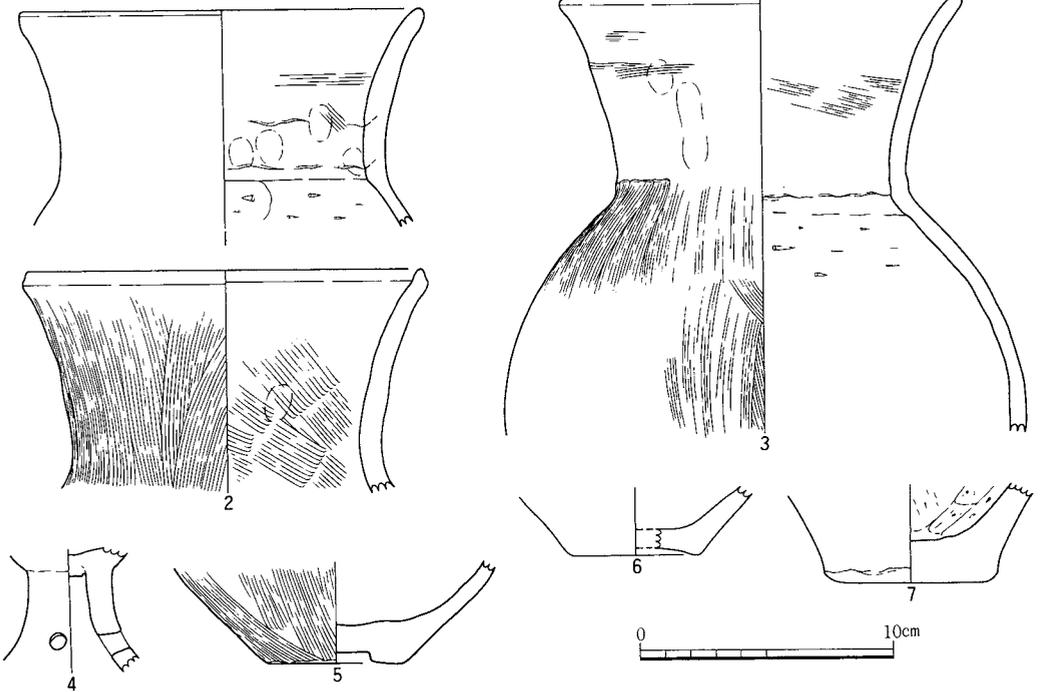
第66图 22号土坑实测图 (S = 1/60)



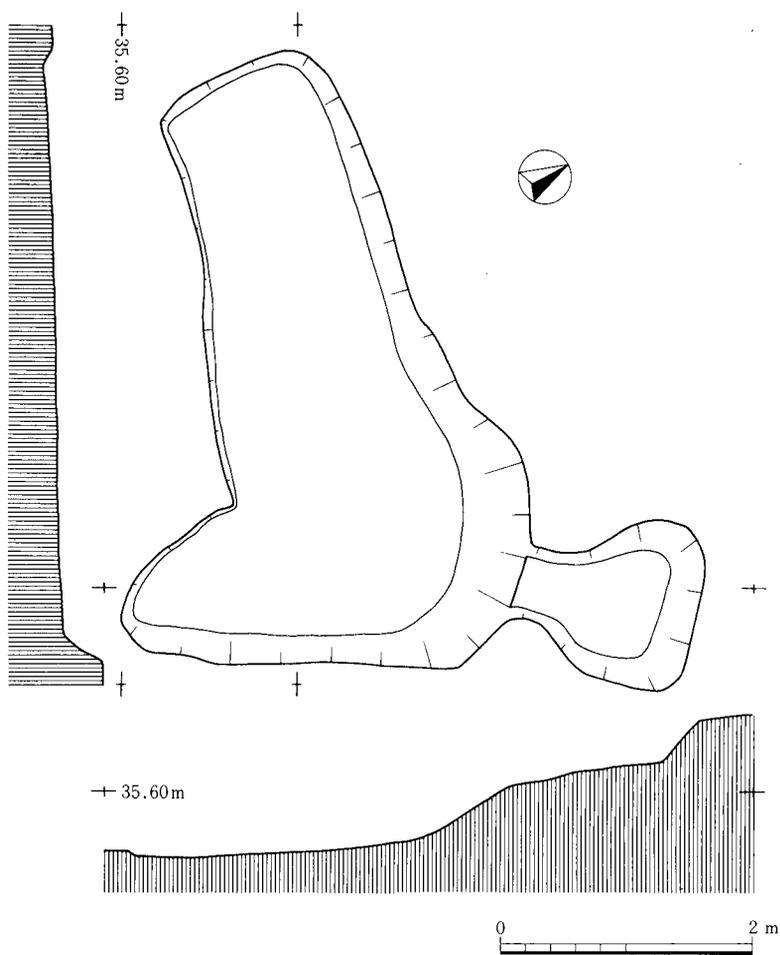
+ 42.10m



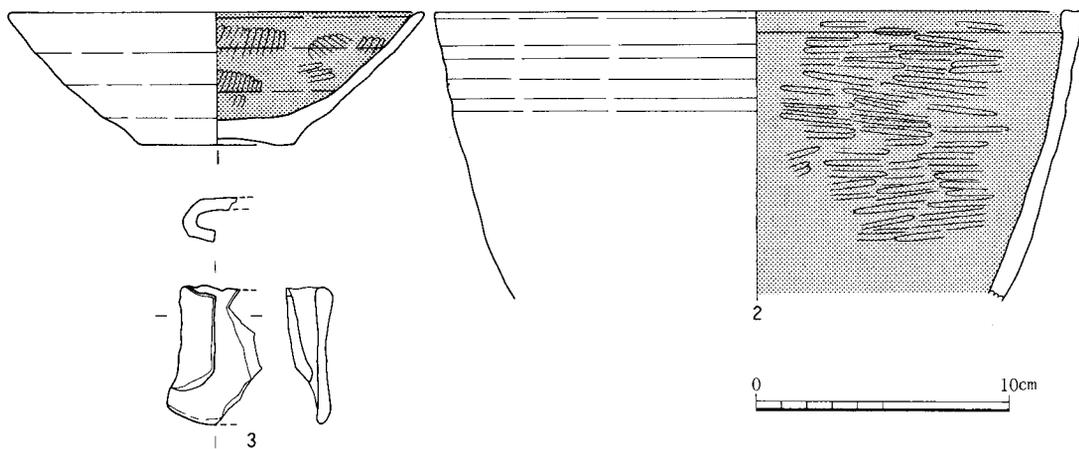
第67图 23号土坑实测图 (S = 1/60)



第68图 21号土坑出土土器实测图 (S = 1/3)



第69图 24号土坑实测图 (S = 1/60)



第70图 24号土坑出土遗物实测图 (S = 1/3)

## 8、9号住居址上面遺構（第71～73図 図版5、57）

8、9号住居址の上面、ほぼ中央に東西に伸びる幅約90cm、深さ10cmの溝状の遺構が検出された。溝を挟んで両側に、炭化物を含んだ焼土面が南側で3ブロック、北側で2ブロック、溝の東側に1ブロック検出された。また北側の焼土面には40cm×30cmの範囲で赤橙色に焼けた場所があり、その東側横に15～20cm大の角礫が転がるように散らばっている。第71図に示したように周囲からは釘と思われる鉄製品が5点（5～7）、鉄滓が7点、フイゴの羽口が1点（4）、須恵器の有台坏1点（3）が検出された。これらの遺構は住居址の凹地を利用して造られた、小鍛冶跡と推定される。

南東隅から、160cm×150cmの略方形で深さ28cmの土坑（25号土坑）を検出した。底面はほぼ中央に深さ8cmの小ピットを持つ。覆土は炭化物層と焼土と炭化物の混入層で、周壁は焼けて暗赤橙色を呈する。須恵器の坏が2点（第73図1、2）出土している。底部と体部の境界がやや丸味を持って立ち上がり、1は口縁端部が外反気味となる。強い撫でが施される。（宮下）

### 溝

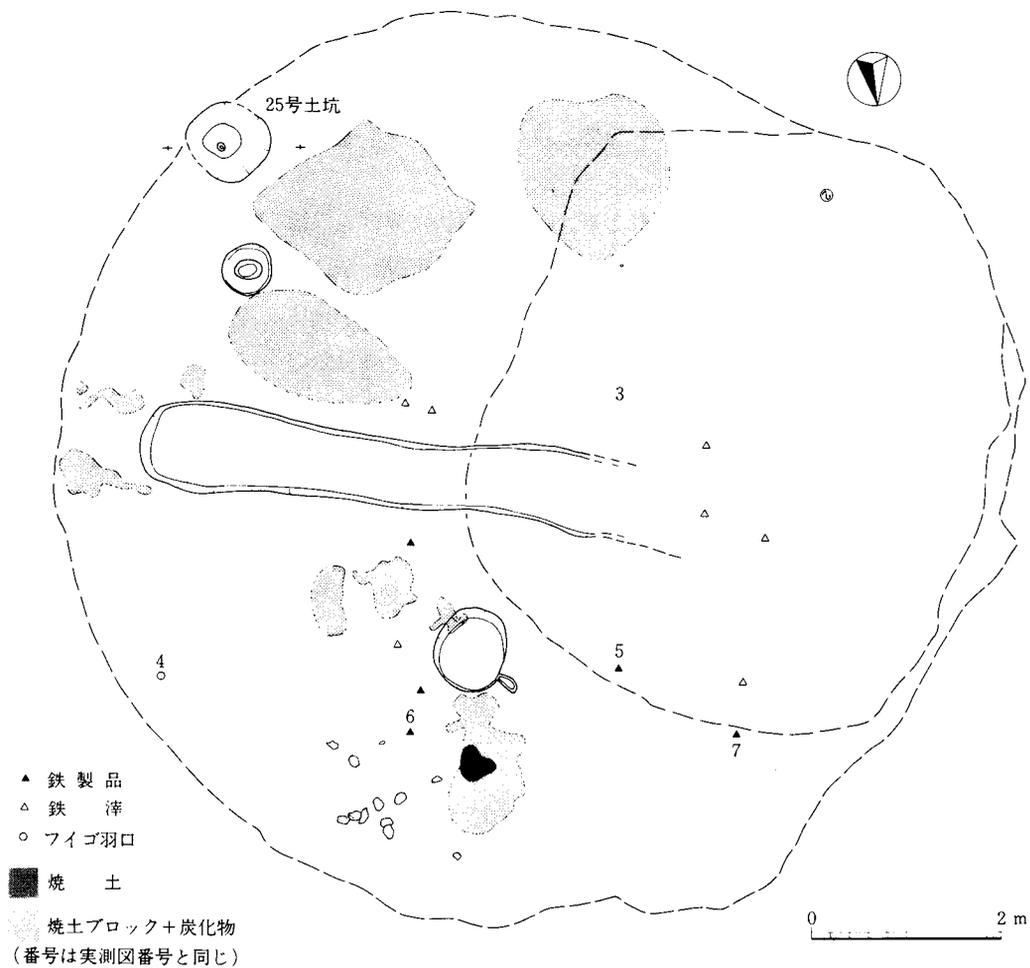
#### 遺構（第4図）

本遺跡で検出された溝遺構の数は少なく、また出土遺物も1号溝を除き細片が多い。2号溝はB3・4で検出され、幅100cm、深さ約10cm～20cmを測る。3号溝はD4区～C8区にまたがる円弧状の溝であり、幅80cm～100cm、深さ5cm～20cmを測る。6、7号住居址、8、9号住居址を取り巻くように巡ってはいるが遺構検出面が大変浅く、また土師器、須恵器の組片も出土するなど住居址遺構に付く可能性は少ないと考えられる。12号溝は8、9号住居址の南で尾根幅が一時狭くなるC・D8区に位置する。全長550cm、幅25cm～30cm、深さ5cm～15cmを測り、東西方向に軸を持つ。また左右には同様の溝が等間隔に並ぶ。出土遺物はいずれも細片であるが、土師器、須恵器は確認されていない。24号溝は調査区南のB17区に位置し幅20cm～30cm、深さ25cm～30cmを測る。当初は住居址遺構の残欠として掘り進めていたが、確証は得られずに溝遺構として取り扱った。覆土内からは鉄斧（第105図19）が1点出土している。また24号溝のすぐ西に位置する24号土坑内からも鉄斧の出土が確認されている。（第70図3）

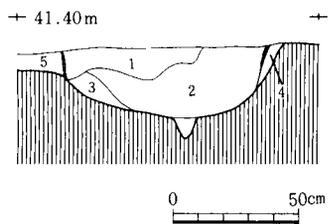
#### 遺物（第74図 図版58）

1、3、4は3号溝、2は12号溝出土の遺物である。1は無文の短い口縁帯を持つ甕形土器。2は口径25.8cmを測るC類の器台形土器。口縁端部に粘土紐を貼付し肥厚する端面を作り出している。内外面には赤彩が施される。3、4はそれぞれ底径6.8cm、2.8cmを測る平底の底部片である。

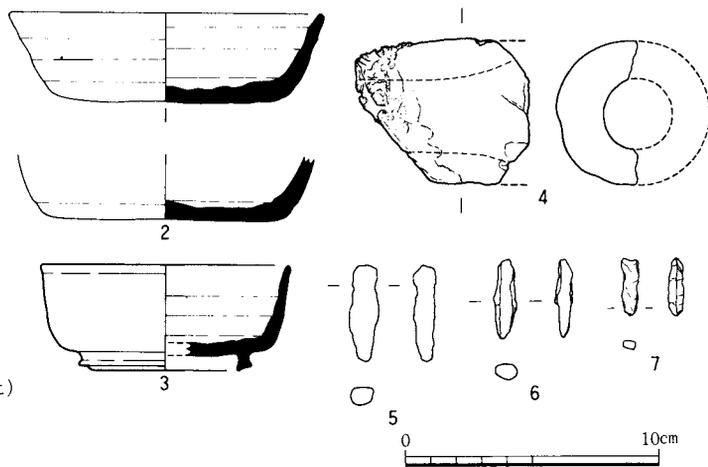
### ピット



第71図 8、9号住居址上面遺構実測図 (S = 1/80)



1. 暗灰褐色土層(焼土、炭化物混入)
2. 黒褐色炭化物層
3. 黒灰褐色土層(焼土、炭化物混入)
4. 暗黄灰褐色土層(焼土、炭化物多量混入)
5. 灰褐色土と黄色砂混合層(9号住居址覆土)



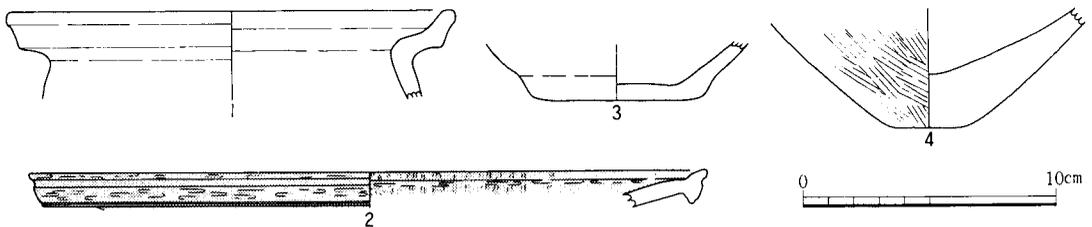
第72図 25号土坑土層断面図 (S = 1/50)

第73図 8、9号住居址上面遺構出土遺物実測図 (S = 1/3)

本遺跡で検出されたピットの数は非常に多く（第4図）、また時期的にもかなりの幅があると思われる。覆土は黒褐色、黄褐色、灰褐色を呈するものが大部分を占めるが、本来のピットと自然樹木痕の区別がつかず、覆土の色調でピットをグループ分けする作業は途中で断念した。なお相当数のピットから遺物は出土しているが、ほとんどが細片である。

遺物 （第75図 図版58）

1～6は有段口縁を持つA類の甕形土器。1は直線状に伸びる口縁を持ち、外面を11条の擬凹線が巡る。7は「く」の字口縁の端部に粘土紐を貼付し肥厚面を作っている。8は壺形土器E類に分類した裝飾壺の1部と思われ、外面には2段の円形刺突文を施す。10は2段に屈曲する口縁部を持つ鉢形土器か。脚部は有段になるが図上復元のため土器分類の中にはいれなかった。11は器台形土器の脚部か。透穴は1個確認できる。12は鈕部端を先細りに仕上げるA類の蓋形土器。鈕部先端は粘土紐の貼付により作られている。14は体部内面をヘラケズリした鉢形土器。器壁は厚く、胎土は淡白褐色を呈する。15は緩く内湾して開く口縁部を持つA類の鉢形土器で推定口径は24.0cmを測る。口縁内面には段を持たず、頸部の器壁は口縁部に較べ非常に薄い。18は底径3.4cmを測り、外底部を含めた外面全体にハケ調整が見られる。21はA5区P<sub>12</sub>出土の土錐であるが、P<sub>12</sub>からはその他に完形に近い甕形土器（図版34）も出土している。しかし全体に器壁が脆く実測は不可能であった。2、9、12、14の外面には煤が付着する。また6、14、17の胎土中には海綿骨片の含みは極めて少ない。（藤田）



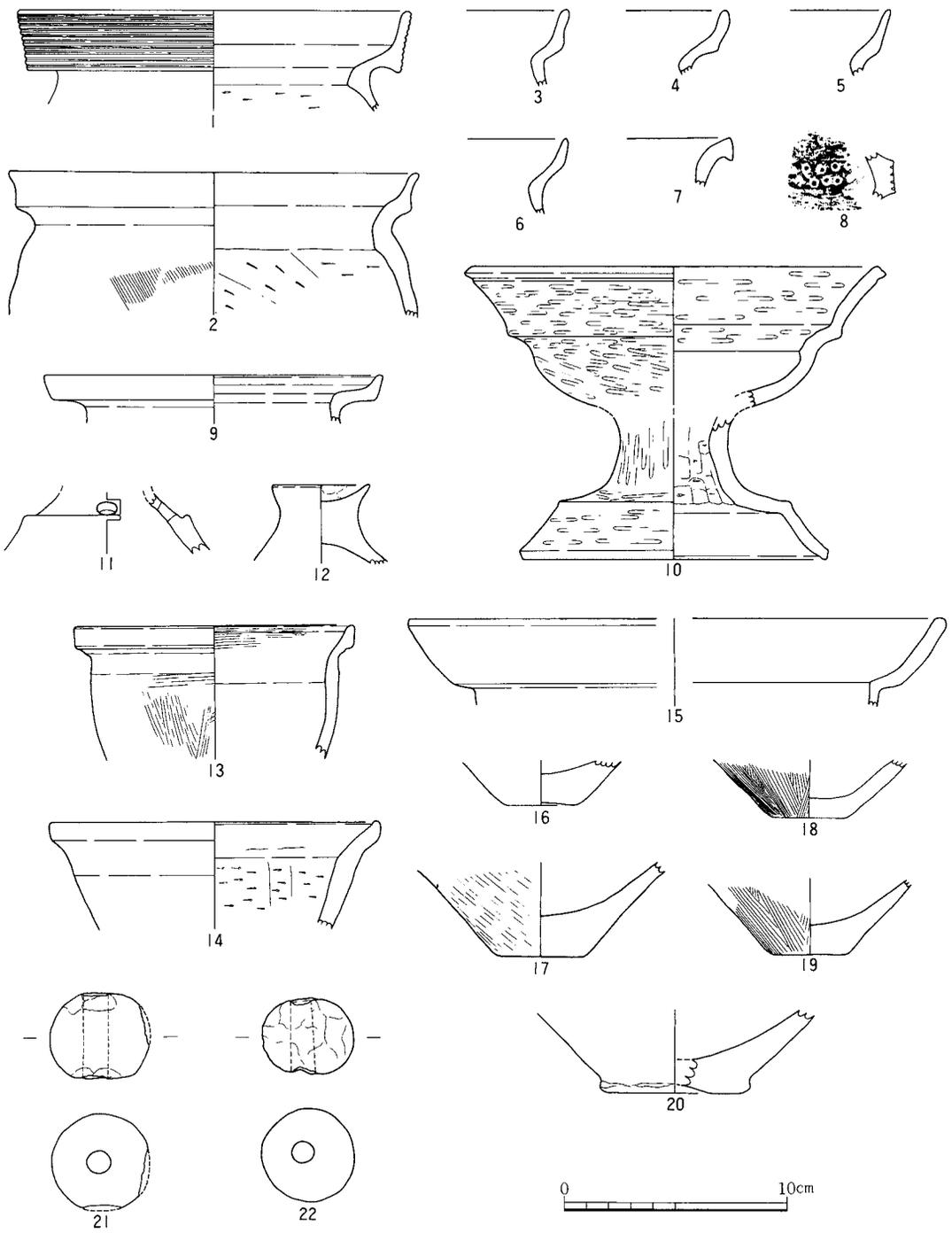
第74図 3号溝(1,3,4)、12号溝(2)出土土器実測図 (S=1/3)

#### 4 掘立柱建物

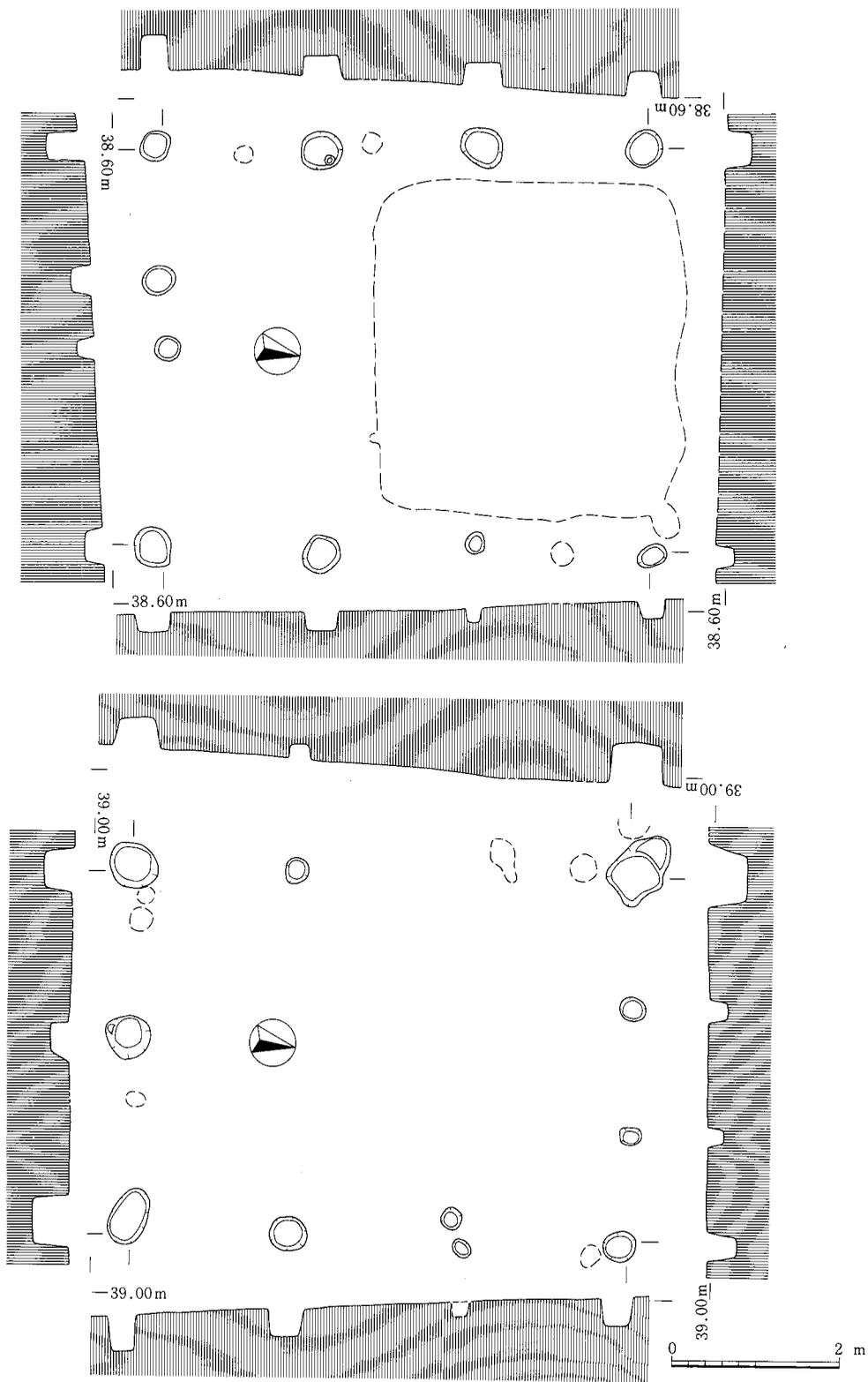
調査区から無数のピットが検出されたが、M区で3棟の掘立柱建物が確認された。建物の主軸はほぼ同方向で、規模は1号と2号掘立柱建物が同じで、3号掘立柱建物が若干大きい程度である。この他に柱列状、あるいは柵列状に並ぶピットがあるが確定するには至らなかった。

1号掘立柱建物 （第76図上 図版11）

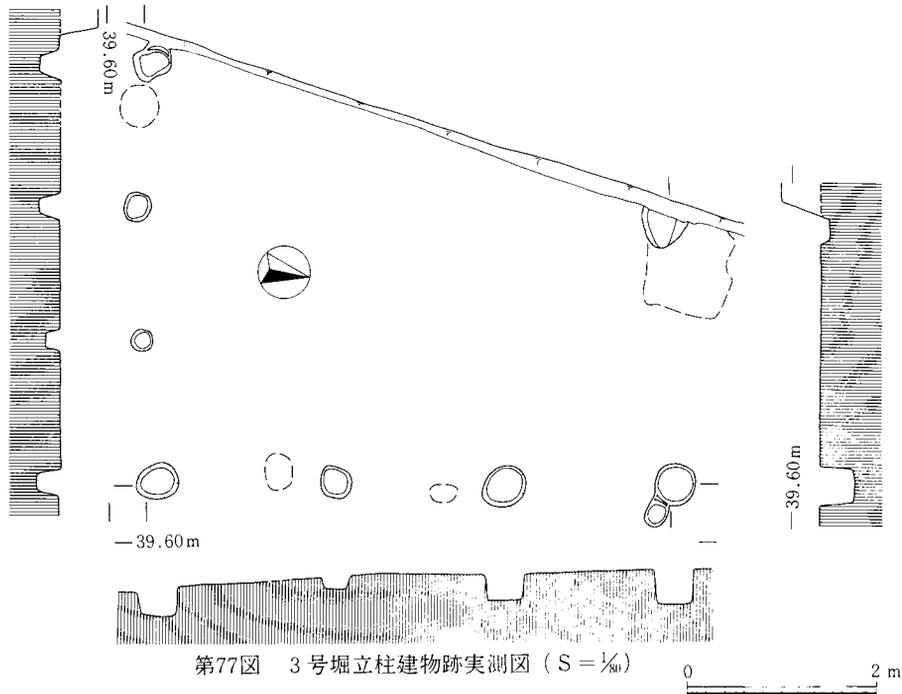
C13・14、D13・14区にかけて検出された3間(6.0m)×2間(4.2m)と想われる、N-12°-Wに主軸をもった南北棟である。西側柱列と東側柱列南の第1・2は径40~50cmの円形で深さが30cm前後としっかりしているが、その他は径30cm前後の円形か楕円形で深さも20cm前後と浅



第75図 ビット出土遺物実測図 (S=1/3)



第76図 1号堀立柱建物跡(上)、2号堀立柱建物跡(下)実測図 (S = 1/80)



い。柱間寸法は桁行が2.0m、梁行が2.1mを測り、床面積は25.2㎡(7.6坪)である。東側桁列南第2柱穴から須恵器の細片が出土しているが、器種、器形は不明である。その他の柱穴からも土師器の細片が出土しているがいずれも弥生時代のものと思われる。

#### 2号掘立柱建物 (第76図下 図版11)

D13区からの検出で1号掘立柱建物の西北に位置する。3間(6.0m)×2間(4.2m)で北側妻柱列が3間となるN-10°-Wに主軸をもつ南北棟である。隅柱が若干大きくて深さが35~45cmを測る。他の柱穴の深さは16~34cmで大きさも定まっていない。柱間寸法は桁行が2.0m、梁行が南側で2.1m、北側が1.6mで、床面積は25.2㎡(7.6坪)と1号掘立柱建物と同規模である。南妻柱列の各柱穴から須恵器の蓋や坏底部と思われるものが出土しているが、いずれも細片である。

#### 3号掘立柱建物 (第77図 図版9)

D12・13区で、2号掘立柱建物に隣接している。北西側が調査区外となるが、3間(5.7m)×3間(4.5m)で、N-10°-Wに主軸を持った南北棟と推定される。ほぼ円形を呈する柱穴で、東側柱列で径約40cm前後で、南妻柱列の中間柱穴は径30cm前後と小型である。深さは隅柱が25~35cmを測り、中間柱は20cm前後と浅い。床面積は25.7㎡(7.8坪)である。(宮下)

## 5 土 罎

### 遺構 (第78図 図版35)

調査区中央で検出された土罎の規模は谷を挟んだ末森山を正面に見すえる東側で35m、北側で未調査区を含めて約35m、南側で7mを測り、土罎を有しない南西側には一段下に幅約2m前後を測る犬走り状のテラス面が巡っている。土罎幅は2.0m～2.5m、高さは0.4m～0.5mを測り、内側と外側にそれぞれ浅い周溝を巡らす。旧地形が南に傾斜しているために土罎構築の際、特に南側で多量の盛土が成されており(土層断面図C-D5層)、当時にしてはかなり規模の大きな土木作業であったことが窺える。土罎内の建造物については明確なものは分からず、遺物は末森城との関連で考えるならば、鉛製の鉄砲玉が1点(第105図17)、時期不詳の珠洲焼片、瀬戸・美濃焼の天目茶碗片がそれぞれ1点ずつ出土しているにすぎない。なお土罎内上層においてはグリッド番号をM1～M8に設定したことを断っておきたい。(藤田)

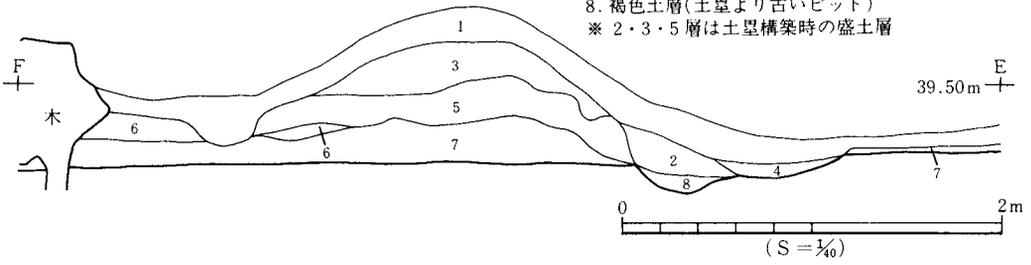
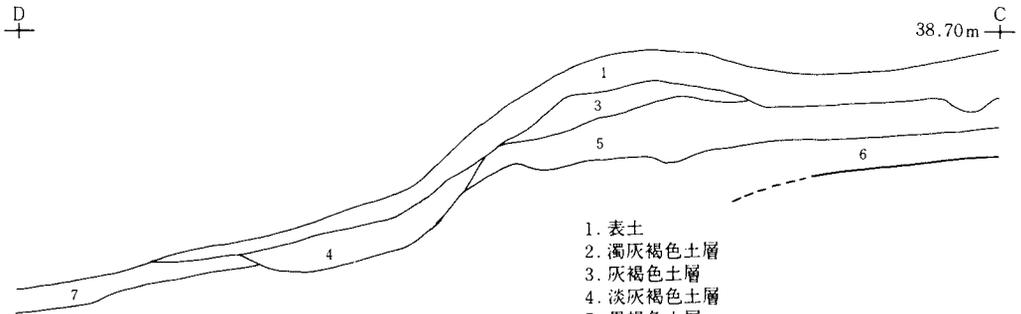
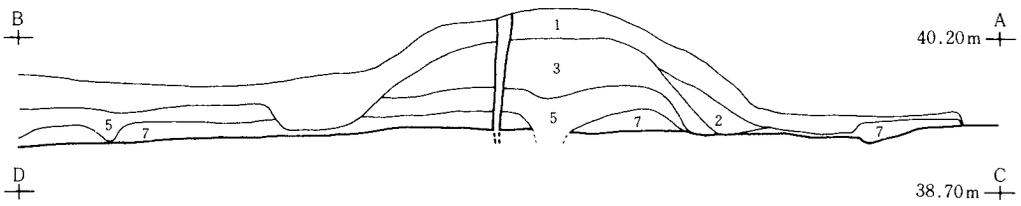
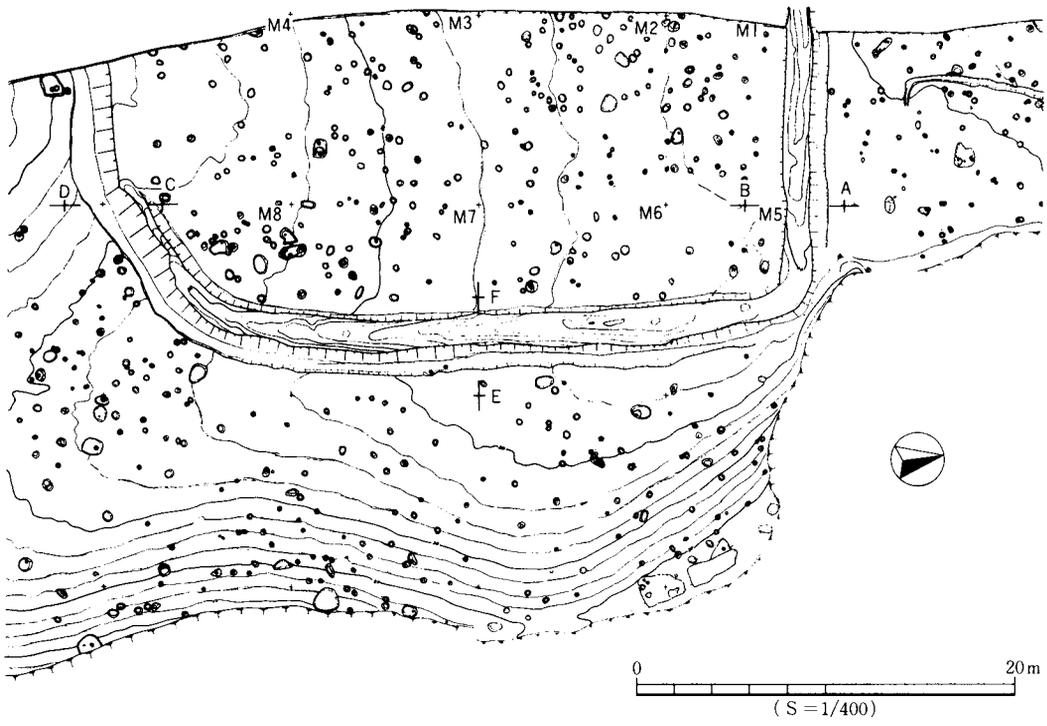
## 6 包含層、その他の遺物

### (1) 旧石器時代

本遺跡の南に尾根続きである宿東山遺跡の調査用プレハブ付近から旧石器時代の遺物が採集されたのは昭和61年初春のことである。そこで当然ながら地形的・地質的な立地条件をほぼ等しくする本遺跡においても該期に属する資料が存在するかどうかということが問題になった。宿東山遺跡の調査に参加した本田秀生氏はいち早く本遺跡出土の石器類を実見し、そのうち6点がそうした資料ではないかと指摘したが、筆者が実際に検討した結果も氏と同じであった。すなわち、ナイフ形石器が1、その他に形状・石質・パティナ等から推して十分に旧石器時代に遡り得るもの5点ということになった。以下、個々について述べていきたい。

### ナイフ形石器 (第79図1 図版59)

横長剥片を素材としているようであり、左側縁の基部から2分の1強にわたって明瞭な刃潰し加工(ブランディング)を有する。その加工の方向はすべて背面から腹面であり、剥離の順序の傾向としては概ね基部から始まって先端へ向かって加工が施されたといえようか。右側縁に関しては腹面側の基部寄りのところが打点となっており、その打面では幅わずか数ミリのかかなり微細な打面調整のための剥離を行っているようである。ただ、ここで若干気に懸るのは打面調整に混じってより新しい、すなわち二次加工以降の剥離痕が存在することで、それがあたかもバルブの上端を少しばかり除去するような形をとる点である。もちろんこれはこの石器の系譜等を考えるうえで一つの重要な事項に他ならないが、使用・廃棄時以降の何らかの欠損である可能性も否定できず、現時点での断定は避けて一応保留ということにしたい。刃部となるのは左右両側縁の先



- 1. 表土
- 2. 濁灰褐色土層
- 3. 灰褐色土層
- 4. 淡灰褐色土層
- 5. 黒褐色土層
- 6. 黄灰褐色土層
- 7. 黄褐色土層
- 8. 褐色土層(土塁より古いピット)
- ※ 2・3・5層は土塁構築時の盛土層

第78図 土塁実測図

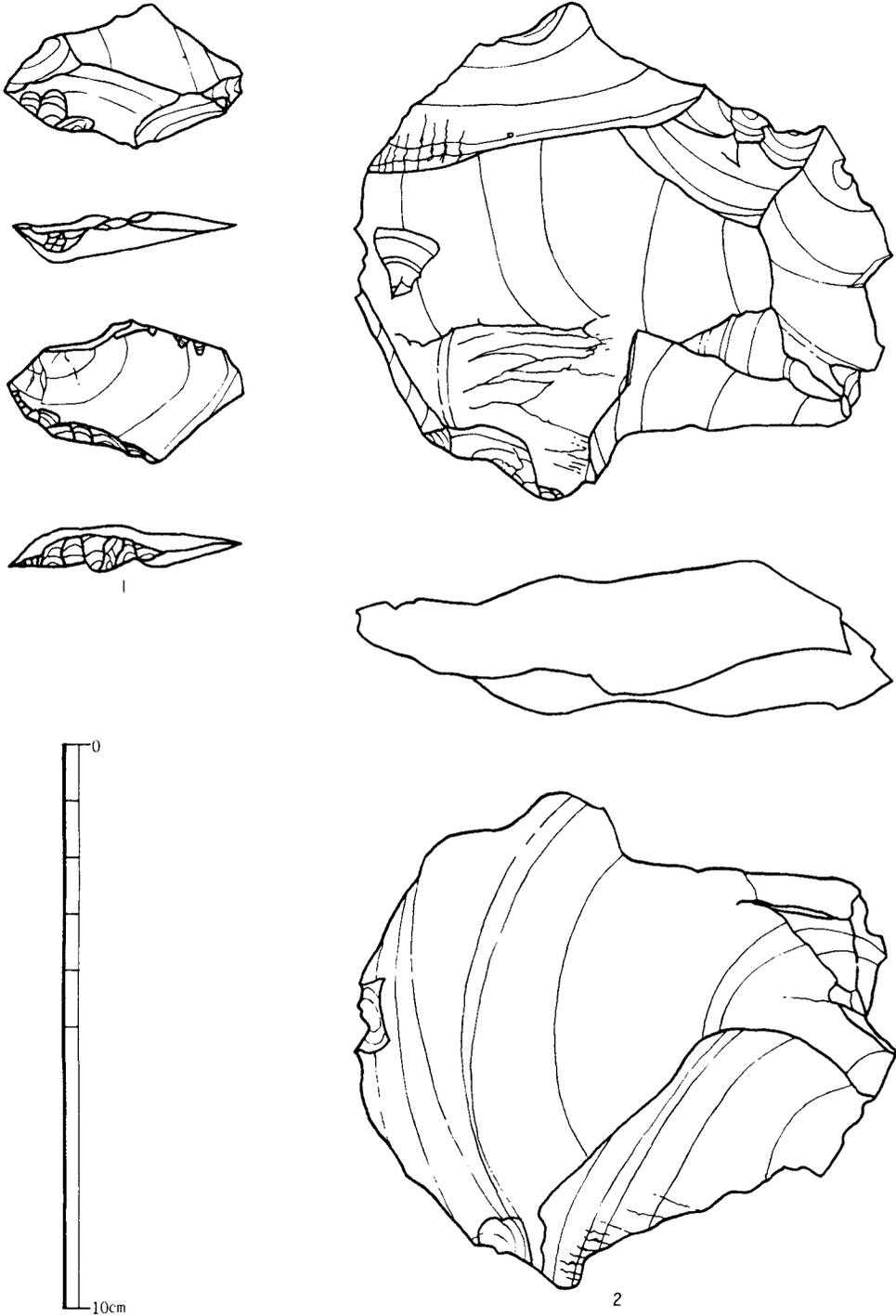
端約半分であるが、左側縁はヒンジ・フラクチュアぎみでその断面形もかなり丸味を帯びたもので必ずしも刃部としては有効とはいえない。むしろ現在は折損しているものの、先端部がより長く伸びてかなり鋭角的な形状を呈していたと推定され、その部位の方が石器の機能を考える際の重要な位置を占めていたものと思われる。次に背面を構成する4つの剥離面から剥片剥離技術について考えるならば、左半部の大きな剥離面、右半部中央の主要剥離とほぼ対をなす面、その基部寄りに接する面、先端部の右下の面という順序で剥離が進められたことが伺われ、最後者に関しては二次加工である可能性も想定できる。なお2番目の面については、そこで取り出された剥片の長さが1.3cmと主要剥離面のほぼ半分である点、前の剥離面に対して約90度の打面転位を行っている点等も考え併せるならば、これを頭部調整痕少なくともそのような役割をもったものとして判断した方がより適切ではなかろうか。さて、この石器は長さ4.2cm以上、幅は最大で2.5cmを測り、重さは約5.0g。珪化凝灰岩製でM5区表土下部からの出土である。

#### 二次加工を有する剥片（第79図2 図版59）

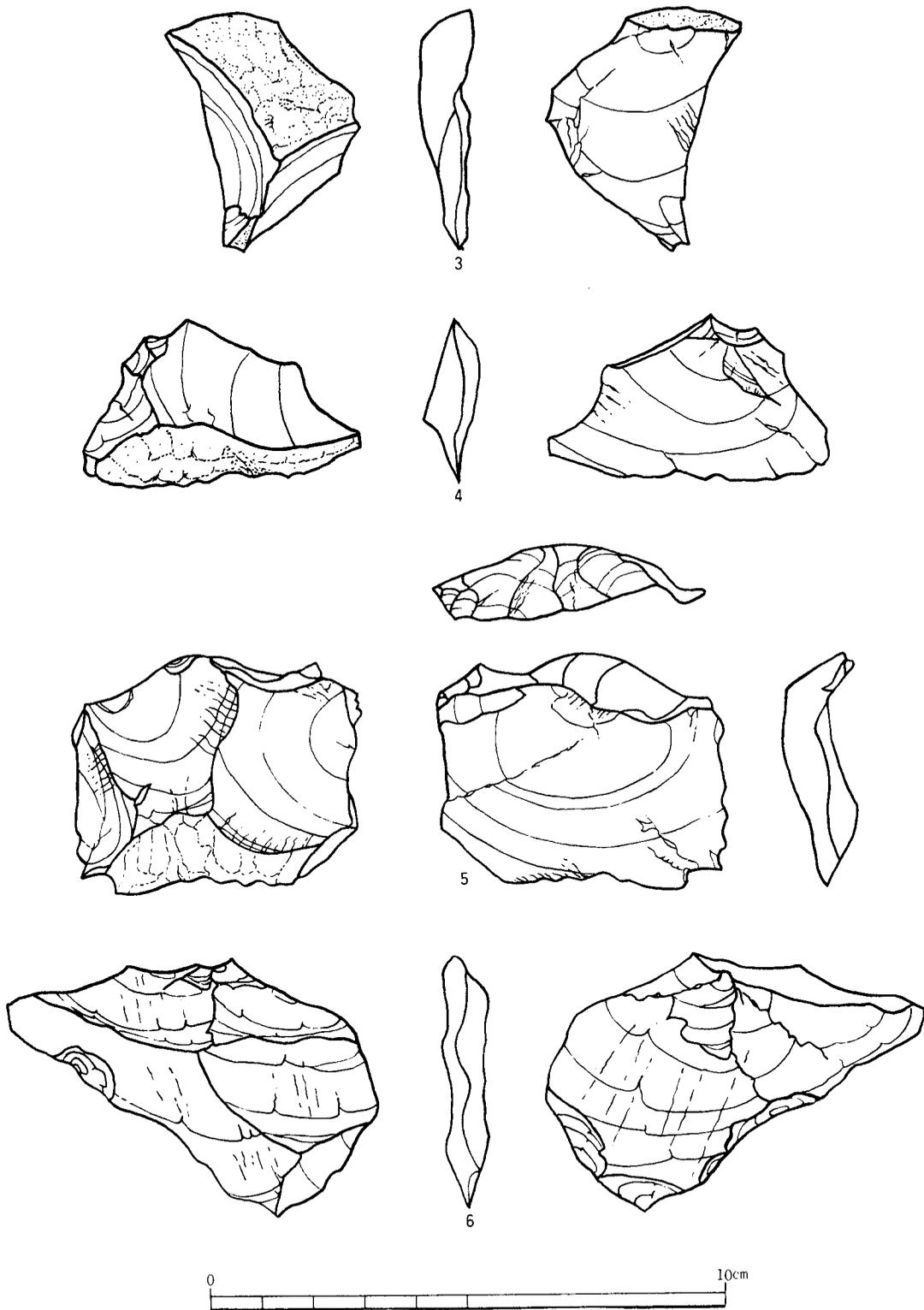
長さ9.5cm、幅8.7cm、厚さも基部付近で最大2.6cmを測り、6点中で最も大形で、重さも約172gと他とは比較にならない。元来は石核であったものを後に石器として転用しているものと思われる。背面側にはそういった剥離のあとが4箇所ばかり認められる。そこで取り出された剥片は縦長、かなり寸づまりぎみの縦長、横長という具合に不揃いではあるが、大きさ・形状等から推していずれも目的剥片であった可能性が高いのではなかろうか。石核としての役割を果たした時点で弧状をなす下端部の背面側右端付近及びそれと向い合うような左端において、腹面から背面という剥離方向でもって二次加工が施されている。刃部は加工部位によって挟まれた円弧状の部分ということになり、その長さは加工部位も含めれば約13cmに及ぶ。また刃部の断面形が腹面側から背面側へ反り返るような形となり、それに使用痕が殆んど刃部の腹面側に集中することなどから考えると、腹面を上にして背面に下した状態でのエンドスクレイパー的な機能を想定するのが妥当であろうか。とはいえ挟入状をなす加工部位に関してはそれとはまた異なった機能を有するとした方がよいだろう。さて、この資料自体かなり大形の縦長剥片を素材としており、主要剥離面をなす腹面がポジティブで背面にもそれと対をなす形で同一方向のネガティブな剥離痕がみられることから、やはり相当大きな母岩の存在が考えられる。ナイフ形石器と同様に珪化凝灰岩製であり、表採品ということで残念ながら出土地点不詳である。

#### 石核調整剥片（第80図3 図版60）

珪化凝灰岩製で、長さ4.6cm、幅は最大で2.9cm、そして重さは10.4gを測る。平坦な節理面を打面とする縦長剥片で、背面上半に大きく自然面を残す。また背面にみられる2面の剥離痕から取り出された剥片も同様に大きく自然面を残していたものと想像される。以上の点から推して原石の表皮を除去して石核を整えていく過程での剥片と考えて差し支えあるまい。出土地点はB12区の表土下部である。



第79图 旧石器时代石器实测图 (S = 1/3)



第80图 旧石器时代石器实测图 (S = 1/5)

#### 剥片 (第80図4、5 図版60)

共通の母岩(石核)から剥ぎ取られた、つまり同一個体資料であるが、接合はしない。4は長さ2.5cm、幅5.3cm、5は長さ3.8cm、幅5.4cm以上(右側縁を欠損)を測り、いずれも横長の形状を呈する。4・5ともに背面下端に節理面がみられ、そのパティナの状況からかなり古い段階にそこで折損したことが伺え、かつてはもう少し先端部が伸びて長さが長かった可能性もあるが、たとえそうであったとしても横長のカテゴリーを越えることはなかったように思われる。さて、これら二者に認められる剥片剥離技術は基本的にはほぼ同じで、上端の打面調整(背面から腹面へという方向)、背面右横90度からの剥離、背面左斜め上45度からの剥離、主要剥離という順序でもって作業工程が進められている。なお、ここに示した角度は主要剥離方向を基準としてもので、5においては後二者が打面を共有する。このようにわずか2点ばかりでその他の多くの部分がすでに失われているとはいえ、同一の石核から取り出された剥片間に共通の技術基盤が存在したことは注目されよう。石質は凝灰岩であり、1～3のような珪化凝灰岩よりは軟質にみえる。重さは4が10.9g、5が27.9gを測る。4は表採で出土地点不明、5はB12区のP<sub>1</sub>覆土中からの出土である。

#### 横長剥片 (第80図6 図版60)

輝石安山岩製であって、他が凝灰岩系の石材を用いているのとは著しく異なる。したがってリングの方向等も看取するのが難しい。長さ4.7cm、幅は最大で6.2cmを測る横長剥片で、重さ28.0gである。打面は単一の面からなり打面調整も認められないが、自然面や節理面ではなく剥離面を用いていると考えた方が無難といえよう。また背面側でも主要剥離と同一方向の剥離が2～3回行われており、そこで取り出された剥片は横長か或いは幅が長さを少し上回るような寸づまりの形状を呈したと考えられる。C13区地山直上出土。(松山)

## (2) 縄文時代の土器と石器

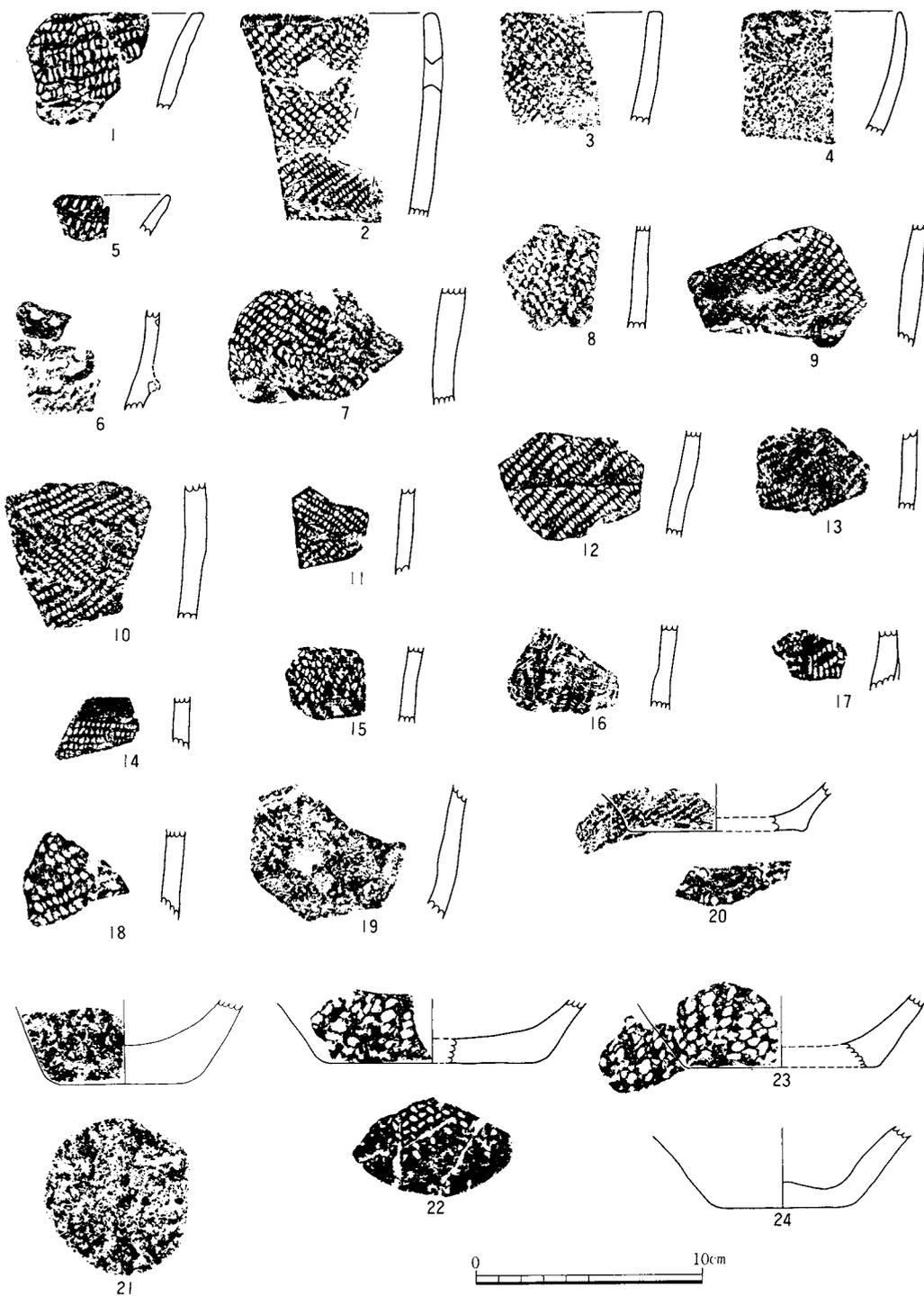
#### 土器 (第81図 図版61)

本遺跡から出土した土器群は少ない。簡単にまとめたい。

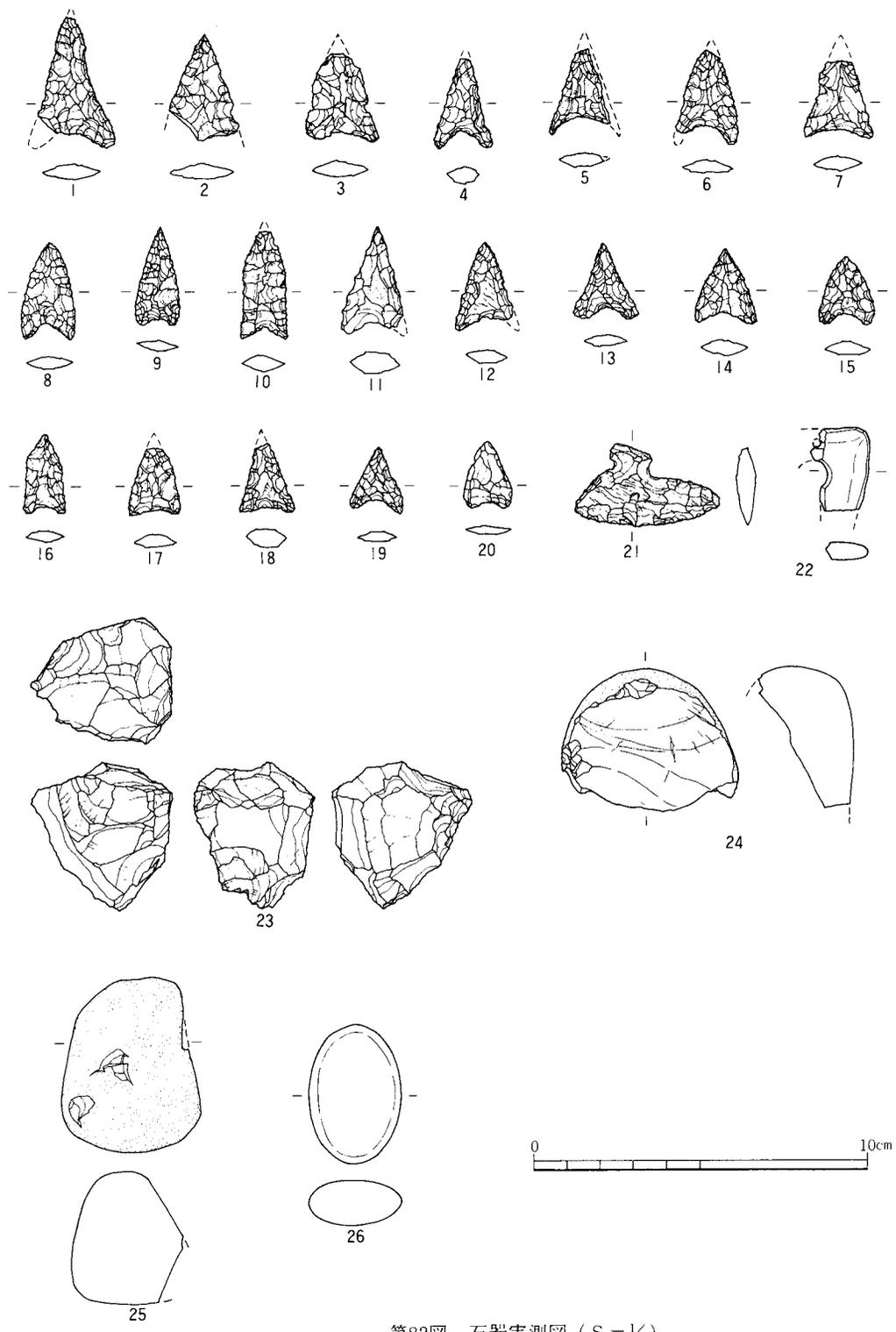
3号土坑出土遺物(1) 深鉢の口縁部で、外面には貝殻腹縁を押捺している。胎土には砂粒を含み、焼成はあまい、色調は淡白灰色を呈している。

これ以外の土器は1号溝の覆土中からのものが殆どで、他に3号住居址の覆土中からも出土している。

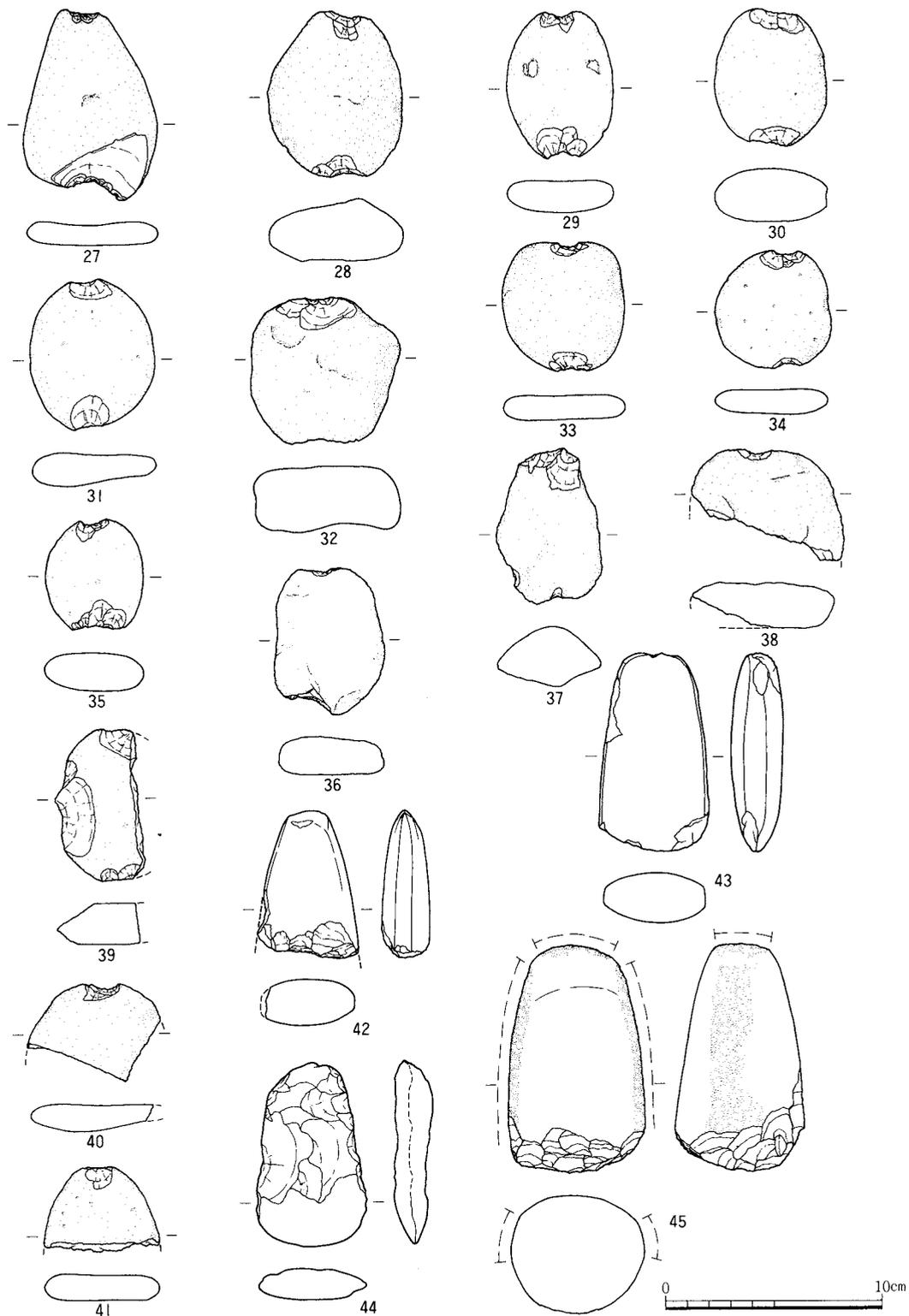
貝殻条痕上に貝殻腹縁の押捺を持つものは17だけである。その他は羽状縄文や斜縄文のみを施しているものが多い。内面には貝殻条痕や擦痕状の条痕を持つものとなっている。5は外面に二段にわたりヘラ先による刺突を加えている。6は突帯を挟んで上部の無文部に竹管による刺突を加えている。刺帯下には斜縄文を施している。底部では22、23は縄文の節が大きくなり縦位に施されていることから、縄文中期後葉から後期前葉にかけてのものであろう。また、無文のみの24



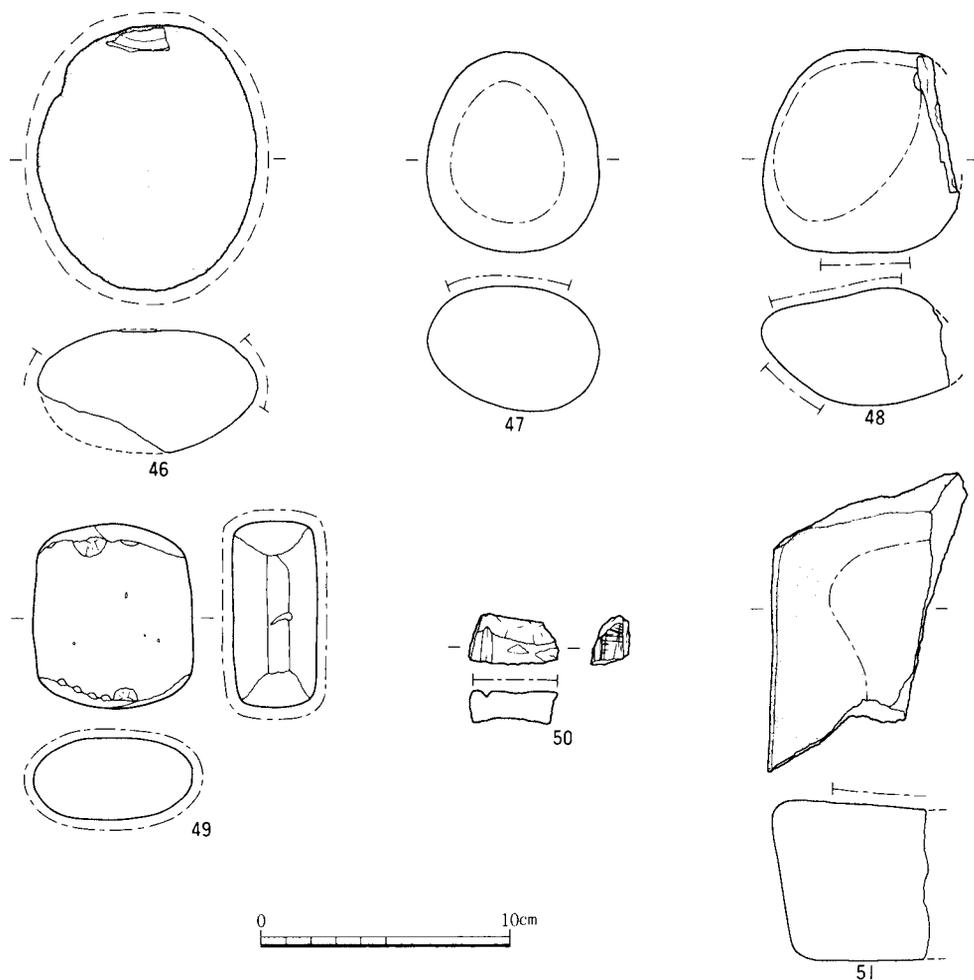
第81図 繩文式土器実測図 (S = 1/4)



第82图 石器实测图 (S = 1/2)



第83图 石器实测图 (S = 1/3)



第84図 石器実測図

も同期頃のものとして推定され、20は先の羽状縄文等の土器群に伴うのであろう。

以上の土器群で主体となるのは、1～20までのものである。それは胎土中に繊維の混入痕がある。貝殻条痕や同腹縁の押捺を持っている。羽状縄文を持っていることから縄文前期初頭頃の佐波式頃のものとして推定される。類例は鹿島郡田鶴浜町吉田野寺遺跡から出土している。

#### 石器 (第82～84図 図版61、62)

石器はその所属時期が縄文時代のものとして弥生時代のものに分かれ、前者のものが多い。縄文時代でもいつの時期のものか特定するのは困難である。各計測値は石器一覧表によりたい。

石鏃は1～20の20点ある。基部の形状から凹基部のものが殆んどで、大型品から小型品まである。側縁部は直線状のもの、内湾ぎみのもの、稜を持つものに分かれる。

石匙は21の1点だけで横型のものである。

玦状耳飾は22の1点である。半分に割れている。

石核及び原石は多数あるが、図示したのは23～25の3点のみである。

礫石錘は16点中15点図示した。39は破損品であるが、側面も打ち欠いている。完形品の平均重量は89.9g、打欠部幅の平均は14.6mmである。

磨製石斧は4点中1点の45は弥生時代の所産であろう。

磨石類は4点あり、46の1点は敲石であるが、これ以外は磨石である。

不明石器の50は破片の表面を磨いているが、V字状の溝が存在している。

石皿も破片が51の1点存在しているのみである。

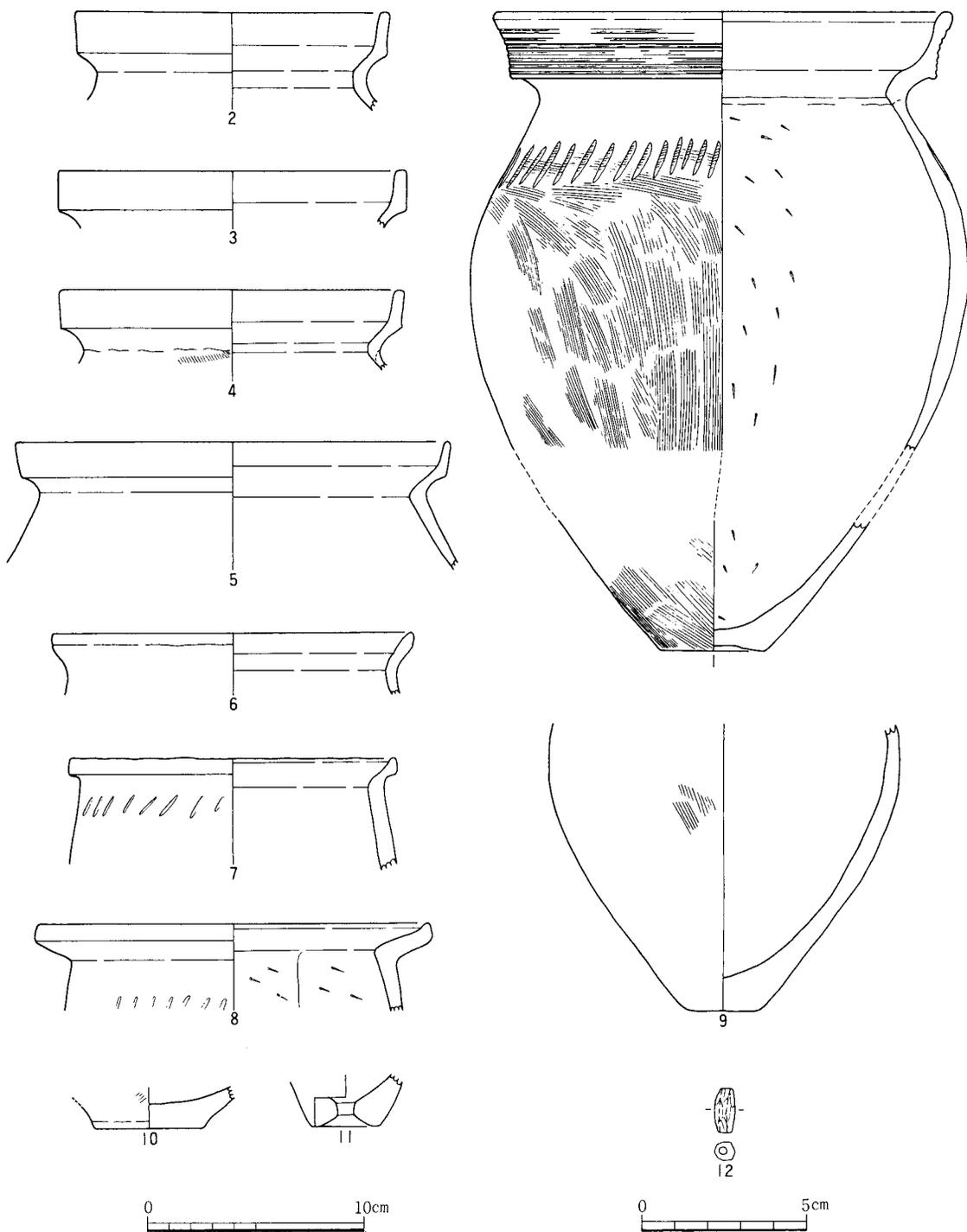
(米沢)

### (3) 弥生時代～古墳時代

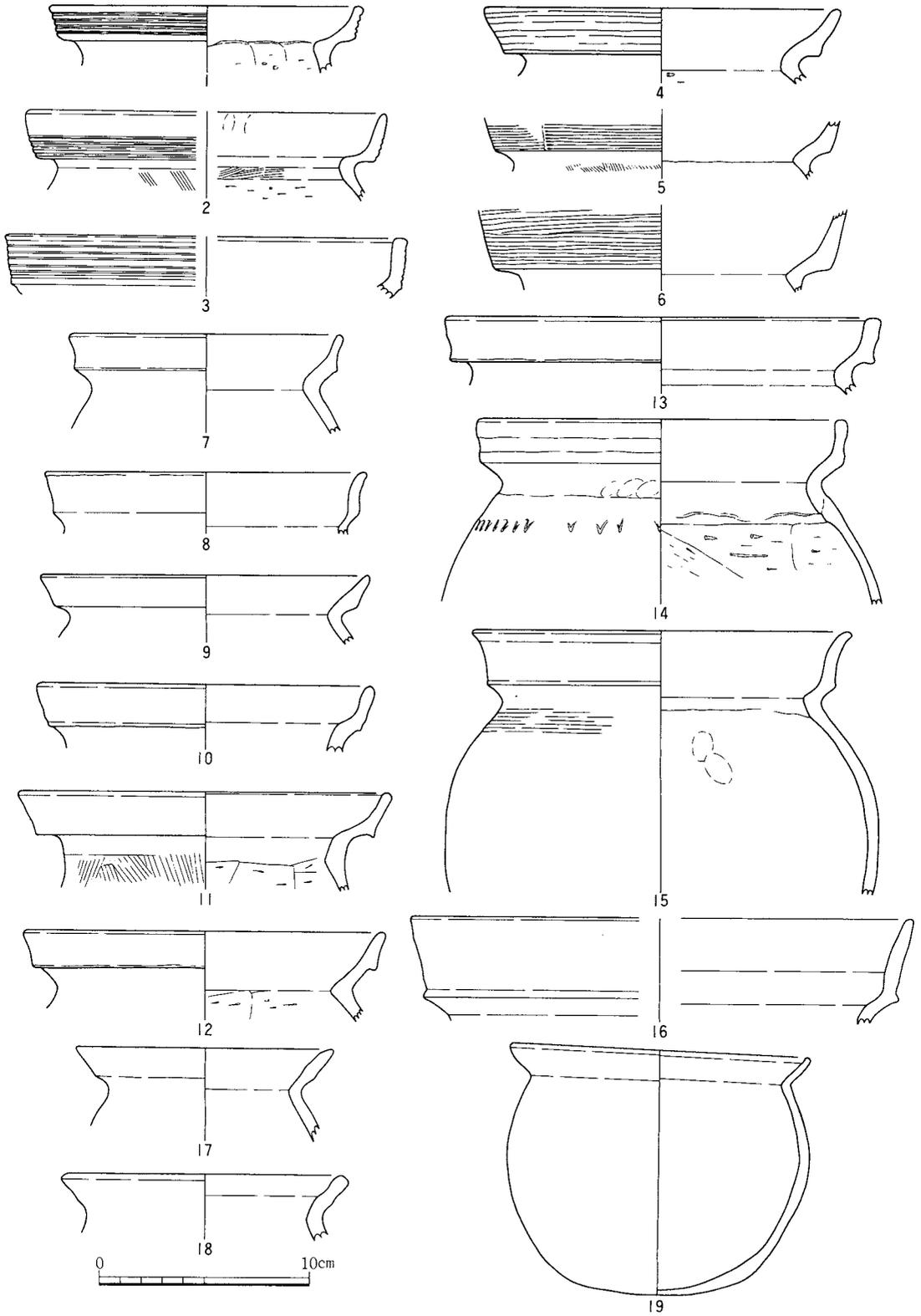
#### 遺物 (第85～89図 図版63～66)

第85図1～12はD14区黒色盛土層内からの出土遺物である。D14区は旧地形のレベルが低いいため、後世に土塁を構築する際大量の盛土(黒色盛土層)がなされた場所であり、14号住居址などはその盛土を除去することによって検出された遺構である。1～5はA類の有段口縁を持つ甕形土器である。1は口径20.8cm、底径4.7cm、復元高29.0cmを測る。口縁部には擬凹線、肩部には斜行列点文がそれぞれ巡り、胴部横断面は楕円形を呈する。口縁端部を丸くおさめ体部外面にはハケ調整、内面にはヘラケズリ調整を施す。2～5はいずれも短い無文の有段口縁を持つ。6は口縁部内面に粘土紐を貼付して口縁端部を肥厚させたと思われるもの。そのため口縁部内外面には凹線状の接合痕が残る。7は口径15.0cmを測るG類の甕形土器である。口縁端部はつまみ上げ気味にヨコナデし、張りのない肩部外面には斜行列点文、内面にはヘラケズリ調整が施される。8も同様の器形であるが7に較べ器壁の厚さが目立つ。11は外底部に凹みを持つ底部穿孔土器である。12は長さ1.4cm、径0.6cmを測る瑪瑙質の管玉であり中央に最大径を置く六角柱状を呈する。1、3、7、8の外面には煤が付着する。また1～9の胎土中には海綿骨片の含みは無いが、あっても極めて少ない。

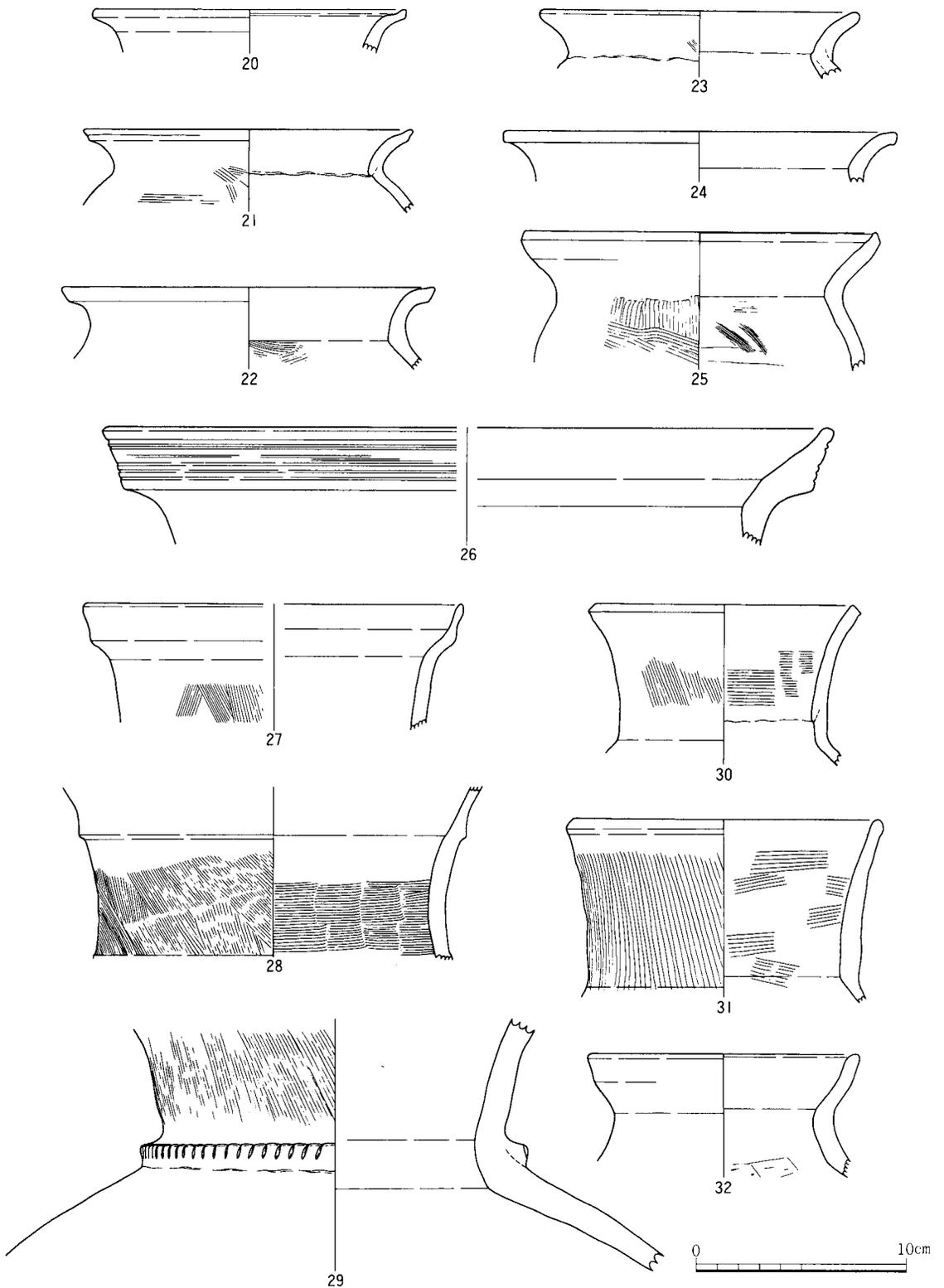
第86～89図1～78はD14区以外から出土した包含層遺物である。1～6は有段の口縁帯外面に擬凹線を施すA<sub>1</sub>類の甕形土器である。全体に口縁端部は先細りせずに丸くおさめ、体部内面にはヘラケズリ調整がみられる。1、4、5は口縁内面にはほとんど段を持たない。7～10、12～15はA<sub>2</sub>類に分類した無文の有段口縁甕である。13は厚く短い口縁部を持ち、端部には面取りが施される。14は口径17.0cmを測る直立気味の口縁部を持ち、肩部外面にV字状文、内面にはヘラケズリ調整が見られる。15は他に較べ外反して伸びる口縁部を持ち、体部内面はナデ調整で仕上げている。11は口径17.4cmを測るD<sub>2</sub>類の壺形土器である。無文の有段口縁を持ち、頸部内面は2段に屈曲する。16は推定口径23.6cmを測るE類の甕形土器。口縁下端部に断面三角形の稜を持つ。M1区土塁盛土内からの出土である。17～19、21～25は「く」の字口縁を持つF類の甕形土器。19はF<sub>6</sub>類に分類した。口径14.0cm、器高11.7cmを測る。緩く内湾する口縁部と平丸底の底部を持つ。体部は球形に近く内面には煤状の付着物が認められる。D12・13区上面で検出された焼土内から出土している。1、3、5～8、11、13、15～17、23の外面には煤が付着する。また



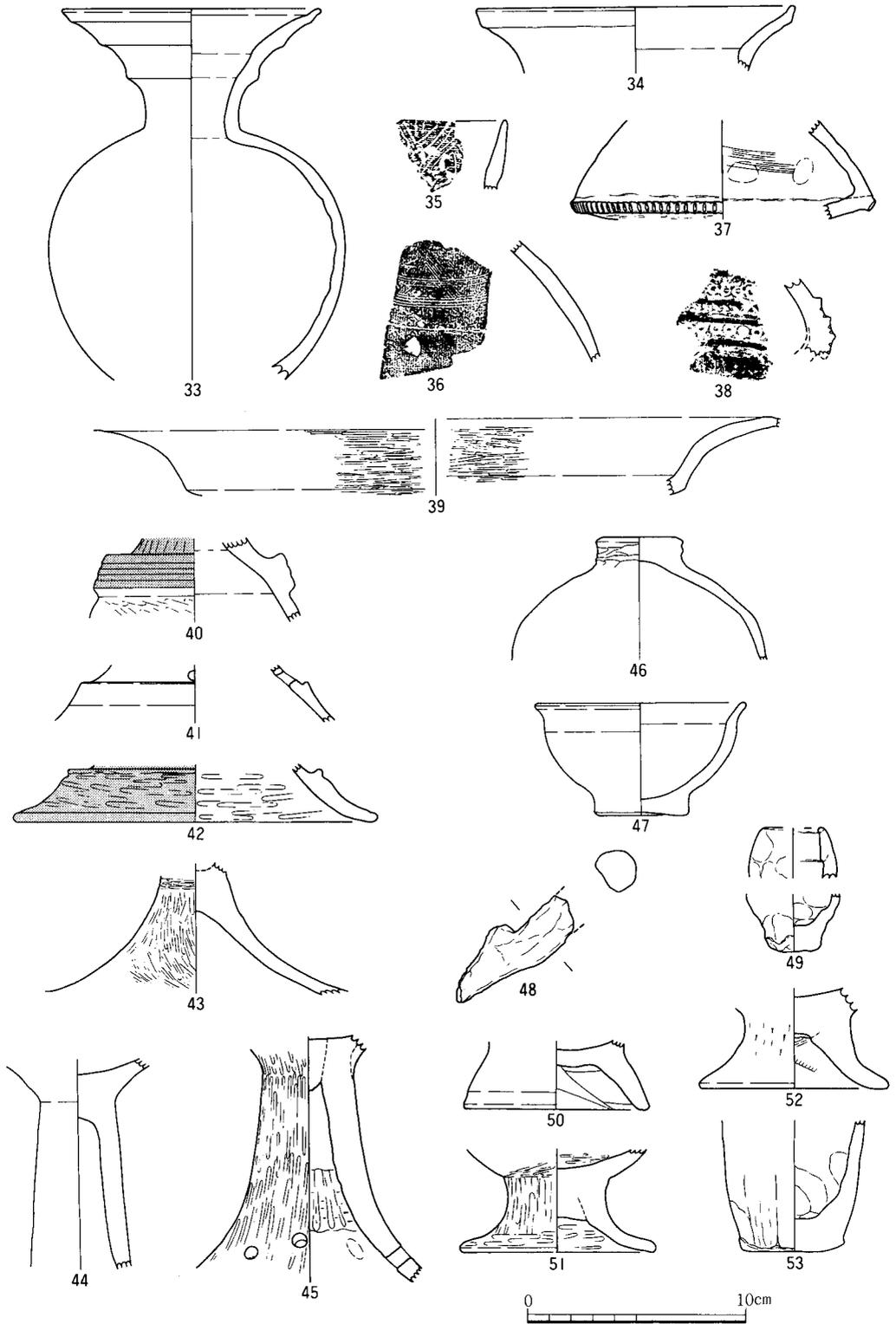
第85図 D14区黒色盛土層出土遺物実測図 (S = 1/3、12は S = 1/2)



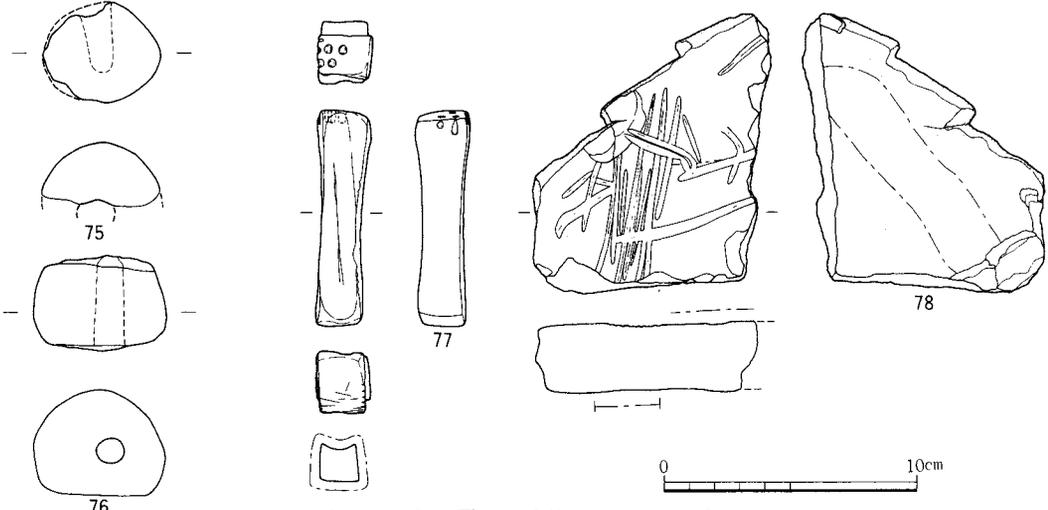
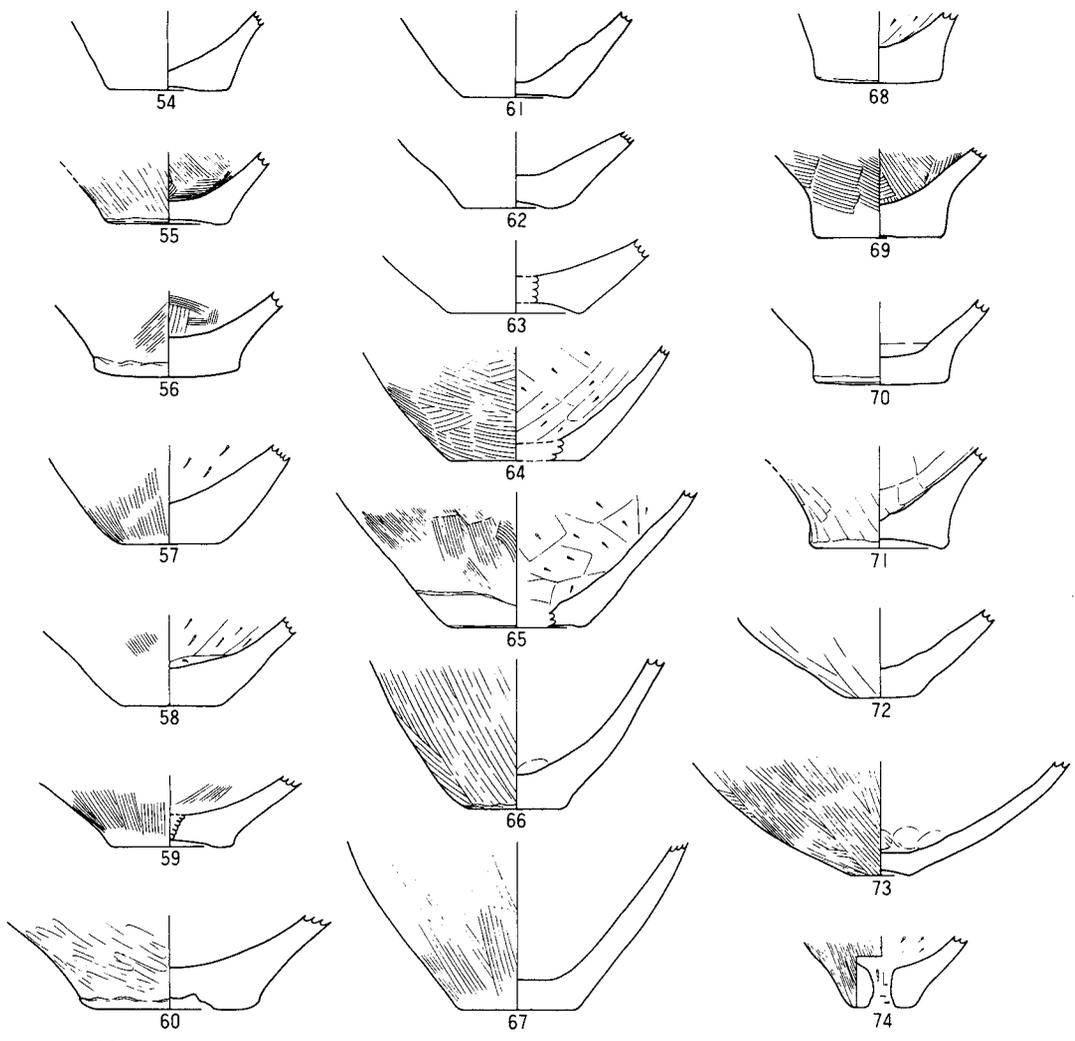
第86图 包含層出土土器実測図 (S = 1/3)



第87图 包含層出土土器实测图 (S = 1/3)



第88图 包含層出土土器実測图 (S = 1/3)



第89図 包含層出土遺物実測図 (S = 1/3)

2、7、18、19の胎土中には海綿骨片の含みは見られない。

26、29はA類の大型壺形土器と思われる。26は推定口径38.0cmを測る。口縁部外面には9条の擬凹線が巡り、頸部内面は2段に屈曲する。29は口縁部を欠くが頸部下端に刻み目を持つ突帯を貼付する。また内面には煤状の付着物が見られる。27、28は頸部の伸びる有段口縁壺でC類に分類した。頸部外面には縦方向のハケ調整が施される。30、31はB類の長頸壺。30は口縁端部にナデによる面を持ち、31の端部は明瞭な面を持たない玉縁状に仕上げている。口径はそれぞれ12.1cm、14.5cmを測る。32は内湾する口縁部を持ち、体部内面にはヘラケズリ調整が見られる。器壁は全体に厚く、B<sub>5</sub>類に分類されるか。33は2段に屈曲する口縁部を持つJ類の壺形土器。直立気味の頸部に球形の体部が続く。34は20と同様に口縁の屈曲部から下を欠いたI<sub>2</sub>類の壺形土器と思われる。口径14.4cmを測り、口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデして面を作る。37、38はE類に分類した台付装飾壺の胴部片である。37は刻み目、38は円形刺突文と綾杉状刺突文を交互に巡らす。31、33～36の胎土中には海綿骨片の含みは見られない。

39は屈曲する坏部を持つA類の高坏形土器か。内外面にはヘラミガキ調整が施される。40は2条の擬凹線が巡る突帯を貼付した脚部片。外面には赤彩が施される。42は脚部として図化したが高坏形土器の坏部となる可能性が大きい。46は鈕部径4.0cmを測るB<sub>2</sub>類の蓋形土器。鈕部上面に凹みを持たず、体部は内湾する。47は口径9.5cm、底部4.2cm、器高5.1cmを測るF<sub>1</sub>類の鉢形土器。内湾する体部と緩く外反する口縁部を持ち、底部は円柱状に仕上げる。50～52は脚台部であり、径はそれぞれ、8.4cm、8.8cm、8.4cmを測る。51は体部内外面、脚部外面にヘラミガキ調整が見られる。40、48の胎土中には海綿骨片の含みは見られない。

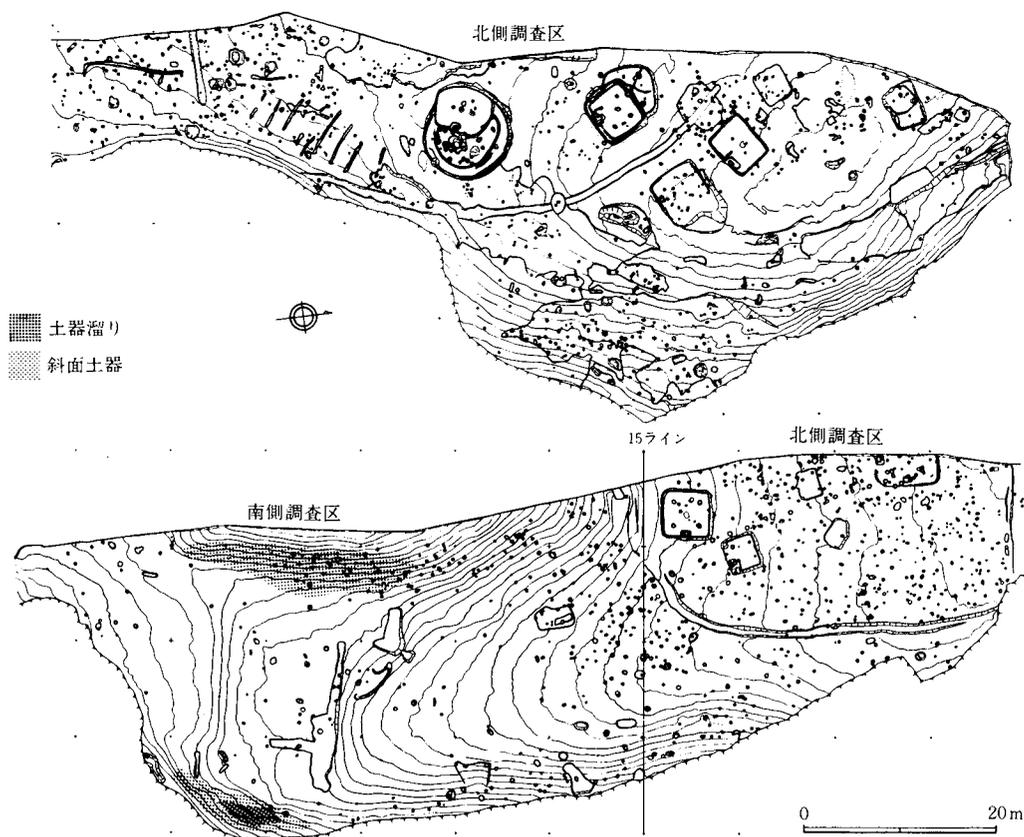
54～74は底部を一括して取り上げた。54～60は海綿骨片が多く含まれる底部片でシャーモットも全てに混入している。61～74は海綿骨片の含有量が少なく、特に61、64、67、71、73の胎土中には海綿骨片の含みは見られない。

75、76の土錘は共にC17区斜面流土から出土している。77は緑色凝灰岩質の砥石であり片側の端部には径3mmを測る孔が5個確認できる。78は安山岩質の砥石であるが研面は粗い。(藤田)

#### (4) 奈良時代～平安時代の遺物

奈良～平安時代の遺物は第90図のように、尾根上台地から南側に緩やかに傾斜して伸びる尾根の東西斜面より多量に出土している。竪穴住居址や掘立柱建物が検出されたM区でも比較的多く出土しているが、北側へ行くほど少なく散在する程度である。ここでは南側斜面の遺物と尾根上台地の遺物に時期差が見られるため、便宜上15ラインより以北を北側調査区、以南を南側調査区として、遺物を分けて記した。

#### 北側調査区出土遺物



第90図 南北調査区地割図 (S=1/800)

須恵器 (第91~93図 1~41、図版67~68)

蓋 (1~9)

口径が11cm前後の小型品(1~5)と17cm前後の大型品(6~8)とがある。1~4は口縁上部にわずかに平坦面をなし、端部を嘴状に内屈しておさめ、2は鋭く屈曲する。2、3の天井部は平坦面をなし、口縁部分との間に稜を持つ。1と3は天井部の外周をヘラ削りを施し、2、4は天井部から口縁部にかけてヘラ削り調整を施す。5は口縁端部を肥厚させ、わずかに内屈しておさめる。天井部に平坦面をつくり、ヘラ削りを施す。つまみは1、3、4が扁平な擬宝珠形で、2と5がボタン形をなし、5は上部が凹んでいる。天井部の器壁は比較的厚くつくられている。6~8の口縁端部は内屈しておさめる。6の天井部はヘラ削りを施すが、7、8は降灰や再調整によって観察できない。つまみは擬宝珠形で、7は天井部に平坦面をつくる。9は葉壺の蓋と考えられるもので、口縁部を内屈させ端部が微妙に外反しておさまる。

有台坏 (10~24)

10は底部と体部の境界が丸味を持って立ち上がり、口縁端部でゆるく外反する。底部やや内側に外方へ強く踏ん張る高台が付く。器壁は底部が厚くつくられる。11~14は底部片である。立ち上がりが急で外傾する体部が付くものと想定できる。11は外方に外反気味で断面形状が方形を呈

するしっかりとした高台が付く。底部の調整は丁寧で爪状の圧痕がある。12は内方に踏ん張る高台で外底にヘラ記号がある。14は直に高台が付くもので内側のみが接地す。15は急な立ち上がりで外傾し直線的に伸び、口縁部で外反気味となる。幅の狭い高台が直に付く。17は外方に開き端部が内湾気味となる幅の狭い高台が付く。外底を撫で回すが中央にヘラ切り痕を残す。18～20は大型品の底部片である。18、19の高台は嘴状に外転するもので、高台内側端部のみが接地する。それぞれ外底の調整はかるく撫でつける程度で粗雑である。21～24は外傾する体部に口縁部を反転しておさめる。22、24には口縁部に強い撫でがはいる。21は身が深い。

#### 坏 (25～34)

25～27は墨書土器である。墨の残りは悪く微かに残る程度である。判読できるのは25で「前」と書かれている。墨書位置はそれぞれ外底である。

25～29の器形は外面の底部と体部の境界が丸味を持って立ち上がるのに対して、内面は強い押圧で急に立ち上がる。口縁部は直線的で、29はやや外反気味となる。外底の始末は25がやや丁寧であるがその他は撫でつけ程度である。器壁は均一である。30の底部にヘラ記号がある。31は口縁端部が反転するものである。32は内面の底部と体部の境界が丸味を持って立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。33は身が深く、底部と体部の境界が明瞭で急に立ち上がり直線的に外傾する。34は外傾度が大きく、器壁がやや薄い。

#### 高坏 (35)

1点のみの出土である。坏底部約 $\frac{1}{2}$ の位置に脚部が貼付され、坏底部はヘラ削りの後、撫で調整が施される。器壁は坏部が非常に厚いのに対して、脚部は薄くつくられる。器表面はザラツとした感じである。

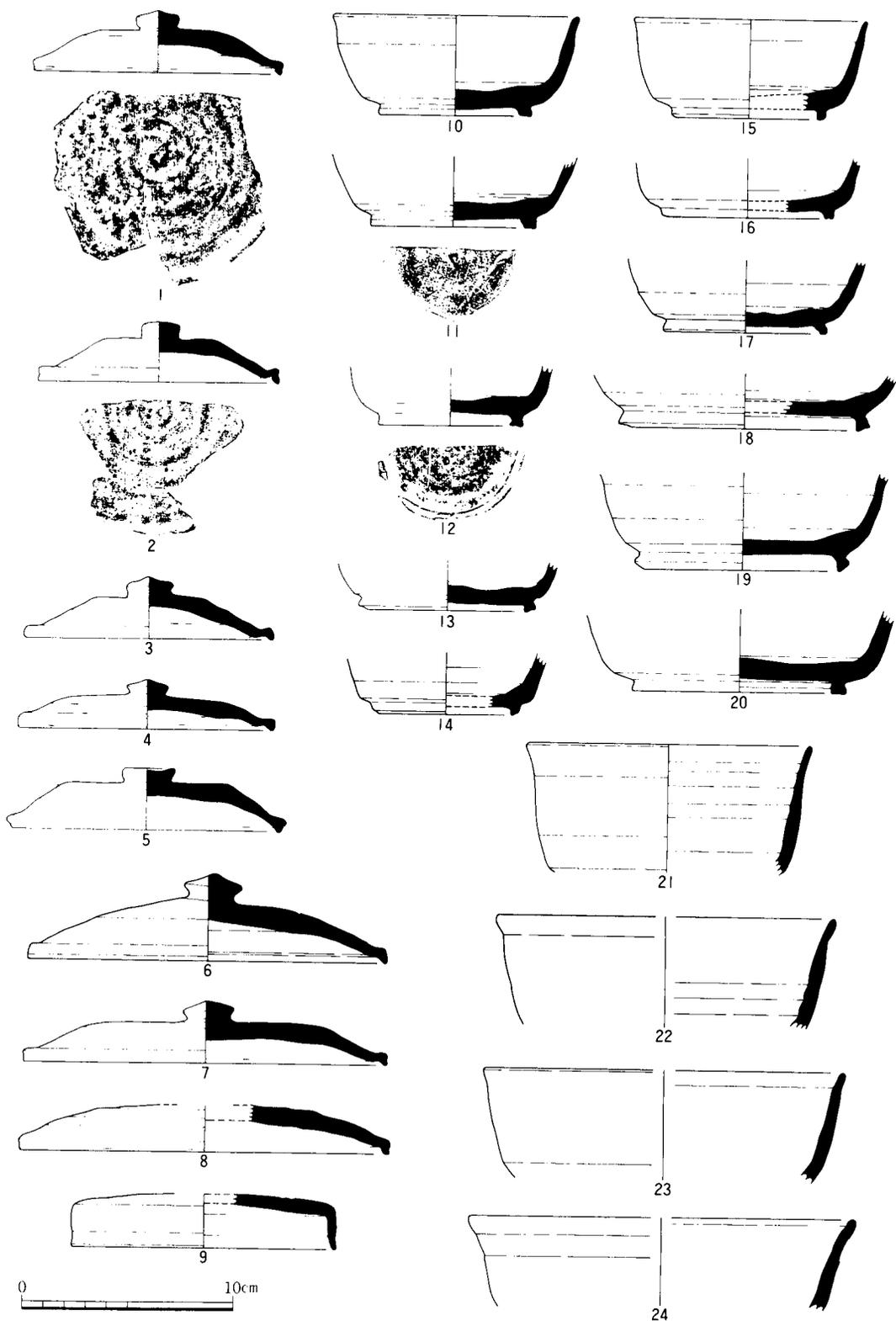
#### 瓶・甕 (36～40)

36、37は横瓶である。36は外湾して立ち上がる短い口縁部がつけられ、内面継目が出っばっている。口縁端部は押圧され外方に開く感じである。胴部内面は撫で調整でタタキ痕をきれいに消している。37は大型品で器壁が厚い。内面の接合部は段をなし、周囲を強くタタキ諦めている。外面接合部はカキ目調整が施される。胴部内面は荒いタタキと押圧で凹凸している。38は双耳瓶の耳部破片である。粘土板を貼り付け、ヘラ状具で形に切断し、円孔が穿たれているものと想定される。39は瓶の底部破片で、平底である。胴部外面は斜方向のケズリ調整で、内面は斜方向の撫で調整である。内底は降灰によるものか荒れている。40は長甕で、口縁部が外折し、端部を上方に引き上げ内面に段を形成するものである。内外面をカキ目調整するが外面は、口縁部にまで及んでいる。胴部外面にはタタキ痕を残している。

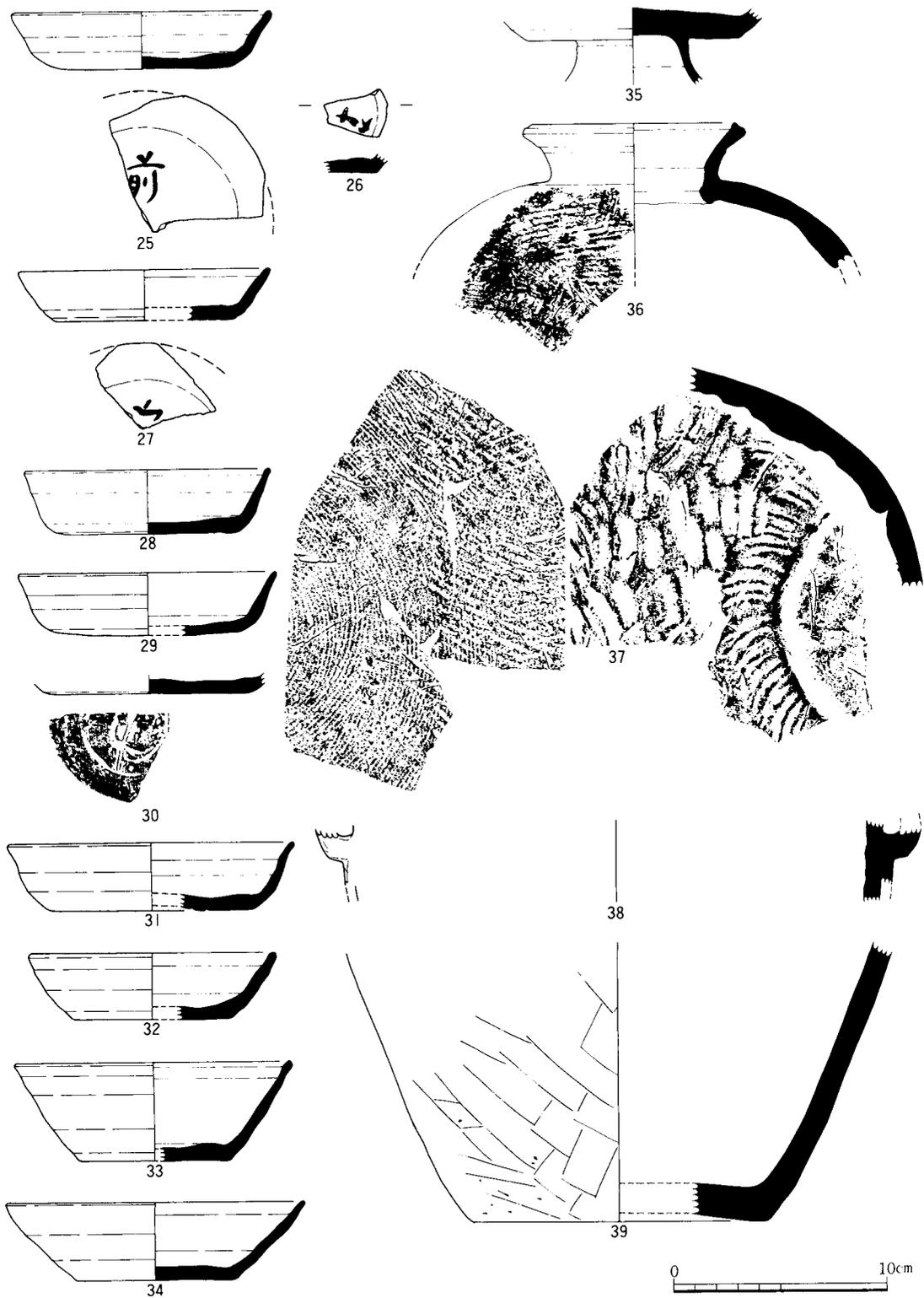
#### 土師器 (第93図42～52、図版68)

##### 埴・皿 (42～46)

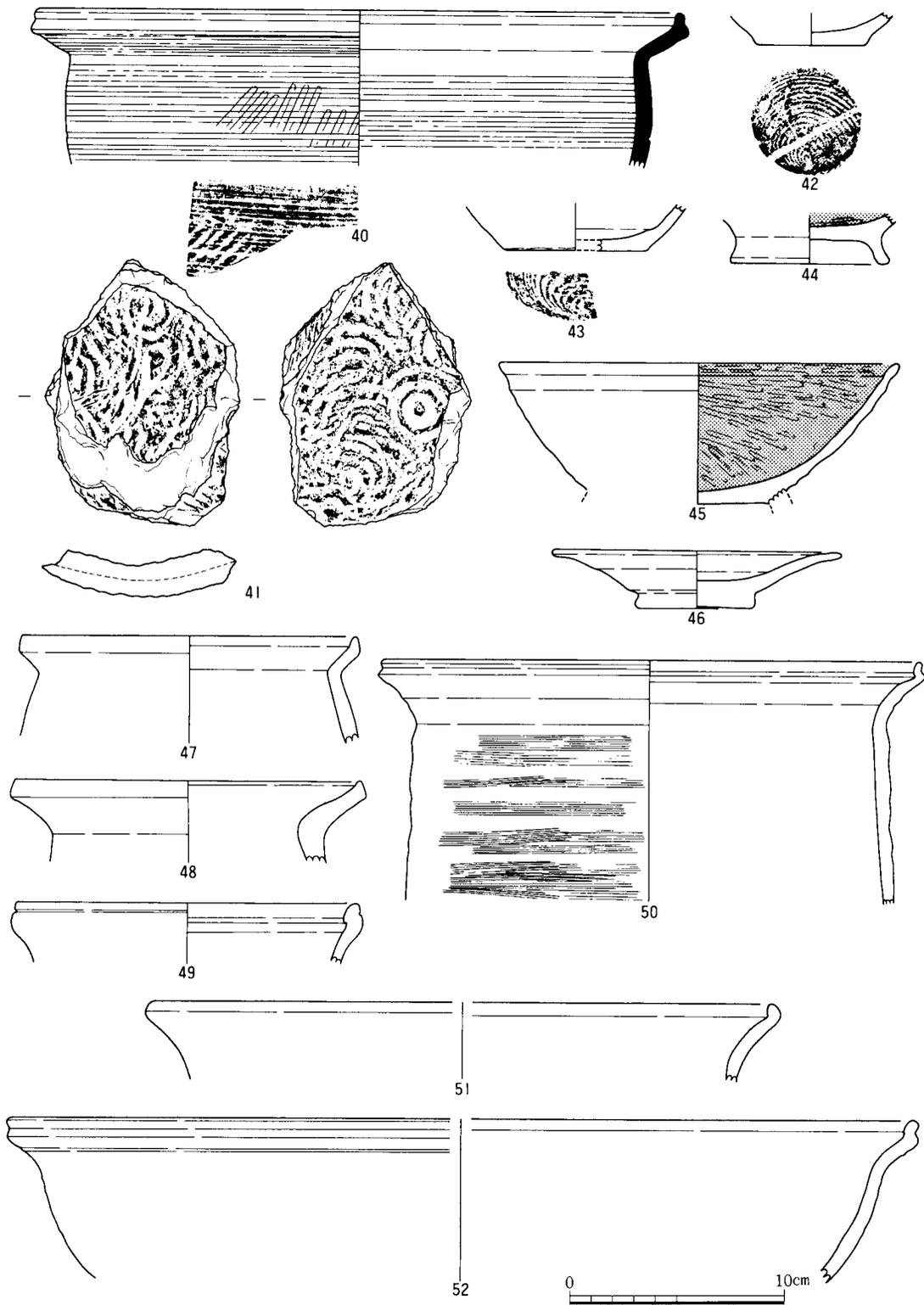
42、43は回転糸切り底である。44、45は有台の内黒土器である。44は体部直下に外方に外反気味となる、やや高目の高台が付く。45は口径18.4cmを測る大型の埴である。内湾気味に立ち上がる体部で、口縁部に強い撫でが入る。内面は良く研磨されており、外底は高台貼り付部周囲を



第91図 北側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第92図 北側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第93図 北側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)

撫で回すが糸切り痕が残る。器壁は比較的均一であるが底部で若干厚くなる。46は平高台の底部をもつ皿である。体部は外反して、口縁部で外方に開く。

#### 甕・埴 (47～52)

47～50は甕である。47は外折する口縁で端部を上方に引き上げる。48は大きく外折させ端部を軽くつまみ上げた形状である。49は口縁端部を内屈させ、内側から押圧を加えた形状をとる。外面口縁端部に凹線状のものがめぐり、50は直線的な胴部に大きく外反する口縁が付く。口縁端部を屈曲させ外反気味に上方に引き上げている。51、52は埴類である。51は外反する口縁で、口縁端部を内屈しておさめる。52はなだらかに湾曲する体部に50と同じような口縁部が付く。

#### 南側調査区出土遺物

##### 須恵器 (第94～96図 1～62、図版69～71)

##### 蓋 (1～7)

1は口径11.2cmと小型で、天井部に平坦面をつくり、口縁端部をわずかに内屈して丸くおさめる。2～4は天井部が平坦で口縁部にも狭い平坦面をつくる。口縁端部は嘴状に内屈しておさめられている。2は天井部と口縁部の境界に稜を持ち、扁平な擬宝珠形のつまみが付く。3は天井部をわりと丁寧に調整するが、4は粗雑である。いずれもつまみを欠損する。5はボタン状の小振りのつまみが付き、天井部は押しつけられた様に凹んでいる。口縁端部は内屈しておさめる。6は天井部にふくらみをもたせ、口縁端部は屈曲しておさめる。つまみは扁平な擬宝珠形である。7は天井部にしっかりとした平坦面をつくり、口縁部との境界に稜を持つ。口縁部にも狭い平坦面をつくり、端部は嘴状に内屈しておさめる。ボタン形のつまみが付き、天井部の器壁は厚い。1、6の内面に墨痕が認められ、器面が滑らかになっており、転用硯と想定される。

##### 坏 (8～40、42、49)

8は立ち上がりが急で外傾し伸び口縁端部でわずかに反転する。器壁は厚手均一で口縁端部で先細となる。9は大振りで底部にふくらみがあり、内面は強い撫でにより凹凸である。底部の器壁は厚い。10は底部と体部の境界が丸味を持ち、外反して立ち上がる口縁が付く。底部の仕上げは撫でつけ程度の粗雑なものである。11、12はやや器高の低いもので、11が立ち上がりが急であるが12は丸味を持って立ち上がる。器壁は比較的均一で、12は先細となる。外底の仕上げはヘラ切り痕が若干残る程度である。13、14は体部の立ち上がりが急で、底部と体部との境界に強い押圧が加えられている。口縁部は13が直線的で、14が外反する。15は外傾度が大きく、直線的に伸びる体部である。底部調整は体基部のみを撫でつけ、ヘラ切り痕を明瞭に残す。器壁は薄く均一である。16はやや内湾して立ち上がる体部で、底部との境界が明瞭である。器壁は口縁部に向かうにつれて若干薄くなる。17～22、24～29は外傾度が大きいもので、碗形をなすものもある。17、18は直線的に立ち上がる体部で、内面体基部が押圧で凹みを持つ。器壁は薄手均一である。底部はヘラ状具と粗雑な撫で調整を施すがヘラ切り痕を残す。17の口縁部内面に凹線状のものがめぐり、19～21は内湾気味に立ち上がる体部である。19の底部は外周をヘラ削りで仕上げる。ふ

くらみがあり不安定である。底部器壁は厚く、体部は薄手均一である。20の底部はへら状具と撫でによりほぼへら切り痕を消している。21は底部と体部の境界が段状をなし明瞭である。22、23は直線的な体部で、口縁内面に若干押圧を加え、端部を丸くおさめる。底部と体部の境界が明瞭で、内面が強い押圧で凹んでいる。底部の仕上げは粗雑である。24、25は内湾する体部で、底部との境界が段状となる。25の器壁は厚く安定感がある。26は体部と底部の内面境界に幅の狭い凹みめぐり、外面に継ぎ痕と想われるものが観察できる。円盤状の粘土に体部の粘土を貼り付け、体部を引き出して整形したと想定される。27～29は内湾気味に立ち上がる体部で、強い撫でにより内外面が凹凸している。28、29の底部は若干のふくらみがあり、器壁が厚い。30は直線的に立ち上がる体部で、底部の器壁が厚いのに比較し、体部が極端に薄くつくられている。31は口径が15.6cmと大ぶりで身も深い。底部を欠損するため高台の有無は判らない。32～35は大きく外傾し、直線的に立ち上がる体部で、器高が低い。底部と体部の境界は丸味を持つものと、明瞭なものがある。器壁は薄手均一である。32、35の胎土は砂粒が多く、器表面がザラついている。底部は渦巻状のへら切り痕を残す。36は小ぶりで、底部と体部の境界は角を持ち明瞭である。37、38は直線的に立ち上がる体部で、口縁端部が反転する。底部の器壁が厚く、体部は薄くなる。39、40は内湾する体部で、39の口縁端部は反転する。40は体部と底部の境界が折り曲がったように段をなし底部にはふくらみがあり不安定である。器壁は厚手で均一である。42は急に立ち上がる体部で、体基部に押圧があり凹んでいる。49は特殊な器形をとるもので、口縁部を大きく反展させる。内底面の立ち上がり部分は強い押圧で、ふくらみを持たせている。外底はへら切り後、粗雑な撫でつけをするが、外側の粘土のはみ出しをそのままにしてある。反展する口縁の境界に径0.3cmの孔が穿たれる。孔は2個と想定される。

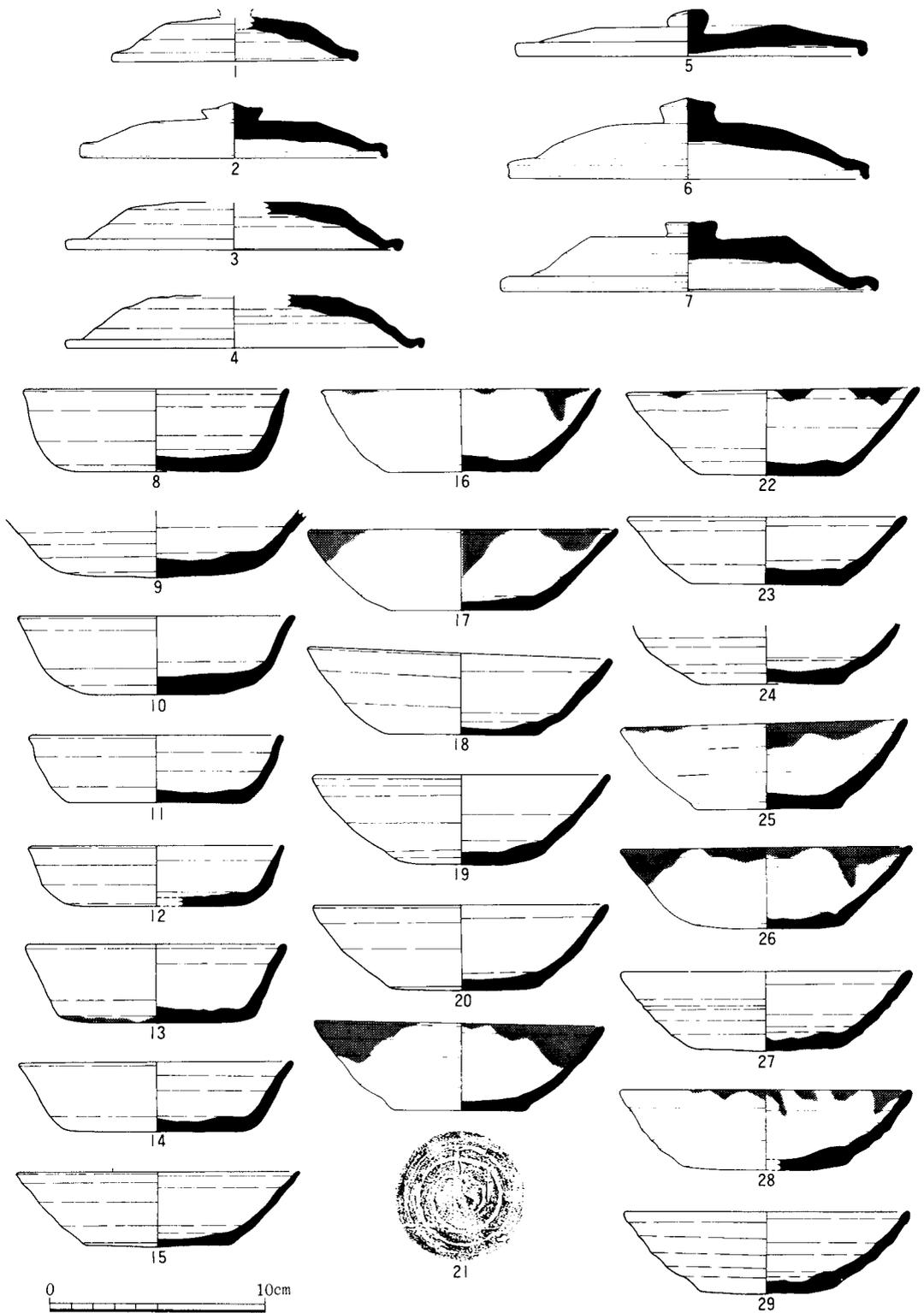
口縁内外面や体部に灯芯痕やタール状のものが付着するもの(16、21、25、26、28、38)がある。38には口縁部から体部にかけて、一面にタール状の付着物が付いている。

### 皿(41、43～48)

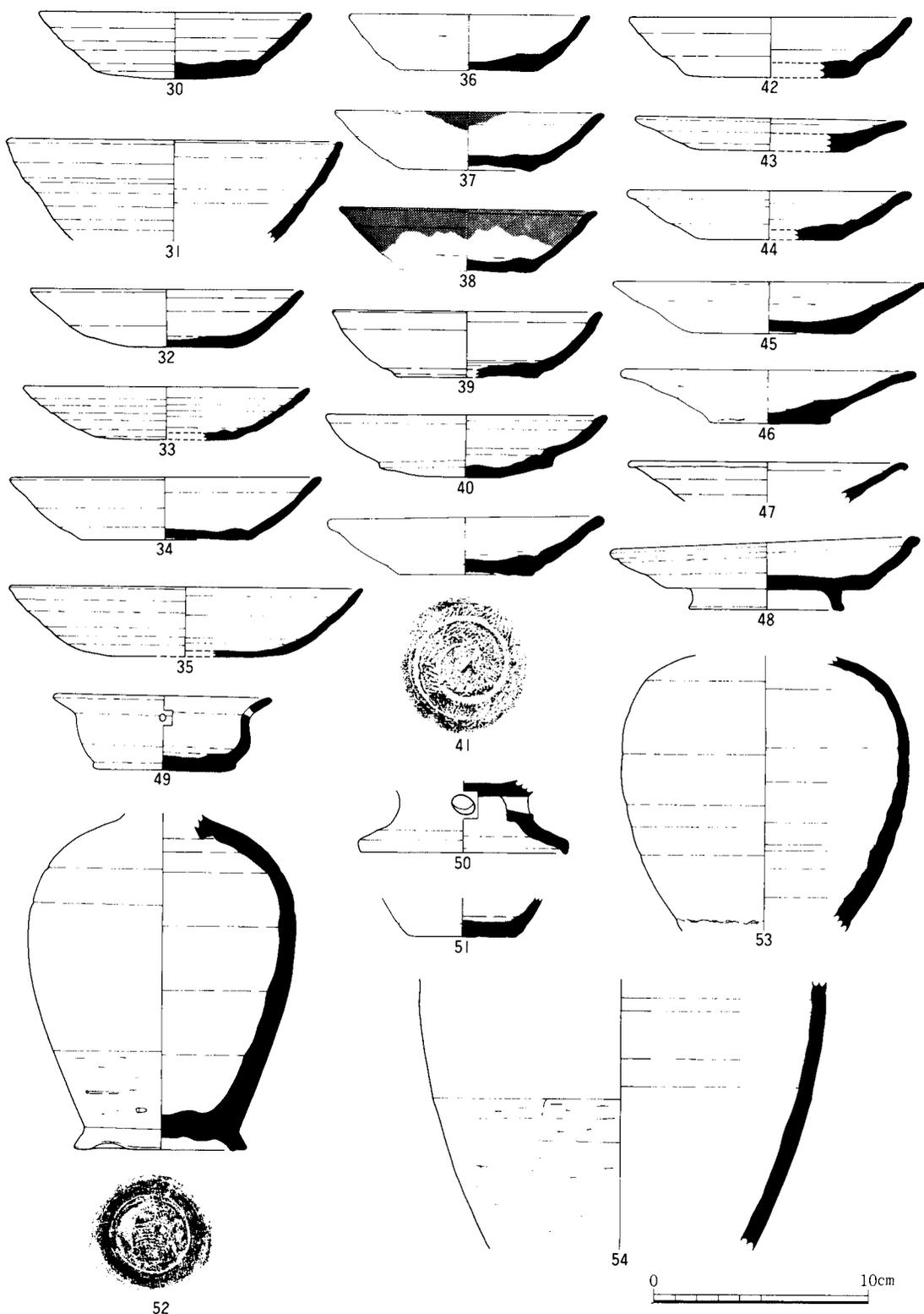
41、44はやや内湾気味に立ち上がる体部で、口縁部で若干外反させて端部を丸くおさめる。体部と底部の境界が明瞭で、内面の立ち上がり部分が押圧で凹んでいる。41の外底にはへら切りによる渦巻き状の痕が明瞭に残る。器壁は比較的均一で厚い。43は外反して開く短い口縁で、器高が低い。底部の器壁は厚く、口縁部でやや先細りとなる。45は体部が外反し、口縁部で直線的に伸びる、大ぶりのものである。外底は体部との境界を撫でつける程度で、へら切り痕を明瞭に残す。46は外反して開く体部に、平高台上の底部が付く。47は直線的な体部が口縁端部で外下方につまみ出すように短く反転させる。48は体部の立ち上がりが急で、口縁端部を押さえつけた形状をなす。口縁部外面に一条の凹線状のものがめぐる。底部の内側に外方に踏ん張る高台が付き、底部外周をへら削りを施し、高台を貼付けして撫で回しをしている。器表面内は、滑らかになっているか墨痕があり、転用硯や墨溜りに利用されたものと想定される。

### 底部(50、51)

50は高坏の脚と考えられるもので、外方に外展させ端部を内屈しておさめる。径1.0cmの円形透し穴が穿たれる。51は小型の坏と考えられるもので、外底はへら切り後、へら削り調整を施



第94図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第95図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)

す。内面に朱墨痕が認められる。

#### 瓶 (52~56)

52は肩部がなだらかに湾曲して移行していく胴部で、胴部直下に外方に張り出す高台が付く。胴部外面は削り調整し、外底は撫で回しを施すが中心部に糸切り痕が残る。器壁は厚い。53の内外面は強い撫でにより凹凸している。胎土に砂粒を多く含み、器表面かザラっとしている。55、56は特殊器形といえる多口瓶である。55は直線的に立ち上がり、端部を押えた形状をなす口縁で主口縁と副口縁5個がつけられる。肩部は肩衝状に張り出し、胴部との境界が突出し明瞭である。胴部、肩部、口頸部の三段成形である。外底は外周をケズリ調整する。56は外反気味に立ち上がり、端部が外転する口縁で、主口縁と副口縁4個がつけられる。肩は丸味を持ち、胴部との境界に凸帯状の突出があり明瞭である。副口縁はこの境界上につけられる。胴部中央付近に凸帯がめぐり、胴部直下に外方に踏ん張る高台が付く。三段成形と想定される。

#### 鉢、埴 (57~60)

57は大きく外傾し、内湾して立ち上がる体部に、口縁端部を内屈して丸くおさめる、いわゆる鉄鉢形をなしている。体部外面は削り調整され、器壁は均一である。58は底部から急に立ち上がり、内湾する体部で、口縁端部は押さえて断面が方形状を呈する。体部外面は強い撫でにより凹凸している。内底面から口縁部にかけてカキ目調整が施される。59は丸底を呈する埴である。内湾して立ち上がり、口縁部で外折して端を上方へつまみ上げて、内面に段を持たせる。外面は不定方向の削りと押圧が加えられる。内面は口縁部まで不定方向のカキ目調整が施される。60は外傾する体部に口縁部で内屈させ端部を反転させる。

#### 甕 (61、62)

61は外反して立ち上がる口縁で端部を押えて面を持っている。62は内面を同心円状タタキ、外面を平行タタキをする。器壁の中央に火ぶくれと割れ目の線が入る。他に胴部片が数点出土しているが、内面が同心円状のタタキで、外面が平行タタキのものである。

#### 灰釉陶器 (第96図63~65 図版71)

##### 埴、皿 (63、64)

63は内湾気味に立ち上がる体部で、口縁灰色で反転し先細となる埴である。体部下に外傾する輪高台を付ける。外面は削りと撫で調整され、外底は入念なヘラ削り調整が施される。体部外面約 $\frac{2}{3}$ 、内面 $\frac{1}{2}$ にまだらな淡緑灰色の釉がハケ塗りされるが、外面高台一部に釉垂れがおよぶ。焼成はややあまいようである。64は皿の口縁部破片である。口縁端部が外反して先細となる。緑灰白色の釉が口縁部内外に施されている。

##### 手付瓶 (65)

口縁部の一部を欠損するがほぼ完形品である。弓状に外反する口縁で、肩部は張りがなく胴部へゆるやかに湾曲し移行していく。口縁部と肩部の粘土紐を貼り付け、持手をつくる。底部は平高台様の低い段をなし、切り離しは静止糸切りである。施釉は粗雑なハケ塗りで、胴部中央までのところと、底部との境界までおよぶところがある。

土師器 (第97~104図 1~134 図版72~77)

壺 (1~47)

分量は口径12cm前後のもの(9、15、31)、15~16cm前後のもの(8、18、24、38、41~43)、20cmを測る大型品(20)等があるが、13~14cm前後のものが大半をしめ規格化されているようである。外底の切り離しも26は例外として、一応に回転糸切りである。器形は体部が内湾し立ち上がり口縁端部が外反するものをⅠ、内湾気味に立ち上がり口縁端部がほぼ直線的に伸びるものをⅡ、体部から口縁部へほぼ直線的に伸びるものをⅢと三者に大別した。

Ⅰ(1~8、12) 口縁端部が僅かに外反するものも含めた。底部と体部の境界は内面はゆるやかに湾曲するが、外面は低い段をなして立ち上がる。5の口縁端部は短かくつまみ出したように外反する。7、8の口縁端部の内面が押さえで狭い面をなしている。体部の器壁は均一のものが多い。胎土は大粒の砂粒が含まれるものが1、3~5、4で、良質のものが2、6~8と約半分に別れる。

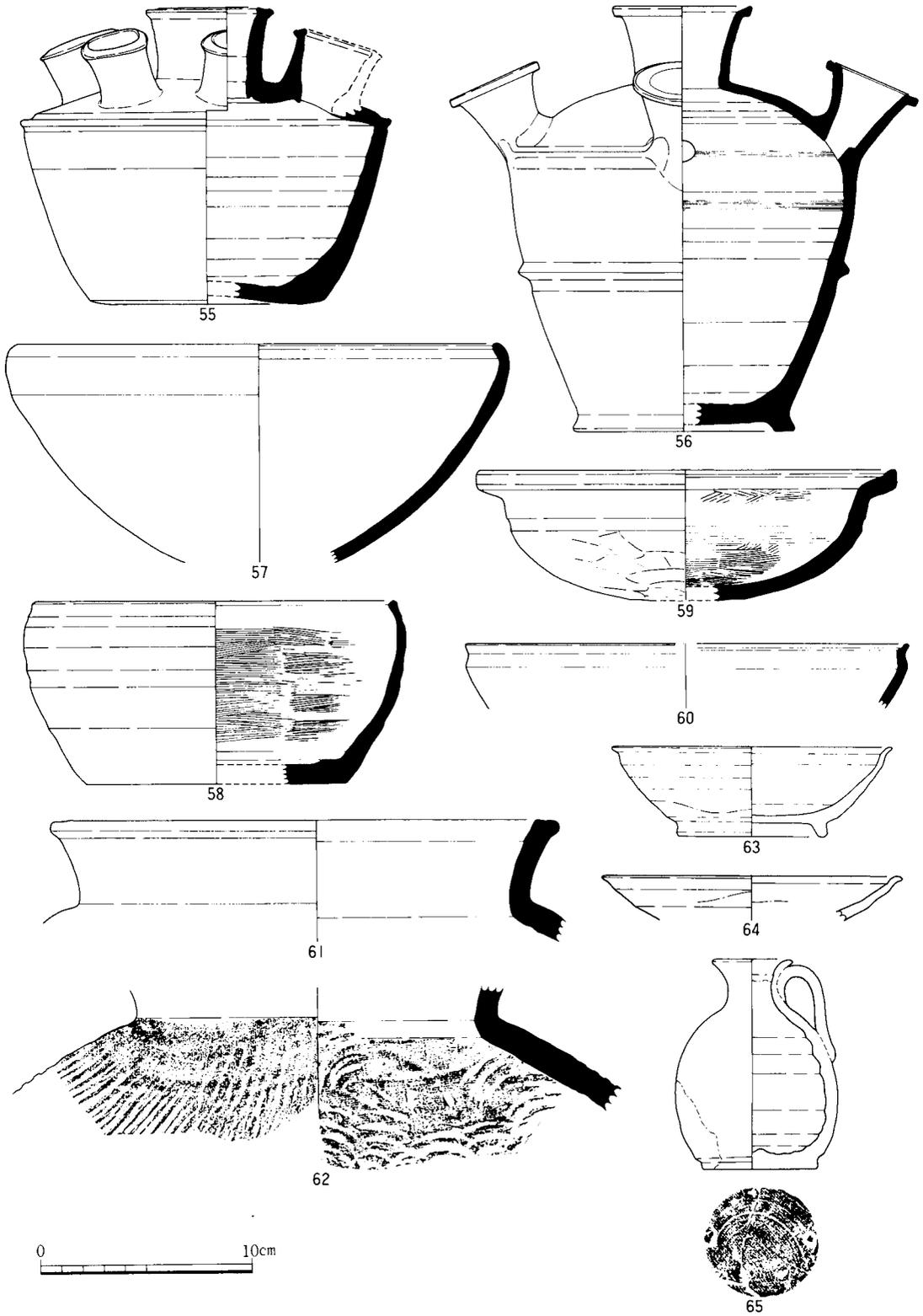
Ⅱ(9、10、13~15、17、18、23~25、27~29) Ⅱの中に、Ⅲとの区別の判断が困難なものも含めた。9、10、13は同じ形をなす小型品と大型品である。直線的に伸びる口縁を端部で丸くおさめる。体部の器壁は均一であるが、底部中心が極めて薄くなる。胎土はやや良質である。14、15の体部は大きく起伏し、15の底部と体部の境界は屈曲し段状をなす。胎土は14が大粒の砂粒を含み、14は良質である。17、18は口縁端部が肥厚し丸くおさめる。体部外面に水挽きによる凹凸がある。23は器壁が厚い。25は外面の口縁下に強い撫でが入っている。27は外面に凹凸があり、器壁は厚く均一である。27、28の内面は断面形状がゆるやかな曲線を描く。

干内屈気味となる。

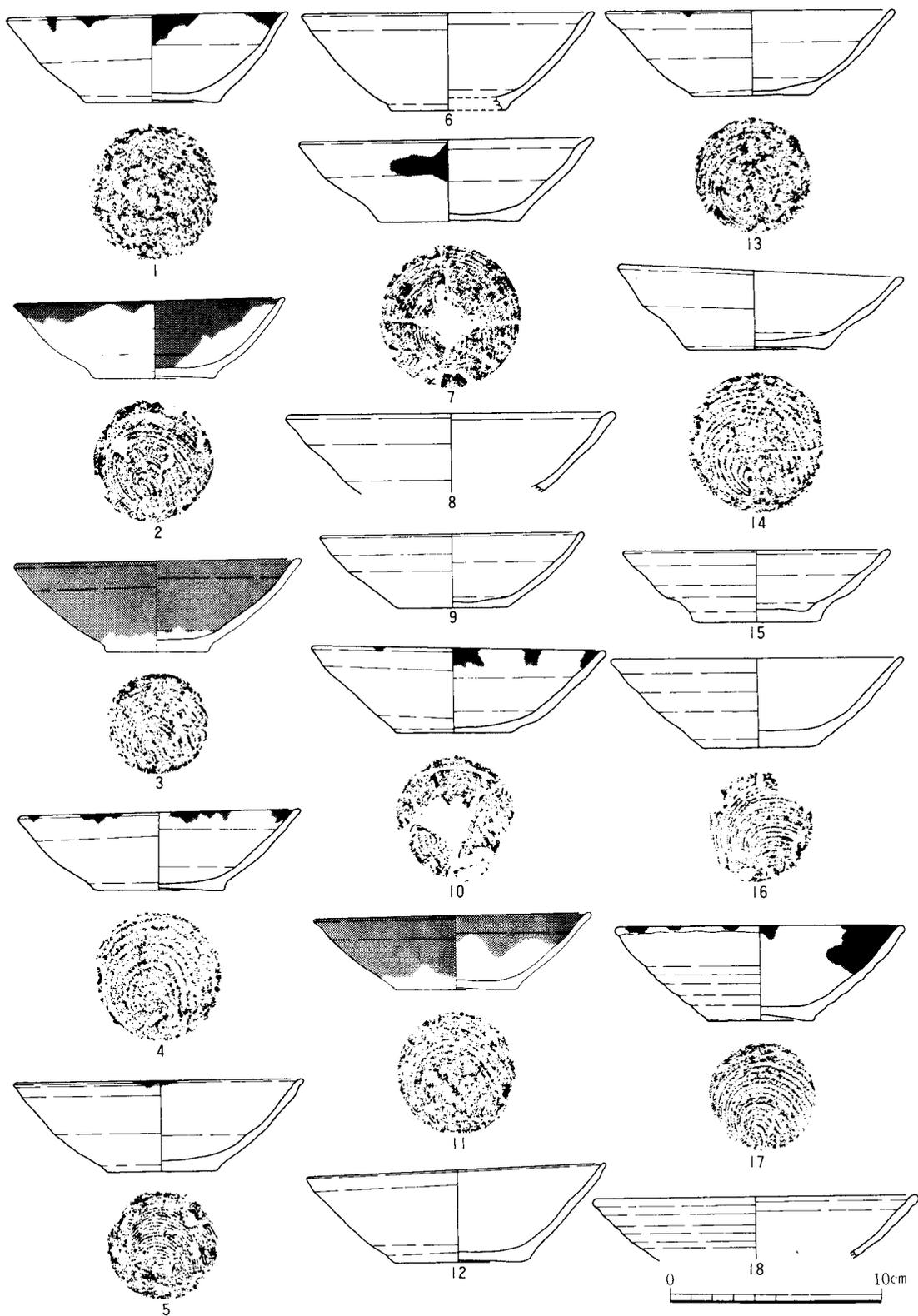
Ⅲ(12、16、19~22、26) 12、16は体部器壁がやや薄手で、口縁端部が先細となる。16の底部器壁は厚く、胎土は良質で、焼成も良好である。19の内面は粗雑な調整で、器面が荒れている。20~22、26は直線的に伸びる口縁が肥厚するものである。20、26は底部器壁が均一であるが、21、22は底部中央で薄くなる。22の胎土は良質で、器面が滑らかに仕上げられる。

その他(30~35) Ⅰ~Ⅲとは異なっているものである。30は内湾して立ち上がるもので、平高台様の底部である。31、32は直線的に立ち上がる体部が口縁部で内湾気味となるものである。31の胎土は良質で、内面を円滑に仕上げている。33は外底がヘラ切りで、底部と体部の境界が丸味を持って立ち上がる須恵器の坏の形状をとる。焼き上がりは土師器であるが、須恵器の生焼きとも考えられる。34は底部から急に立ち上がり、直線的に伸びる口縁である。小型品であるが器高の高いコップ状をなす。35は底部中央に径0.7cmの円孔が穿たれる。

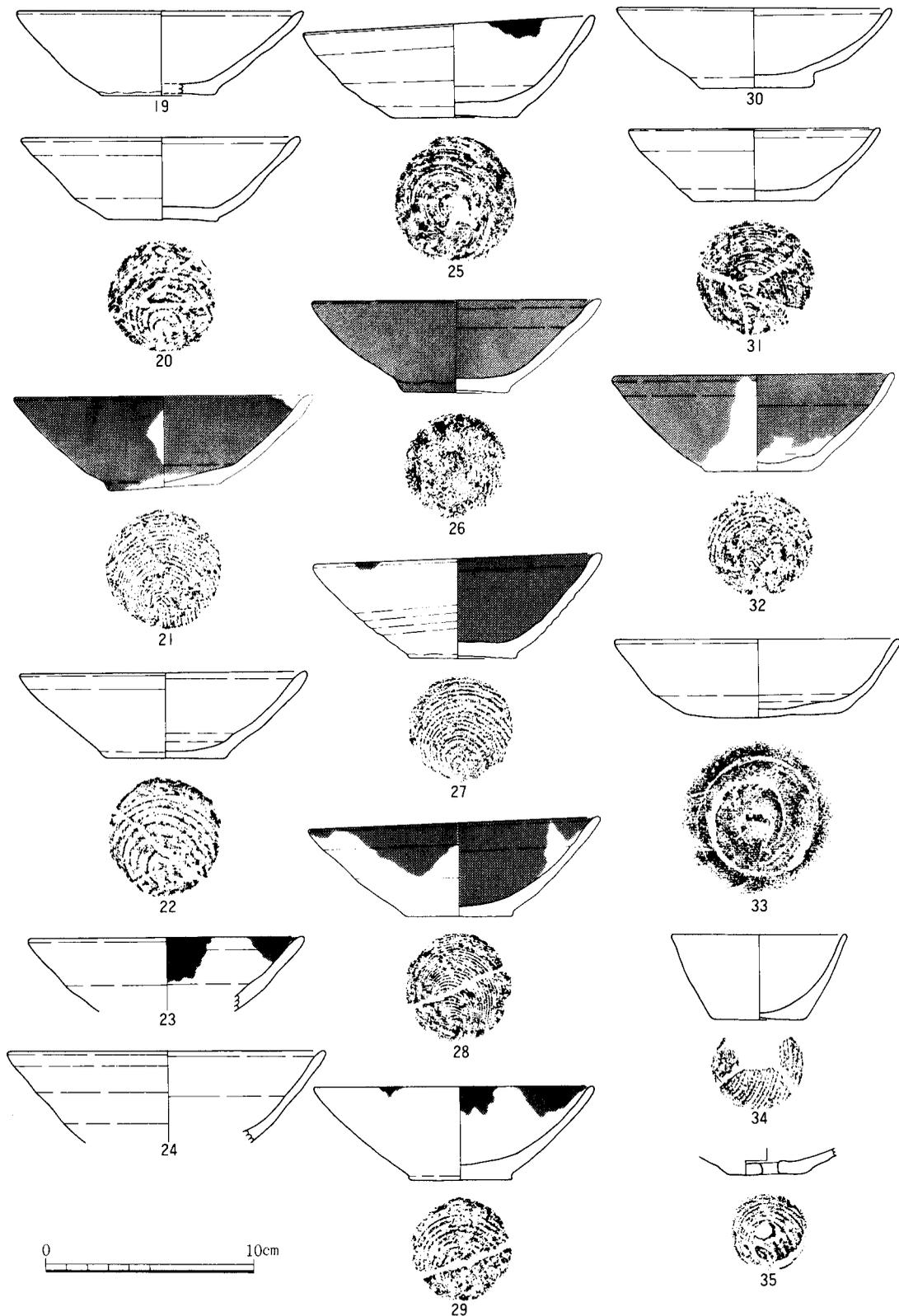
内黒土器(38~47) いずれも内面をよく研磨するが、39は内面をいぶし焼で黒色にするが研磨されていない。40は内面が黒褐色であるが黒斑によるもので土師器である。38、43がⅠである。器壁は比較的均一で薄手である。39はⅢで、底部と体部の境界が稜をなし立ち上がり先細となる。40~42をⅡとした。39は大きく外傾するもので、底部は若干上げ底風となる。42の底部は段をなし器壁が厚く、平高台様になる。44~47は底部片で、底部の境界に稜を持つ。45は器壁が厚く、47は薄い。



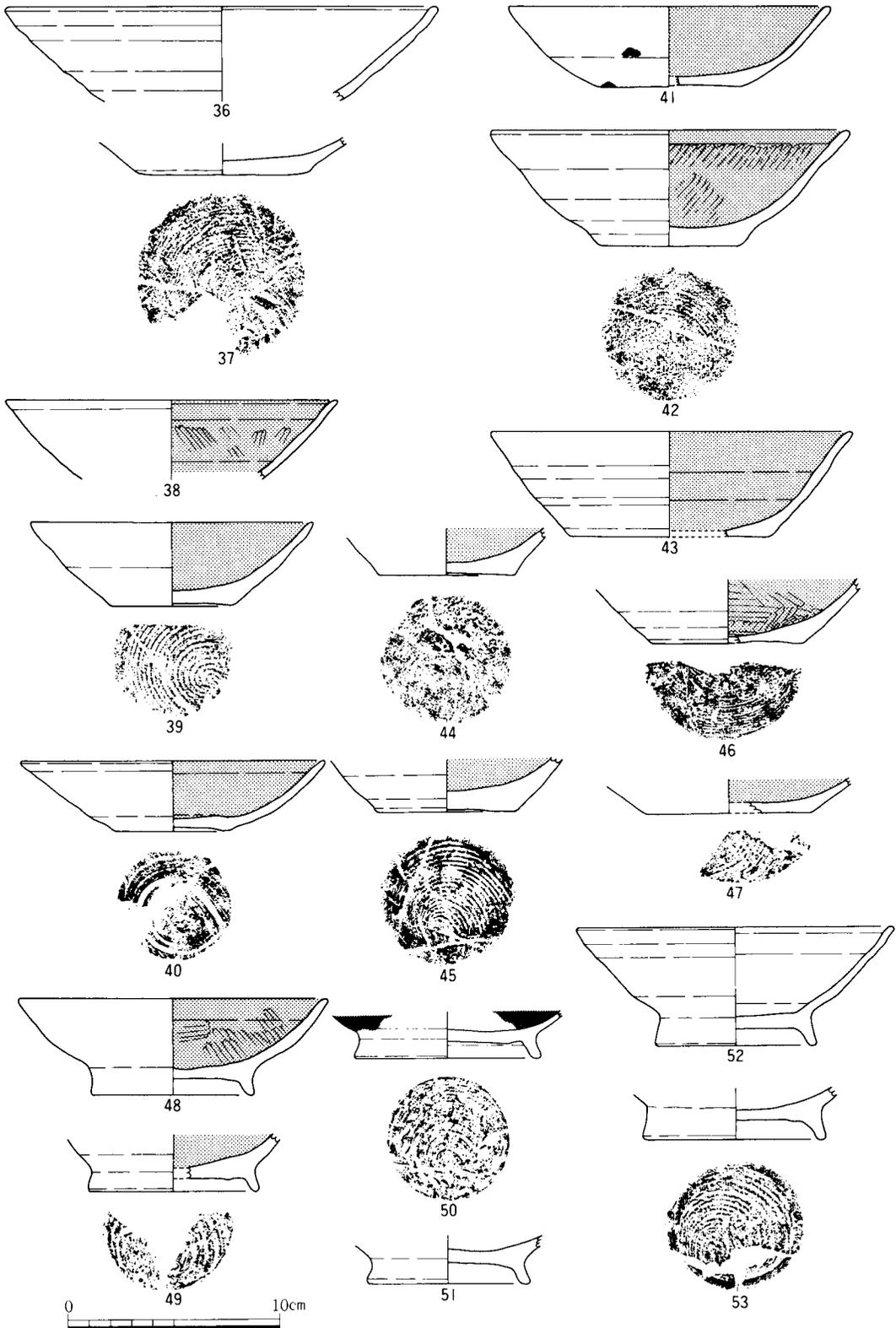
第96図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第97図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第98図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第99図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/4)

内黒土器を除く一般的なもの（1～32）で、口縁部や体部内外面に灯芯痕や、タール状の付着物が付くものが17個体あり、半数以上を占めている。中には器表面の全面に及ぶもの（2、21、25）もある。

#### 有台壺（48～86）

底部だけで、全体形が判るものが少ない。底部径（高台径）で大小をみると、9 cmを超えるもの（56、58、59、61、71）と、6 cm台のもの（68、78、80、81）があるが、7～8 cm前後のものが多数で、標準的である。高台高は2.1 cmを測る高いもの（63）や、0.3 cmと低いもの（83）等様々であるが、1 cm前後のものが多くいようである。

48～50は外反する高台が付く。48は内湾して立ち上がる体部で、内面にミガキ調整が施される。器壁は比較的均一である。49は内黒土器である。50の外底には爪痕状の圧痕が、高台の内側に円を描くように施されている。51～58は外傾し、直線的に立つ高台が付く。端部を丸くおさめるものと断面形状が方形となるものがある。52は直線的に伸びる体部が付く。59は外傾し、端部が外方へ開く。60、61は大きく開いて端部が先細となり、62、63は直立気味に立つ高台が付く。64は直線的に立ち上がる体部で、高台を欠損する。65はやや内方に踏ん張る高台で、66～71はやや内湾気味に立つ高台である。72～74は断面形状が方形をなす。75、76はずんぐりとした高台である。74、75の体部は直線的で、器壁は均一で厚い。77～81は低めの高台で、外傾し端部が丸くなるものと、方形のものがある。82はずんぐりとして低く、83は極端に低い高台が付く。84～86は器壁が厚く、端部が肥厚するもので大型である。

#### 皿（87～100）

87は直線的な体部で口縁端部を僅かに外反させる。88～92は平高台を持つものである。体部は直線的に伸びるもので、89は口縁部が外反して開く。93～98は高台付である。93～97は外反して開く体部である。93の高台は外方に開く低い高台で、断面形状が三角形をなす。98は直線的に伸びる体部で、高台は直立気味に立つ。99は須恵器形状をなすものである。100は底部面が広く、外反して開く体部で、指頭で整形された脚が付く三足盤である。内面に黒色処理を施す。

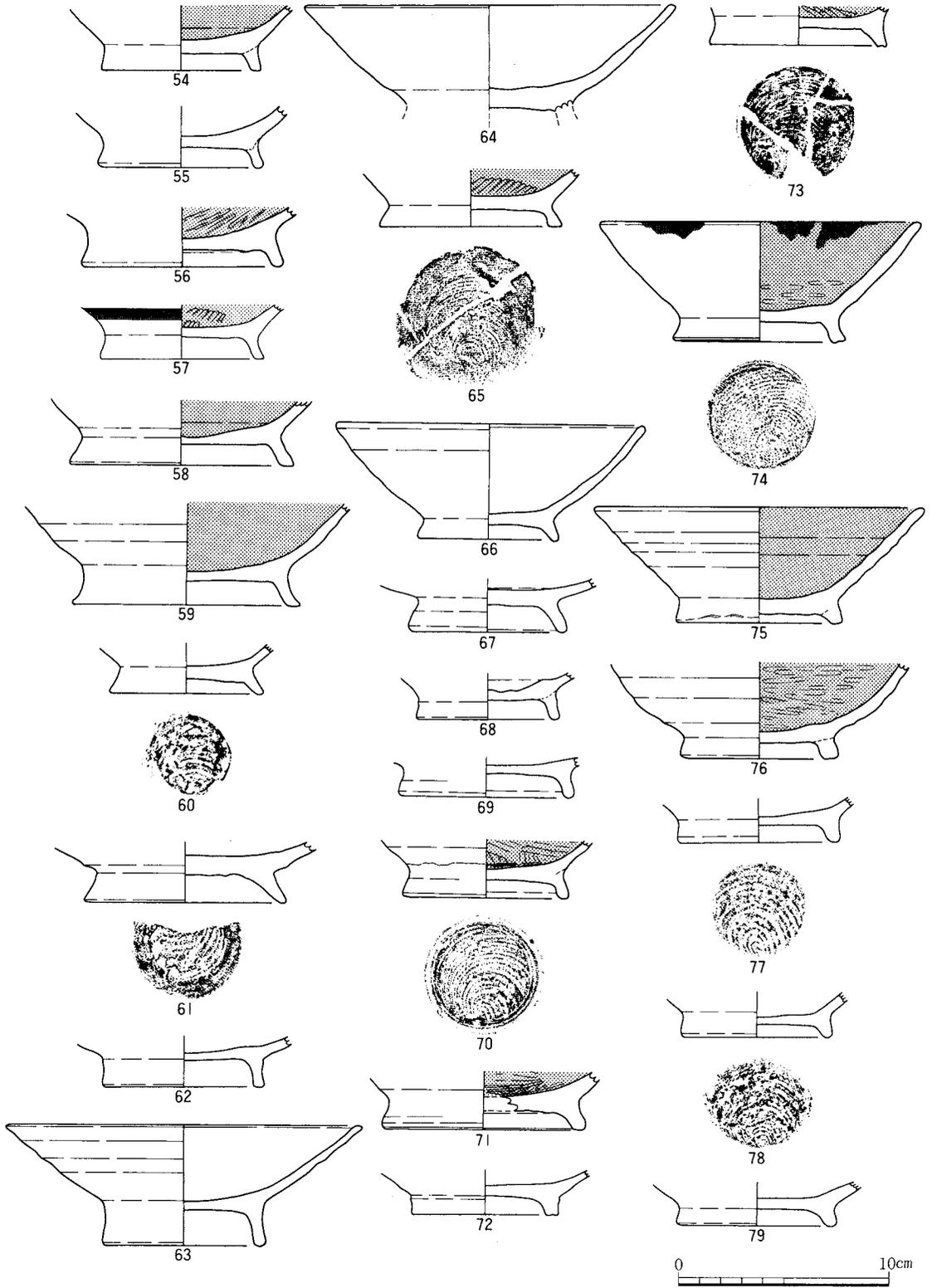
#### 高坏・高台部（101～103）

101は小型の高坏である。坏部は急に立ち上がる体部が口縁部で外折し段上をなし、端部を上方へ上げておさめる。脚部は直線的に下がり、端部で外方に開くものと想定される。坏部と脚部の付け根にヘラ状具による孔が穿たれる。102、103は高脚状のもので、102は外傾気味に立つ背の高いもので、103は外方に開く器壁の厚いものである。

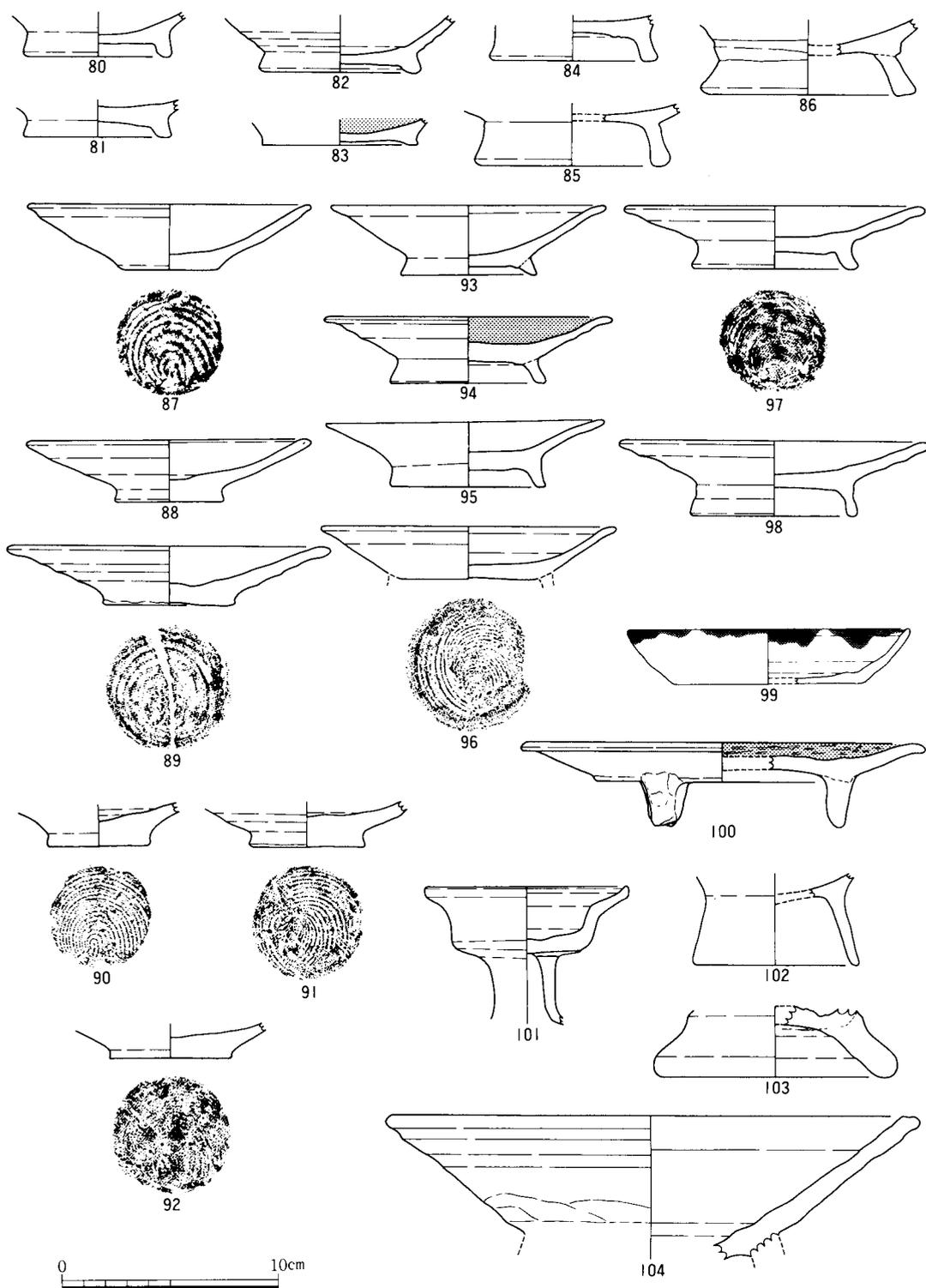
#### 鉢・埴（104～130、134）

104、105は大きく外傾して直線的に伸びる体部で、口縁端部は104が面を持たせておさまり、105外反気味となり上方へ内折しておさめる。外底には外傾して端部が外方に開く高脚が付く。高脚部の中央に径2.1 cmの円形の透し穴が穿がたれ3箇所と想定される。体部外面下半に斜方向の削り調整が施される。104にも高脚が付くものと想定される。107は湾曲する体部で口縁端部が内屈する鉢である。

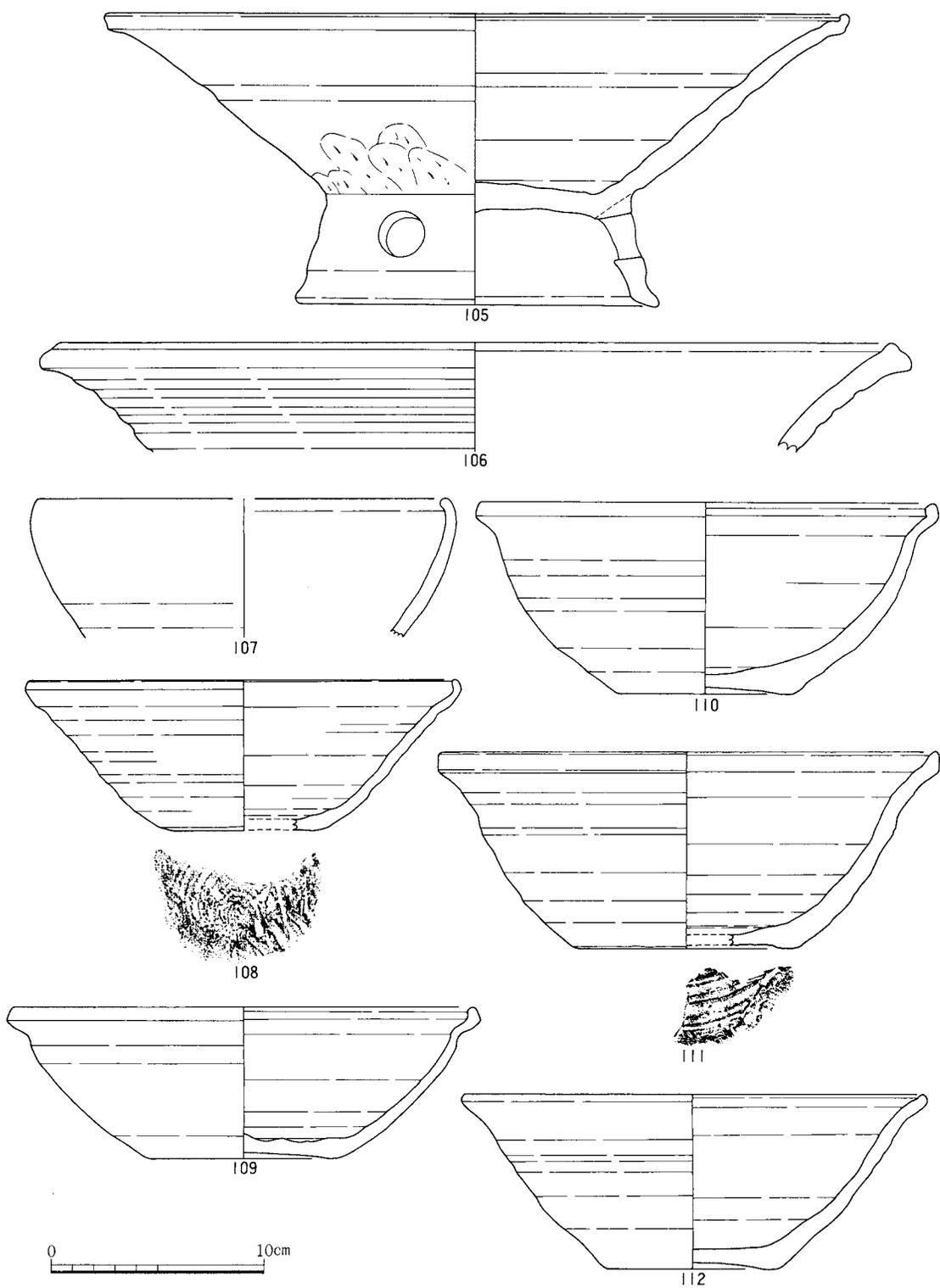
108～130は埴形をなすもので、底部は平底で、丸底のものは1点も見い出せなかった。ここでは



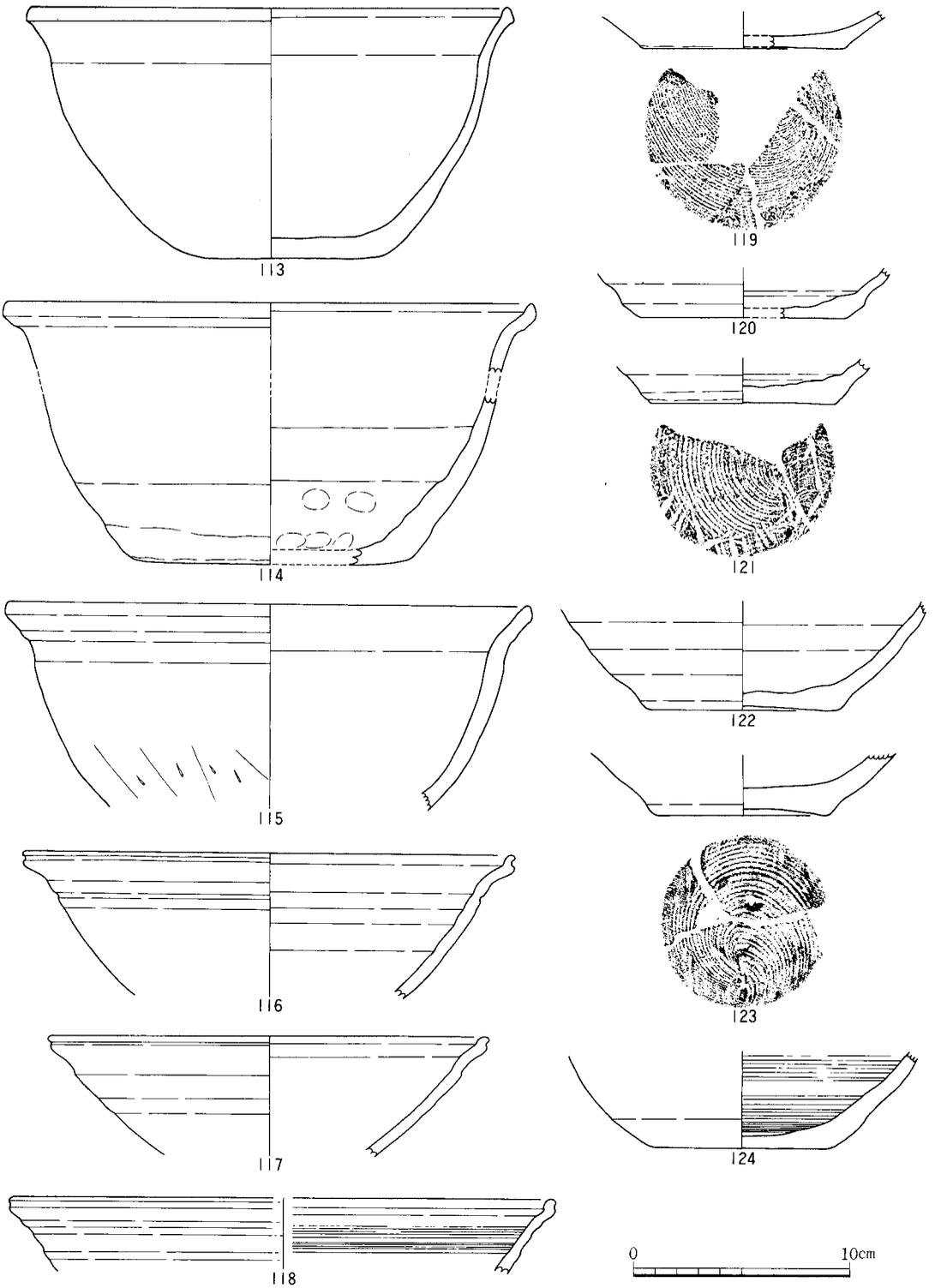
第100図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



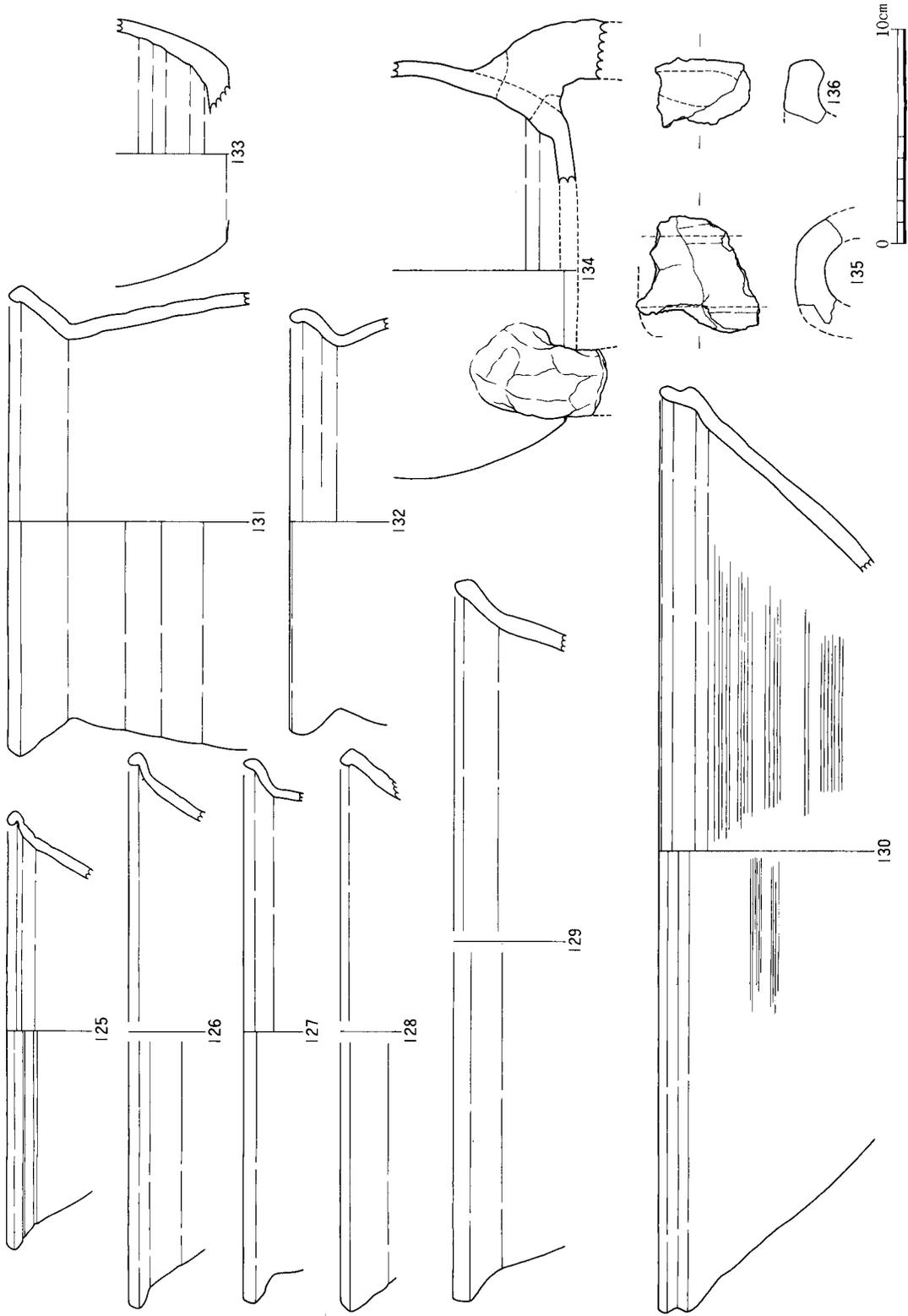
第101図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第102図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第103図 南側調査区出土土器実測図 (S = 1/3)



第104図 南側調査区出土遺物実測図 (S = 1/8)

鉢として考えておく。轆轤成形品で撫で調整であるが、115の体部下半に斜方向の削り、124の内面にカキ目調整が入るものもある。体部の形は大きく外傾して直線的なもの(108、112)と、外傾して湾曲するもの(109～111、116、117、130)と、立ち上がり之急で湾曲し身の深いもの(113～115)がある。口縁形状でみると、口縁部を外折して端部が肉屈するもの(108～110、125、126、128)、反転して端部を上方へ短く引き上げるもの(111、113、114、127、129)、反転させておさめるもの(112、115)、外反気味で端部を上方へ引き上げ外反させるもの(116～118、130)がある。

134は鼎状の脚が付く三脚埴である。底部との境界上の体部に貼付される。体部外面にタタキ痕があり、内面は黒色処理を施す。

#### 甕、その他(131～133、135、136)

131、132は外折して端部を上方へ引き出す口縁を持つ甕である。内外面は撫で調整である。135、136はフイゴの羽口の破片である。(宮下)

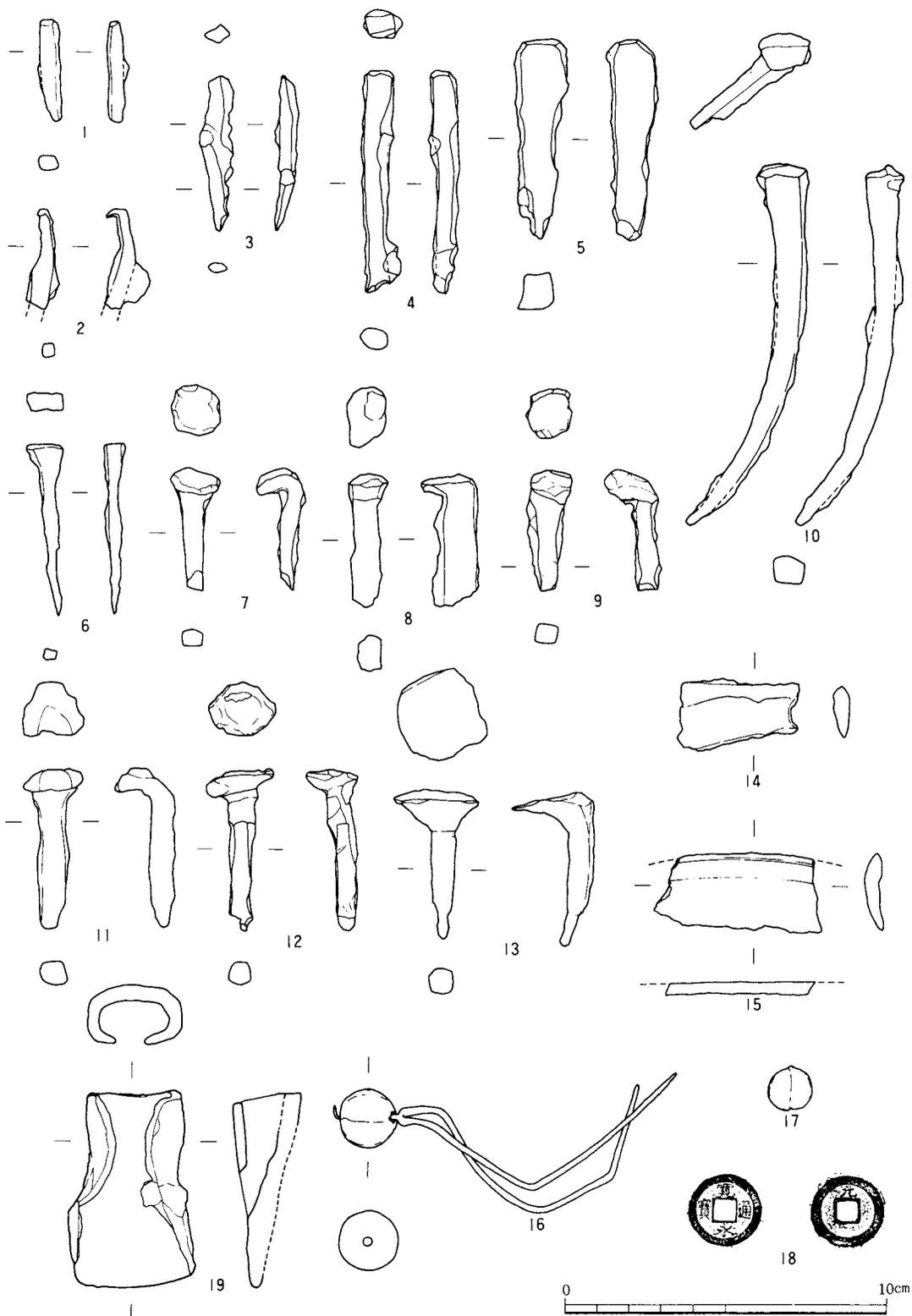
### (5) 金属製品

本遺跡から出土した金属関係の遺物は鉄滓も含めて別表に計測値を記してあるが、実測したものは比較的形の分かる19点だけである。

#### 遺物(第105図 図版78、79)

1～13は鉄釘である。7～13は頭部をL字状に折り曲げたもの。15は縁が緩い弧を描く。蓋状のものであろうか。16は銅製の簪であり、頭部にはガラス質の玉を持つ。17は土壘近くから出土した鉛製の鉄砲玉である。中央部には1条の筋がはいり、半円形の鑄型を利用した型作りであることが分かる。18も土壘近くのM7区から出土した寛永通宝である。背面に「元」の文字が見えるところから1741年～1745年に大坂高津で鑄造された新寛永と思われる。(藤田1983)19は24号溝出土の鉄斧である。袋状の柄を持ち全長6.1cm、刃幅3.7cm、袋部径3.0cmを測る。重量は41.5gである。

本遺跡で取り上げた金属遺物は総数で125点にのぼる。その内で最も数が多いのは鉄釘であり、続いて鉄滓である。鉄釘の出土地点はA～C18～19区に集中しており、また鉄滓の出土は8、9号住居址上面を含め土壘以北に多い傾向がある。(藤田)



第105图 包含層(1~18)、24号溝(19)出土金属製品実測図 (S=1/2)

## IV ま と め

### 旧石器時代

本遺跡から出土した6点の資料について、その出土地点を検討すると、B12区が2点、C13区が1点、M5区が1点、出土地点不明2点ということになり、概ね土塁の東北コーナー付近に分布の中心をもつと考えてよさそうである。(第4図参照。なおM5区はC11区と範囲としては同一)。ちょうど尾根上の平坦面が東側斜面へと移行する変換点にあたる場所で、標高は39m~40mを測る。しかし、この一帯は弥生時代後期及び奈良・平安時代を中心とする時期に集落その他が営まれ、しかも中世末期には末森城の一画として砦が築造されているようであり、元来の土層の堆積状況が良好に保たれているわけではない。ゆえに石器にしても原包蔵位置と調査時の検出地点が異なる可能性が高いが、後者に著しいばらつきが認められるわけではなく、大体においては後者の示す広がり周辺の周辺に該期の人間集団の場を求めて大過ないであろう。ここには単一かせいぜい2~3箇所の石器集中分布地点(ブロック)が存在したと想像される。因みに縄文時代前期初頭の佐波式土器及びそれに伴う石器を出土した地点は調査区北端の第1次調査地区中にほぼ限られるようであり、その間には約100mの距離を有する。蛇足ながら佐波式期の立地は恐らく当時の汀線と密接な関連をもつとかがえられ、生業基盤の異なる該期とは一概に論ずることができないように思われる。

さて、旧石器時代について周辺の遺跡をみると、本遺跡以外にも宿東山遺跡(1985・86県埋文センター調査)、竹生野遺跡(越坂1983)、御館遺跡(秋田1964)、免田一本松遺跡(1986県埋文センター調査)等が知られ、押水町は県下でも有数の密度をもって遺跡が分布していることが伺われる。これらの遺跡はいずれも広義の宝達山麓に位置するということができようが、さらに細くみれば末森山麓の前山帯をなす低丘陵周辺と前田川・大海川の臨む低台地周辺といった具合に南北二つのグループとして把握されるものである。このうち本遺跡及び宿東山・竹生野が前者に属し、とりわけ南に尾根続きである宿東山遺跡は本遺跡と立地上密接な関連性を有するものと考えられる。宿東山遺跡ではD地区と呼ばれる地点を中心に小形のナイフ形石器を主体とする石器群が発見されており、時期としては恐らく本遺跡に先行する可能性が高いものの、ともに末森山塊と前山帯をなす低丘陵(海成段丘)とによって挟まれるようにして形成された「ナカダ」と呼ばれる谷地形の谷奥部の湧水を意識しての立地と判断されようか。人間集団だけではなく狩猟の対象となる動物たちにとっても格好の水場であったのだろう。

さて、本遺跡出土の資料について少し考えてみたい。前述の通りその出土状況も良好とはいえず、加えて点数も少ない。したがって資料操作のしようがないというのが実状だが、これまで論ぜられる機会の余り無かった石川県下の資料ということで、敢えてここに若干の考察を試みたい。遺跡内における出土地点のあり方、及び凝灰岩系の石材によってほぼ占められている点から推して、一応6点がすべて同一の時期に属するという前提に立脚することとする。そうした場合にこれらからその特徴として指摘できる事柄は、縦長剥片離技法がはっきりとして形で看取され

ないという点である。4の石核調整剥片としたものは縦長の形状を示してはいるものの、背面側に残る剥離痕の状況から察して連続的な縦長剥片の生産とは何らつながらない。また2についても縦長の大型剥片を素材として用いてはいるが、そこで行われた剥片剥離のあり方というのは部厚い剥片からなる石核素材の縁辺部からの求心的剥離というものであって、まさに不定形剥片の剥離に対応した方法として評価されよう。なお、このような石核の場合は素材の背面側を打面とした連続横剥ぎ技術も可能であったと思われるが、本遺跡においてはその存在を検証するに至らなかった。その他の資料4点についてはいずれも幅が長さを上回るという意味において横長剥片である。1のナイフ形石器については、背面右側に頭部調整とも考えられる剥離痕を有するものの、この素材が連続的な横剥ぎ技法によって生産されたか否かは判断材料に欠ける。また、4・5の同一個体資料はともに背面下部に節理面がみられ、これら剥片を生産した石核の底部がその節理面であったと仮定すると、これらは平口哲夫氏による横長剥片の分類(平口1983)のⅡ類、すなわち「亜翼状剥片」ということになるだろうが、しかしこの箇所については先述のように折損部と考えた方が妥当であって、したがってⅣ類である可能性が高い。残りの6の横長剥片については底面をもたず明らかにⅣ類である。以上の点から考えて本遺跡で遺物として検出された資料にみる限りにおいて、横長剥片剥離技法の卓越という現象が一応は指摘できるが、しかしそれは翼状剥片を生産するためのいわゆる瀬戸内技法や或いは平口氏が福井県三国町西下向遺跡の調査によって提唱された「亜翼状剥片」を生産するための「三国技法」とも異なるものである。このことは本遺跡において、宿東山遺跡(本遺跡よりも時期的に先行か)と共通した凝灰岩系の石材が使われるという、いわば石材選択における在地色といった面とも無関係ではあるまい。国府系といわれる石器群が北陸において安山岩系の石材を多用する事実とは対照的である。

ここで本遺跡に石器群の系統性・編年的位置づけといった問題について若干言及してみたい。もちろん、こうした問題は数量的な処理を必要とするものであって、本遺跡ではそれに耐え得るだけの内容を持たない貧弱な資料からの根拠に乏しい推測といった域を出ないであろうが、あくまでも諸氏の御批判・御叱正を乞うてのこととしてお許し願いたい。まず剥片剥離技法についてであるが、先程は縦長剥片を生産する技法がはっきりとした形では認められずに横長剥片が多数を占めると指摘したが、しかしながらそれは必ずしも連続的かつ組織的な横剥ぎ技術の存在とは直接的につながるとはいえない。とはいえ4・5の同一個体資料に関しては、ともに明瞭な打面調整によって山なりの打面を作り出し、作業面である石核の正面から90度の打面転移を絡めつつ概ね横長の形状の剥片を剥取するというものであって、北陸地方の旧石器時代の古い段階には横剥ぎ技法の伝統が存在しなかったという前提に立つならば、やはり横長剥片剥離技法が著しく発達をみせた近畿・東部瀬戸内地方から何らかの影響を受けて成立し得る技法として評価されようか。もちろん、石材選択の傾向や背面下部にポジティブな底面を持たない点を勘案すれば、そうした地域からのきわめて間接的な影響を看取し得るものの、かなり在地色の濃い石器群として把握した方がよいと思われる。

そして、本遺跡の石器群の性格を考える際の指標ともいうべきナイフ形石器の形態についてであるが、前述の通り横長剥片を素材とし、それを断ち切るようにしてブランディングが施されて

いる。またバルブについても若干その上端が除去されているとみた方がよさそうであり、基部を挟む左右両辺の下半に二次加工を有することになる。このようないわゆる「斜め整形」によって素材の形状を大きく修正することを特徴とするナイフ形石器は、二側縁加工のナイフ形石器ともども北陸地方では「富山県第Ⅱ期C」（橋本1975）としてとらえられてきた。この富山県下で採用されている分類のカテゴリーにはいくつかの系統性が含まれるかもしれないが、本遺跡例に限って言えば広義の「茂呂系」と考えて差し支えないと思われる。また、その年代性については平口哲夫氏がいみじくも指摘するように、「斜め整形や両側整形のナイフというものは、武蔵野第Ⅰc期にも第Ⅱb期にも主体的に認められ、決して単期に限定できるものではない。」（平口1983）であろうが、ただ本遺跡例については、加工も細くて精緻である部類に属し、しかも一担ブランディングが行われた後に基部を尖基とする修正のための加工が施されているなど、どちらかといえば後出的な、すなわち南関東では「砂川期」とも称される武蔵野第Ⅱb期のあたりに含まれる蓋然性の方がより高いのではなかろうか。

いずれにせよ北陸地方では本遺跡資料と直接的に対比可能で類例となるべき石器群は今のところほとんど見当たらないようである。とはいえ敢えて例を挙げるとすれば、実見したわけではないが富山県小矢部市安養寺遺跡の2群（瀬戸内系）とされる石器群中のナイフ形石器1点（西井1966）が本遺跡のそれと素材の形状及び加工部位において共通するのではないかという気がする。また本遺跡で特徴的に認められた長さとの比が1:1に近いような寸づまりの幅広剥片を剥取する技法としては、富山県大沢野町野沢遺跡A地点の「剥片剥離技法B」（鈴木1982）が近似する例として考えられようか。北陸3県においては、これまで金谷原系・東山系といわれる石刃技法、国府系とされる横剥ぎ技法、また北陸の地域性を代表するともいべき小形ナイフ形石器に伴う剥離技術に関しては多かれ少なか注意が払われてきたといえる。しかし、それ以外のものについては、1遺跡で主体的な位置を占める例がわずかであり、したがってほとんど顧慮されないか或いは縄文時代の石器として片付けられる場合もあったであろう。本遺跡でもナイフ形石器を除いては、いわば旧石器時代らしくない、すなわち石刃でも翼状剥片に類するものでもなくましてや小形不定形剥片でもない剥片によって占められており、そのことが時代の認定も含めて問題を難しくしているように思われる。

ややまとまらないようであるが、今後は石川県下においても丘陵や台地上に残された旧石器時代人の生活の場が、それに適した方法によって調査され、その積み重ねによって県下の旧石器時代の文化の実相の解明が幾らかでも進むことを祈念したい。そのためには事前の踏査・試掘段階における対応が特に大切となろう。

最後に本稿を記すにあたっては平口哲夫・樫田誠・本田秀生の各氏から多くの教示を得た。必ずしもそれを活用しきれなかったのは、偏に筆者の責任である。なお、石質同定に関しては金沢大学教育学部の藤則雄教授にお願いした。ここに皆様に感謝申し上げる次第である。（松山）

## 弥生時代～古墳時代

今回の土器分類作業の対象にした遺物は堅穴住居址、土坑、溝、ピット、包含層からの出土遺物であり、実測総点数は429点を数える。(土器観察表1～15表参照)器種は甕形土器、壺形土器、高坏形土器、器台形土器、蓋形土器、鉢形土器、小型土器で構成される。

### (1) 甕形土器

#### A<sub>1</sub>類

口縁帯外面に擬凹線を施す有段口縁の甕形土器。口縁部内面に比較的明瞭な段を持ち、端部は丸くおさめる。またその他口縁部内面の段が不明瞭なもの、口縁端部を先細り気味に仕上げるものなどが認められる。

#### A<sub>2</sub>類

無文の有段口縁をもつ甕形土器。口縁帯が短く端部を丸くおさめるもの、また外反して伸びる口縁に先細りの端部を持つものなどA<sub>1</sub>類と同様に口縁部の形態差で細分が可能である。

#### B類

鋭く水平に屈曲する頸部と内湾気味に立ち上がる短い口縁帯を持つ。体部内面にはヘラケズリ調整が施される。

#### C類

「く」の字口縁の端部に粘土紐を付加して有段状に仕上げたもの。口縁帯は狭く、擬凹線を持つC<sub>1</sub>類と無文のC<sub>2</sub>類に細分できる。

#### D類

口縁部外面全体に幅広く粘土(板)を貼付し、口縁を肥厚させたもの。

#### E類

口縁部下端に稜を持つ甕形土器。口縁部は外反気味に伸び口縁端部は丸くおさめる。

#### F類

「く」の字口縁を持つ甕形土器を一括した。完形品が少ないため主に口縁部の形態差により6類に細分した。

#### F<sub>1</sub>類

口縁端部に面を持たないもの。細分可能であるが、口縁を外反させ端部を丸くおさめる例が多い。

#### F<sub>2</sub>類

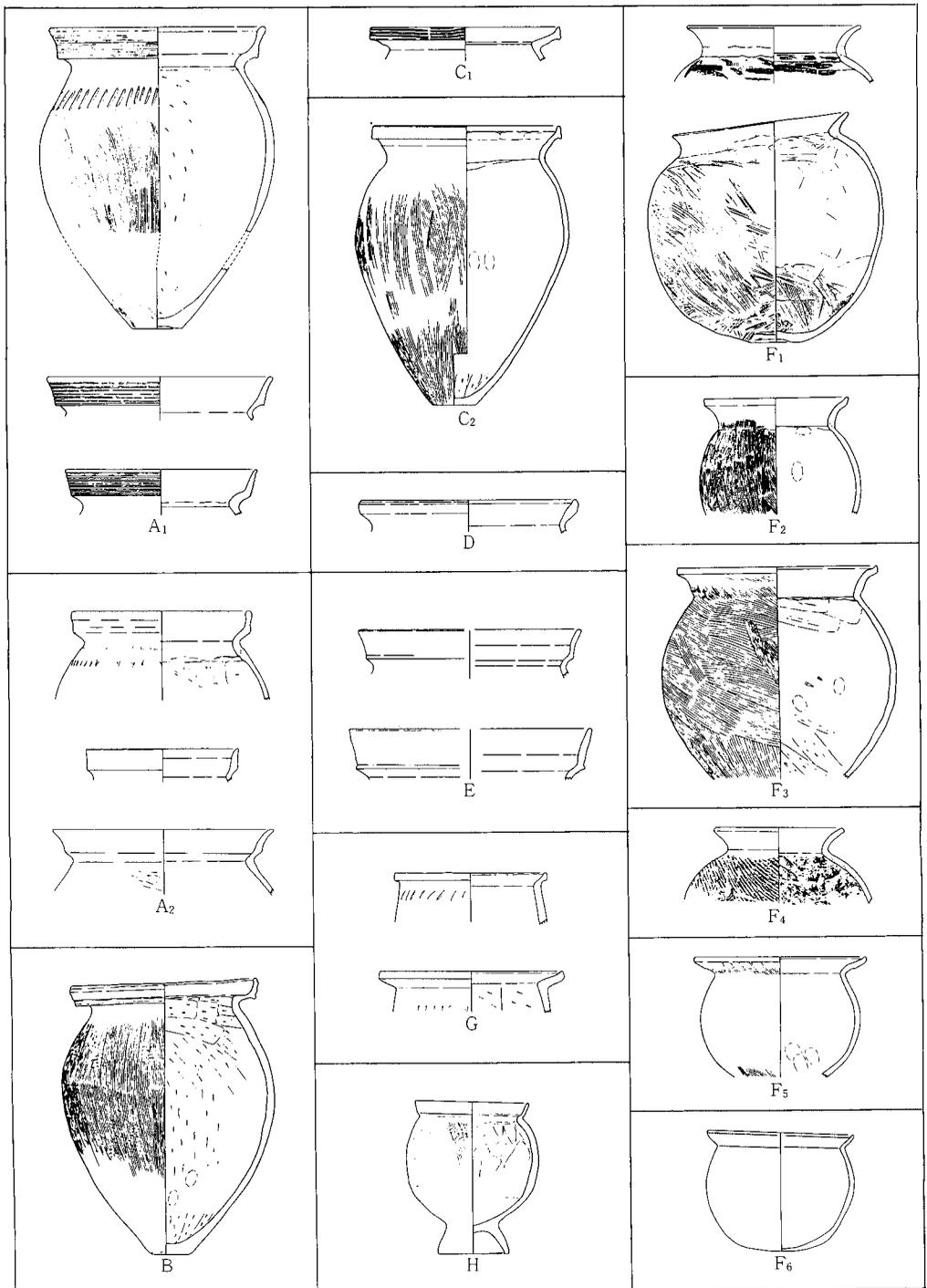
外反する口縁を持ち、口縁端部はつまみ上げ気味にヨコナデする。

#### F<sub>3</sub>類

F<sub>2</sub>類に似るが、口縁端部の面取りをより意識しており端面を内傾気味に仕上げている。

#### F<sub>4</sub>類

口縁端部をつまみ上げずに、強いヨコナデによって端面を作り出す。



第106図 甕形土器分類一覽図

F<sub>5</sub>類

屈曲の強い頸部を持ち、口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデして面を作る。胴部最大径は口径を越えず丸底に近い底部を持つと思われる。

## F<sub>6</sub>類

緩く内湾して開く短い口縁に丸くおさめる口縁端部を持つ。体部は球状に近く底部は平丸底に仕上げる。

## G類

「く」の字口縁とつまみ上げ気味にヨコナデする口縁端部を持ち、体部は下方向に直線的に伸びる。肩部付近には斜行列点文が施される。

## H類

有段状の短い口縁帯を持つ台付甕。体部は球状を呈し、脚台部は内湾気味に開く。

## (2) 壺形土器

### A<sub>1</sub>類

大型壺形土器を一括した。全形の分かる資料は出土していない。

### A<sub>2</sub>類

擬凹線を施した有段口縁を持ち、直立気味の頸部を持つ。

### A類

口縁形態は明らかではないが、頸部下端に刻み目を持った突帯を貼付する。

### B類

いわゆる長頸壺。口頸部と体部の形態により5類に細分した。

### B<sub>1</sub>類

外反して開く口頸部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。胴部の張りは弱い。

### B<sub>2</sub>類

口頸部は外反し、口縁端部をつまみ上げ気味にヨコナデして面を作る。また外方につまみ上げるだけで面を持たないものもある。

### B<sub>3</sub>類

B<sub>2</sub>類に似るが、口縁端部を強いヨコナデによって肥厚させ面を作る。

### B<sub>4</sub>類

ほぼ直線的に開く短めの口頸部と張りの強い胴部を持つ。口縁端部は丸くおさめる。

### B<sub>5</sub>類

他のB類に較べて短い口頸部を持つ。頸部は直立気味に伸びるものと、外傾気味に伸びるものがあるが、典型的な長頸壺とは異なるため別の分類が必要かもしれない。

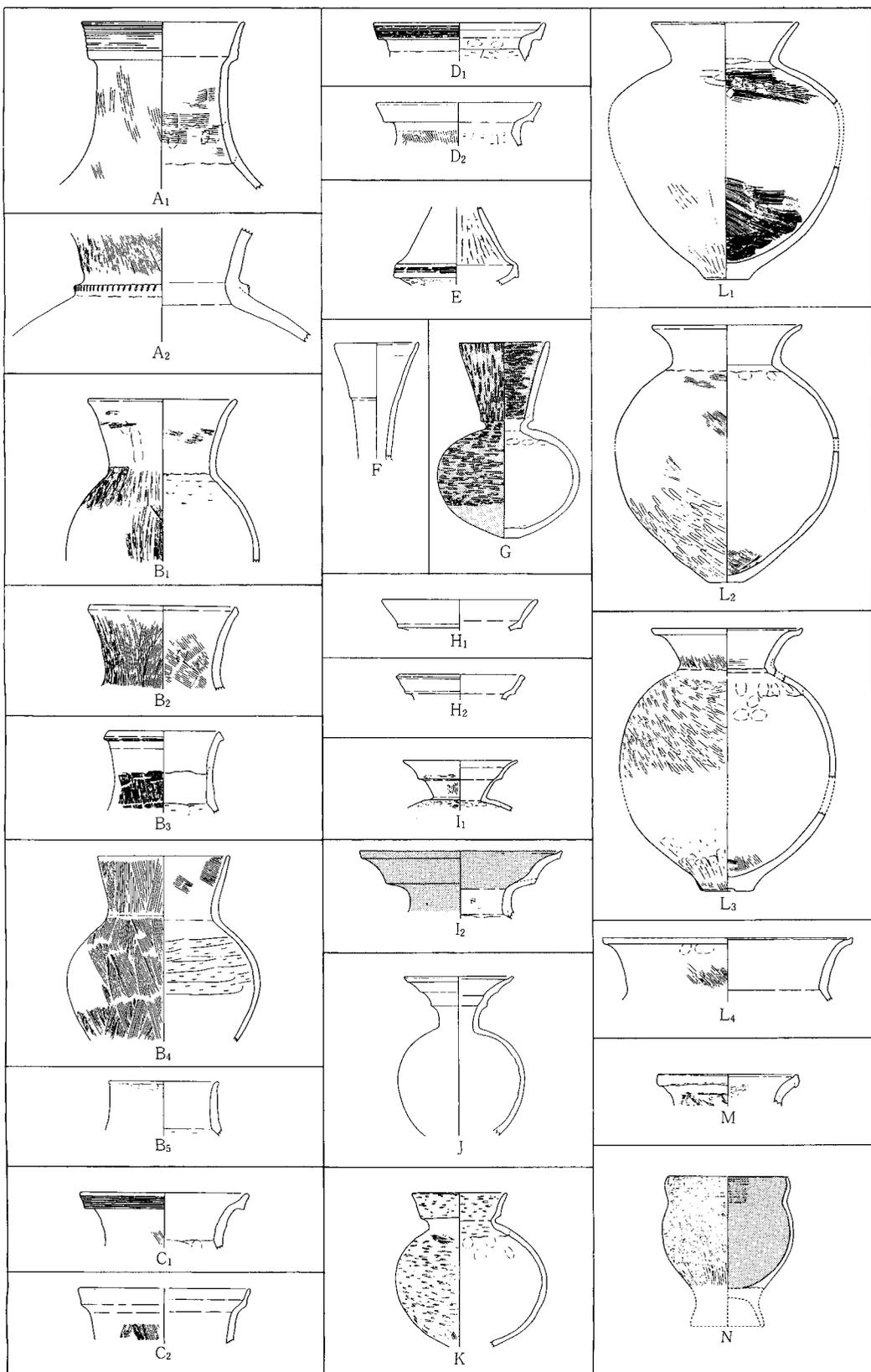
### C類

頸部の伸びる有段口縁壺。口縁部の擬凹線の有無によりC<sub>1</sub>類、C<sub>2</sub>類に細分される。

### D類

幅狭の口縁帯を持つ有段口縁壺で頸部内面は2段に屈曲する。やはり擬凹線の有無によりD<sub>1</sub>類、D<sub>2</sub>類に細分される。

### E類



第107図 壺形土器分類一覽図

いわゆる台付装飾壺。胴部に貼付された突帯には弱い擬凹線を巡らす。他胴部の形態に多少差異のある資料も出土している。

#### F類

口縁部下端に不明瞭な段を持つ細頸有段口縁壺。内面での屈曲はほとんど認められず口縁部と頸部の長さはほぼ等しい。

#### G類

口縁部下端に明瞭な段を持つ細口壺。胴部はやや扁平な球状を呈する。底部は狭小で自立できない。

#### H類

口縁部下端に稜を持つ壺形土器。

#### H<sub>1</sub>類

外反気味の口縁を持ち、丸くおさめる口縁端部内面には、ヨコナデによる弱い面取りが認められる。

#### H<sub>2</sub>類

幅の狭い口縁帯を持ち、口縁端部はヨコナデにより把厚し面を作る。

#### I<sub>1</sub>類

V字状に外傾する頸部に、外反して開く有段口縁が続く。器壁は全体に薄い。

#### I<sub>2</sub>類

直立気味の頸部を持つ有段口縁壺。口縁部は外反し、端部をつまみ上げ気味にヨコナデして面を作る。器壁はI<sub>1</sub>類に較べ厚い。

#### J類

口縁部が2段に屈曲する有段口縁壺。直立気味に伸びる頸部と球状の体部を持つ。

#### K類

外反気味に開く有段口縁を持つ。体部は丸味をおびる。

#### L類

比較的大型の「く」の字口縁壺を一括した。口縁部と体部の形態により4類に細分できる。

#### L<sub>1</sub>類

ほぼ直線的に開く口縁部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。肩の張る器形で胴部最大径を上位に持つと思われる。

#### L<sub>2</sub>類

外反して開く口縁に弱いヨコナデを施した端部を持つ。胴部最大径は中位よりやや上方に求められ、底部は他のL類に較べ薄い。

#### L<sub>3</sub>類

外反気味に開く口縁は端部近くで緩く屈曲し、つまみ上げによるヨコナデ調整を施した口縁端部へと続く。胴部最大径は中位に求められよう。また口縁形態の似る小型品も出土している。

#### L<sub>4</sub>類

口縁形態はL<sub>3</sub>類に似るが、頸部径が他のL類に較べ大きい。全形の分かる資料は出土していない。

M類

口縁端部を粘土紐の貼付により肥厚させたもの。

N類

内湾して立ち上がる口縁部を持つ台付の広口壺。胎土、焼成は高坏形土器D類に似る。

(3) 高坏形土器

A類

坏部途中で屈曲した口縁部は外反して上方に開き、端部で肥厚する面を持つ。脚部を含めた全形の分かる資料は出土していない。

B類

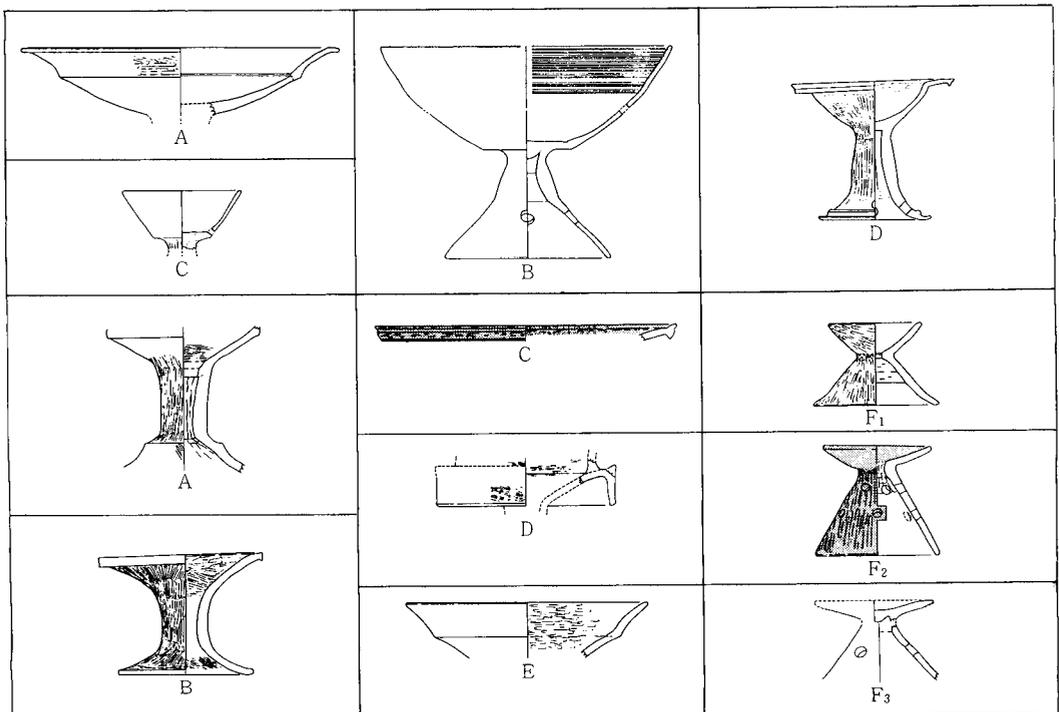
緩く内湾しながら開く坏部とラップ状に開く胴部を持つ。脚部には内湾気味のものや外反気味のものがある。

C類

いわゆる小型高坏。坏部は逆台形を呈し、坏部下端には段を持つ。

D類

内湾しながら開く坏部を持ち、水平に伸びる口縁の端部と脚部下方には断面三角形の突帯を貼付する。胎土、焼成は壺形土器N類に似る。



第108図 高坏形土器、器台形土器分類一覧図

#### (4) 器台形土器

##### A類

受部、脚部ともに有段に仕上げる。また口縁帯や脚台部に擬凹線を施すものもある。

##### B類

外反して伸びる受部と、途中で緩やかに屈曲して開く脚部を持つ。鉢形・小型土器D<sub>1</sub>類と共伴する。

##### C類

受部の口縁端部資料であるが、粘土紐を貼付させて肥厚する端面を作り出している。内外面には赤彩およびヘラミガキ調整が施される。

##### D類

いわゆる装飾器台。脚部から続く体底部は上方に伸び、垂下帯はほぼ直線的に真下に向かって貼付されている。通常有段脚を持つ。

##### E類

有段状の受部を持ち、口縁帯は外反して上方に伸びる。脚部はラッパ状に開くと思われる。

##### F類

いわゆる小型器台。受部と脚部の形態により3類に細分した。

##### F<sub>1</sub>類

F類の中では最も深い受部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。脚部は外反気味にラッパ状に開く。

##### F<sub>2</sub>類

緩く内湾する浅い受部を持ち、口縁端部には弱い面取りが見られる。脚部は内湾気味に開き、外面にはヘラミガキ調整が施される。

##### F<sub>3</sub>類

受部は直線的に開き、全体的に浅い皿状を呈する。脚部はラッパ状と思われ、受部から脚部へ抜ける孔を持たない。

#### (5) 蓋形土器

蓋形土器は体部に形態により大別し、体部が外反傾向にあるものをA類、内湾傾向にあるものをB類とした。

##### A<sub>1</sub>類

鈕部中央部分をU字形に凹ませたもの。鈕部先端部が内傾して面を持つもの、先細りで外方に伸びるもの、また丸く短めに仕上げるものなどが確認されているが、全形の分かる資料は出土していない。

##### A<sub>2</sub>類

A<sub>1</sub>類に較べて鈕部の凹みが目立たず、上面はほぼ直線的に仕上げられている。器壁は全体に厚い印象を受ける。

B<sub>1</sub>類

鈕部に凹みを持ち、体部を内湾させるもの。用途は不明であるが鈕部下方に一对の孔を穿つものも出土している。

B<sub>2</sub>類

上面を直線的に仕上げるもので、比較的低い鈕部高を持つ。体部が半円状で器高の高くなるものと、笠状に裾部が広がるものが確認されている。

(6) 鉢形・小型土器

鉢形土器と小型土器を一括して分類した。小型土器の中には鉢形、壺形、手捏ね土器などが含まれる。

A類

口径23cm前後の無文有段口縁を持つ鉢形土器。口縁帯の形状で短く直線的に仕上げるA<sub>1</sub>類、外反して伸びるA<sub>2</sub>類、緩く内湾するA<sub>3</sub>類に細分される。

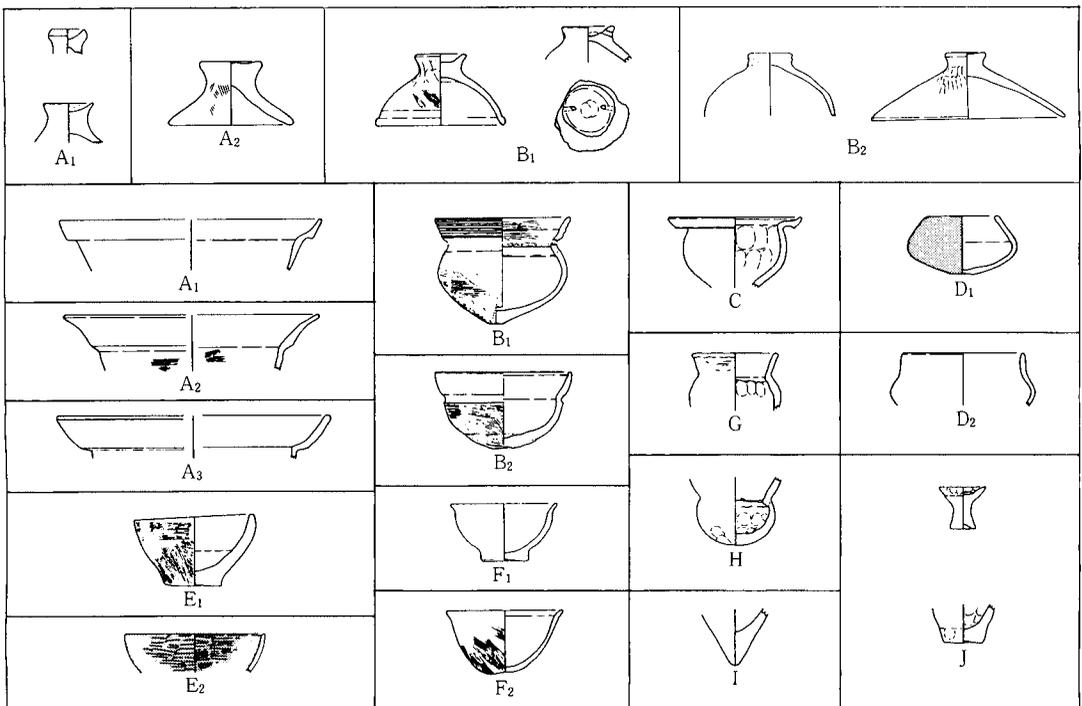
B類

有段口縁と狭小な底部を持つ小型鉢形土器。外反気味の口縁に擬凹線を施すB<sub>1</sub>類、無文で内湾する口縁を持つB<sub>2</sub>類がある。

C類

外傾する幅狭の口縁帯を持つ小型鉢形土器。作りは全体にシャープである。

D<sub>1</sub>類



第109図 蓋形土器、鉢形・小型土器分類一覧図

胴部中央に最大径を置く算盤玉状の体部を持つ。器壁は全体に薄く、底部が僅かに残る。外面には赤彩痕が認められ、器台形土器B類と共伴する。

#### D<sub>2</sub>類

全形を窺える資料ではないが、体部は丸く内湾し口縁部で緩く外反する。

#### E<sub>1</sub>類

体部から口縁にかけて緩く内湾する器形を持ち、口縁端部には明瞭な面を持たない。器壁は全体に厚く底部は平底に仕上げる。

#### E<sub>2</sub>類

碗形の小型土器。口縁端部内面に弱い面取りを行い、内外面には横方向のヘラミガキが施されている。

#### F類

口縁部分を緩く外反させ、端部は丸くおさめる。底部は平底（F<sub>1</sub>類）と丸底（F<sub>2</sub>類）の2種類が認められる。

#### G類

口縁が「く」の字状を呈する小型壺形土器。

#### H類

いわゆる小型丸底壺。器壁は厚く、体部内外面に指押さえ痕が見られる。

#### I類

全形を知ることはできないが、角坏状を呈する尖底の小型土器と思われる。

#### J類

手捏ね土器として一括した。全体に指押さえ痕の残る高坏形土器などはその相形を想定できる好資料であろう。 (藤田)

この時期の集落は、前面に低湿地帯を臨む丘陵上や砂丘上に立地していることが多い。鉄製品普及による農業生産の向上は必然的に人口増加を来し、分村化の傾向が一層進んだものとされる。(谷内尾1978)本遺跡もその分村化した一集落かと思われる。昭和55年に調査が実施された宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡の発掘成果(米沢1980)からいわゆる高地性集落といわれる集落の存在が確認され、この時期は耕地の占有や既に普及している鉄製品の所有をめぐる集団間や対外集団の勢力進出に伴う緊張関係が存在したと推定されている。本遺跡周辺でこの種の集落が存在するならば、本遺跡の南東方向(直線距離で約750m)に聳え眺望が利き、末森城跡の存在する末森山(海拔133.8m)に同様な性格を有する集落が存在する可能性があろう。

出土した遺物についてみると、大きく新旧二時期に分けられる。新しい時期の土器群は在地系土器の解体段階のものと捉えており、他地域の影響と在地のものが融合し、独自のものを作り出している。それぞれ小地域単位で異なる土器圏を作り、複雑な様相を呈していたのであろう。特に3号住居址出土の土器群については東海地方の色彩が強く反映されているものとみており、当時の本遺跡をめぐる政治的、社会的動向を示すものと考えている。(米沢)

## 奈良時代～平安時代

奈良時代～平安時代の本遺跡における性格と時期の概略を記述して一応のまとめとしたい。

本遺跡は弥生時代末から古墳時代前期の集落が営まれて以来、長い空白期間を経て、奈良時代後半頃に再び当地に集落が営まれるようになる。遺構として確認できたものは、カマドを持つ13号住居址、1～3号掘立柱建物、7、24号土坑、小鍛冶跡と推定される8、9号住居址上面遺構と数少ない。これは調査区が尾根上台地の東側にあたり、当期の遺跡の中心から外れるためであり、遺構は西側の調査区外へ広がるものと推定される。

13号住居址の出土土器は、若干の古相も窺えるが、吉岡康暢氏の編年案（吉岡1983）では、奈良時代後半のⅡ期箱宮5号窯期に比定される。1号掘立柱建物は13号住居に継続して建てられており、その他の掘立柱建物や7号土坑、小鍛冶跡も同時期並行か若干下たる時期が推定される。また北側調査区の出土須恵器は、これらの遺構との関連性を示すものが多くを占めており、釘等の鉄製品の出土も掘立柱建物に使用されていたものと推定される。

一方、南側の斜面を中心とした調査区からは平安時代中期前後の須恵器や土師器が、廃棄された状態で多量に出土した。南側調査区は北側尾根上台地から南方に緩やかに傾斜して下たる尾根で、先端付近に北側と東側の二方を溝に画された小テラス（B18・19区）が形成されている。テラス内には、掘立柱建物が存在した可能性を示す柱穴が数個検出された。大半の土器はこの小テラスを挟んで東西の斜面から出土しており、須恵器が約3割、土師器5.5割強、内黒土器1.5割弱で土器器と内黒土器で約2/3以上を占める量比である。また小テラス内から、破碎された状態になって灰釉陶器の模倣と思われる多口瓶が2個体（第96図55、56）、黒笹90号窯期に比定される（檜崎1983）灰釉の手付瓶（第96図65）がほぼ完形で出土し、近辺から折戸53号窯期に比定される（檜崎1983）灰釉の壺（第96図63）が出土している。

南側調査区の概要を記したが、当期における特徴は次のような点があげられる。

1. 丘陵の一端の小テラスに限定された営み、活動と考えられる。
2. 土器の量に対して、遺構が少ない。
3. 多口瓶や灰釉陶器等の特殊器形が多い。
4. 出土土器に完形品が多く含まれ、その中の須恵器、土師器の坏や壺に灯芯痕、タール状の付着物が付くものが多い。
5. 大型品が僅少である。

以上5つの点から、通常の集落とは異なり、単なる生活の場ではないことが想定され、丘陵の一端に小規模な特殊施設、たとえば宗教的施設が存在し、多量の土器や特殊な土器も、これに伴う行為によるものと考えられる。

本遺跡における奈良時代～平安時代の性格などについて記したが、筆者の力量不足で土器の詳細について触れることができなかった。今後の資料増加を待って検討を加えて行きたい次第である。

（宮下）

## 末森城跡とテラヤシキ

昭和57、58年度に発掘調査が行われた宿向山遺跡より土塁に囲まれた部分が発掘され、末森城跡との関連性について注目されたが、城郭とのつながりを示す出土資料に恵まれず、その大半が推測となるものの、両者の係わりについて簡単に整理してみたい。

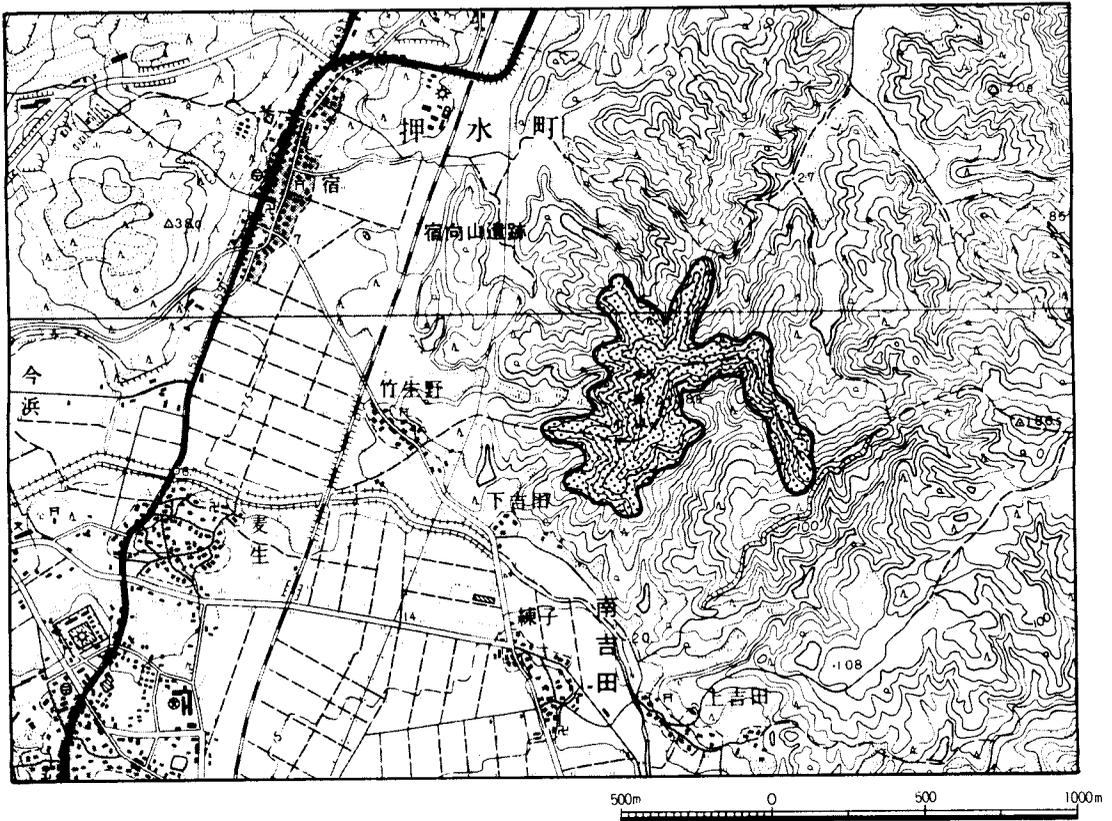
末森城跡は、その要害としての発生時期は未だ不明である。文献等に残る末森山の記録は、天文22年12月(1553年)、畠山守護代の一人遊佐氏「能州乱入」を初めとして、天正4年10月(1576年)の上杉謙信による「能登攻め」、天正12年(1584年)の前田、佐々両軍による「末森合戦」を経て、江戸幕府による一国一城令により廃城となるまでの多くの記録が存在する。しかし実際には後年記されたものが多くそのまま利用しにくい状況〈勝者有利〉にあり、今後検討されるべきものと考えられる。

末森城の総構については、末森城跡調査団による分布調査、発掘調査等によりおおよその城の縄張りが示されたに過ぎないが、その内容については大きく内縄張りとは外縄張りとは分けられよう。

まず城郭の内縄張りであるが本丸・二ノ丸(近世にはいつから付けられた名称)等を中心に、尾根づたいに郭が連なって形成されており、この連郭を取り巻く様にして腰曲輪を同心円状に二重に巡らせている。この腰曲輪から谷側に突き出す形でまた別の曲輪があり、端に切り通し、掘り切りが設けられている。そしてこの掘り切り後は尾根は自然地形を呈しており、内縄張りもここまでと考えられる。

外縄張りについては現在調査中である。分布調査等では、小字名(大手門、搦手長坂、縄手、堀、ほりぬき坂、長御手、長割、城丸、若宮、城の下、侍屋敷、古屋敷、寺屋敷、伊予屋敷等)の広がりその他、城郭からの尾根端部近くに掘り切り、平坦面の拡がり確認されている。また要害の立場から見ると城郭南側に流れる相見川も水堀として、縄張りの一部に考えたい。そしてこの内縄張り、外縄張り(未調査区が多い)をもって山城の総構を成すわけであるが、山を降りた平地での居住域あるいは陣地、戦闘地を含む史跡としての範囲については、調査は手つかずの状態にある。なお末森山からの出土遺物については、調査箇所が極く一部であることから、遺物の年代イコール城郭の年代と断定することはできないが、珠洲焼、越前焼、土師質土器が主に出土しており、おおよそ15世紀代の年代が与えられよう。

以上のことを踏まえた上で宿向山遺跡との関連性を考えてみたい。宿向山遺跡は小字名を寺屋敷(テラヤシキ)と称し、かつて寺院が存在したと伝えられている場所であるが建立、廃寺時期については不明である。現在地表面で目視できる遺構については、中世期では寺社においても周囲に土塁を巡らし、堀を設けることを常としていたことから、末森城と同時期に存在した寺院関係の構築物とも考えられるが、寺屋敷より直線で約200m西方の鳥毛社跡に関する記録以外、寺社についての詳細な記録は現在見い出せていない。



第110図 末森城跡内縄張り範囲予想図  
(スクリーントーン部分)

(S=1/25,000)

寺屋敷を末森城の関連遺構として見た場合、地理的、軍事的位置はどうであろうか。周囲を湿地帯に囲まれ、自然に切り立った斜面を有する当該区は城の大手、搦手のほぼ中間に位置し、尾根づたいに本丸下、腰曲輪に直接通ずる道を持つ。加えて本丸からは死角となる邑知地溝帯の南端も寺屋敷からは見通すことができる。また寺社地であっても末森城の出城的な意味で利用されていた可能性も考えられ、城の攻防上何らかの関連遺構の存在は十分に予想できる。

その他天正12年の末森城攻防戦に関しては幕末近くに描かれた数枚の絵図(石川県立図書館蔵)が現存しているが、その1枚を見ると佐々方、前田方の布陣が記されており、その中で本丸下にせまる佐々方の陣の背後西側に隣接して前田方の陣の記載が見られる。断定はできないが、現地の状況から考えると末森山の西側丘陵地にはいった佐々軍と、その後方の寺屋敷にはいった前田軍との見方も可能である。

以上現時点での調査内容から末森城と宿向山遺跡(テラヤシキ)の関連性を推察してみたが、末森城の調査は現在のところ基礎資料作製の段階であり、不明、不詳の点が多々あることを断っておきたい。そのため今後の調査によって本編の内容が変化する可能性もあるが、外縄張りの範囲をより明確にすることで、テラヤシキの性格も一層明らかになるものと考えている。

(村井)

遺物一覧表

遺物一覧表は1～30を土器観察表、31を石器一覧表、32を金属器、鉄滓一覧表として作成した。1～15表は胎土・焼成覧を4分してあるが、1番目には砂粒の大きさ(単位mm)を記した。粒の形状は角形と見てよい。2番目には海綿骨片の含有量を1～5の番号で示したが主に裸眼での作業である。1・海綿を確認できない。2・1、2片ほどで極めて少ない。3・少ない。4・海綿を容易に確認できる。5・無数にある。と分けたが対象物の大きさは考慮に入れず同じ基準で観察した。3番目には主にシャーモット(土器破碎粒)の有無を記した。大きさは1mm前後のものから10mm近くのものまで種々認められる。4番目には焼成具合を記した。

I 土器観察表

図番号	器種	出土地点	法	量 (cm)	胎土・焼成	色調	外内	調整	外内	備考
-----	----	------	---	--------	-------	----	----	----	----	----

第7図 1号住居址

1	甕A <sub>2</sub>	下層	口径13.0	1~2	1	並	淡黄褐色	ナデ		
2	甕A <sub>2</sub>	覆土	口径15.0	1~2	5	並	褐色 淡黄褐色	ナデ ナデ、ケズリ		外面煤付着
3	壺B <sub>3</sub>	覆土	口径12.0	1~2	5	シャーモット	並	灰褐色 褐色	ナデ、ハケ ハケ、ナデ、ケズリ	
4	高坏A	床面	口径28.0	1~2少	5	並	淡褐色	ミガキ 摩耗		
5	脚部	覆土	脚部径15.0	1~2少	5	良	淡橙褐色	ミガキ ハケ		

第8図 1号土坑

1	甕A <sub>2</sub>	中層	口径17.0	1~2	1	並	淡褐色	ナデ ナデ、ケズリ		
2	甕A <sub>1</sub>	中層	口径26.0	1~2	1	並	淡橙褐色	擬凹線 摩耗		
3	壺L <sub>1</sub>	中層	口径15.4、底径4.8	1~2少	4	シャーモット	並	淡褐色 淡灰褐色	ナデ、ミガキ ハケ	
4	壺I <sub>1</sub>	中層	口径12.0	極少	3	シャーモット	良	淡褐色	ミガキ ミガキ、ナデ	5と同一か
5	底部	中層		極少	3	シャーモット	良	淡黄褐色 淡褐色	ミガキ ナデ	
6	高坏	中層	筒径3.1	1~2	2	並	淡褐色	ミガキ 摩耗		
7	脚部	下層	脚部径13.0	1少	4	並	淡褐色 淡灰褐色	ミガキ ハケ		透穴3
8	脚部	中層	脚部径13.0	1~2	4	シャーモット	並	淡黄褐色	ミガキ ナデ	
9	壺底部	中層	底径1.7	1~2少	5	並	橙褐色 褐色	ミガキ ナデ、ハケ		外面赤彩
10	底部	中層	底径2.1	1~2	2	並	褐色 淡灰褐色	ハケ ナデ		外面煤付着
11	土錘	中層	幅2.7、長2.3	1~2	4	並	黒灰褐色	ナデ		
12	土錘	中層	幅2.4、長2.1	1~2	4	並	黒灰褐色	ナデ		

第10図 2号住居址

1	甕B	床面	口径18.0、底径3.6、器高26.7	1~2	4	シャーモット	並	灰褐色 橙褐色	ナデ、タタキのちハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
2	底部	下層	底径4.7	1~2	4	良	褐色	ハケ ケズリ、ハケ		外面煤付着
3	底部	中層	底径4.8	1~3	5	並	黒褐色 灰褐色	ナデ		

図番号	器種	出土地点	法量 (cm)	胎土・焼成		色調	外内	調整	外内	備考
-----	----	------	---------	-------	--	----	----	----	----	----

## 第10図 4号土坑

4	甕C <sub>2</sub>	床面	口径18.2、底径4.3、器高27.0	1~2	4	シャーモット	並	淡黒褐色 褐色	ナデ、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
5	脚柱部	覆土	筒径3.9	1	4		良	淡褐色	ミガキ ナデ	

## 第12、13図 3号住居址

1	甕A <sub>1</sub>	上層	口径17.0	1~2	5	シャーモット	並	淡橙褐色 淡褐色	擬凹線、ナデ ナデ、ケズリ	
2	甕A <sub>1</sub>	上層		1~2	4		並	淡橙褐色	擬凹線、ナデ 摩耗	
3	甕A <sub>1</sub>	上層		1~2少	4	シャーモット	並	淡橙褐色	擬凹線、ナデ ナデ	外面煤付着
4	甕A <sub>1</sub>	上層		1~2	3		並	橙褐色	擬凹線 ナデ	
5	甕A <sub>1</sub>	上層		1~2	1		並	褐色 淡橙褐色	擬凹線 摩耗	外面煤付着
6	甕A <sub>1</sub>	上層		1~2	1	黒雲母	並	淡灰褐色	擬凹線、ナデ ナデ、ケズリ	
7	甕F	上層	口径15.8	1~3	4		並	淡橙褐色	ナデ	
8	甕F <sub>2</sub>	上層	口径17.3	1~3	5		並	淡褐色 橙褐色	ナデ ナデ、ハケ	
9	甕F	上層	口径11.7	1~3	5		並	淡橙褐色 淡褐色	ナデ	
10	壺	上層	口径9.0	1~2	4		並	淡橙褐色	ナデ ハケ、ナデ	
11	甕A <sub>1</sub>	中層	口径18.4	1~2少	2	黒雲母	良	淡褐色	擬凹線、ナデ ナデ	外面煤付着
12	甕C <sub>1</sub>	中層	口径18.5	1~2	3	シャーモット	並	淡橙褐色	擬凹線、ナデ ナデ、ケズリ	
13	甕F	中層	口径14.6	1~2	5	シャーモット	良	黒灰褐色	ナデ、ハケ ナデ	
14	壺I?	中層	口径17.0	1~3少	3		良	淡褐色 淡灰褐色	ハケ、ナデ	
15	高坏B	中層	口径19.5	1~2	5	シャーモット	良	淡橙褐色	ミガキ	
17	甕A <sub>1</sub>	下層	口径16.6	1~3	5	シャーモット	並	淡黄褐色	擬凹線、縹状文 摩耗	
18	甕C <sub>2</sub>	下層	口径(19.8)	1~2	3	シャーモット	並	橙褐色 淡褐色	ナデ	外面煤付着
19	甕C?	下層	口径17.6	1~2	5		並	黒褐色 褐色	ナデ	外面煤付着
20	壺	下層		1	4	シャーモット	並	淡灰褐色	ハケ、ナデ	
21	器台	下層		1~2	4	シャーモット	並	淡橙褐色	ミガキ ハケ	
22	甕F <sub>1</sub>	P <sub>3</sub>	口径17.0、底径4.9、器高21.3	1~3	3	シャーモット	並	褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
23	壺L	床面	口径13.1	1~5	3	シャーモット	並	橙褐色 橙灰褐色	摩耗 ナデ	
24	甕H	床面	口径11.0、脚部径6.8、器高14.8	1~2少	3	シャーモット	並	淡橙褐色 淡褐色	ナデ、ハケ ナデ	
25	壺N	床面	口径12.6	1~2少	4	シャーモット	並	淡白褐色 淡橙褐色	ミガキ ミガキ、ナデ	外面化粧土 内面漆? 付着
26	高坏D	床面	口径14.3、脚部径9.9、器高12.3	1~2少	3	シャーモット	並	淡白褐色 淡橙褐色	ミガキ ナデ、ハケ	外面化粧土 透穴4
27	高坏C	床面	口径10.4	1~2	5	シャーモット	並	淡橙褐色	摩耗	
28	高坏B	床面	口径(25.9)、脚部径14.5、器高(18.7)	1~2少	2		並	淡褐色	摩耗	透穴4
29	蓋B <sub>1</sub>	P <sub>4</sub>	鈕部径4.9	1~2	4		並	淡灰褐色 淡褐色	ナデ	
30	脚台部	P <sub>4</sub>	脚部径6.6	1~5少	4	シャーモット	並	淡褐色	ナデ ハケ、ナデ	
31	脚台部	床面	脚部径6.4	1~2	4	シャーモット	並	橙褐色 黒褐色	摩耗 ナデ	

## 3 土器観察表

図番号	器種	出土地点	法量 (cm)	胎土・焼成		色調	外内	調整	外内	備考
32	底部	床面	底径 3.5	1~4	5	シャーモット	並	淡褐色	ケズリ、ハケ ハケ	

## 第15図 4号住居址

1	甕E	覆土	口径(21.6)	0.5~2	5		並	淡橙色	ナデ	
---	----	----	----------	-------	---	--	---	-----	----	--

## 第17、18図 5号住居址

1	甕F <sub>2</sub>	上層	口径13.6	1~3	5		良	灰褐色 淡黄褐色	ハケ ナデ	外面煤付着
2	甕F <sub>2</sub>	上層	口径14.7	1~3	5		良	淡黄褐色	ハケ ハケ、ナデ	外面煤付着
3	甕F <sub>2</sub>	上層	口径15.8	1~2	5	シャーモット	並	黒灰褐色 淡褐色	ハケ ナデ	外面煤付着
4	甕F <sub>2</sub>	上層	口径19.6	1~3	5	黒雲母	並	灰褐色 淡褐色	ハケ ハケ、ナデ	外面煤付着
5	甕F <sub>3</sub>	上層	口径19.0	1~2	5		並	淡黄褐色	ハケ ケズリ、ナデ	内外面赤橙色痕
6	壺L <sub>2</sub>	上層	口径15.6、底径3.6、器高(27.0)	1~2少	4		並	淡橙色 灰褐色	ハケ、ミガキ ナデ、ハケ	
7	器台F <sub>3</sub>	上層	口径(10.5)	極少	5	シャーモット	並	赤橙色	ミガキ	透穴3
8	鉢E <sub>2</sub>	上層	口径12.3	極少	3	シャーモット	良	淡橙色	ミガキ	
9	壺底部L	上層	底径 4.3	少	5	シャーモット	良	淡黄橙色	ケズリ、ミガキ ナデ、ハケ	
10	底部	上層	底径 1.7	1~3	5		並	淡黄褐色 黒褐色	ハケ	
11	底部	上層	口径 3.7	1~4	5		並	淡黄橙色	摩耗、ハケ ハケ	内面赤橙色痕
12	甕A <sub>1</sub>	下層	口径16.8	1~3	5	シャーモット	並	黄橙色	擬凹線 ナデ	外面煤付着
13	甕A <sub>1</sub>	下層	口径19.2	1~3	5		並	淡黄褐色	擬凹線 ナデ	外面煤付着
14	甕A <sub>1</sub>	下層	口径21.6	1~3	5		並	淡黄褐色	擬凹線 ナデ、ケズリ	外面煤付着
15	甕F <sub>3</sub>	下層	口径13.0	1~4	1		並	淡橙色	摩耗 ナデ、ハケ	外面煤付着
16	甕F <sub>3</sub>	下層	口径14.3	1~4	4		並	淡褐色	ナデ	外面煤付着 内面赤橙色痕
17	甕F <sub>1</sub>	下層	口径15.0	1~4	5		並	淡黄褐色	ナデ ハケ、ナデ	
18	甕F <sub>5</sub>	下層	口径16.4	1~3	5		並	淡褐色	ハケ、ナデ ナデ	
19	高坏	下層	筒径 5.1	1~3	1	白色細砂粒	並	淡黄褐色	ナデ	外面赤橙色痕
20	器台F	下層		極少	5		並	赤褐色 淡黄褐色	ミガキ ハケ、ナデ	外面赤彩 透穴6
21	鉢?	下層		少	5		並	赤褐色 淡褐色	ミガキ	内外面赤彩
22	鉢F	下層	口径12.0、底径6.2、器高10.0	1~4	5		並	淡黄褐色	ナデ ナデ、ケズリ、ハケ	
23	底部	下層	底径 2.5	1~4	5		並	橙褐色 灰褐色	摩耗	
24	底部	下層	底径 1.5	1~3	5		並	黒灰褐色 褐色	ハケ ナデ	
25	底部	下層		1~4	5		並	淡黄褐色 灰褐色	摩耗	丸底
26	底部	下層	底径 4.5	1~3	5		並	淡黄褐色	ハケ 摩耗	
27	底部	下層	口径 2.6	1~4	5		並	褐色	ハケ	外面煤付着
28	甕F <sub>3</sub>	覆土	口径15.1	1~3	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ハケ	外面煤付着
29	甕F <sub>1</sub>	覆土	口径16.6	1~4	5	シャーモット	並	橙褐色	ナデ ハケ	外面煤付着
30	甕F <sub>2</sub>	覆土	口径17.0	1~4	5		並	淡黄褐色	ナデ ハケ、ナデ	外面煤付着 外面赤橙色痕

## 4 土器観察表

図番号	器種	出土地点	法量 (cm)	胎土・焼成			色調	外内	調整	外内	備考
31	底部	覆土	底径 2.7	1~3	5		並	褐色	ハケ ケズリ		外面煤付着
32	底部	P <sub>5</sub>	底径 3.2	1~3	5		並	橙褐色	ハケ		外面煤付着

第19図 5号土坑

1	器台F <sub>2</sub>	上層	口径9.3、脚部径10.6、器高9.9	極少	3			良	淡橙色	ミガキ		内外面赤彩 透穴6
2	底部	上層	底径 1.4	1~4	5	シャーモット	並	淡褐色 灰褐色	ハケ ナデ			
3	甕F <sub>2</sub>	下層	口径14.0	1~3	5		並	淡橙褐色	ナデ			
4	甕F <sub>5</sub>	下層	口径15.6	1~3	5		並	褐色	ナデ、ハケ			
5	甕F <sub>1</sub>	下層	口径16.0	1~3	2		並	淡橙色	ナデ			外面煤付着
6	脚部	下層	脚部径17.3	1~2	3		並	淡褐色	ミガキ 摩耗			
7	器台A?	下層		1~2	2	シャーモット	並	淡褐色	擬凹線 ナデ			
8	鉢A <sub>2</sub>	下層	口径(22.4)	1~3	5		並	黒褐色 赤褐色	ナデ、ハケ			外面煤付着
9	高坏	下層	口径(24.6)	1~2	4		並	灰褐色 淡褐色	ナデ			
10	鉢F <sub>2</sub>	下層	口径10.3、器高 5.7	1~2	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ハケ ナデ			
11	鉢I	下層		極少	1		並	淡褐色	摩耗 ナデ			
12	底部	下層	底径 1.3	1~3	5		並	黒灰褐色	ナデ、ミガキ ナデ			
13	底部	下層	底径 1.2	1~3	1		並	淡橙褐色	摩耗			
14	壺D <sub>1</sub>	覆土	口径15.0	1~2	3	シャーモット	並	黒褐色 淡橙色	擬凹線、ハケ ナデ、ケズリ			
15	器台F	覆土		極少	5	シャーモット	並	赤褐色 淡褐色	ミガキ ナデ、ミガキ			内外面赤彩 透穴6

第21、22図 6号住居址

1	甕A	上層	口径(15.6)	1~4	5		並	淡褐色	ナデ、ハケ ナデ、ケズリ			
2	甕F <sub>5</sub>	上層	口径16.2	1~3	5	シャーモット	並	淡黄褐色 淡黄褐色	ハケ ナデ			外面煤付着
3	甕A <sub>2</sub>	上層	口径22.2	1~5	4		並	淡褐色	ハケ、ナデ ナデ			外面煤付着 赤橙色痕
4	壺M?	上層	口径17.8	1~3	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ			
5	蓋B <sub>2</sub>	上層		1~3	5		並	淡灰褐色 橙褐色	摩耗			
6	底部	上層	底径 4.2	1~3	5	シャーモット	良	黄褐色 橙褐色	ハケ ケズリ			
7	甕A <sub>1</sub>	下層	口径(20.0)	1~3	3		並	淡黄褐色	擬凹線 摩耗			
8	甕A <sub>1</sub>	下層	口径(19.0)	1~2	1		並	淡白褐色	擬凹線 摩耗			
9	甕F <sub>4</sub>	下層	口径12.6	1~3	5		並	黄褐色 黄橙褐色	ナデ			
10	甕F <sub>4</sub>	下層	口径20.0	1~3	5		並	黄褐色	ナデ、ハケ ナデ			外面煤付着
11	壺L <sub>4</sub>	下層	口径26.2	1~4	5		並	淡褐色 淡橙褐色	ハケ、ナデ ナデ			外面煤付着 赤橙色痕
12	壺I <sub>2</sub>	下層	口径16.6	極少	5	シャーモット	並	淡褐色 橙灰褐色	ナデ、ミガキ ナデ			
13	壺I <sub>2</sub>	下層	口径21.6	極少	1		良	淡黄褐色 淡黄褐色	ナデ、ミガキ ナデ			内外面赤彩
14	壺?	下層	口径14.2	1~3	2		並	淡黄褐色	ナデ 摩耗			外面煤付着
15	底部	下層	底径 6.3	1~3	1	シャーモット	並	淡黄褐色	ハケ、ナデ ケズリ、ナデ			底部穿孔

図番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	胎 土 ・ 焼 成			色 調	外 内	調 整	外 内	備 考
16	底部	下層	底径 4.8	1~4	5		並	黒灰褐色	ナデ	ケズリ、ナデ	
17	壺 I <sub>2</sub>	覆土	口径12.4	1~3	4		並	淡橙褐色	ナデ		
18	甕 F <sub>1</sub>	覆土	口径15.4	1~3	5		並	淡黄褐色 灰褐色	ナデ		
19	壺 L <sub>4</sub>	覆土	口径(24.0)	1~3少	5	シャーモット	良	淡黄褐色 黒褐色	ハケ		
20	器台?	覆土	脚部径(15.2)	1~2少	1		並	淡黄褐色	摩耗		
21	壺 K?	覆土	口径(15.0)	1~2少	5	シャーモット	並	灰褐色	ナデ		内外面煤付着
22	底部	覆土	底径 1.8	0.5~3	5	シャーモット	並	灰褐色	摩耗		
23	底部	覆土	底径 4.4	1~3	4	シャーモット	並	淡黄褐色 黒灰色	摩耗 ハケ		
24	底部	覆土	底径 5.1	1~2	3	シャーモット	並	橙褐色 淡橙褐色	ハケ ナデ		外面煤付着
25	底部	覆土	底径 5.6	1~2	4	シャーモット	並	淡赤褐色 淡橙褐色	ミガキ ナデ		外面赤彩
26	甕 A <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	口径15.5	1~2	4	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ ナデ、ケズリ		外面煤付着
27	甕 F <sub>3</sub>	P <sub>6</sub>	口径18.0	1~4	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ、ハケ ナデ		
28	甕 F <sub>1</sub>	P <sub>4</sub>	口径20.0	1~4	4		並	淡黄褐色	摩耗		
29	壺 H <sub>1</sub>	床面	口径16.6	1~2	4		並	黄褐色 淡黄褐色	ナデ		外面煤付着
30	脚台部	貼床面	脚部径 5.0	1~2少	3	シャーモット	並	淡黄褐色	ハケ ナデ		
31	壺底部 L	床面	底径 5.1	1~5	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ケズリ、ミガキ ナデ、ハケ		外面煤付着
32	底部	床面	底径 4.9	1~2	5	シャーモット	並	黒灰色 黄褐色	ハケ		
33	底部	床面	底径 2.8	1~3	5		並	淡黄褐色 灰褐色	ハケ 摩耗		
34	底部	床面	底径 4.6	1~3	3	シャーモット	並	黄灰褐色 灰褐色	摩耗		
35	底部	貼床面	底径 4.8	1~2	5	シャーモット	並	淡橙褐色	摩耗		

## 第23、24図 7号住居址

1	甕 C?	上層	口径20.0	1~4	5		並	褐色 橙褐色	擬凹線、簾状文 ナデ		
2	甕 A <sub>1</sub>	上層	口径24.4	1~3	5	シャーモット	並	淡黄褐色	擬凹線、ハケ ナデ		
3	壺 M	上層	口径14.6	1~3	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ハケ ハケ、ナデ		
4	壺 C <sub>1</sub>	上層	口径17.6	1~3	5	シャーモット	良	淡黄褐色	擬凹線、ナデ、ハケ ナデ		
5	壺 A <sub>1</sub>	上層	口径16.8	1~3	2	シャーモット 黒雲母	並	淡白褐色	擬凹線、ハケ、ナデ ハケ、ナデ		
6	器台 A	上層	口径(20.4)	1~2	5		良	黒褐色 淡橙褐色	ミガキ、ハケ ミガキ		内面赤彩
7	器台 E	上層	口径21.6	1~2	5	シャーモット	並	黄褐色	ミガキ		
8	高坏 A	上層	口径26.2	1~2	2	黒雲母	並	淡白黄色	ナデ		
9	器台	上層		極少	4	シャーモット	良	黄橙褐色	ミガキ、円形スタンプ文 ナデ		外面赤彩
10	蓋 A <sub>1</sub>	上層	鈕部径 3.0	1~2	4		並	橙灰褐色 黒褐色	ミガキ		
11	鉢 G	上層	口径 7.1	1~2	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ		
12	鉢 J	上層	底径 3.4	1~2	5		並	黒灰色	ナデ		手握ね
13	底部	上層	底径 5.6	1~2少	4	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ		底部穿孔

## 6 土器観察表

図番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	胎 土 ・ 焼 成			色 調 外 内	調 整 外 内	備 考	
14	土製品	上層		1~2	4	シャーモット	並	橙褐色 黒褐色	ナデ	杓子型
15	甕F	下層	口径11.6、底径3.9、器高12.9	1~3	4	シャーモット	並	橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	外面煤付着
16	甕D	下層	口径21.1	1~2	4		並	褐色 淡黄褐色	ナデ ナデ、体部ケズリ	外面煤付着
17	壺	下層	口径(13.8)	1~2	5		並	黄橙褐色 灰褐色	摩耗	
18	鉢D <sub>2</sub>	下層	口径10.5	1~3	5		並	淡橙褐色	ナデ 摩耗	
19	鉢E	下層	口径9.8、底径3.0、器高7.3	1~2	5		並	褐色	ハケ ハケ、ナデ	
20	底部	下層	底径3.0	1~3	2		並	淡橙褐色	摩耗	
21	壺D <sub>1</sub>	覆土	口径18.2	1~2	5	シャーモット	良	淡黄褐色 褐色	擬凹線 ケズリ	赤橙色痕
22	鉢C	覆土	口径11.6	1~2少	5		並	淡橙褐色	ナデ ケズリ、ナデ	外面煤付着
23	壺E	床面	胴部径13.3	1~2	3	シャーモット	並	淡橙褐色 褐色	ミガキ、擬凹線 ナデ	外面化粧土?
24	鉢E <sub>1</sub>	床面	口径10.3、底径4.6、器高6.4	1~3	5		並	淡黄褐色	ハケ ナデ	赤橙色痕
25	甕A <sub>2</sub>	床面	口径9.5、底径2.3、器高11.4	1~2	3	シャーモット	並	褐色	ハケ ケズリ	外面煤付着
26	高坏	床面	脚部径14.8	1~2	4	シャーモット	並	淡黄褐色	擬凹線 ケズリ、ナデ	外面化粧土?
27	器台A?	床面	口径18.7	1~2	4	シャーモット	並	淡黄褐色 淡橙褐色	擬凹線 ケズリ、ナデ	
28	甕A <sub>1</sub>	P <sub>8</sub>	口径14.6	1~2	3	シャーモット	並	黄褐色	擬凹線 ナデ	外面煤付着
29	壺B <sub>5</sub>	P <sub>12</sub>	口径11.6	1~2	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ	
30	壺F	P <sub>12</sub>	口径8.8	1~3	3	シャーモット	並	橙褐色	摩耗	
31	高坏A	P <sub>12</sub>	口径23.8	1~2	5	シャーモット	並	淡黄褐色	摩耗	

## 第26~30図 8号住居址

1	甕F <sub>1</sub>	上層	口径10.6	極少	1	シャーモット	並	赤橙褐色	ナデ、ハケ ハケ	
2	甕F <sub>1</sub>	上層	口径13.4	1~2	5		並	淡橙褐色	摩耗	
3	甕F <sub>1</sub>	上層	口径(14.0)	1~2	5		並	淡黄褐色	ナデ、ハケ	
4	甕F <sub>4</sub>	上層	口径14.0	1~2	5		並	淡黄褐色	ナデ	
5	甕F <sub>4</sub>	上層	口径15.5	1~2	5		並	黄橙褐色	ハケ ナデ	
6	甕F <sub>5</sub>	上層	口径15.6	1~2少	5		並	淡橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	頸部に穿孔
7	甕F <sub>4</sub>	上層	口径18.2	1~3	5		並	淡黄褐色	ハケ、ナデ	
8	甕F <sub>1</sub>	上層	口径17.7	1~2少	5		並	褐色 灰褐色	ナデ、ハケ ナデ	内外面赤橙色痕
9	甕F <sub>1</sub>	上層	口径19.4	1~2	5		並	黄褐色 淡橙褐色	摩耗	外面煤付着
10	甕F <sub>3</sub>	上層	口径18.4、底径2.9、器高25.5	1~3	5		並	褐色 淡黄褐色	ナデ、ハケ ナデ	外面煤付着
11	壺L <sub>3</sub>	上層	口径15.8、底径5.5、器高(27.5)	1~2少	5	シャーモット	良	淡黄褐色	ハケ、ミガキ、ケズリ ナデ、ハケ	
12	器台A?	上層	脚部径16.9	1~1.5	1		並	淡黄褐色	擬凹線 ケズリ	
13	高坏	上層		1~2	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ミガキ ハケ	
14	器台F <sub>1</sub>	上層	口径7.9、脚部径10.9、器高7.3	1~2少	5		並	淡黄褐色	ミガキ ナデ、ケズリ	
15	器台F	上層		1~2少	5	シャーモット	並	淡黄褐色	摩耗	

## 7 土器観察表

図番号	器種	出土地点	法量 (cm)	胎土・焼成			色調 外内	調整 外内	備考
16	蓋A <sub>2</sub>	上層	鈕部径5.4、口径10.4、器高5.5	1~2	5		並 橙褐色	摩耗	
17	鉢H	上層		1~2	5		並 褐色 淡黄褐色	ナデ	
18	底部	上層	底径2.4	1	5	シャーモット	良 橙褐色	ミガキ 摩耗	外面赤彩
19	底部	上層	底径2.4	1~3	5		並 淡橙褐色 灰褐色	ナデ ハケ	
20	底部	上層	底径3.0	1~2	5		並 黄褐色 灰褐色	ナデ ハケ	内底面に 炭化物付着
21	底部	上層	底径2.2	1~2	1		並 赤橙褐色 淡褐色	ナデ ケズリ	
22	底部	上層	底径5.4	極少	5	シャーモット	良 灰褐色 淡橙褐色	ハケ、ナデ	
23	底部	上層	底径7.1	1~2少	5	シャーモット	良 黄褐色 淡灰褐色	ナデ ハケ	
24	底部	上層	底径4.4	極少	5	シャーモット	良 灰褐色 淡橙褐色	ケズリ ハケ	
25	底部	上層	底径4.6	1~2	5		並 淡黄褐色	ハケ	
26	底部	上層	底径5.6	1~2	3	シャーモット	並 淡黄褐色	ナデ ケズリ	
27	底部	上層	底径3.4	1~3	5		並 淡黄褐色 淡灰褐色	ハケ	外面煤付着
28	底部	上層	底径2.6	1~4	5		並 褐色 灰褐色	ケズリ、ミガキ ナデ、ハケ	
29	底部	上層	底径4.0	1~3	3	シャーモット	良 橙褐色 淡橙褐色	ミガキ ナデ	
30	甕A <sub>2</sub>	下層	口径14.6、底径2.5、器高12.8	1~2	5	シャーモット	並 淡橙褐色	ナデ、ハケ	内外面煤付着
31	甕A <sub>2</sub>	下層	口径16.8	1~2	5	シャーモット	並 淡黄褐色	ナデ	
32	甕A <sub>2</sub>	下層	口径17.6	1~2	5		並 淡黄褐色	ナデ	
33	壺K	下層	口径10.0	1~4	3	シャーモット	並 淡橙褐色	ミガキ ミガキ、ナデ	
34	壺I <sub>2</sub>	下層	口径14.0	1~2	3	シャーモット	良 橙褐色	ナデ ハケ、ナデ	
35	高坏B	下層		1~3	2	シャーモット 白色細砂粒	並 橙褐色	ミガキ ハケ	透穴4
36	高坏B	下層		1~3	5	シャーモット	並 淡黄褐色	摩耗 ハケ	透穴4
37	高坏	下層		1	3	シャーモット	並 淡黄褐色	摩耗	脚柱部
38	底部	下層	底径5.2	1~2	5	シャーモット	良 淡橙褐色 灰褐色	ミガキ? ハケ、ナデ	外面煤付着
39	底部	下層		1~3	5	シャーモット	良 灰褐色	ナデ	外面煤付着
40	蓋B <sub>1</sub>	下層	鈕部径4.1、口径11.4、器高6.2	1~3	5	シャーモット	並 黒褐色	ハケ ナデ	
41	蓋B <sub>2</sub>	下層	鈕部径3.6、口径16.7、器高5.8	極少	2	シャーモット 白色細砂粒	良 淡橙褐色	ミガキ 摩耗	
42	壺K?	下層	口径13.8	1少	5	シャーモット	良 淡橙褐色	ミガキ	
43	底部	下層	底径7.5	1~2	5	シャーモット	並 淡黄褐色	ナデ	
44	底部	下層	底径2.6	1~2	5		並 黒灰褐色	ナデ	外底部にヘラ描文
45	甕F <sub>3</sub>	覆土	口径15.6	1少	5		良 淡黄褐色	ナデ	
46	甕F <sub>1</sub>	覆土	口径16.6	1~2	5		並 淡橙褐色	ナデ、ハケ ハケ、ナデ	外面煤付着
47	甕A <sub>1</sub>	覆土	口径20.8	1~2	2	シャーモット	良 黒灰褐色 淡褐色	擬凹線、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
48	器台F <sub>1</sub>	覆土		無	4	シャーモット	良 橙褐色	ミガキ	外面赤彩
49	脚台部	覆土	脚部径6.0	極少	5	シャーモット	並 淡橙褐色	ミガキ ナデ	

図番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	胎 土 ・ 焼 成			色 調	外 内	調 整	外 内	備 考
50	蓋B <sub>2</sub>	覆土	鈕径 3.8	1~2	3		良	淡橙褐色	ミガキ 摩耗		
51	蓋B <sub>1</sub>	覆土		1~2	5		並	灰黄褐色 淡黄褐色	ミガキ		
52	底部	覆土	底径 1.8	1~3	5		並	黄褐色 淡灰褐色	ハケ ケズリ		外面煤付着
53	底部	覆土	底径 3.4	1~3	5		並	淡橙褐色	摩耗 ケズリ		赤橙色痕
54	底部	覆土	底径 5.8	1~2少	4		良	淡褐色 黒褐色	ハケ ナデ		
55	底部	覆土	底径 5.6	1	3	シャーモット	良	黒灰褐色 淡黄褐色	ミガキ ナデ		
56	底部	覆土	底径 5.8	1~2少	5	シャーモット	良	淡橙褐色 淡褐色	ナデ? ハケ		
57	底部	覆土		1~2	5		並	褐色 灰褐色	ハケ		外面煤付着
58	底部	覆土	底径 3.6	1~4	5		並	褐色 灰褐色	ハケ		
59	壺H <sub>2</sub>	床面	口径13.0	1~2	3		良	淡黄褐色	ナデ		
60	壺H?	床面	口径17.4	1~2	3	シャーモット	良	褐色 淡橙褐色	ナデ		
61	壺L	床面	口径14.0	1~3	5	シャーモット	並	橙褐色	摩耗		
62	鉢B?	床面	口径11.6	1~4	4		不	橙灰褐色	摩耗		
63	底部	床面	底径 4.2	1~3	2	シャーモット	良	淡橙褐色	ハケ ナデ		外底部にヘラ描文
64	甕F <sub>4</sub>	P <sub>3</sub>	口径17.1	1~3	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ		
65	脚部	周溝	脚径15.0	1少	3	シャーモット	並	淡黄褐色	ミガキ 摩耗		
66	高坏	周溝	脚径11.0	1~2	5	シャーモット	並	黄灰褐色	ミガキ ハケ		
67	蓋B <sub>1</sub>	周溝	鈕径 4.4	1~2	3	シャーモット	並	淡黄橙褐色	ハケ、ミガキ		
68	底部	周溝	底径 5.2	1~3少	2		並	黒灰褐色 淡黄灰褐色	ハケ ケズリ		外底部に編物状の圧痕

## 第30、31図 9号住居址

1	壺B <sub>4</sub>	上層	口径14.0	1~3	4	シャーモット	並	褐色	ハケ ハケ、ケズリ		
2	壺K?	上層	口径10.8	1~2	4	シャーモット	並	橙褐色 褐色	摩耗		
3	器台F?	上層	脚径11.4	極少	5	シャーモット	並	淡褐色	ミガキ ハケ		透穴4
4	高坏	上層		1~2	4	シャーモット	並	褐色	ミガキ ナデ		
5	鉢J	上層	口径4.1、脚径2.2、器高3.7	1~2	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ		ミニチュア
6	底部	上層	底径 1.8	1~2	3	シャーモット	並	灰褐色	ケズリ 摩耗		
7	壺L?	下層	口径17.8	1~2	2	シャーモット	良	淡橙褐色	ナデ		
8	器台	下層		1	2		並	淡黄褐色	ミガキ ナデ		
9	甕D	覆土	口径21.8	1~2	4	シャーモット	並	淡黄褐色 灰褐色	ナデ		外面煤付着
10	甕F <sub>4</sub>	覆土	口径12.0	1~2	3	シャーモット	並	淡橙褐色 淡灰褐色	ナデ、タタキ ナデ		
11	底部	覆土	底径 1.8	1~3	3		並	褐色	ハケ ケズリ		外面煤付着
12	器台A	床面		1~2	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ミガキ ミガキ、ナデ		赤橙色痕
13	底部	床面	底径 6.9	1~2	5	シャーモット	並	湖黄褐色	ナデ ハケ		
14	甕A <sub>2</sub>	周溝	口径15.0	1~2	5	シャーモット	並	灰褐色	ナデ		外面煤付着

図番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	胎 土 ・ 焼 成		色 調 外 内	調 整 外 内	備 考		
15	甕A?	P <sub>6</sub>	口径(18.6)	1~2	2	シャーモット 白色細砂粒	並	黒褐色 淡橙褐色	擬凹線? 摩耗	外面煤付着
16	甕A <sub>2</sub>	P <sub>6</sub>	口径(21.6)	1	3	シャーモット	良	灰褐色	ナデ	
17	壺G	P <sub>6</sub>	口径9.4、底径1.5、器高20.6	1~2	4		良	淡橙褐色	ミガキ ミガキ、ナデ	外面煤付着 内外面赤彩
18	蓋B <sub>1</sub>	P <sub>6</sub>	鈕部径4.6	1~3	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ 摩耗	2ヶ所穿孔
19	壺?	P <sub>6</sub>	口径9.9	極少	3		良	淡白橙色	ミガキ ナデ	脚台?
20	底部	P <sub>6</sub>	底径2.4	1~3	5	シャーモット	良	橙褐色 淡黄褐色	ハケ 摩耗	
21	底部	周溝	底径2.2	1~3	5	シャーモット	並	灰褐色 黒灰褐色	ハケ	外面煤付着 14と同一か

第33図 12号住居址

1	甕A <sub>2</sub>	P <sub>2</sub>	口径12.7	1~3	3	シャーモット	並	黄褐色	ナデ、ハケ ナデ	
2	甕F	P <sub>4</sub>	口径20.2	1~2	5		良	褐色	ナデ、ハケ ハケ	外面煤付着
3	甕F <sub>1</sub>	覆土	口径16.2	1~2	5		並	淡黄褐色	ナデ	
4	器台F	覆土	口径 9.4	極少	3	シャーモット	良	淡橙褐色	ミガキ ナデ	外面赤彩
5	底部	覆土	底径(4.8)	1~3	5		並	淡橙褐色 灰褐色	ナデ	内底面に 炭火物付着

第35、36図 14号住居址

1	甕F <sub>5</sub> ?	上層	口径13.8、底径1.2、器高12.7	1~4	5	シャーモット	並	橙褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
2	壺B	上層	口径14.8	1~3	5	シャーモット	並	橙灰褐色	ハケ	
3	甕A <sub>2</sub>	下層	口径21.4	1~4	5	シャーモット	良	淡橙褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
4	甕C?	下層	口径21.5	1~2	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ	
5	甕F <sub>1</sub>	下層	口径17.6	1~2	3	シャーモット	並	灰褐色	ナデ、ハケ	
6	甕F	下層	口径12.7、底径1.6、器高12.7	1~2	3	シャーモット	並	黄橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	外面煤付着
7	甕F <sub>3</sub>	下層	口径17.6	1~2	5		並	黄灰褐色	ナデ、ハケ ナデ	
8	甕F <sub>1</sub>	下層	口径16.6	1~2	3	シャーモット	並	黒褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
9	鉢A <sub>1</sub>	下層	口径(23.0)	1~2	3	シャーモット	並	黒灰褐色 淡橙褐色	ナデ 摩耗	
10	鉢?	下層	口径13.6	1	2	シャーモット 黒雲母	並	淡黄褐色	ミガキ	
11	鉢F	下層	口径8.2、底径3.8、器高(7.4)	1	4	シャーモット	並	淡橙褐色	ハケ ナデ	
12	底部	下層	底径 1.2	1~5	5	シャーモット	並	淡褐色 淡橙褐色	ハケ ナデ	外面煤付着
13	底部	下層	底径 5.5	1~2	5	シャーモット	良	淡褐色	ナデ ハケ	
14	底部	下層	底径 8.2	1~2	5	シャーモット	良	淡黄橙褐色	ハケ 摩耗	
15	底部	下層	底径 5.0	1~2	3		並	淡橙褐色	ナデ	
16	底部	下層	底径 6.8	1少	5	シャーモット	良	淡灰褐色 橙褐色	摩耗	
17	底部	下層	底径 2.0	1~2	3	シャーモット 白色細砂粒	並	褐色	ハケ ナデ	外面煤付着 内底面に炭化物
18	甕D?	覆土	口径20.6	1~2	3	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ	外面煤付着
19	甕F <sub>2</sub>	覆土	口径15.0	1~2	5		並	黒褐色 淡褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
20	壺A <sub>2</sub>	覆土		1~2	4	シャーモット	並	淡褐色 淡黄褐色	ハケ 摩耗	

図番味	器種	出土地点	法 量 (cm)	胎土・焼成		色調	外内	調整	外内	備考
21	器台F	覆土		1~2	5	シャーモット	良	淡灰褐色	ミガキ ナデ	赤彩?
22	鉢B <sub>1</sub>	覆土	口径12.0、底径1.3、器高(9.3)	1~3	5		並	褐色	擬凹線、ハケ ハケ、ナデ	
23	底部	覆土	底径 3.6	1	3		良	黒褐色 灰褐色	ハケ ナデ	
24	壺底部L?	覆土	底径 7.3	1~2	4	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ、ミガキ ハケ、ナデ	
25	甕F <sub>3</sub>	床面	口径14.6	1~2少	2	シャーモット	並	褐色 橙褐色	ナデ、ハケ 摩耗	外面煤付着
26	蓋B <sub>2</sub>	床面	鈕部径 3.5	極少	5	シャーモット	並	橙色	摩耗	
27	鉢B <sub>2</sub>	床面	口径12.0、底径1.8、器高6.7	1~2少	5		良	灰褐色	ナデ、ハケ ナデ	
28	甕F <sub>1</sub>	P <sub>5</sub>	口径14.8	1~2	5		並	淡橙褐色	ナデ	
29	底部	P <sub>5</sub>	底径 3.4	1~3	5		並	灰褐色 黒褐色	ハケ	

第41図 1号溝

1	甕A <sub>1</sub>	覆土	口径15.2	1~2	4		並	淡灰褐色 淡黄褐色	擬凹線 ナデ	
2	甕A?	覆土	口径16.6	1~2	3	シャーモット	並	淡橙褐色	擬凹線 ナデ	外面煤付着
3	壺B	覆土	口径10.4	1~2	4	シャーモット	並	淡褐色	ナデ ナデ、ケズリ	
4	壺B <sub>3</sub>	覆土	口径11.0	1~2	4	シャーモット	並	淡褐色 淡橙褐色	ハケ ナデ、ケズリ	
5	脚柱部	覆土	筒径 4.2	1~10	4		並	灰褐色 淡褐色	摩耗	
6	脚部	覆土		1	4		並	橙褐色	ミガキ ナデ	外面にへろ描文?
7	蓋B <sub>1</sub>	覆土	鈕部径 3.6	1~2	5		並	褐色	ナデ	
8	底部	覆土	底径 4.6	1~3	4		並	褐色 橙褐色	ハケ ケズリ	

第41図 2号土坑

9	甕	覆土	口径15.0	1~2	3		並	淡橙褐色	擬凹線 摩耗	外面煤付着
10	甕	覆土		1~2	5		並	淡褐色	ナデ ナデ、ケズリ	外面煤付着
11	壺B <sub>5</sub>	覆土	口径11.0	1~2	4	シャーモット	並	淡褐色 淡橙褐色	ハケ ナデ、ケズリ	
12	器台D	覆土		1~2少	1		並	淡褐色	ミガキ	
13	高坏A	覆土		1少	3		並	淡黄褐色	ミガキ	

第44図 6号土坑

1	底部	覆土	底径 2.3	1~3	5	シャーモット	並	淡橙褐色 灰褐色	ハケ 摩耗	
---	----	----	--------	-----	---	--------	---	-------------	----------	--

第49図 7号土坑

1	甕A <sub>2</sub>	覆土	口径(12.4)	1~2	5	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ	
2	甕C <sub>1</sub>	覆土	口径13.5	1~2	3	シャーモット	良	淡橙褐色	擬凹線、ナデ ナデ、ケズリ	
3	甕F <sub>1</sub>	覆土	口径(18.6)	1~3	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
4	壺I <sub>2</sub>	覆土	口径(16.0)	1~2	5		並	淡灰褐色	ナデ	
5	脚部	覆土		極少	5	シャーモット	良	淡橙褐色	ミガキ ケズリ、ナデ	
6	脚部	覆土		極少	4		並	淡黄褐色	ミガキ ハケ	

図番号	器種	出土地点	法	量 (cm)	胎土・焼成	色調	外内	調整	外内	備考
-----	----	------	---	--------	-------	----	----	----	----	----

## 第47図 9号土坑

1	甕A <sub>1</sub>	覆土	口径(14.5)	1~2	4	シャーモット	並	淡橙褐色	擬凹線 ナデ	
---	-----------------	----	----------	-----	---	--------	---	------	-----------	--

## 第60図 10号土坑

1	甕F <sub>1</sub>	覆土	口径16.2	1	5		良	淡橙褐色 淡褐色	ナデ、ハケ	
2	甕F <sub>2</sub>	覆土	口径17.4	1~2	5		並	淡黄橙褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
3	壺	覆土		1	1		並	淡白黄色	円形浮文 摩耗	
4	器台	覆土		極少	2	シャーモット	並	淡橙褐色	ミガキ ナデ	
5	把手	覆土		1~2	1	シャーモット	良	淡黄褐色	ナデ	赤橙色痕
6	底部	覆土	底径 5.3	1~3	3	シャーモット	並	淡橙褐色 淡褐色	ミガキ? ケズリ、ナデ	外面赤橙色痕

## 第55図 13号土坑

1	深鉢	覆土	底径16.4	1~4	3	シャーモット	並	褐色	木目状撫糸文 ナデ	縄文式土器
---	----	----	--------	-----	---	--------	---	----	--------------	-------

## 第61図 15号土坑

1	甕F	覆土	口径12.3、底径1.9、器高12.5	1~2	3		良	褐色 黒褐色	ナデ、ハケ	体部下方に穿孔
2	器台B	覆土	口径14.4、脚部径11.9、器高10.9	1~3	5		良	赤橙褐色	ミガキ ミガキ、ハケ	
3	鉢D <sub>1</sub>	覆土	口径5.8、底径1.8、器高5.1	極少	1		並	淡白褐色	摩耗	外面赤彩

## 第64図 20号土坑

1	甕F <sub>2</sub>	覆土	口径15.0	1~2	5	シャーモット	良	橙褐色 淡橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	外面煤付着
2	甕A <sub>2</sub>	覆土	口径15.3	1~2	2	シャーモット	並	橙褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
3	甕F <sub>4</sub>	覆土	口径16.3	1~3	3	シャーモット	良	橙褐色	ナデ	外面煤付着
4	壺M?	覆土	口径13.7	1	2	シャーモット	並	淡橙褐色 淡灰褐色	ナデ	
5	体部	覆土		1~2少	5	シャーモット	良	淡褐色 灰褐色	ミガキ ハケ、ナデ	6と同一か
6	底部	覆土		1~2少	5	シャーモット	良	淡褐色 灰褐色	ミガキ ナデ、ハケ	

## 第68図 21号土坑

1	壺B <sub>1</sub>	覆土	口径15.8	1~2	3	シャーモット	良	淡褐色	摩耗 ハケ、ケズリ	5と同一か
2	壺B <sub>2</sub>	覆土	口径15.6	1	2		並	淡白褐色	ナデ、ハケ	
3	壺B <sub>1</sub>	覆土	口径15.6	1~2	2		並	淡黄褐色	ハケ ハケ、ケズリ	内外面煤付着
4	高坏	覆土		1~2	1	黒雲母	並	淡橙褐色	ミガキ ナデ	
5	底部	覆土	底径 5.4	1~2	4	シャーモット	良	橙褐色 褐色	ハケ ハケ、ナデ	
6	底部	覆土	底径 5.0	1	1		並	橙灰褐色 淡灰褐色	摩耗	外面煤付着
7	底部	覆土	底径 6.0	1~2	3		並	淡灰褐色 黒褐色	摩耗 ケズリ	

## 第74図 溝

1	甕A <sub>2</sub>	3号溝	口径16.6	1~2	5	シャーモット	並	淡褐色 灰褐色	ナデ ナデ、ケズリ	
2	器台C	12号溝	口径25.8	極少	3	シャーモット	良	淡橙褐色	ミガキ	内外面赤彩
3	底部	3号溝	底径 6.8	1~2	3	シャーモット	並	淡橙褐色	摩耗	

図番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	胎 土 ・ 焼 成			色 調 外 内	調 整 外 内	備 考
4	底部	3号溝	底径 2.8	1~5	3		並 淡黄褐色 灰褐色	ハケ ナデ	

## 第75図 ピット

1	甕A <sub>1</sub>	A-5、P <sub>8</sub>	口径17.4	1	3		並 淡黄褐色	擬凹線 ナデ、ケズリ	
2	甕A <sub>2</sub>	D-7、P <sub>14</sub>	口径18.0	1~2	3	シャーモット	良 灰褐色	ナデ、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
3	甕A <sub>2</sub>	D-10、P <sub>15</sub>		1~2	4	シャーモット	並 黒灰褐色	摩耗	
4	甕A <sub>2</sub>	D-10、P <sub>15</sub>		1~2	3	シャーモット	良 淡橙褐色	ナデ	
5	甕A <sub>2</sub>	D-10、P <sub>4</sub>		1~2	3	シャーモット	良 橙灰褐色	摩耗	
6	甕A <sub>2</sub>	D-9、P <sub>23</sub>		1~2	2	シャーモット	並 橙褐色	摩耗	
7	甕C?	D-10、P <sub>20</sub>		1~2	3	シャーモット	良 淡橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	
8	壺E?	D-9、P <sub>23</sub>		1~2	3		並 灰褐色 淡橙褐色	円形刺突文 摩耗	
9	壺	D-9、P <sub>23</sub>	口径15.0	1~2	4	シャーモット	並 淡黄褐色 淡黄灰褐色	ナデ、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
10	鉢	D-10、P <sub>21</sub>	口径18.2、底径13.6	1~2	5	シャーモット	並 橙褐色	ミガキ ミガキ、ナデ	
11	脚部	D-12、P <sub>142</sub>		1	3		並 橙灰褐色 橙褐色	摩耗	
12	蓋A <sub>1</sub>	D-10、P <sub>8</sub>	鈕径 4.4	1~2	3	シャーモット	良 黒灰褐色 褐色	ナデ	外面煤付着
13	鉢C?	D-13、P <sub>94</sub>	口径12.3	1	5	シャーモット	並 橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	
14	鉢C?	D-7、P <sub>14</sub>	口径14.8	1~2	2		並 淡白褐色	ミガキ ナデ、ケズリ	外面煤付着
15	鉢A <sub>3</sub>	C-12、P <sub>121</sub>	口径(24.0)	1~2少	3	シャーモット	良 黒褐色 橙褐色	ナデ ナデ、ケズリ	
16	底部	D-6、P <sub>2</sub>	底径 3.2	1~9	3		並 橙褐色 灰褐色	摩耗	
17	底部	D-7、P <sub>15</sub>	底径 4.0	1~2	2	シャーモット	並 褐色 淡橙褐色	ミガキ ケズリ、ナデ	
18	底部	A-12、P <sub>1</sub>	底径 3.4	1	3	シャーモット	並 黒褐色 褐色	ハケ ケズリ、ナデ	
19	底部	D-9、P <sub>3</sub>	底径 3.4	1~3	4	シャーモット	並 橙褐色 灰褐色	ハケ 摩耗	
20	底部	M-1、P <sub>3</sub>	底径 6.6	1~2少	5	シャーモット	良 淡褐色	摩耗 ハケ	
21	土錘	A-5、P <sub>12</sub>	長3.8、幅4.5	1~2	5	シャーモット	良 灰褐色	ナデ	
22	土錘	B-18、P <sub>33</sub>	長3.4、幅4.1	1~2	5	シャーモット	並 灰褐色	ナデ	

## 第85~89図 包含層

1	甕A <sub>1</sub>	D-14、黒色盛土	口径20.8、底径4.7、器高(29.0)	1~2	1	シャーモット	並 淡褐色	擬凹線、斜行列点文、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
2	甕A <sub>2</sub>	D-14、黒色盛土	口径14.4	1~2	3	シャーモット	良 淡黄橙褐色	ナデ	
3	甕A <sub>2</sub>	D-14、黒色盛土	口径15.7	1~2	3	シャーモット	良 黒褐色 橙灰褐色	ナデ、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
4	甕A <sub>2</sub>	D-14、黒色盛土	口径16.0	1~2	2	シャーモット	並 褐色 淡橙褐色	ナデ	
5	甕A <sub>2</sub>	D-14、黒色盛土	口径19.8	1~3	3	シャーモット	並 橙褐色 橙灰褐色	ナデ ナデ、ケズリ	
6	甕F?	D-14、黒色盛土	口径16.4	1	2	シャーモット 黒雲母	並 褐色	ナデ	
7	甕G	D-14、黒色盛土	口径15.0	1~2	2		並 淡黄褐色	ナデ、斜行列点文 ナデ、ケズリ	外面煤付着
8	甕G	D-14、黒色盛土	口径18.9	1~2	2		並 褐色 淡黄褐色	ナデ、斜行列点文 ナデ、ケズリ	外面煤付着
9	底部	D-14、黒色盛土	底径 3.2	1~3	2	シャーモット	良 淡褐色	ハケ 摩耗	

図番号	器種	出土地点	法量 (cm)	胎土・焼成		色調 外内	調整 外内	備考
10	底部	D-14 黒色盛土	底径 5.0	1~3	3	シャーモット 並 橙褐色 淡黄褐色	ナデ	
11	底部	D-14 黒色盛土	底径 3.2	1~2	4	並 褐色	摩耗	底部穿孔
1	甕 A <sub>1</sub>	C-17	口径15.0	1~2	4	シャーモット 並 淡黄褐色	擬凹線 ナデ、ケズリ	外面煤付着
2	甕 A <sub>1</sub>	C-15	口径(16.8)	1~2	1	シャーモット 並 淡橙褐色	擬凹線、ハケ ナデ、ケズリ	
3	甕 A <sub>1</sub>	D-3	口径(18.8)	1	5	シャーモット 並 黒褐色 灰褐色	擬凹線 ナデ	外面煤付着
4	甕 A <sub>1</sub>	C-2	口径16.6	1	3	並 淡橙褐色 黒褐色	擬凹線 ナデ、ケズリ	
5	甕 A <sub>1</sub>	D-4		1	4	良 淡橙褐色	擬凹線、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
6	甕 A <sub>1</sub>	D-3		1~2	3	シャーモット 並 淡橙褐色	擬凹線 ナデ	外面煤付着
7	甕 A <sub>2</sub>	C-18	口径12.6	1~2	1	シャーモット 並 淡黄褐色	ナデ ナデ、ケズリ	外面煤付着
8	甕 A <sub>2</sub>	M-4	口径15.0	1~2	3	シャーモット 並 淡橙褐色 橙褐色	ナデ	外面煤付着
9	甕 A <sub>2</sub>	C-2	口径15.3	1~2	3	シャーモット 並 黒褐色 褐色	ナデ 摩耗	
10	甕 A <sub>2</sub>	M-1	口径15.7	1~2	4	良 淡橙褐色	ナデ ナデ、ケズリ	
11	壺 D <sub>2</sub>	M-2	口径17.4	1~2	3	シャーモット 並 灰褐色	ナデ、ハケ ナデ、ケズリ	外面煤付着
12	甕 A <sub>2</sub>	C-2	口径16.8	1	5	並 褐色	ナデ ナデ、ケズリ	
13	甕 A <sub>2</sub>	D-15	口径20.7	1~2	2	シャーモット 並 灰褐色	ナデ ナデ、ケズリ	外面煤付着
14	甕 A <sub>2</sub>	C-19	口径17.0	1~2	3	シャーモット 良 淡橙褐色	ナデ、ハケ、V状文 ナデ、ケズリ	
15	甕 A <sub>2</sub>	C-14	口径16.6	1~3	3	シャーモット 並 橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	外面煤付着
16	甕 E	M-1	口径(23.6)	1~2	4	シャーモット 並 淡橙褐色	ナデ	外面煤付着
17	甕 F <sub>1</sub>	B-5	口径12.0	1~2	5	シャーモット 並 淡橙褐色 淡黄褐色	ナデ、ハケ ハケ、ナデ	外面煤付着
18	甕 F	C-17	口径13.2	1~2少	1	並 淡黄褐色	摩耗 ナデ	
19	甕 F <sub>6</sub>	D-12	口径14.0、器高11.7	1~2少	1	並 淡黄色	摩耗 ハケ、ナデ	内面煤付着
20	壺 I <sub>2</sub>	D-6	口径15.0	1~2	5	並 淡橙褐色	ナデ	
21	甕 F <sub>2</sub>	B-4	口径15.6	1~2	2	シャーモット 並 褐色 淡黄褐色	ナデ、ハケ ナデ	73と同一
22	甕 F <sub>2</sub>	D-4	口径17.9	1~3	4	並 褐色	ナデ ナデ、ハケ	
23	甕 F <sub>1</sub>	D-11	口径15.0	1~2	4	並 淡橙褐色	ナデ、ハケ	外面煤付着
24	甕 F	M-3	口径18.5	1~3	4	シャーモット 並 灰褐色 橙灰褐色	ナデ	
25	甕 F <sub>3</sub>	M-1・2	口径16.6	1~2	5	並 褐色	ナデ、ハケ	
26	壺 A ?	C-2	口径(38.0)	1~2	5	シャーモット 並 褐色 淡橙褐色	擬凹線 ミガキ	
27	壺 C <sub>2</sub>	C-2	口径(18.0)	1	4	並 淡黄橙褐色	ナデ、ハケ ナデ	
28	壺 C <sub>2</sub>	C-2		1	5	シャーモット 並 淡褐色	ナデ、ハケ	
29	壺 A <sub>2</sub>	B-15		1~2少	2	シャーモット 並 淡黄褐色	ハケ ナデ、ハケ	内面炭化物付着
30	壺 B <sub>2</sub>	C-17	口径12.1	1~2	3	シャーモット 並 淡黄橙褐色	ハケ	内面赤橙色痕
31	壺 B <sub>1</sub>	C-18	口径14.5	1~2	1	シャーモット 並 橙褐色	ハケ	
32	壺 B ?	C-1	口径12.8	1~2	4	シャーモット 並 灰褐色 橙灰褐色	ナデ ナデ、ケズリ	

図番号	器種	出土地点	法 量 (cm)	胎 土 ・ 焼 成			色 調 外 内		調 整 外 内	備 考
33	壺 J	A-18・19	口径11.8	1~2	1		並	淡褐色 淡灰褐色	ナデ	
34	壺 I <sub>2</sub>	D-2	口径14.4	1~2	1	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ	
35	口縁部片	表採		1~3	1		並	赤橙褐色	ミガキ	
36	体部片	D-2・3		極少	1		良	橙褐色 灰褐色	ミガキ ナデ	外面赤彩
37	壺 E	C-2		1~2少	3		並	淡橙灰色	ミガキ ハケ、ナデ	
38	壺 E	M-1		1	3	シャーモット	良	橙褐色 黒褐色	円形、菱杉状刺突文、ミガキ ナデ	
39	坏部?	D-4		1~2少	3	シャーモット	並	淡褐色	ミガキ	内面赤橙色痕
40	脚部	D-7		1~2少	1		良	赤橙褐色 淡橙褐色	ミガキ、擬凹線 ナデ	外面赤彩
41	脚部	C-18		1	2	シャーモット	並	淡黄橙褐色	ナデ	
42	脚部?	C-2	脚部径16.2	1~2少	3	シャーモット	並	赤褐色 黒褐色	ミガキ	天地逆か
43	高坏	D-3		1~2少	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ミガキ ハケ、ナデ	
44	高坏	C-18		1	5	シャーモット	並	淡橙褐色	摩耗	
45	高坏	C-8・9		1	2	シャーモット	並	淡褐色	ミガキ ケズリ、ナデ	
46	蓋 B <sub>2</sub>	D-3	鈕部径 4.0	1~3	4	シャーモット	並	淡橙褐色	ナデ	
47	鉢 F <sub>1</sub>	C-18	口径9.5、底径4.2、器高5.1	1~3	3	シャーモット	並	灰褐色 橙灰褐色	摩耗	
48	把手	M-4		1	1	シャーモット	並	淡白黄色	ナデ	
49	鉢 J	M-6	口径2.4、底径2.1	1~2	5		並	淡橙褐色 淡灰褐色	ナデ、オサエ	手握ね
50	脚台部	B-3	脚部径 8.4	1~2少	3	シャーモット	良	黒褐色	ナデ	
51	脚台部	B-4	脚部径 8.8	1~2少	3	シャーモット	並	淡橙褐色	ミガキ ミガキ、ナデ	
52	脚台部	D-12	脚部径 8.4	1~2	5	シャーモット	並	淡橙褐色	ケズリ ナデ	
53	底部	D-7	底径 4.6	1~2少	4	シャーモット	並	淡褐色	ナデ ナデ、オサエ	
54	底部	A-18	底径 4.8	1~2	4	シャーモット	並	橙褐色	摩耗	
55	底部	C-18	底径 4.8	1	5	シャーモット	並	赤橙褐色 淡黄褐色	ハケ	
56	底部	C-19	底径 5.7	1	4	シャーモット	並	淡橙褐色 灰褐色	ハケ	
57	底部	C-17	底径 3.9	1~2	4	シャーモット	良	淡黄褐色 灰褐色	ハケ ケズリ	
58	底部	C-17	底径 3.9	1~2	5	シャーモット	良	橙褐色 灰褐色	ハケ ケズリ	
59	底部	C-17	底径 4.8	1~3	4	シャーモット	並	淡橙褐色 灰褐色	ハケ	
60	底部	D-11	底径 7.1	1~2少	5	シャーモット	良	黒灰褐色 淡褐色	ミガキ ナデ	
61	底部	C-7	底径 4.2	1~2	1	シャーモット	並	褐色	ナデ 摩耗	
62	底部	B-15	底径 4.5	1~2	3	シャーモット	並	淡灰褐色 淡褐色	摩耗	
63	底部	D-4	底径 7.0	1~2	2	シャーモット	並	橙灰褐色 灰褐色	ナデ ケズリ	
64	底部	C-18	底径 5.4	1少	1		良	黒褐色	ハケ ケズリ	
65	底部	C-18	底径 5.4	1~2	2	シャーモット	並	黒褐色 淡灰褐色	ハケ ケズリ	
66	底部	C-19	底径 3.8	1~2	3	シャーモット	並	橙褐色 淡灰褐色	ハケ ケズリ	

図番号	器種	出土地点	法量 (cm)	胎土・焼成			色調	外内	調整	外内	備考
67	底部	B-17	底径4.5	1~2	1		並	淡黄褐色	ハケ ケズリ		
68	底部	D-12	底径4.8	1~2	3	シャーモット	良	褐色 灰褐色	ナデ ケズリ		
69	底部	C-2	底径5.0	1~2	3		並	淡橙褐色 淡褐色	ハケ		
70	底部	C-18	底径5.2	1~2	2	シャーモット	並	淡黄褐色	ナデ		外面赤褐色痕
71	底部	C-18	底径5.3	1~2少	1	黒雲母	並	灰褐色	ナデ ケズリ		
72	底部	C-14	底径2.7	1~3	2	シャーモット	並	淡橙褐色 淡灰褐色	ケズリ 摩耗		
73	底部	B-4	底径2.1	1~2	1	シャーモット	並	淡灰白色 淡褐色	ハケ		
74	底部	M-4	底径2.4	1~2	2	シャーモット	並	淡褐色	ハケ ケズリ		底部穿孔
75	土錘	C-17	長4.5、幅3.9	1~3	4		並	褐色	ナデ		
76	土錘	C-17	長5.1、幅3.6	1~2	2	シャーモット	並	褐色	ナデ		

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土成	色調内外	調整	備考
第38図 1	須恵器 (有台坏)	カマド付近	口径 11.8 器高 3.8 底径 8.4 高台高 0.5	並 (1~2mmの 砂粒) 良 好	淡青灰色	内外面ナデ	
2	須恵器 (把手付鉢)	カマド面・上層 M-4	底径 14.0	良 不 良	灰褐色	内外面ナデとカキ目 把手部はオサエ。外底は 粗雑なナデ	
第39図 3	土師器 (甕)	カマド面	口径 21.6	並 (1~4mmの 砂粒) 並	乳橙褐色	口縁から胴部約1/4がナデ で内面の一部にカキ目胴 部はタタキ	内面に炭化物 が付着
4	土師器 (甕)	カマド面	口径 20.7	良 (1~2mmの 砂粒) 良 好	淡黄色 乳橙褐色	外面はナデとカキ目 内面は摩耗	胴部外面に煤 付着
5	土師器 (鉢・埴類)	床面		並 (1~3mmの 砂粒) 並	乳白色	摩耗	

## 7号土坑

第49図 7	須恵器 (蓋)	上層	口径 13.0 器高 3.1 紐径 2.0 紐高 0.9	粗 (1~4mmの 砂粒) 良 好	淡紫灰色 淡緑灰色	内外面ナデ。天井部はケ ズリの後、不定方向のナ デ	外面に降灰
8	須恵器 (蓋)	上層	口径 13.2 器高 3.0 紐径 2.2 紐高 0.9	並 (1~3mmの 砂粒) 不 良	黄灰色	内外面ナデ。天井部はケ ズリ	
9	須恵器 (坏)	上層	口径 12.1 器高 3.8 底径 7.9	良 好 不 良	橙灰色	内外面ナデ。外底はへら 切り	

## 24号土坑

第70図 1	内黒土器 (碗)	B-14	口径 12.8 器高 3.0 底径 4.2	並 (1mm前後 の砂粒) 良 好	淡褐色	内面研磨。外面は摩耗	外面の器面が 剥脱し荒れて いる。
2	内黒土器 (鉢)	B-14	口径 25.8	並 (1~2mmの 砂粒) 良 好	淡橙褐色	内面研磨。外面ナデ	

## 8、9号住居址上面遺構

第73図 1	須恵器 (坏)	25号土坑	口径 12.4 器高 3.5 底径 9.3	並 (1~3mmの 砂粒) 並	淡灰色 淡青灰色	内外面ナデ。外底はへら 切り後、粗雑なナデ	
2	須恵器 (坏)	25号土坑	底径 9.7	並 (1~2mmの 砂粒) 不 良	淡黄灰色	内外面ナデ。外底はへら 切り後、粗雑なナデ	
3	須恵器 (有台坏)		口径 9.8 器高 4.2 底径 5.8 高台高 0.6	並 (1~2mmの 砂粒) 良 好	淡青灰色 暗青灰色	内外面ナデ	
4	フイゴ羽口		外径 5.4 内径 2.5	1~4mmの砂粒	淡橙褐色		口部が溶解す る

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎焼土成	色調内外	調整	備考
第91図 1	須恵器(蓋)	M-4 黒色土層	口径 11.6 器高 2.9 鈕径 2.0 鈕高 0.9	並(1~5mmの砂粒) 良好	青灰色	内外面ナデ。天井部外面はケズリ	内面にへら記号
2	須恵器(蓋)	M-7 土壘盛土内	口径 11.2 器高 2.8 鈕径 1.7 鈕高 0.9	並(1~3mmの砂粒) 良好	青灰色	内外面ナデ。天井部外面はケズリ	
3	須恵器(蓋)	M区 表土下部	口径 11.6 器高 2.9 鈕径 2.2 鈕高 1.0	粗(5mm前後の砂粒) やや不良	淡灰色	内外面ナデ。天井部外面はケズリ	
4	須恵器(蓋)	14号住居址 上層	口径 11.8 器高 2.4 鈕径 1.8 鈕高 0.9	並(1~3mmの砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ。天井部外面はケズリ	
5	須恵器(蓋)	M-1・2・3 表土下部	口径 12.6 器高 2.9 鈕径 2.4 鈕高 0.7	粗(1~5mmの砂粒) 良好	淡青灰色 青灰色	内外面ナデ。天井部外面はケズリ	
6	須恵器(蓋)	14号住居址 上層	口径 16.8 器高 4.0 鈕径 2.6 鈕高 1.3	粗(1~5mmの砂粒) 良好	淡青灰色 暗青灰色	内外面ナデ。天井部外面はケズリ	
7	須恵器(蓋)	M-5 土壘盛土	口径 17.1 器高 2.9 鈕径 2.3 鈕高 1.0	並(1mm前後の砂粒) 良好	暗紫灰色 淡紫灰色	内外面ナデ。天井部外面はケズリ	外面に降灰
8	須恵器(蓋)	B-12 ピット2	口径 16.4	良好 やや不良	淡灰色	内外面ナデ	
9	須恵器(蓋)	M-3・4 C-12	口径 12.4	並(1~4mmの砂粒) 良好	緑灰色 暗紫灰色	内外面ナデ	内面に降灰
10	須恵器(有台坏)	M-7 土壘盛土内	口径 11.6 器高 4.7 底径 7.2 高台高 0.5	並(1~2mmの砂粒) 不良	淡黄灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	
11	須恵器(有台坏)	C-6 表土下部	底径 7.8 高台高 0.5	良好	淡青灰色	内外面ナデ 外底に爪状の圧痕	
12	須恵器(有台坏)	M-4 整地土層	底径 6.8 高台高 0.5	並(1~4mmの砂粒) 並	淡青灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	外底にへら記号
13	須恵器(有台坏)	5号土坑 上層	底径 7.4 高台高 0.5	並(1~3mmの砂粒) 良好	青灰色	内外面ナデ	
14	須恵器(有台坏)	M-7 土壘盛土内	底径 6.4 高台高 0.5	並(1~2mmの砂粒) 良好	青灰色	内外面ナデ	
15	須恵器(有台坏)	D-14 黒色土・表土 下部	口径 10.8 器高 4.7 底径 5.8 高台高 0.5	良好	淡青灰色	内外面ナデ	
16	須恵器(有台坏)	D-14 黒色土・表土 下部	底径 8.0 高台高 0.4	並(1~3mmの砂粒) 良好	青灰色	内外面ナデ	
17	須恵器(有台坏)	M-4	底径 7.5 高台高 0.6	良好 やや不良	淡青灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎焼土成	色調内外	調整	備考
第91図18	須恵器 (有台坏)	M-7 土壘盛土内	底径 10.6 高台高0.7	粗(1~4mmの 砂粒多) 良好	紫灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	
19	須恵器 (有台坏)	M-4 ピット-20	底径 9.2 高台高0.8	並(1~4mmの 砂粒) 並	淡紫灰色	内外面ナデ。外底はへら 切り後粗雑なナデ	
20	須恵器 (有台坏)	M-6 土壘盛土内	底径 9.8 高台高0.5	並(1~4mmの 砂粒) やや不良	淡青灰色	内外面ナデ。外底はへら 切り後粗雑なナデ	
21	須恵器 (有台坏)	B-12 表土下部	口径 13.2	良好	青灰色 暗青灰色	内外面ナデ	
22	須恵器 (有台坏)	M-6		並(1~3mmの 砂粒) 並	淡青灰色	内外面ナデ	
23	須恵器 (有台坏)	M区 表土下部		並(1~3mmの 砂粒) 良好	暗灰色	内外面ナデ	
24	須恵器 (有台坏)	M-2		並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ	
第92図25	須恵器 (坏)	M-2 表土下部	口径 12.0 器高 2.7 底径 8.6	良好 やや不良	淡黄灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	外底に「前」 の墨書
26	須恵器 (底部)	M区		並	淡青灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	外底に墨書
27	須恵器 (坏)	M-4 黑色土層	口径 11.6 器高 2.5 底径 8.3	良好	淡灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	外底に墨書
28	須恵器 (坏)	14号住居址 上層	口径 11.4 器高 3.0 底径 7.7	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後ナデ	
29	須恵器 (坏)	M区	口径 12.0 器高 2.9 底径 8.6	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底はへら 切り後へら先によるナデ	
30	須恵器 (底部)	M-2 表土下部	底径 8.8	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡灰色	外底はへら切り後粗雑な ナデ	外底はへら記 号
31	須恵器 (坏)	D-14 表土下部	口径 13.3 器高 3.1 底径 7.7	良好 不良	乳白色	内外面ナデ 外底はへら切り	
32	須恵器 (坏)	M-6 土壘盛土内	口径 11.4 器高 3.1 底径 7.2	並(1~2mmの 砂粒) 不良	灰白色	内外面ナデ 外底はへら切り後粗雑な ナデ	
33	須恵器 (坏)	M-4 黑色土層	口径 12.8 器高 4.7 底径 7.0	並	淡青灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後粗雑な ナデ	
34	須恵器 (坏)	M-4 黑色土層	口径 14.0 器高 3.7 底径 7.4	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡灰色	内外面ナデ 外底はへら切り後粗雑な ナデ	
35	須恵器 (高坏)	M-3・4	坏部底径 10.0	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡灰色	内外面ナデ。坏部外底は へら切り後ナデ	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土成	色調内外	調整	備考
第92図36	須恵器 (横瓶)	M-6・7 C-12	口径 9.6 頸部径7.9	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡青灰色 淡緑灰色	口頸部ナデ。体部外面タ タキとカキ目。内面ナデ	降灰による自然 釉
37	須恵器 (横瓶)	M-6		粗(1~5mmの 砂粒多) 良好	淡青灰色 淡緑灰色	外面はタタキとカキ目 内面はタタキとオサエ	
38	須恵器 (双耳瓶)	M-2		並(1~3mmの 砂粒) 良好	青灰色	内外面ナデ	
39	須恵器 (瓶)	M-4・5 D-15	底径 13.8	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡灰色 淡青灰色	内面ナデ。外面不定方向 のケズリ。外底は粗雑な ナデ	
第93図40	須恵器 (甕)	M-3・4・5	口径 29.9	良好 やや不良	淡灰褐色	口縁部ナデ。体部はタタ キの後カキ目	
41	須恵器	M-5		並(1~4mmの 砂粒) 良好	淡青灰色	タタキ	甕片の融着
42	土師器 (底部)	D-14 黒色土層	底径 5.0	並(1~3mmの 砂粒) 良好	暗褐色	外底は糸切り	
43	土師器 (底部)	M-4	底径 6.6	良好	淡褐色	外底は糸切り	
44	内黒土器 (有台碗)	M-7	底径 7.2 高台高1.2	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
45	内黒土器 (有台碗)	5号土坑 上層	口径 18.4	良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
46	土師器 (皿)	D-7 表土下部	口径 13.4 器高 2.7 底径 5.2	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡褐色	摩耗	
47	土師器 (甕)	M-2 ピット-26	口径 15.6	粗(1~6mmの 砂粒) 良好	淡褐色 淡橙褐色	摩耗	
48	土師器 (甕)	D-14 黒色土層	口径 16.2	並	乳白色	摩耗	
49	土師器 (甕)	D-14 黒色土層	口径 16.0	良好	淡褐色	内外面ナデ	
50	土師器 (甕)	D-10 土塁盛土内	口径 24.8	良好	淡褐色 濁褐色	口縁部ナデ。体部外面ハ ケとナデ。内面ナデと斜 方向のナデ	
51	土師器 (鉢・埴類)	M-5		並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡橙褐色	摩耗	
52	土師器 (鉢・埴類)	M-3 表土下部		並(1~3mmの 砂粒) 良好	灰褐色	内外面ナデ	

## 南側調査区

第94図 1	須恵器 (蓋)	C-18 斜面流土	口径 11.2	並(1~3mmの 砂粒を含む) やや不良	灰白色	内外面ナデ。天井部外面 はヘラ切り後粗雑なナデ	内面に黒痕 転用硯
--------	------------	--------------	---------	----------------------------	-----	----------------------------	--------------

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎焼土成	色調内外	調整	備考
第94図2	須恵器(蓋)	A-18・19 土器溜り	口径 14.0 器高 2.5 鈕径 2.3 鈕高 0.7	並(1~4mmの砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ	外面に降灰
3	須恵器(蓋)	A-19 斜面流土	口径 15.4	良(1~4mmの砂粒) やや不良	灰白色	内外面ナデ。天井部外面は定方向ナデ	ヘラ書きあり
4	須恵器(蓋)	A-19 斜面流土	口径 16.4	良(1~2mmの砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ。天井部外面はヘラ切り後粗雑なナデ	
5	須恵器(蓋)	A-18・19 土器溜り	口径 16.0 器高 2.1 鈕径 1.9 鈕高 1.0	やや不良(1~4mmの砂粒) 良好	緑灰色 暗紫灰色	内外面ナデ	外面に降灰
6	須恵器(蓋)	A-18・19 土器溜り	口径 16.4 器高 3.7 鈕径 2.5 鈕高 1.2	並(1~4mmの砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ	内面に墨痕転用硯?
7	須恵器(蓋)	C-18. 斜面流土	口径 17.1 器高 3.2 鈕径 2.4 鈕高 0.8	並(1~2mmの砂粒) 良好	青灰色	内外面ナデ	
8	須恵器(坏)	D-15 斜面流土	口径 12.0 器高 2.9 底径 6.0	良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底面はヘラ切り後、粗雑なナデ	
9	須恵器(坏)	A-18 斜面流土	底径 8.2	良好	青灰色	内外面ナデ。体部下ケズリ。外底は粗雑なナデ	
10	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	口径 12.6 器高 3.6 底径 6.0	並(1~3mmの砂粒) やや不良	橙灰色	内外面ナデ。外底面はヘラ切り後、ヘラ状具とナデの粗雑調整	
11	須恵器(坏)	C-19 表土下部	口径 11.5 器高 3.1 底径 8.1	良好 やや不良	淡黄灰色	内外面ナデ。外底はヘラ切り後ナデ	
12	須恵器(坏)	C-19 斜面流土	口径 11.6 器高 2.8 底径 8.4	良好	淡灰色	内外面ナデ。外底面はヘラ切り後ナデ	
13	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径 11.8 器高 3.6 底径 9.0	並(1~3mmの砂粒) やや不良	淡紫灰色	内外面ナデ。外底はヘラ切り後ナデ	外底にタール
14	須恵器(坏)	C-18・19 斜面流土	口径 12.5 器高 3.2 底径 8.2	並(1~5mmの砂粒) 良好	淡紫灰色	内外面ナデ。外底面はヘラ切り後ナデ	
15	須恵器(坏)	A-18 表土下部	口径 13.0 器高 3.5 底径 6.6	良(1~2mmの砂粒) 並	淡青灰色	内外面ナデ。外底はヘラ切り	
16	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	口径 12.8 器高 3.8 底径 7.0	良好	淡灰色	内外面ナデ。外底はヘラ切り後、粗雑なナデ	灯芯痕あり
17	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径 14.3 器高 3.7 底径 6.9	並良好	淡灰色	内外面ナデ。外底はヘラ切り後、ヘラ状具で粗雑なナデ	灯芯痕あり
18	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	口径 14.0 器高 3.7 底径 7.0	並(1~3mmの砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底はヘラ切り後、ヘラ状具で粗雑なナデ	灯芯痕あり
19	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	口径 13.7 器高 4.1 底径 6.8	並(1~4mmの砂粒) 良好	淡灰色	内外面ナデ。外底はヘラ切り後、ヘラ状具で粗雑なナデ	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎焼土成	色調内外	調整	備考
第94図20	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径 13.6 器高 3.9 底径 7.1	並 やや不良	灰白色	内外面ナデ。外底はへら切り後、へら状具で粗雑なナデ	
21	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径 13.4 器高 4.1 底径 6.2	並 やや不良	淡橙灰色	内外面ナデ。外底はへら切り後、へら状具で粗雑なナデ	灯芯痕あり
22	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	口径 13.3 器高 3.9 底径 6.5	並(3~5mmの砂粒) 並	淡灰色	内外面ナデ。外底はへら切り後、へら状具で粗雑なナデ	灯芯痕あり
23	須恵器(坏)	C-18 斜面流土	口径 12.6 器高 3.1 底径 7.0	並(1~3mmの砂粒) 並	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
24	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	底径 6.4	並(1~3mmの砂粒) 良好	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
25	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	口径 13.0 器高 3.9 底径 6.6	良(1~3mmの砂粒) 良好	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	灯芯痕あり
26	須恵器(坏)	C-18 斜面流土	口径 13.2 器高 3.7 底径 7.0	並(5mm大の砂粒を少し) 良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	灯芯痕あり
27	須恵器(坏)	C-18 斜面流土	口径 13.2 器高 3.5 底径 6.8	並(1~3mmの砂粒) やや不良	灰白色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
28	須恵器(坏)	C-18 斜面流土	口径 13.2 器高 3.8 底径 7.5	良好 やや不良	灰白色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	灯芯痕あり
29	須恵器(坏)	C-18 斜面流土	口径 13.0 器高 3.9 底径 6.4	良好	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
第95図30	須恵器(坏)	C-18 斜面流土	口径 12.6 器高 3.1 底径 7.6	良(1~2mmの砂粒) 良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
31	須恵器(坏)	A-20 斜面流土	口径 15.6	良好	淡青灰色	内外面強いナデ	
32	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径 12.7 器高 2.7 底径 7.0	やや不良 良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	灯芯痕あり
33	須恵器(坏)	C-18 斜面流土	口径 13.2 器高 2.5 底径 6.7	並(1~2mmの砂粒) 良好	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
34	須恵器(坏)	C-19 表土下部	口径 14.5 器高 2.9 底径 7.8	やや不良 並	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
35	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	器高 3.2	やや不良 並	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
36	須恵器(坏)	A-18・19 土器溜り	口径 11.2 器高 2.6 底径 6.6	並(1~2mmの砂粒) 並	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	灯芯痕あり
37	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径 12.5 器高 2.7 底径 6.1	並(1~4mmの砂粒) やや不良	淡黄灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	灯芯痕あり

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土成	色調内外	調整	備考
第95図38	須恵器(坏)	D-15 斜面流土	口径12.0 器高2.9 底径6.0	良(1~2mmの砂粒)並	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	体内内外全面にタール付着
39	須恵器(坏)	B-18 ピット	口径12.5 器高3.1 底径6.6	良(1~2mmの砂粒)好	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	灯芯痕あり
40	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径13.1 器高3.0 底径8.1	並(1~4mmの砂粒)不良	乳白色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
41	須恵器(皿)	A-19 斜面流土	口径12.8 器高2.7 底径6.8	並(1~3mmの砂粒)良好	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	内面に墨痕 転用硯
42	須恵器(坏)	A-19 斜面流土	口径13.0 器高2.8 底径8.0	並(1~4mmの砂粒)良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	
43	須恵器(皿)	C-18 斜面流土	口径12.3 器高1.5 底径7.2	並(1~2mmの砂粒)良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	内面に墨痕 転用硯?
44	須恵器(皿)	C-18 斜面流土	口径12.8 器高2.3 底径6.8	良(1mm前後の砂粒)良好	淡青灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	内面に墨痕 転用硯
45	須恵器(皿)	C-19 表土下部	口径14.4 器高2.4 底径8.0	良好	淡緑灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	内面に墨痕 転用硯
46	須恵器(皿)	A-19 斜面流土	口径13.4 器高2.5 底径5.5	並(1~2mmの砂粒)良好	淡灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	内面に墨痕
47	須恵器(皿)	A-19 斜面流土	口径12.6	並(1~3mmの砂粒)良好	淡灰色	内外面ナデ	
48	須恵器(有台皿)	C-18 斜面流土	口径14.1 器高3.2 高台径7.2 高台高1.0	並(1~2mmの砂粒)並	淡灰色	内外面ナデ。高台貼付部はケズリの後、ナデ	内面に墨痕 転用硯
49	須恵器(坏)	C-20 表土下部	口径9.9 器高3.5 底径6.7	並(1~2mmの砂粒)並	灰色	内外面ナデ。外底は粗雑なナデ	タールと煤が付着、口縁部に径3mmの穿孔あり
50	須恵器(脚部)	C-18 斜面流土	底径9.7 脚高2.7	並(1~2mmの砂粒)良好	淡灰色	内外面ナデ	径1.0cmの円径透し穴あり
51	須恵器(底部)	C-18 斜面流土	底径5.1	並(1~3mmの砂粒)良好	青灰色 淡青灰色	内外面ナデ。外底はケズリ	内面に朱墨痕あり
52	須恵器(瓶)	C-18 斜面流土	胴径12.5 底径8.0 高台径1.0	並(3~5mmの砂粒)良好	淡緑灰色 淡灰色	内面ナデ。外面はケズリとナデ。外底は糸切り後ナデ	肩部に降灰
53	須恵器(瓶)	C-18 斜面流土	胴径13.3	やや不良(1~4mmの砂粒)良好	淡青灰色 暗青灰色	内外面ナデ	外面降灰で一部暗緑灰色
54	須恵器(瓶)	A-19 斜面流土		並(1~3mmの砂粒)良好	淡緑灰色 淡灰色	外面ケズリ。内面ナデ	降灰あり
第96図55	須恵器(多口瓶)	A・B-18 表土下部	主口径6.0 副口径4.3 器高13.7 胴径17.4 底径11.1	並(1~2mmの砂粒)良好	暗灰色	内外面ナデ。胴部下半は定方向・不定方向のケズリとナデ。外底は粗雑なナデ	降灰あり。副口5個

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎焼土成	色調内外	調整	備考
第96図56	須恵器 (多口瓶)	A・B-18 表土下部	主口径6.4 副口径4.5 器高19.8 胴径16.7 底径10.4 高台高0.8 凹帯径15.4	良(1mm程度 の砂粒) 良好	淡灰色	内外面ナデ。胴部はケズリ後ナデ。内底にカキ目	副口4個
57	須恵器 (鉢)	C-19 表土下部	口径 22.6	良好	淡青灰色	外面ケズリ。口縁部ナデ。内面はナデと不定方向のナデ	
58	須恵器 (鉢)	A-18・19 土器溜り	口径 12.2	並(1~2mmの 砂粒) やや不良	淡灰色	外面ナデ。内面カキ目	
59	須恵器 (壺)	C-18 斜面流土	口径 19.5 器高 6.1	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡青灰色	口縁部内外ナデ。体部外面は不定方向のケズリとナデ。内面は定方向と不定方向のカキ目	
60	須恵器 (鉢)	A-20 斜面流土		良好	淡灰色	内外面ナデ	
61	須恵器 (甕)	C-18 斜面流土	口径 23.8	並(1~4mmの 砂粒) 良好	緑灰色	口頸部内外ナデ。胴部タタキ	降灰あり
62	須恵器 (甕)	C-16 表土下部		並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡灰色	内外面タタキ	火ぶくれあり
63	灰釉 (碗)	B-18 表土下部	口径 12.9 器高 4.1 高台径6.8 高台高0.7	並 やや不良	淡緑灰色	内外面ナデ。外底ケズリ	
64	灰釉 (皿)	C-18 斜面流土		良好	緑灰白色	内外面ナデ	
65	灰釉 (手付瓶)	B-19 表土下部	口径 3.4 器高 9.8 底径 5.2	並 良好	淡緑灰色	内外面ナデ。外底は静止糸切り	
第97図 1	土師器 (碗)	A-18・19 土器溜り	口径 13.2 器高 4.2 底径 6.4	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
2	土師器 (碗)	A-18・19 土器溜り	口径 12.7 器高 3.7 底径 5.8	良好	乳褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	口縁部のほぼ 前面にタール
3	土師器 (碗)	A-18・19 土器溜り	口径 13.4 器高 4.3 底径 4.8	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	内外全面タール
4	土師器 (碗)	A-18・19 土器溜り	口径 13.2 器高 3.7 底径 6.0	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
5	土師器 (碗)	C-18 斜面流土	口径 13.5 器高 4.3 底径 5.2	粗(1~4mmの 砂粒) 良好	淡褐色	摩耗するがナデ。外底は糸切り	灯芯痕あり
6	土師器 (碗)	C-18 斜面流土	口径 13.8 器高 4.6 底径 5.6	良(1mm前後 の砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土成	色調	内外調	備考
第97図 7	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 13.9 器高 3.9 底径 6.7	良 (1~4mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	外面にタール
8	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 15.6	並 (1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ	
9	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 12.3 器高 3.4 底径 5.2	良好 並	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
10	土師器 (埴)	A-18・19 土器溜り	口径 13.9 器高 4.0 底径 5.7	良好	乳褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
11	土師器 (埴)	A-18・19 土器溜り	口径 13.1 器高 3.6 底径 5.8	良 (1mm前後 の砂粒) 良好	乳橙色	摩耗 外底は糸切り	内外面にタール
12	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 14.1 器高 4.4 底径 6.2	並 (1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
13	土師器 (埴)	A-18・19 土器溜り	口径 13.5 器高 4.1 底径 5.5	並 (1~2mmの 砂粒) 良好	乳橙色	内面は摩耗、外面はナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
14	土師器 (埴)	A-18・19 土器溜り	口径 13.2 器高 3.8 底径 6.5	並 (1~4mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
15	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 12.4 器高 3.4 底径 5.4	良 (1~2mmの 砂粒少) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
16	土師器 (埴)	A-18・19 土器溜り	口径 13.6 器高 4.2 底径 5.2	良好 並	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
17	土師器 (埴)	A-19 斜面流土	口径 13.4 器高 4.5 底径 5.0	並 (1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
18	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 15.1	良 (1mm前後 の砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ	
第98図 19	土師器 (埴)	A-19 斜面流土	口径 13.6 器高 4.0 底径 5.5	粗 (1~2mmの 砂粒多) 並	淡褐色	摩耗	
20	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 13.2 器高 4.0 底径 5.2	良 (1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
21	土師器 (埴)	A-18・19 土器溜り	口径 14.3 器高 4.3 底径 5.4	良 (1mm前後 の砂粒) 良好	乳橙色	内外面ナデ 外底は糸切り	内外面にタール。外底に及ぶ。
22	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 13.8 器高 4.1 底径 5.6	良 (1mm前後 の砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
23	土師器 (埴)	A-18・19 土器溜り	口径 13.1	良好	乳白色	内外面ナデ	灯芯痕あり
24	土師器 (埴)	C-18 斜面流土	口径 15.0	良 (1mm前後 の砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎焼土成	色調内外	調整	備考
第98図25	土師器(埴)	A-18・19 土器溜り	□径 14.0 器高 4.5 底径 6.0	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
26	土師器(埴)	A-19 斜面流土	□径 13.8 器高 4.5 底径 5.0	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡褐色	ナデか 外底は糸切り	内外ほぼ前面 にタール
27	土師器(埴)	A-19 斜面流土	□径 13.8 器高 5.0 底径 5.2	粗(1~3mmの 砂粒多) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	内面にター ル。口縁部外 面に及ぶ。
28	土師器(埴)	C-18 斜面流土	□径 14.0 器高 4.5 底径 5.2	良(1~2mmの 砂粒) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	内面にタール
29	土師器(埴)	A-18・19 土器溜り	□径 13.5 器高 4.5 底径 5.0	並(1~4mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
30	土師器(埴)	C-18 斜面流土	□径 12.9 器高 4.8 底径 5.2	良(1~2mmの 砂粒少) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
31	土師器(埴)	C-18 斜面流土	□径 11.8 器高 3.4 底径 5.8	良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	内面に煤付着
32	土師器(埴)	A-18・19 土器溜り	□径 13.3 器高 4.6 底径 5.0	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	内外面にター ル
33	土師器(埴)	C-19 表土下部	□径 13.6 器高 3.7 底径 7.1	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底はへら切り	須恵器の生焼 か
34	土師器(埴)	C-18 斜面流土	□径 8.3 器高 4.1 底径 4.4	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底はへら切り	
35	土師器(埴)	C-18 斜面流土	底径 3.8	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底はへら切り	底部中央に径 0.7cmの穿孔
第99図36	土師器(埴)	C-18 斜面流土	□径 20.0	良(1mm前後 の砂粒少) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ	
37	土師器(埴)	C-18 斜面流土	底径 8.0	並(1~4mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
38	内黒土器(埴)	C-18 斜面流土	□径 15.6	並(1~4mmの 砂粒) 良好	乳白色	内面研磨 外面ナデ	
39	内黒土器(埴)	C-18 斜面流土	□径 13.4 器高 3.9 底径 5.8	良(1mm前後 の砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	内面にタール
40	土師器(埴)	C-18 斜面流土	□径 14.2 器高 3.3 底径 5.4	良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	黒班あり
41	内黒土器(埴)	A-19 斜面流土	□径 15.0 器高 3.8 底径 6.7	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は摩耗	内面にタール
42	内黒土器(埴)	C-18 斜面流土	□径 16.6 器高 5.4 底径 6.4	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土成	色調内外	調整	備考
第99図43	内黒土器 (碗)	A-19 斜面流土	口径 16.4 器高 4.9 底径 9.4	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
44	内黒土器 (碗)	C-18 斜面流土	底径 6.4	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
45	内黒土器 (碗)	C-18 斜面流土	底径 6.5	良(1mm前後 の砂粒) 良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
46	内黒土器 (碗)	A20-7	底径 7.0	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡灰褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
47	内黒土器 (碗)	C-18 斜面流土	底径 7.6	良好	橙褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
48	土師器 (有台碗)	C-19 表土下部	口径 14.4 器高 4.5 底径 7.6 高台高0.9	並(1~4mmの 砂粒) 良好	淡橙色	内面ミガキ。外面ナデ 外底は糸切り	
49	内黒土器 (有台碗)	南側調査区	底径 8.2 高台高0.8	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡橙褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
50	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 8.6 高台高0.9	良好	赤橙色	内外面ナデ 外底は糸切りで爪状圧痕	内外面にター ル
51	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.5 高台高1.0	良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底はナデで切り離しを 消す	
52	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	口径 14.6 器高 5.5 底径 7.2 高台高1.3	良(1mm前後 の砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底はナデで切り離しを 消す	
53	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 8.2 高台高1.5	良(1mm前後 の砂粒) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	内側の器面が 剥脱
第100図 54	内黒土器 (有台碗)	南側調査区	底径 7.6 高台高1.2	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	摩耗	
55	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.6 高台高1.0	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底は摩耗	
56	内黒土器 (有台碗)	C-19 表土下部	底径 9.4 高台高1.1	良(1mm前後 の砂粒) 良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
57	内黒土器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.8 高台高1.1	良(1mm前後 の砂粒) 良好	乳白色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	外面にター ル
58	内黒土器 (有台碗)	C-17 表土下部	底径 10.6 高台高1.3	並(1~5mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内面摩耗。外面ナデ 外底は糸切り	
59	内黒土器 (有台碗)	A-19 斜面流土	底径 10.7 高台高1.3	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内面摩耗。外面ナデ 外底は糸切り	
60	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.2 高台高1.2	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内面ナデ 外底は糸切り	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土 焼成	色調 内外	調 整	備 考
第100図 61	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 9.4 高台高1.4	粗(1~3mmの 砂粒多) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
62	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.6 高台高1.3	粗(1~3mmの 砂粒多) 良好	淡褐色	摩耗	
63	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	口径 16.6 器高 5.8 底径 7.4 高台高2.1	良好	乳白色	内外面ナデ 外底はナデで糸切り痕を 消す	
64	土師器 (有台碗)	C-17 斜面流土	口径 17.6	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	摩耗	
65	内黒土器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 8.8 高台高1.0	良好	乳白色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
66	土師器 (有台碗)	A-18 表土下部	口径 14.8 器高 5.5 底径 6.8 高台高1.0	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内面摩耗。外面ナデ 外底は糸切り	口縁部の一部 は熱を受け赤 褐色を呈する
67	土師器 (有台碗)	A-20 斜面流土	底径 7.1 高台高1.4	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
68	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 6.7 高台高1.0	並(1mm前後 の砂粒) 良好	淡橙褐色 淡褐色	摩耗	
69	土師器 (有台碗)	A-20 斜面流土	底径 8.1 高台高1.1	並(1mm前後 の砂粒) 良好	淡橙褐色 淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
70	内黒土器 (有台碗)	A-20 斜面流土	底径 8.0 高台高1.5	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
71	内黒土器 (有台碗)	A-20 斜面流土	底径 9.4 高台高1.4	並(1~4mmの 砂粒少) 良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
72	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.0 高台高0.9	並(1mm前後 の砂粒) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
73	内黒土器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 8.4 高台高1.4	良好	乳白色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
74	内黒土器 (有台碗)	A-18・19 土器溜り	口径 14.9 器高 5.6 底径 7.9 高台高0.9	並(1mm前後 の砂粒) 良好	乳白色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	灯芯痕あり
75	内黒土器 (有台碗)	A-18・19 土器溜り	口径 15.4 器高 5.5 底径 7.8 高台高1.0	並(1mm前後 の砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は摩耗	
76	内黒土器 (有台碗)	C-19 表土下部	底径 7.4 高台高1.0	並(1mm前後 の砂粒) 良好	淡褐色	内面研磨。外面ナデ 外底は糸切り	
77	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.4 高台高1.1	並(1mm前後 の砂粒多) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
78	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 6.8 高台高0.6	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土成	色調内外	調整	備考
第100図 79	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.2 高台高0.8	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
第101図 80	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 6.5 高台高1.1	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
81	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 6.6 高台高0.8	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
82	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.1 高台高0.9	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は摩耗	
83	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.2 高台高0.3	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡橙褐色	摩耗	外面に黒斑
84	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 7.6 高台高1.3	良(1mm前後 の砂粒少) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
85	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 8.5 高台高2.0	良(1mm前後 の砂粒少) 良好	乳白色	摩耗	
86	土師器 (有台碗)	C-18 斜面流土	底径 9.0 高台高1.6	良(1mm前後 の砂粒少) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は切り離し後、ナデ	高台貼付が明瞭
87	土師器 (皿)	南側調査区	口径 12.8 器高 3.0 底径 4.2	並(1~3mmの 砂粒多) 良好	淡褐色	摩耗	
88	土師器 (皿)	C-18 斜面流土	口径 12.6 器高 2.8 底径 4.8	良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
89	土師器 (皿)	A-19 斜面流土	口径 14.8 器高 2.7 底径 6.0	並(1~2mmの 砂粒少) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
90	土師器 (皿)	C-18 斜面流土	底径 4.6	並(1~4mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
91	土師器 (皿)	C-18 斜面流土	底径 5.6	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は糸切り	
93	土師器 (有台皿)	A-18・19 土器溜り	口径 12.8 器高 3.2 底径 6.4 高台高0.8	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は摩耗	
94	内黒土器 (有台皿)	A-18・19 土器溜り	口径 13.4 器高 3.0 底径 7.2 高台高1.1	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳白色	摩耗	
95	土師器 (有台皿)	A-18・19 土器溜り	口径 12.9 器高 3.1 底径 7.2 高台高0.9	粗(1~3mmの 砂粒多) 良好	乳白色	摩耗	
96	土師器 (有台皿)	C-19 斜面流土	口径 13.6	並(1mm前後 の砂粒) 良好	乳白色	内外面摩耗 外底は糸切り	赤彩痕あり
97	土師器 (有台皿)	A-19 斜面流土	口径 13.2 器高 2.9 底径 7.4 高台高1.3	並(1mmの前 後砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切りで爪状の圧痕	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎土 焼成	色調 内外	調 整	備 考
第101図 98	土師器 (有台皿)	A-19 斜面流土	口径 13.8 器高 3.5 底径 7.4 高台高 1.4	並(1~3mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
99	土師器 (皿)	C-18 斜面流土	口径 12.8 器高 2.5 底径 8.6	並(1~2mmの 砂粒) 並	橙褐色	摩耗	須恵器の模倣か
100	内黒土器 (三足盤)	A-18・19 土器溜り	口径 18.6 器高 3.8 底径 11.8 足高 2.0	並(1mm前後 の砂粒) 良好	橙褐色	内面研磨。外面は摩耗	
101	土師器 (高坏)	A-18・19 土器溜り	口径 9.3 脚径 3.0	良好	乳褐色	内外面ナデ。脚部内面に しぼり痕	坏部と脚部の 境界にへら状 具による孔が 穿たれる
102	土師器 (高台部)	A-18 表土下部	高台径 7.2 高台高 3.2	並(1mm前後 の砂粒) 並	淡褐色	摩耗	
103	土師器 (高台部)	C-17 斜面流土	高台径 10.4 高台高 3.0	良好	淡褐色	ナデ	
104	土師器 (有台鉢)	C-18 斜面流土	口径 24.0	良好	乳白色	内外面ナデ	
第102図 105	土師器 (有台鉢)	A-18・19 土器溜り	口径 34.4 器高 13.5 底径 16.9 高台高 5.1	良好	淡橙褐色	内外面ナデ。体部下半を ケズリ	高台部に径 2.1cmの透し 穴あり。3ヶ 所か
106	土師器 (鉢)	C-18 斜面流土		並(1~3mmの 砂粒) 並	乳白色	摩耗	
107	土師器 (鉢)	A-18・19 土器溜り		並(1~3mmの 砂粒) 並	乳白色	摩耗	
108	土師器 (鉢)	A-18・19 土器溜り	口径 19.9 器高 7.0 底径 5.4	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ。外底は糸切 り後、へら状具による粗 雑なナデ	内外面の一部 に煤付着
109	土師器 (鉢)	A-18・19 土器溜り	口径 21.4 器高 7.1 底径 8.6	並(1~4mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は摩耗	シャームット が多量に混入
110	土師器 (鉢)	A-18・19 土器溜り	口径 20.9 器高 8.9 底径 8.1	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ 外底は摩耗	
111	土師器 (鉢)	A-20 斜面流土	口径 23.0 器高 9.1 底径 9.7	良好	灰褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	外面に煤付着
112	土師器 (鉢)	A-19 斜面流土	口径 21.4 器高 8.2 底径 8.2	並(1~4mmの 砂粒) 良好	淡橙褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
第103図 113	土師器 (鉢)	A-18・19 土器溜り	口径 22.2 器高 11.4 底径 9.7	粗(1~5mmの 砂粒) 良好	乳白色	摩耗	
114	土師器 (鉢)	A-18・19 土器溜り	口径 24.3 底径 12.6	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ	
115	土師器 (鉢・埴類)	A-18・19 土器溜り	口径 24.2	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ。体部下半を ケズリ	
116	土師器 (鉢・埴類)	A-18・19 土器溜り	口径 22.6	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	摩耗	

図番号	器種	出土地点	法量(cm)	胎焼土成	色調内外	調整	備考
第103図 117	土師器 (鉢・埴類)	C-18 斜面流土	口径 20.1	並(1~2mmの 砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ	
118	土師器 (鉢・埴類)	C-18 斜面流土		並(1~2mmの 砂粒) 良好	暗褐色	強いナデ	
119	土師器 (底部)	C-18 斜面流土	底径 9.2	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
120	土師器 (底部)	C-18 斜面流土	底径 9.4	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
121	土師器 (底部)	C-18 斜面流土	底径 8.4	並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
122	土師器 (底部)	C-18 斜面流土	底径 8.6	並(1~5mmの 砂粒) 良好	淡褐色	摩耗 外底は糸切り	
123	土師器 (底部)	A-18・19 土器溜り	底径 7.9	並(1~3mmの 砂粒) 良好	乳褐色	内外面ナデ 外底は糸切り	
124	土師器 (底部)	C-19 表土下部	底径 8.2	粗(1~2mmの 砂粒多) 良好	淡褐色	内面カキ目 外面は摩耗	
第104図 125	土師器 (鉢・埴類)	C-18 斜面流土	口径 19.8	並(1~4mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面ナデ	
126	土師器 (鉢・埴類)	C-18 斜面流土		並(1mm前後 の砂粒) 良好	乳白色	内外面ナデ	
127	土師器 (鉢・埴類)	C-19 斜面流土	口径 25.0	並(1~5mmの 砂粒) 良好	淡褐色	摩耗	
128	土師器 (鉢・埴類)	C-18 斜面流土		良好	淡褐色	内外面ナデ	外面に煤付着
129	土師器 (鉢・埴類)	A-19 斜面流土		並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	摩耗	
130	土師器 (鉢・埴類)	南側調査区		並(1~3mmの 砂粒) 良好	灰褐色	内面体部がカキ目 外面はナデ	口縁部に煤付着
131	土師器 (甕)	C-19 表土下部	口径 20.9	良好	淡橙褐色	内外面ナデ	外面に煤付着
132	土師器 (甕)	C-18 斜面流土	口径 19.2	良好	淡褐色	内面ナデ	
133	土師器 (底部)	A-19 斜面流土		良好	灰褐色 淡褐色	内面ナデ。外面摩耗	
134	内黒土器 (三足埴)	C-18 斜面流土		並(1~2mmの 砂粒) 良好	淡褐色	内外面タタキとナデ	内底に炭化物 付着 外面に煤付着
135	フィゴの 羽口	A-19					
136	フィゴの 羽口	C-17					

## 石 鏃

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	先端角度 (°)	挿図番号
6号住	(32.0)	14.1	4.5	1.9	(48)	第82-10
14号住	(26.5)	17.6	4.5	1.4	(37)	第82-18
14号住	(22.4)	20.7	4.1	1.5		第82-7
14号住	26.3	(17.1)	3.6	1.2	(52)	第82-12
10号土坑	(19.4)	15.2	3.7	1.1		第82-17
D-9	28.6	16.1	3.5	1.5	62	第82-8
M-1	19.8	16.1	4.0	1.0	68	第82-15
M-1	28.9	13.3	3.1	1.0	40	第82-9
M-2	19.8	14.3	3.2	0.8	62	第82-20
M-6	(26.3)	22.0	5.0	2.3		第82-3
M-6	32.2	18.5	6.3	2.6	43	第82-11
C-18	22.1	18.0	4.4	1.2	64	第82-14
B-18	(27.4)	18.3	3.7	1.7		第82-6
B-6	(31.4)	(20.2)	3.9	1.8	55	第82-2
B-12	22.2	18.6	3.6	0.9	49	第82-13
B-19	(38.9)	(22.4)	4.7	2.4	(44)	第82-1
C-12	(25.2)	(17.8)	3.9	1.2		第82-5
C-18	23.3	12.3	3.4	0.9	64	第82-16
D-7	18.4	16.0	2.6	0.6	59	第82-19
D-16	(20.4)	16.5	6.1	1.5		第82-4

## 石 匙

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
M-6	24.5	42.6	6.4	4.8	第82-21

## 块状耳飾

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
M-8	(24.4)	(12.2)	5.3	(3.2)	第82-22

## 石 核

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
D-11	43.0	42.9	36.2	60.8	第82-23

## 原 石

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
C-18	(52.4)	(41.6)	(40.6)	(115.8)	第82-25
C-18	(42.8)	(53.1)	(29.4)	(63.5)	第82-24

## 礫石鏃

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	打欠部幅 (mm)	挿図番号	
1号溝	88.3	61.4	12.5	65.1	13.5	24.0	第83-27
1号溝	66.5	50.5	19.3	93.2	9.0	20.0	第83-36
1号溝	70.1	48.9	27.5	93.4	14.0	18.5	第83-37
1号溝	69.0	(41.0)	18.6	(62.5)	10.0	14.0	第83-39
1号溝	67.0	57.8	16.1	68.9	12.3	12.0	第83-31
1号溝	(50.9)	(70.6)	(21.7)	(74.6)	12.5		第83-38
1号溝	59.1	56.2	12.2	44.1	9.2	13.0	第83-33
1号溝	(39.2)	(53.1)	(14.3)	(36.5)	12.0		第83-41
1号溝	61.6	51.0	24.9	110.0	15.5	16.5	第82-30
3号住	67.1	49.2	14.7	71.7	12.5	14.5	第83-29
C-2	50.0	44.2	17.1	47.9	12.5	18.0	第83-35
D-3	53.7	52.0	11.0	46.0	11.5	12.0	第83-34
D-3	66.7	70.2	30.5	196.0	12.8	24.3	第83-32
D-3	(44.0)	61.2	(13.1)	(26.0)	15.2		第83-40
D-10	75.1	61.8	30.0	151.5	13.0	16.8	第83-28

## 磨製石斧

## 31 石器一覧表

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
3号住	(67.5)	(46.3)	(21.4)	(94.4)	第83-42
トレンチ	90.2	49.7	22.6	153.6	第83-43
C-5	84.4	51.1	(18.0)	(74.5)	第83-44

## 磨 石

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
1号溝	76.4	67.8	48.7	364.5	第84-47
1号溝	78.5	(75.6)	45.3	(369.1)	第84-48

## 敲 石

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
トレンチ	103.4	86.3	48.0	(557.5)	第84-46

## 石 皿

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
1号溝	(131.0)	(76.0)	(63.6)	(699.0)	第84-51

## 砥 石

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
トレンチ	(119.8)	(94.5)	(30.5)	(418.5)	第89-78
8号住	(82.8)	(43.4)	(33.8)	(142.1)	第31-23
9号住	(126.3)	(35.3)	(24.5)	(118.6)	第31-22
8号住	(54.6)	(27.4)	(26.6)	(61.8)	第31-24
14号住	76.3	33.2	11.2	38.2	第36-30
5号土坑	98.2	67.5	16.6	60.4	第19-16
C-19	84.5	21.3	23.8	44.3	第89-77
C-19	(19.8)	(35.6)	(12.5)	(9.8)	第84-50

## 軽 石

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
7号住	89.3	64.3	51.7	32.2	第24-33
7号住	113.3	72.0	49.3	56.0	第24-32

## 管 玉

出土地点	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	挿図番号	
8号住	15.4	2.6	1.4	1.2	0.2	第31-28
9号住	12.2	3.5	1.7	1.4	0.2	第31-27
9号住	(5.4)	2.7	1.1		0.1	第31-26
D-14	12.9	5.8	2.1	1.9	0.6	第85-12

## 不 明 品

出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	挿図番号
M-2	104.2	62.1	(57.6)	(524.3)	第83-45
24号溝	70.7	63.0	32.0	226.5	第84-49
14号住	71.8	30.0	21.5	68.3	第36-31
3号住	41.3	27.8	13.9	23.3	第82-26

## 32 金属器、鉄滓一覧表

No.	種別	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	挿図番号	No.	種別	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	挿図番号
1	鉄鏃	3号住	5.6	1.9	5.9	第12-16	64	釘	B-18	4.9	1.9	9.0	第105-11
2		5号住	0.7	2.1	0.6	第18-33	65	釘	B-18	1.7	0.4	0.8	
3	鉄滓	8号住	5.0		41.6		66	釘	B-19	2.0	1.1	0.9	
4	鉄滓	8号住	3.5		15.3		67	釘	B-19	4.8	0.8	5.9	
5	鉄滓	8号住	6.1		37.3		68	釘	B-19	4.9	0.6	4.9	
6	釘	9号住	3.4	0.8	2.0		69	釘	B-19	4.8	0.6	4.2	
7	釘	8号住	1.9	0.6	2.7		70	鉄滓	C-8	2.8		6.4	
8	鉄滓	8号住	5.2		32.4		71	釘	C-15	3.8	1.2	5.7	第105-9
9	鉄滓	9号住	7.2		70.4		72		C-15	2.3	1.6	6.7	
10	鉄滓	8号住	3.0		13.2		73		C-15	1.7	1.7	3.1	
11	鉄滓	8号住	3.8		28.9		74	釘	C-16	2.9	0.8	4.4	
12	鉄鏃	9号住	5.1	1.8	4.9	第31-25	75		C-16	3.2	0.6	3.2	第105-2
13	釘	9号住	2.3	0.7	1.2	第73-7	76	鉄滓	C-16	4.8		43.1	
14	鉄滓	9号住	4.3		16.7		77	釘	C-17	3.8	0.7	5.3	第105-7
15	釘	9号住	3.8	0.8	2.9	第73-5	78	鉄滓	C-17	3.7		7.0	
16	釘	9号住	3.2	1.0	1.8	第73-6	79	鉄滓	C-17	3.2		9.1	
17	鉄滓	14号住	3.7		5.9		80	鉄滓	C-17	3.5		12.2	
18	鉄鏃	1号土坑	10.2	2.1	23.8	第8-13	81	釘	C-18	6.2	1.7	1.8	第105-5
19	鉄滓	7号土坑	8.6		258.7		82	釘	C-18	11.3	1.6	22.3	第105-10
20	鉄滓	5号土坑	4.1		5.9		83	釘	C-18	4.7	1.0	5.5	
21	釘	23号土坑	3.3	0.9	3.7		84	釘	C-18	3.5	0.6	1.6	
22	釘	19号土坑	3.2	0.9	2.9		85	鉄滓	C-18	2.8		5.2	
23	鉄斧	24号土坑	5.5	3.8	27.5	第70-3	86	釘	C-18	4.7	1.6	16.0	
24	鉄斧	24号溝	6.1	3.7	41.5	第105-19	87	鉄滓	C-18	5.4		60.1	
25	釘	土塁周溝	3.0	0.5	0.6		88	釘	C-19	4.9	0.5	6.3	
26	鉄滓	土塁周溝	3.6		9.0		89	釘	C-19	3.4	1.0	4.1	
27	釘	M-6ピット	3.6	1.9	4.5		90	鉄滓	C-19	2.3		4.7	
28	鉄滓	M-4ピット	2.1		2.6		91	釘	C-20	3.4	1.1	4.9	
29	鉄滓	A-5	3.3		6.6		92		D-10	2.4	5.2	14.2	第105-15
30	鉄滓	A-5	2.3		0.3		93	釘	D-15	5.0	0.9	6.7	第105-12
31	釘	A-14	2.5	0.8	2.4		94	釘	D-15	4.6	0.7	9.7	第105-13
32	釘	A-18	4.1	1.2	7.8	第105-8	95	鉄滓	M-2	3.5		10.4	
33	鉄滓	A-18・19	3.3		8.7		96		M-2	4.3	2.5	10.0	
34	鉄滓	A-18・19	1.1		0.8		97	釘	M-2	4.6	2.0	9.6	
35	釘	A-18・19	2.2	0.8	3.4		98	釘	M-2	1.6	0.5	0.4	
36	鉄滓	A-18・19	3.6		14.4		99	鉄滓	M-3	2.9		9.7	
37	鉄滓	A-18・19	3.2		24.1		100	鉄滓	M-3	3.8		30.8	
38	釘	A-18・19	4.1	0.9	8.3		101	釘	M-3	2.0	1.5	1.6	
39		A-19	2.3	3.8	5.3	第105-14	102	鉄滓	M-3	3.5		17.9	
40	釘	A-19	5.3	0.9	8.4		103	鉄滓	M-4	2.7		6.4	
41	釘	A-19	4.8	0.8	6.1		104	鉄滓	M-4	3.9		24.6	
42	釘	A-19	6.1	0.7	4.8		105		M-4	5.6	3.5	23.4	
43	釘	A-19	3.8	0.5	2.1		106	釘	M-4	2.7	0.8	0.3	
44	釘	A-19	4.0	0.9	3.7		107	釘	M-4	2.8	0.6	1.6	
45	釘	A-19	4.2	0.5	2.3	第105-3	108	釘	M-4	4.1	0.7	5.5	
46	釘	A-19	4.6	0.8	9.9		109	鉄滓	M-5	4.9		43.0	
47	釘	A-19	2.9	0.8	2.6		110	鉄滓	M-5	3.3		5.9	
48	釘	A-19	4.2	1.0	15.4		111	鉄滓	M-6	2.9		5.1	
49	釘	A-19	3.3	0.6	1.3		112	釘	M-6	3.0	0.6	0.8	
50	釘	A-19	8.4	0.4	5.7		113	鉄滓	M-6	2.6		6.2	
51	釘	A-19	2.8	0.8	4.9		114	鉄滓	M-6	2.3		1.6	
52	釘	A-19	2.4	0.8	3.4		115	鉄滓	M-8	4.0		37.6	
53	釘	A-19	2.1	0.7	1.6		116	鉄滓	C-17ピット	3.6		25.9	
54	釘	A-19	2.9	0.8	2.9		117	釘	C-16ピット	1.3	1.0	0.8	
55	釘	A-19	3.6	1.1	11.0		118	釘	B-18ピット	1.7	0.7	0.5	
56	鉄滓	A-19	3.9		15.9		119	釘	B-18ピット	1.1	0.7	0.6	
57	釘	A-20	3.2	0.6	2.4	第105-1	120	釘	不明	4.6	0.9	6.1	
58	釘	A-20	6.9	1.1	10.1	第105-4	121	釘	不明	5.3	0.3	4.3	第105-6
59	釘	B-18	2.6	0.8	2.1		122	釘	不明	2.2	0.9	2.4	
60	釘	B-18	4.1	0.7	10.2		123	簪	M-8	10.8		14.7	第105-16
61	釘	B-18	3.8	0.7	5.9		124	古銭	M-7	2.2		1.9	第105-18
62	釘	B-18	8.9	0.9	24.9		125	鉄砲玉	M-8	1.3		10.9	第105-17
63	釘	B-18	5.4	0.7	7.8								

おわりに

本書を報告するに当たっては石川県立埋蔵文化財センターの職員はじめ調査員の方々に大変多くの御協力を頂いている。特に土器分類一覧図の作製時には当センターの栃木英道氏より多大の御教示を得ており、感謝に堪えない次第である。なお弥生時代～古墳時代の遺構、遺物に関しては編者の不手際により内容が甚だ不完全であり、十分にまとめきれなかったことをお詫びしておきたい。

#### 参考文献

- 押水町史編纂委員会 『押水町史』 押水町 1974
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会 『角川日本地名大辞典 17 石川県』 角川書店 1981
- 藤則雄編 『石川の地形・地質案内』 東京法令出版 1985
- 秋田喜一 「能登国羽咋郡北大海村字東間宝殿古墳短報」『考古学雑誌』第25巻9号 日本考古学会 1935
- 秋田喜一 「羽咋郡中荘村上田通称地頭方遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第6号 石川考古学研究会 1954
- 秋田喜一 「羽咋郡押水町発見資料二点に就いて」『石川考古学研究会々誌』第8号 石川考古学研究会 1954
- 秋田喜一 「石川県羽咋郡押水町出土石器の一例」『古代学研究』37 古代学研究会 1964
- 秋田喜一 「能登宝達山出土土器の一例に就いて」『石川考古学研究会々誌』第12号 石川考古学研究会 1969
- 越坂一也 「押水町竹生野遺跡出土の石刃」『拓影』（石川県立埋蔵文化財センター所報）第12号 石川県立埋蔵文化財センター 1983
- 嵯峨井亮・松永清・村井一郎 「石川県高松町・押水町入会東間坂手山縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第9号 石川考古学研究会 1965
- 嵯峨井亮・村井一郎 「石川県押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第12号 石川考古学研究会 1969
- 嵯峨井亮・村井一郎 「押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告（第二次）」『石川考古学研究会々誌』第13号 石川考古学研究会 1970
- 高堀勝喜・西野秀和 『上田うまばち遺跡』 押水町教育委員会・石川考古学研究会調査団 1983
- 高松町大海公民館 『南大海村史』 1971
- 谷幸信・西野秀和 「羽咋郡押水町竹生野トリゲ山遺跡」『石川考古学研究会々誌』第19号 石川考古学研究会 1976
- 橋本澄夫 「石川県押水町森本大塚古墳の予備的調査」『石川考古学研究会々誌』第10号 石川考古学研究会 1966

- 浜岡賢太郎 「北陸地方Ⅰ」 『弥生式土器集成』本編 日本考古学協会 1968
- 浜岡賢太郎・吉岡康暢 「加賀・能登の古式土師器」『古代学研究』第32号 古代学研究会 1962
- 北陸旧石器文化研究会 「手取川流域旧石器時代遺跡群の予備的調査」『石川考古学研究会々誌』第29号 石川考古学研究会 1986
- 三浦純夫 『上田出西山遺跡発掘調査報告書』 押水町教育委員会 1980
- 村井一郎 「羽咋郡押水町北川尻オサノ山遺跡」『石川考古学研究会々誌』第10号 石川考古学研究会 1966
- 都出比呂志 「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』 大阪大学文学 1985
- 藤田邦雄 「近世火葬場遺構」『敷地天神山遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター 1983
- 平口哲夫他 『西下向遺跡発掘調査概要』 福井県三国町教育委員会 1983
- 橋本正 「富山県における先土器時代石器群の概要と問題」 『物質文化』24 1975
- 平口哲夫 「北陸におけるナイフ形石器文化の変遷についての予察」『北陸の考古学』（石川考古学研究会々誌第26号）1983
- 西井龍儀 「安養寺遺跡について」『大境』第2号 富山考古学会 1966
- 鈴木忠司他 『野沢遺跡』 平安博物館 1982
- 谷内尾晋司 「加賀・能登両国の成立—古代」 創土社 1978
- 米沢義光 『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター 1980
- 吉岡康暢・小嶋芳孝他 「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団 1976
- 田嶋明人他 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 栃木英道他 『北安江遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1985
- 栃木英道他 『近岡遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 湯尻修平・米沢義光 『鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』 石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 吉岡康暢 「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』 松任市教育委員会・石川考古学研究会 1983
- 檜崎彰一・斉藤孝正 「猿投窯編年の再検討について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』2 愛知県陶磁資料館 1983
- 西野秀和・平田千秋他 『高松町若緑ヤキノ窯跡』 高松町教育委員会 1985
- 浜岡賢太郎 「第六節 古窯跡」『富来町史・資料編』 富来町 1974
- 浜岡賢太郎 「第四節 歴史時代 倉垣コマクラベ窯跡」『志賀町史・資料編第一巻』 志賀町 1974



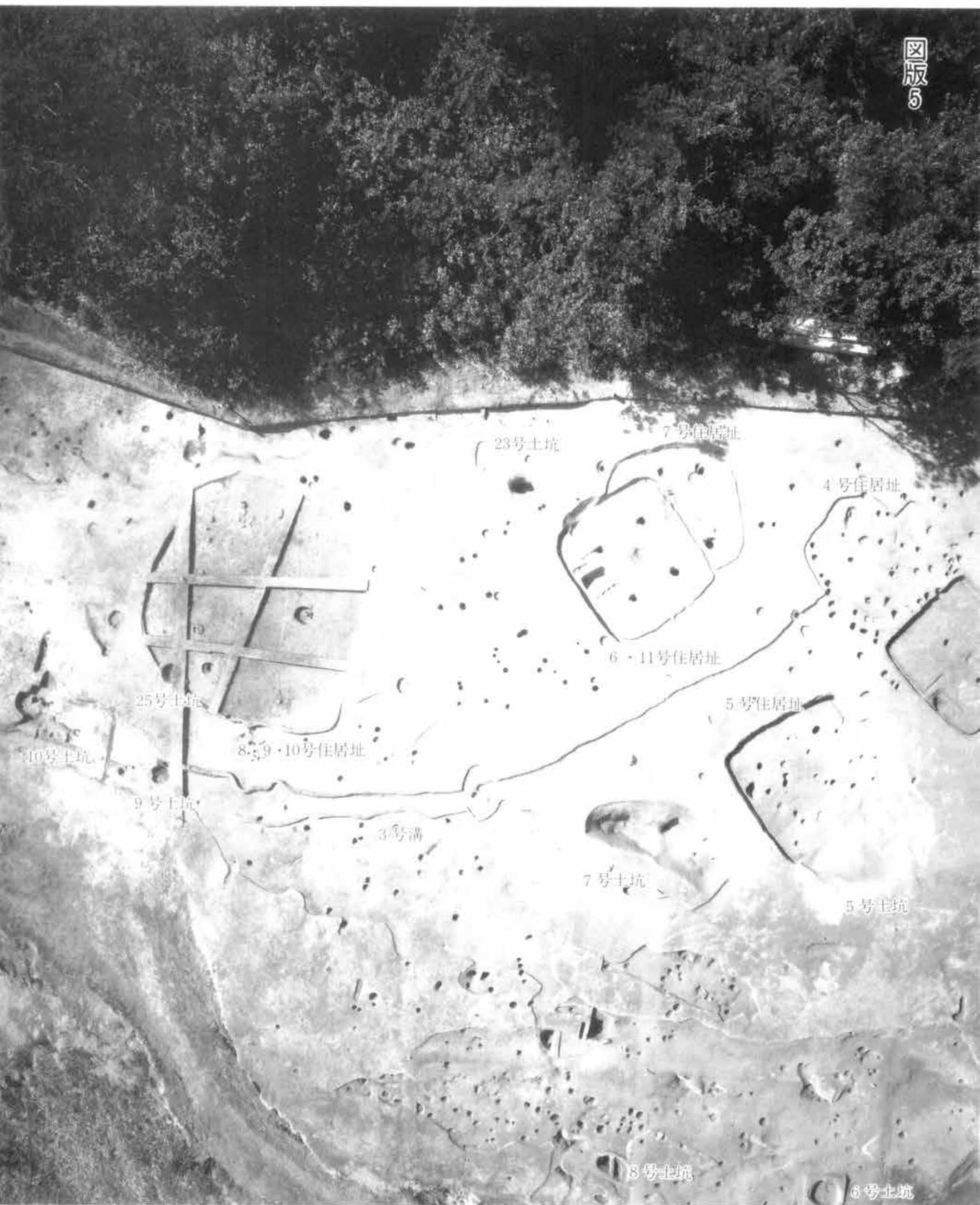
遺跡周辺の航空写真(1/15,000)

(昭和46年6月26日撮影)













17号土坑 18号土坑

土壁



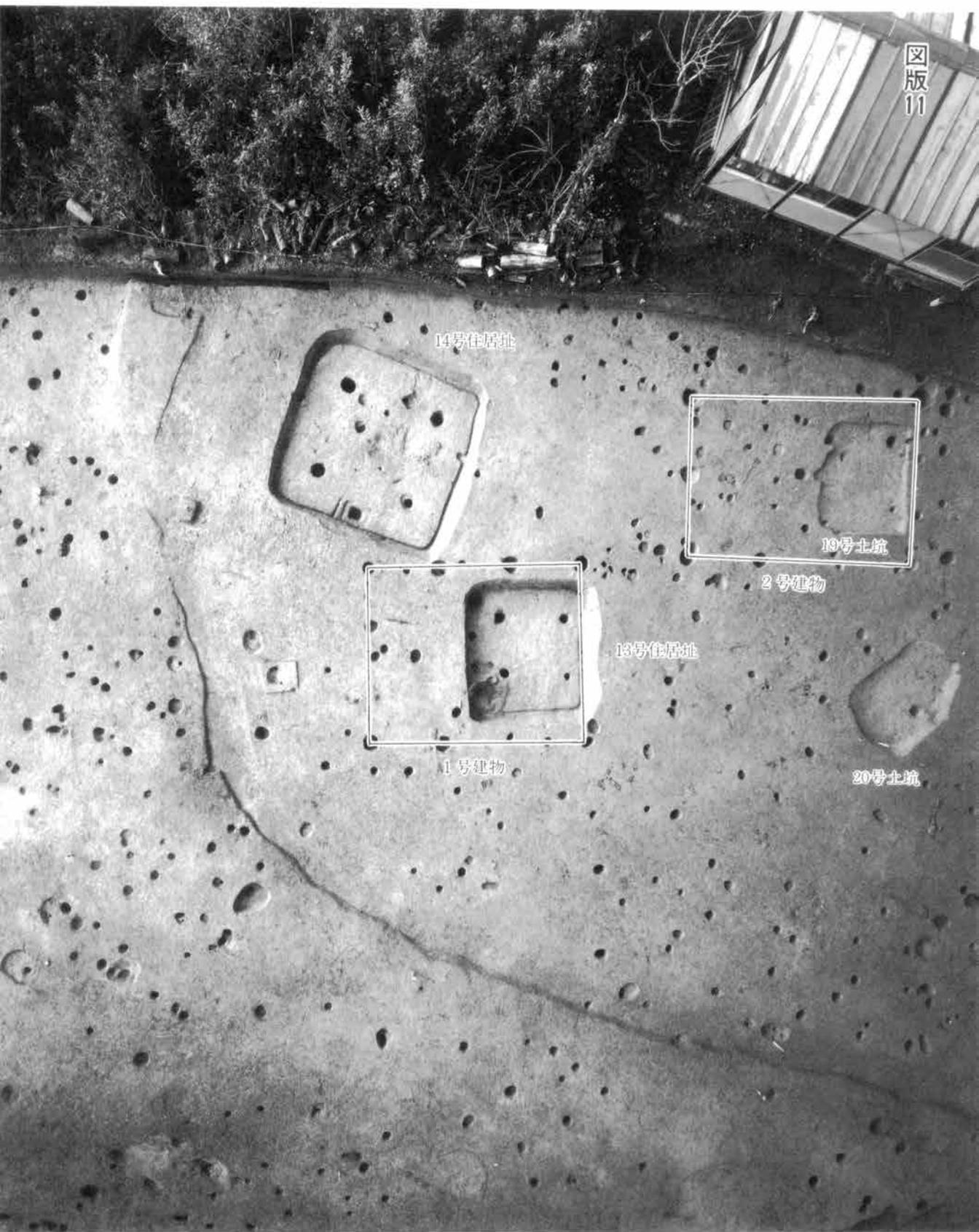


3号建物

12号住居址

20号土坑





14号住居址

19号土坑

2号建物

13号住居址

1号建物

20号土坑



24号主坑

24号溝

全器埋



22号土坑

土器溜り



遺跡周辺の航空写真①(北から)



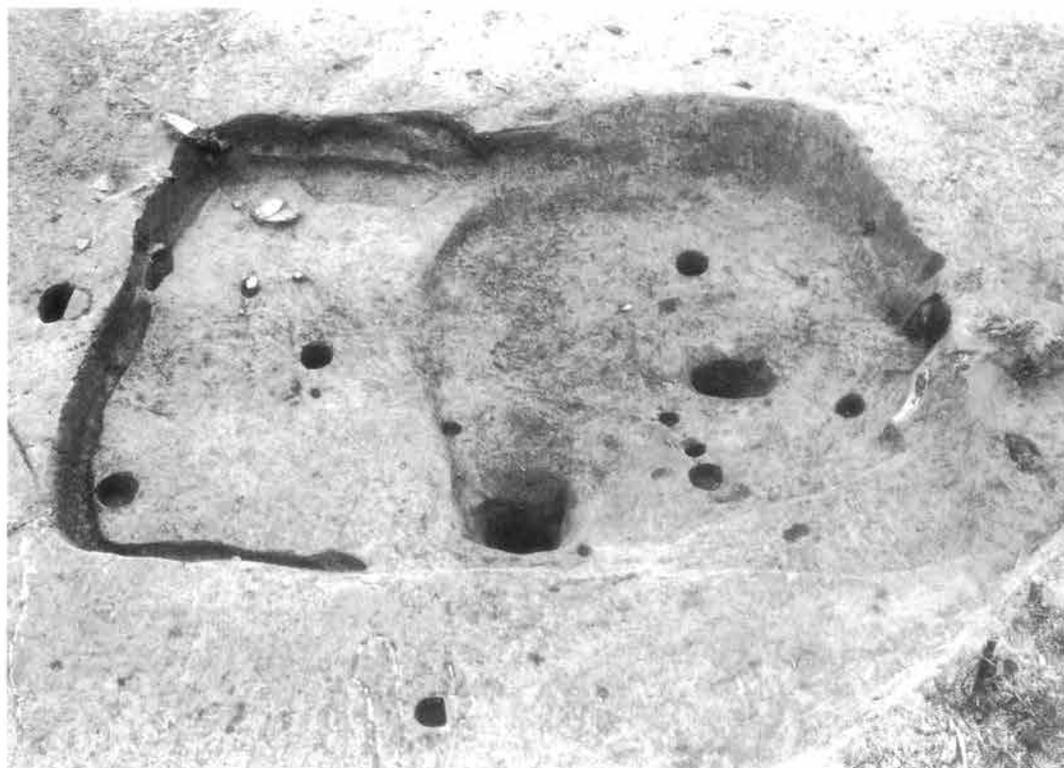
遺跡周辺の航空写真②(東から)



調査地の伐採風景



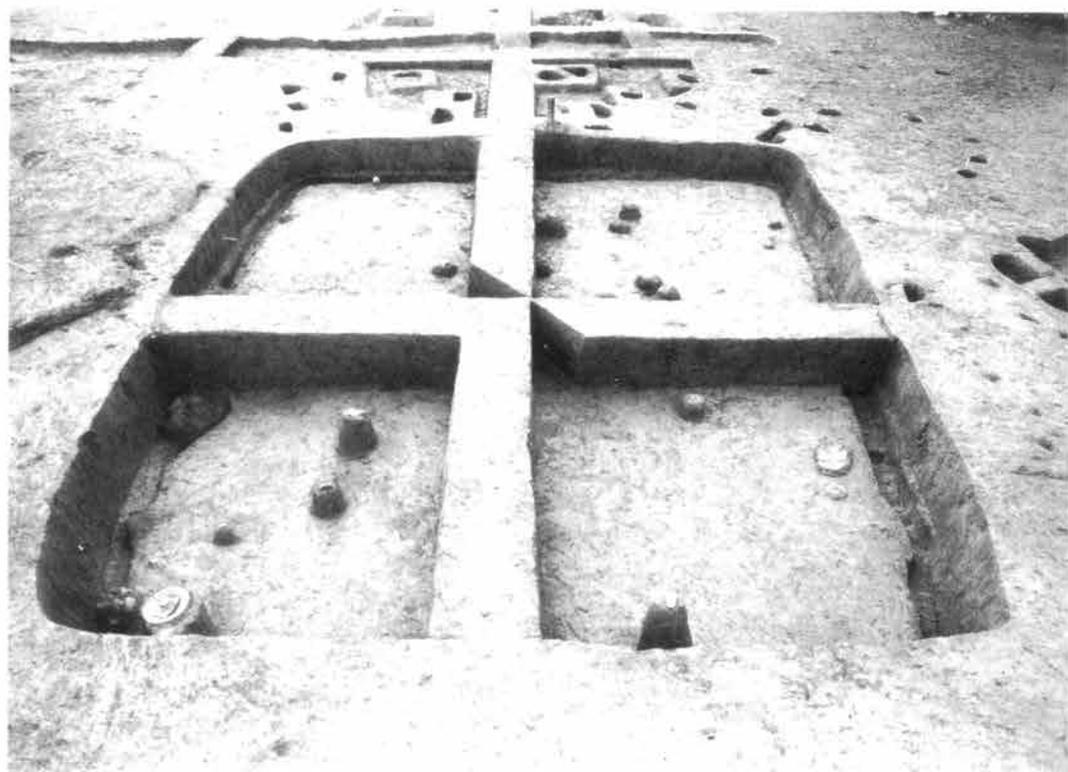
分布調査風景



1号住居址、1号土坑完掘状況(北から)



2号住居址、4号土坑完掘状況(西から)



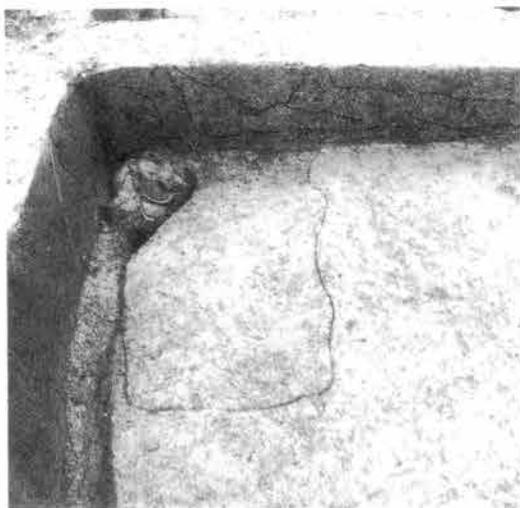
3号住居址遺物出土状況(北から)



3号住居址完掘状況(北から)



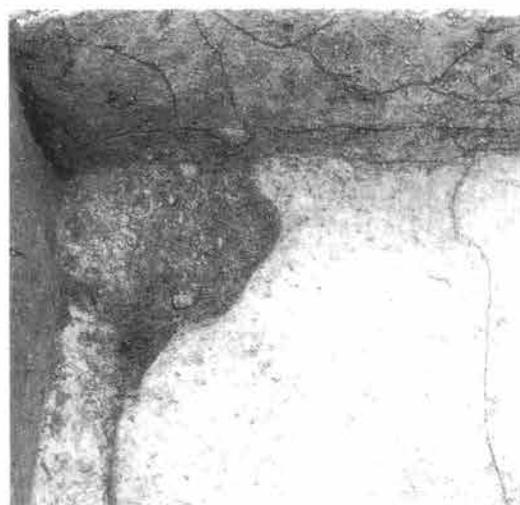
1号土坑鉄製品出土状況



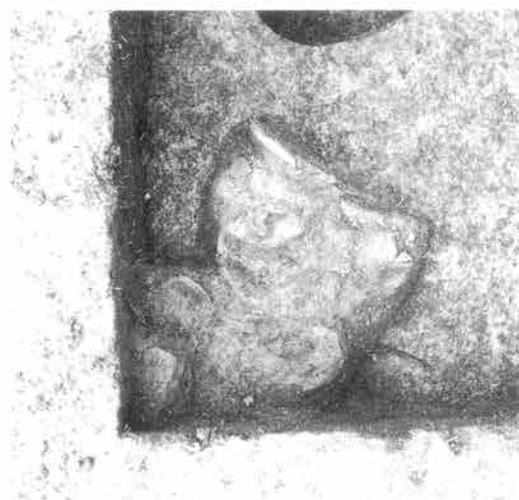
3号住居址P<sub>3</sub>遺物出土状況



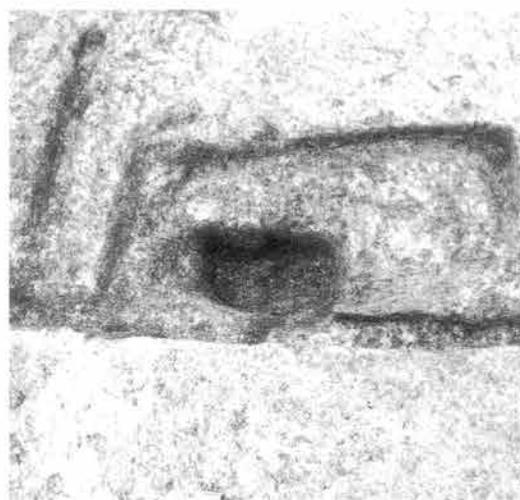
2号住居址遺物出土状況



3号住居址P<sub>3</sub>出土遺物取り上げ後



4号土坑遺物出土状況



3号住居址P<sub>4</sub>完掘状況



3号住居址遺物出土狀況①



3号住居址遺物出土狀況④



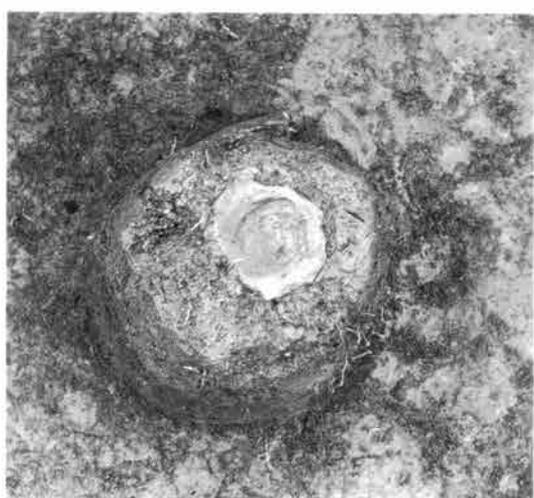
3号住居址遺物出土狀況②



3号住居址遺物出土狀況⑤



3号住居址遺物出土狀況③



3号住居址遺物出土狀況⑥



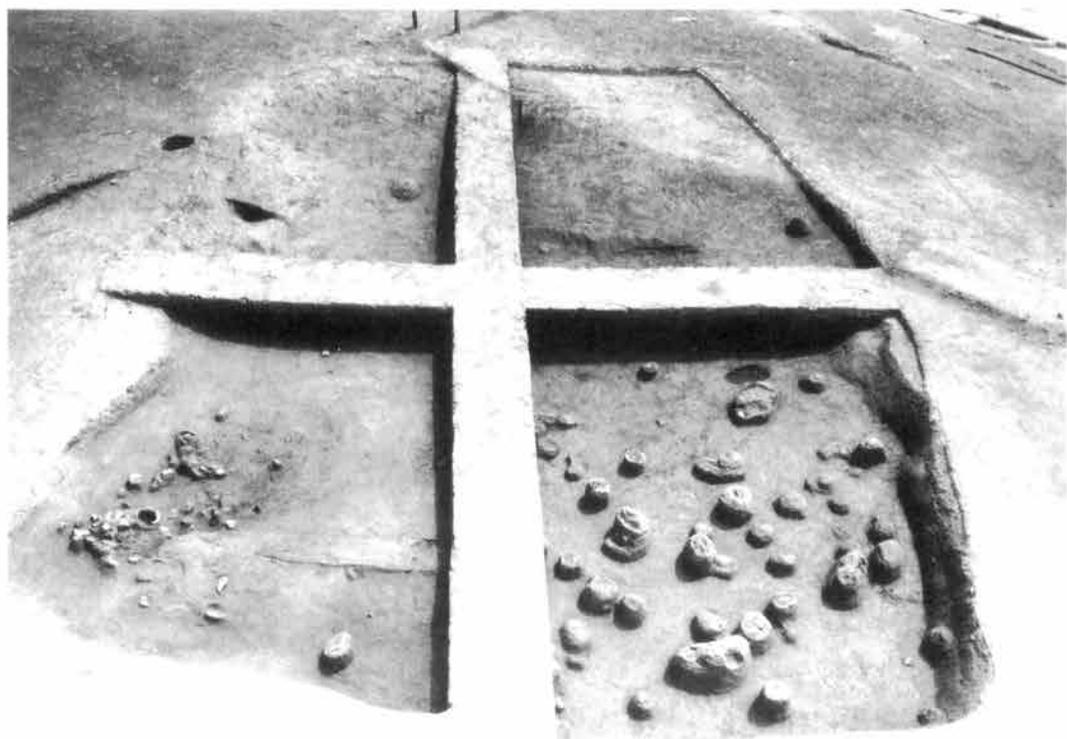
1号溝、2号土坑完掘状況(南から)



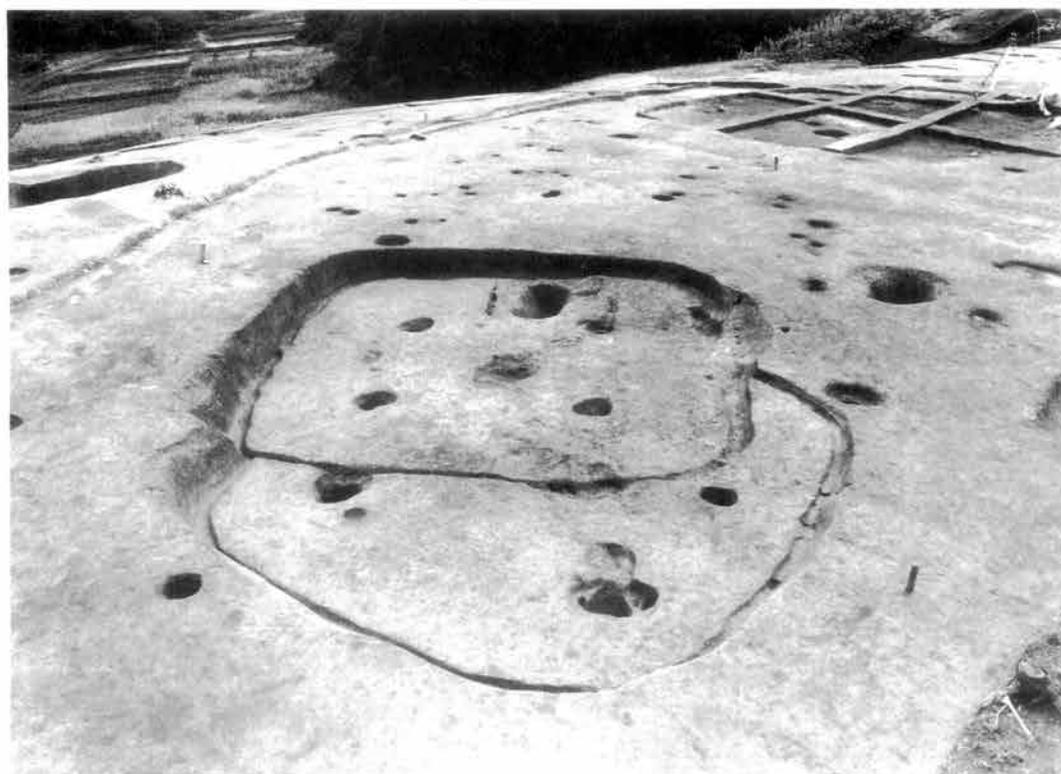
1号溝土層断面図(南から)



5号住居址、5号土坑掘り下げ状況(北から)



5号住居址、5号土坑遺物出土状況(西から)



6、7号住居址完掘状況(北から)



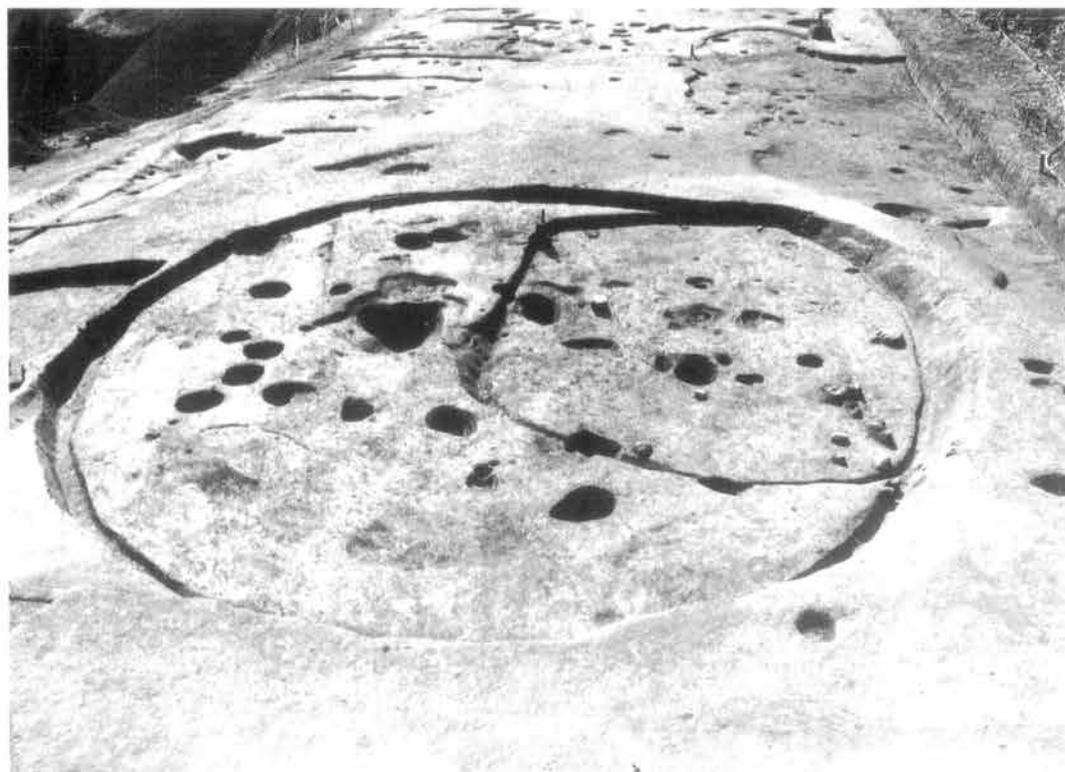
6・11、7号住居址完掘状況(東から)



7号住居址P12 遺物出土状況①(西から)



7号住居址P12 遺物出土状況②



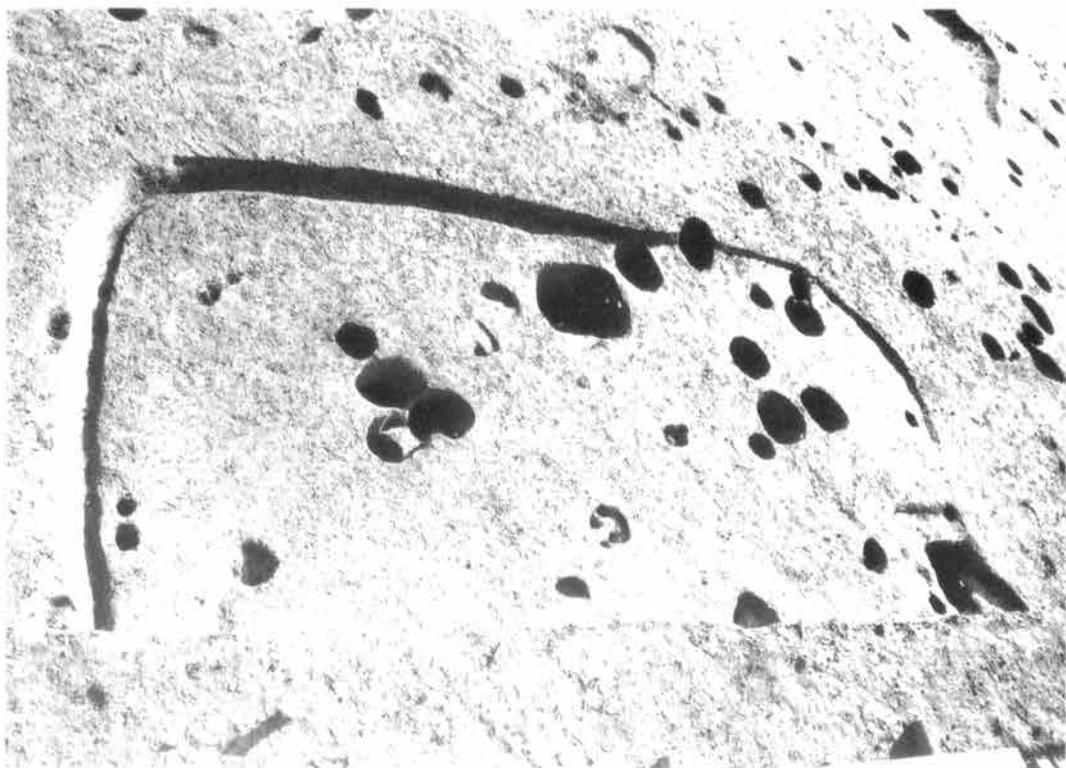
8、9号住居址完掘状況(北から)



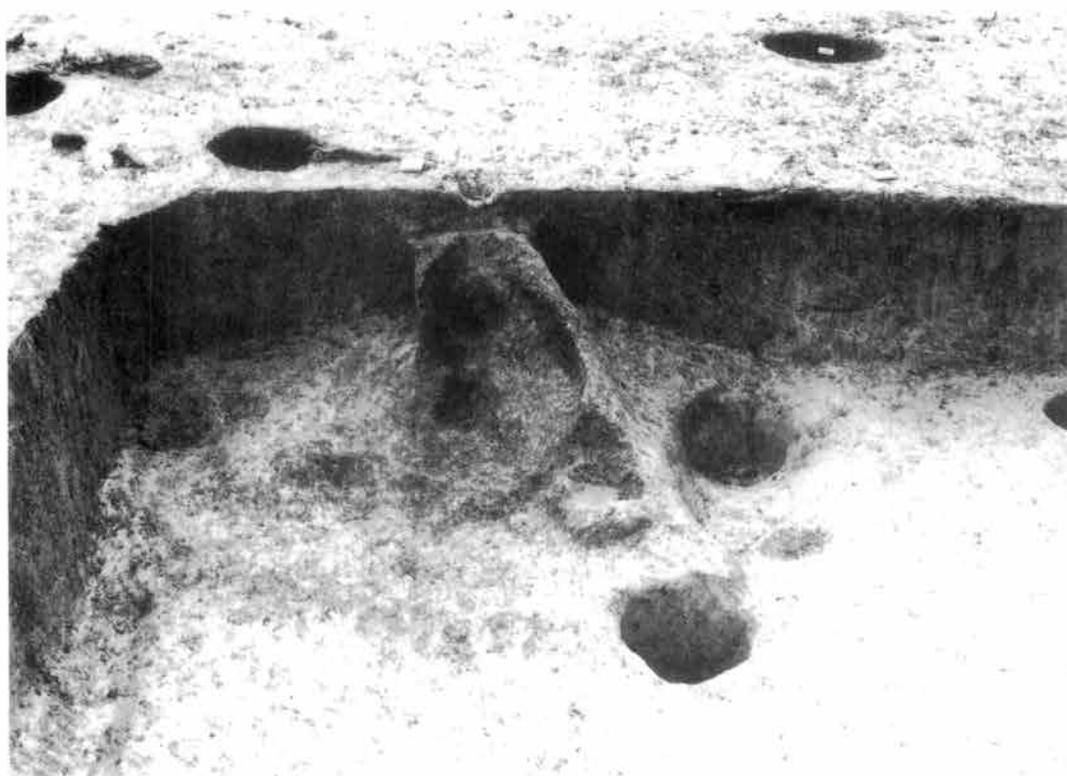
8、9・10号住居址完掘状況(北から)



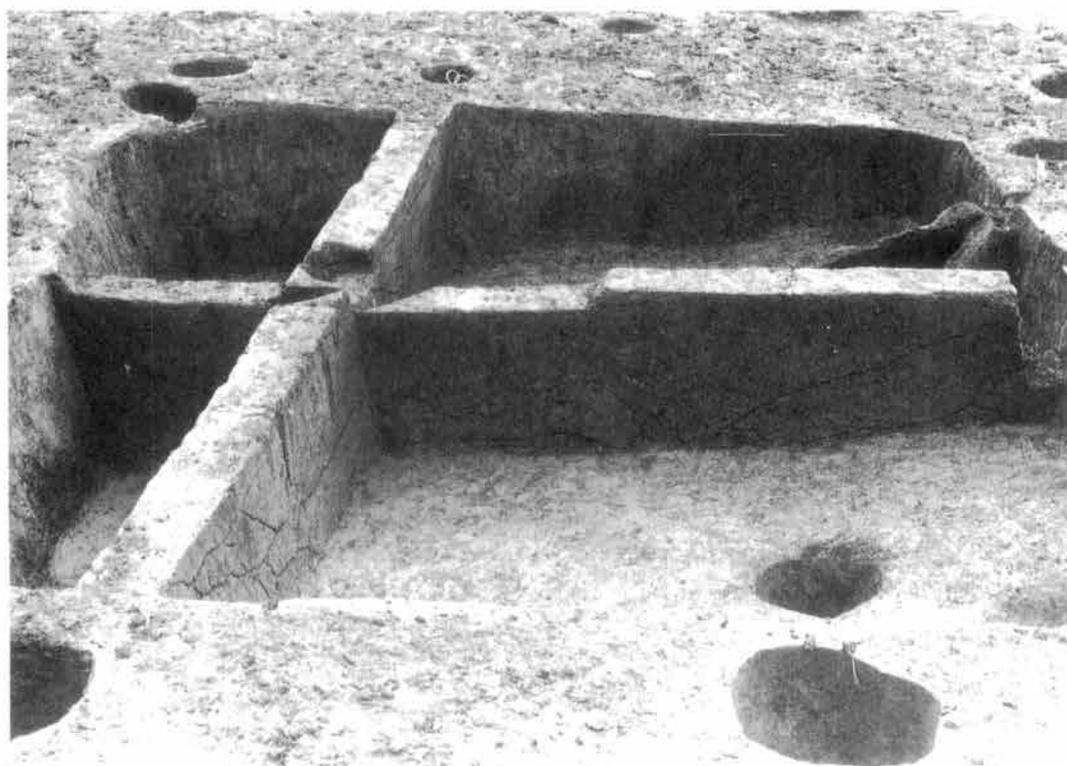
8号住居址上層遺物出土状況



12号住完掘状況(西から)



13号住居址カマド完掘状況(北から)



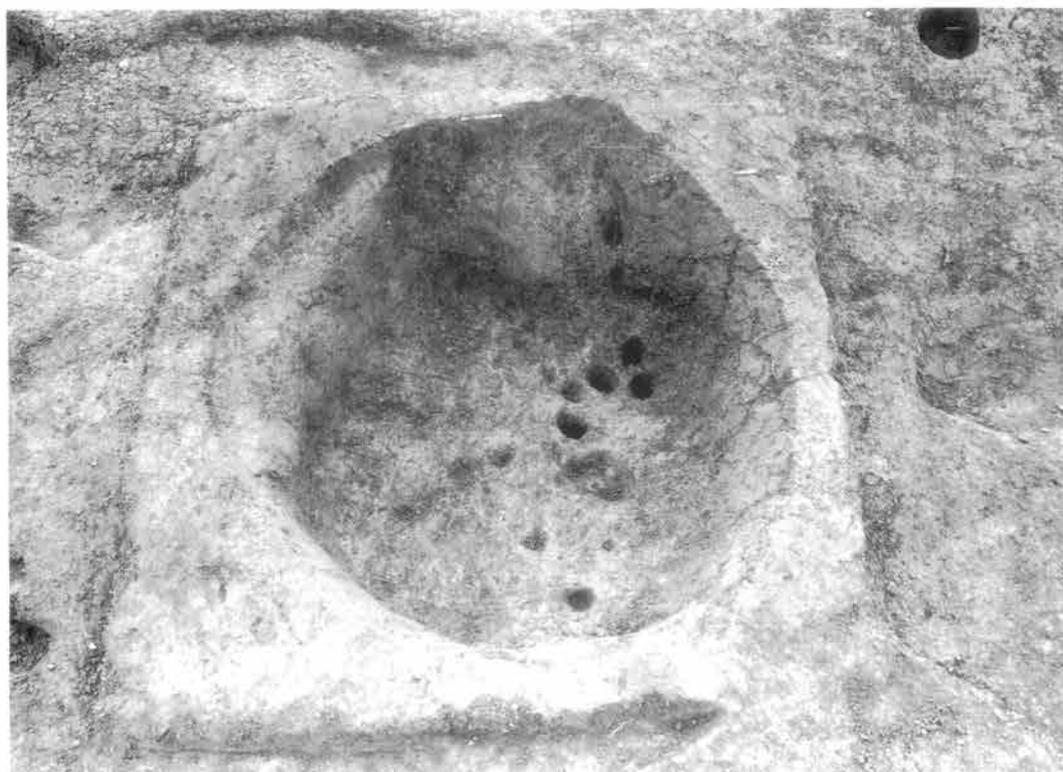
13号住居址土層断面図(西から)



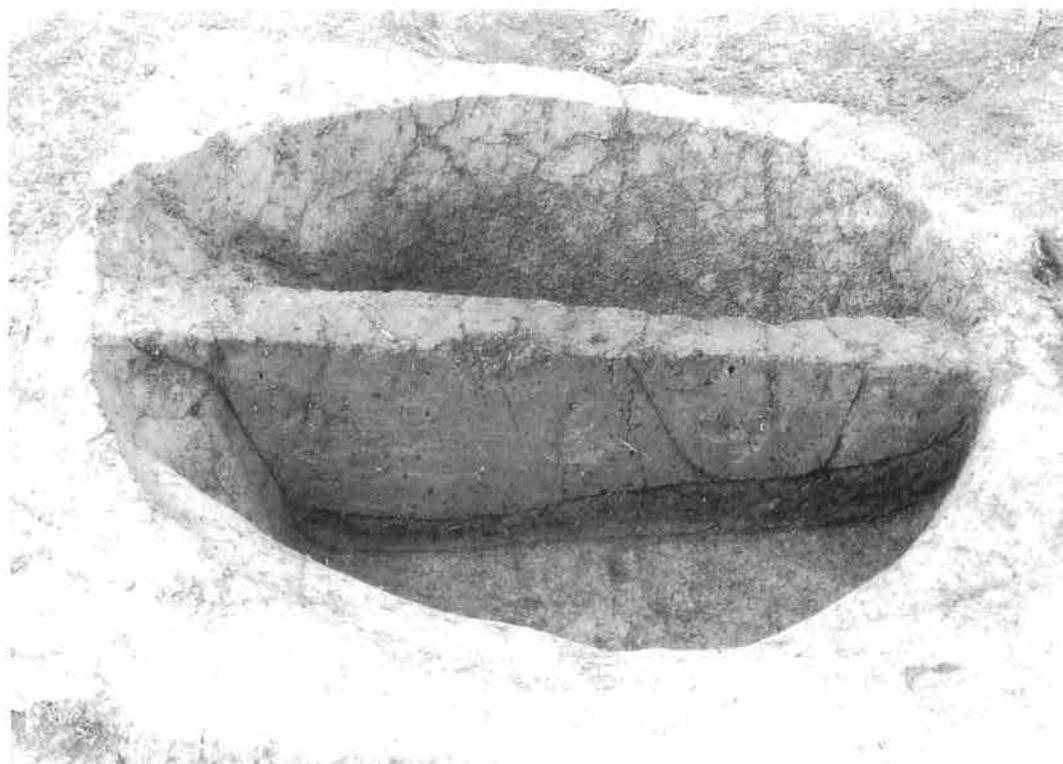
14号住居址完掘状況(北から)



14号住居址土層断面図(東から)



6号土坑完掘状況(東から)



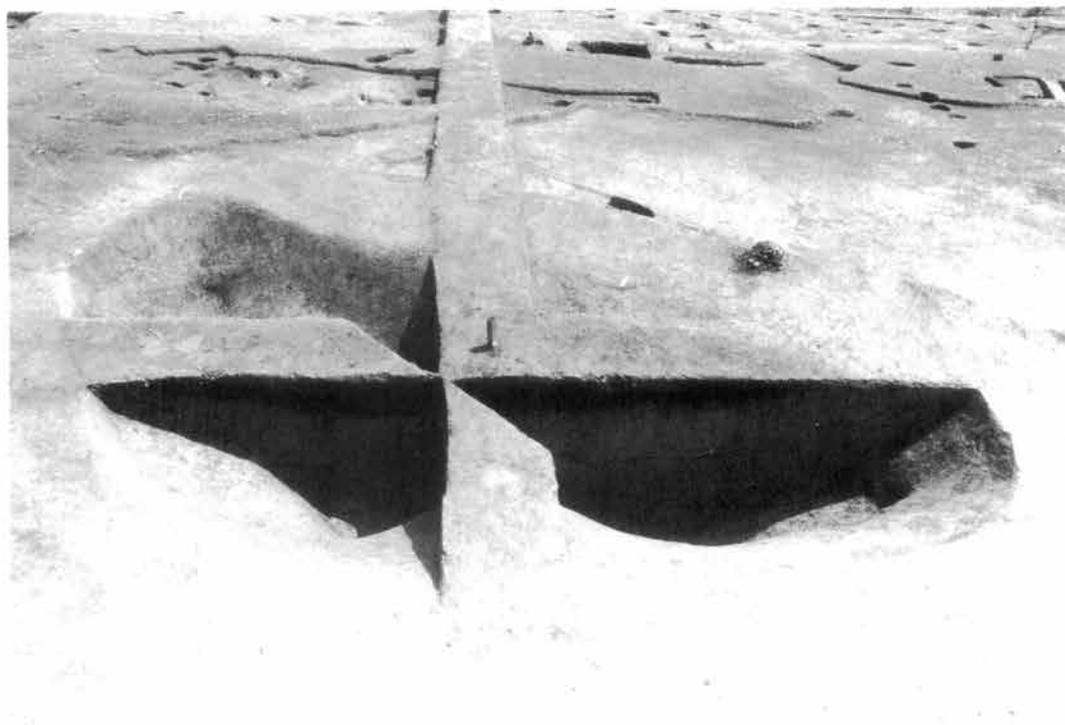
6号土坑土層断面図(南から)



9号土坑完掘状況(東から)



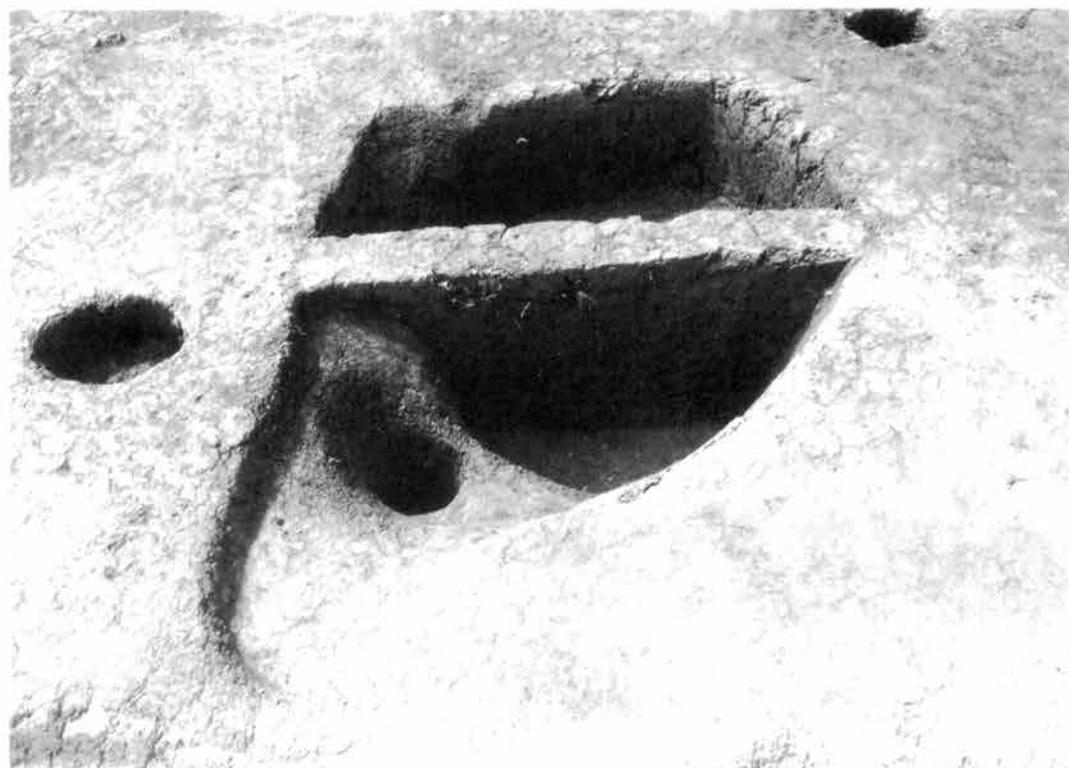
9号土坑土層断面図(東から)



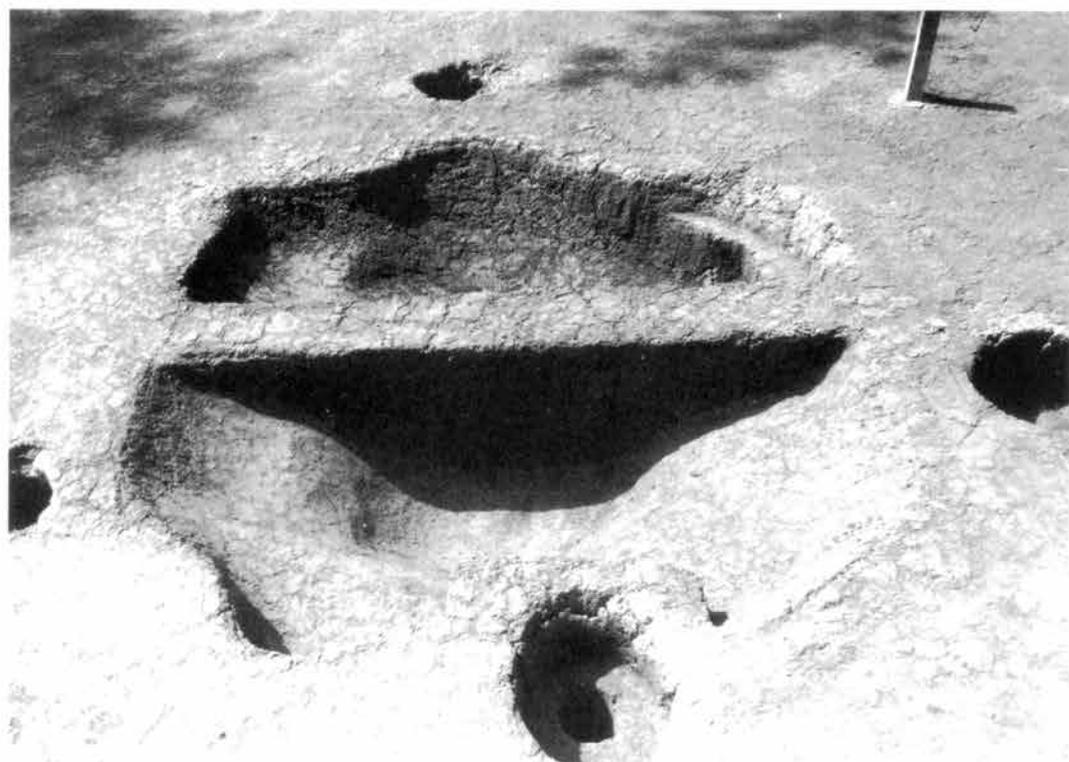
7号土坑土層断面図(西から)



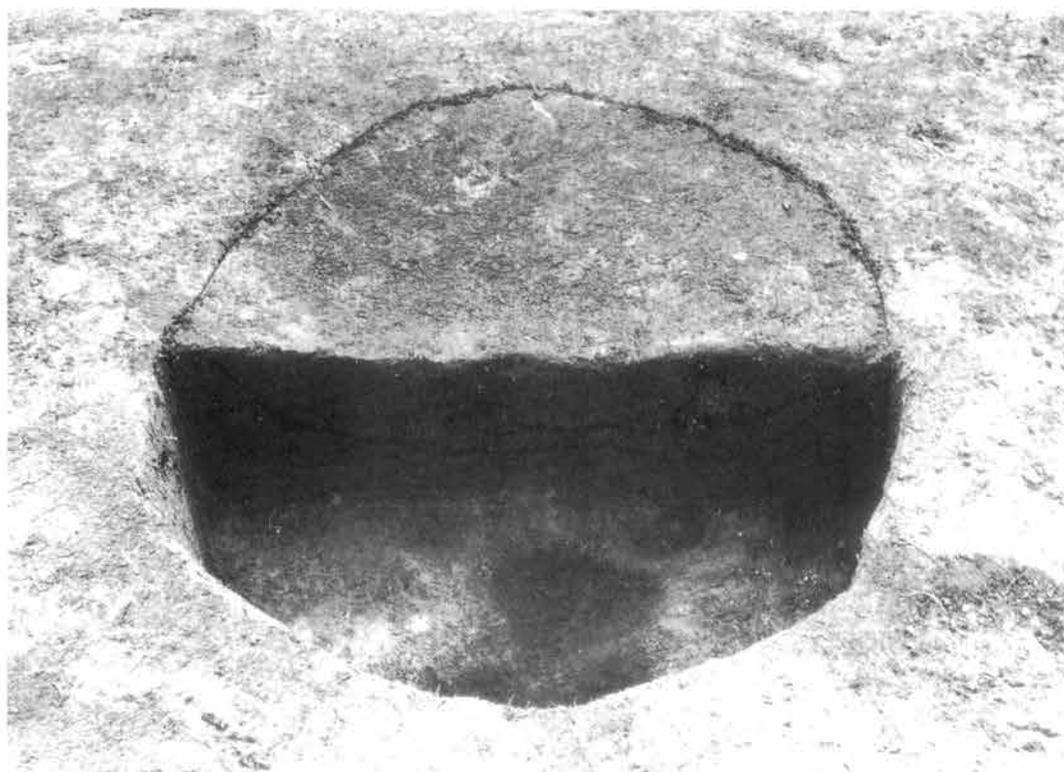
10号土坑遺物出土状況(南から)



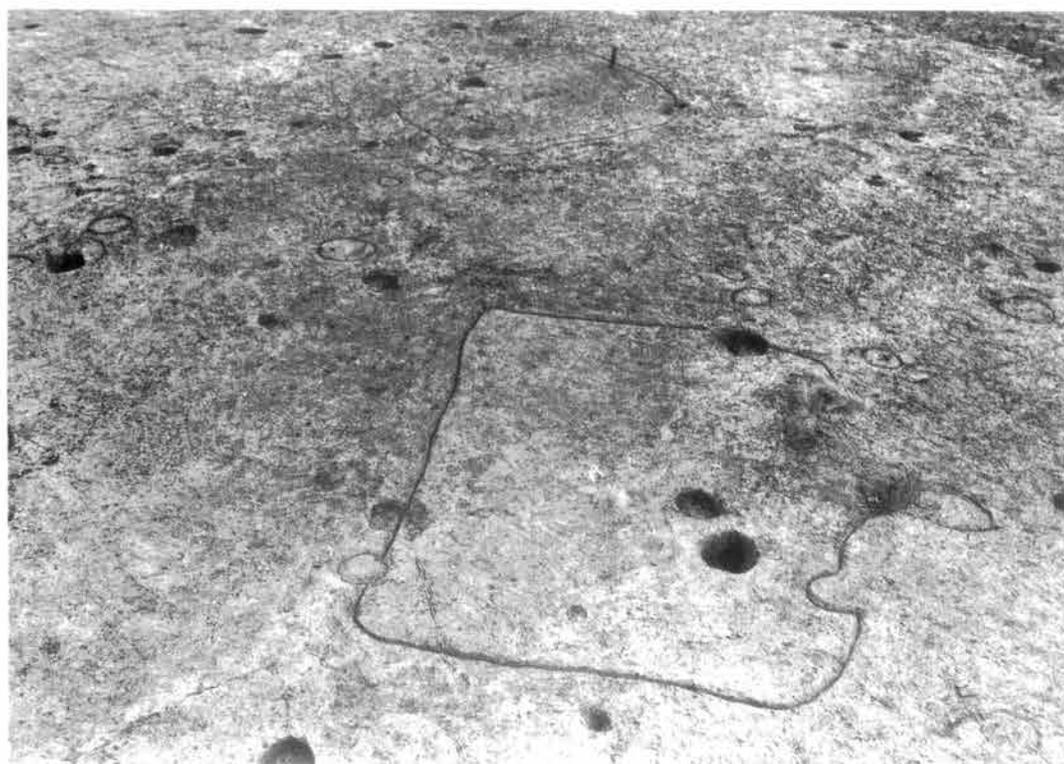
11号土坑土層断面図(東から)



12号土坑土層断面図(東から)



13号土坑土層断面図(東から)



19号土坑遺構検出状況(西から)



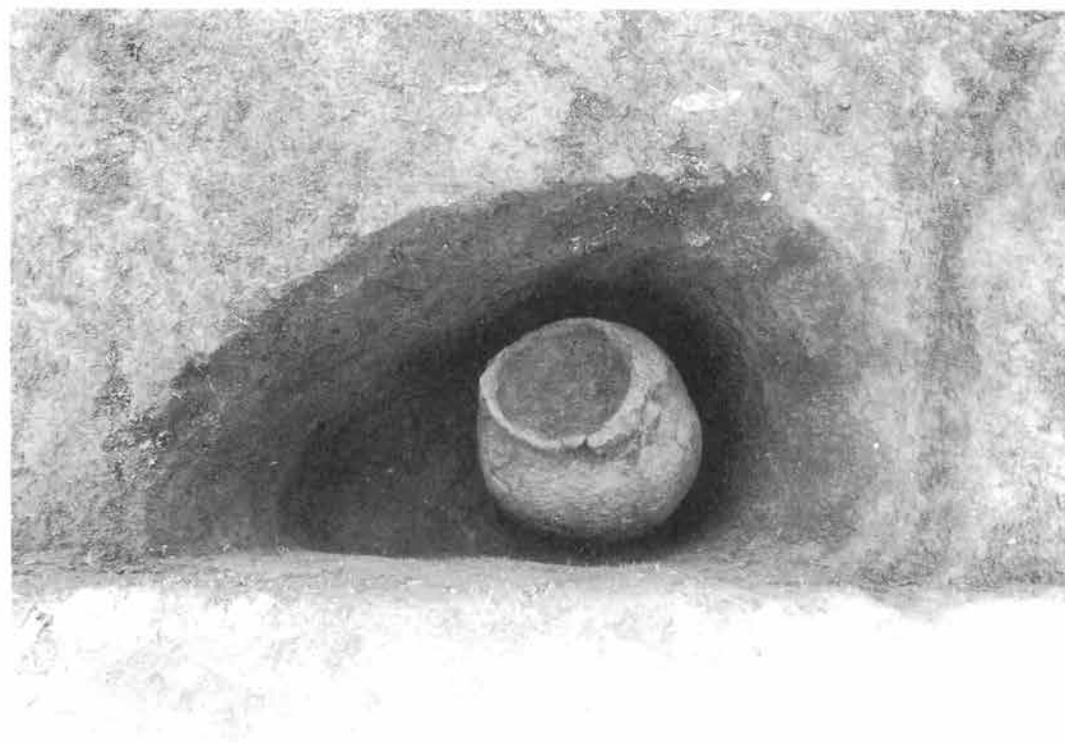
15号土坑完掘状況(東から)



15号土坑遺物出土状況



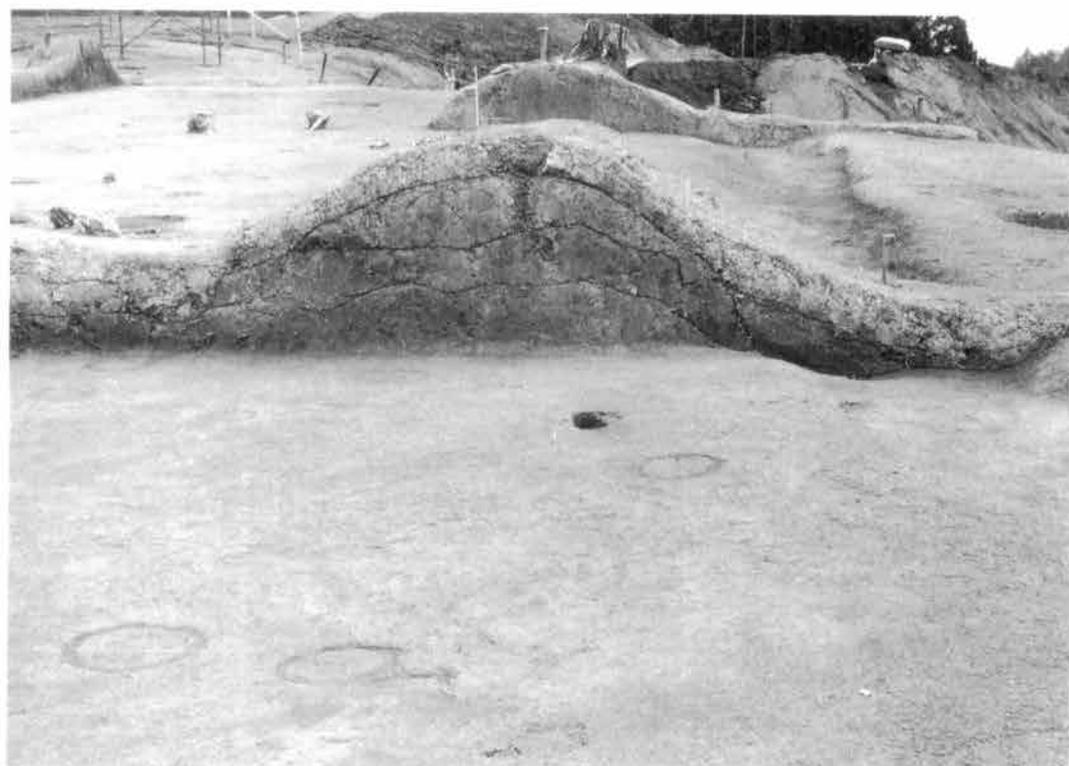
24号溝完掘状況(南から)



A5区P12遺物出土状況(南から)



土罟および土罟内遺構検出状況(北から)



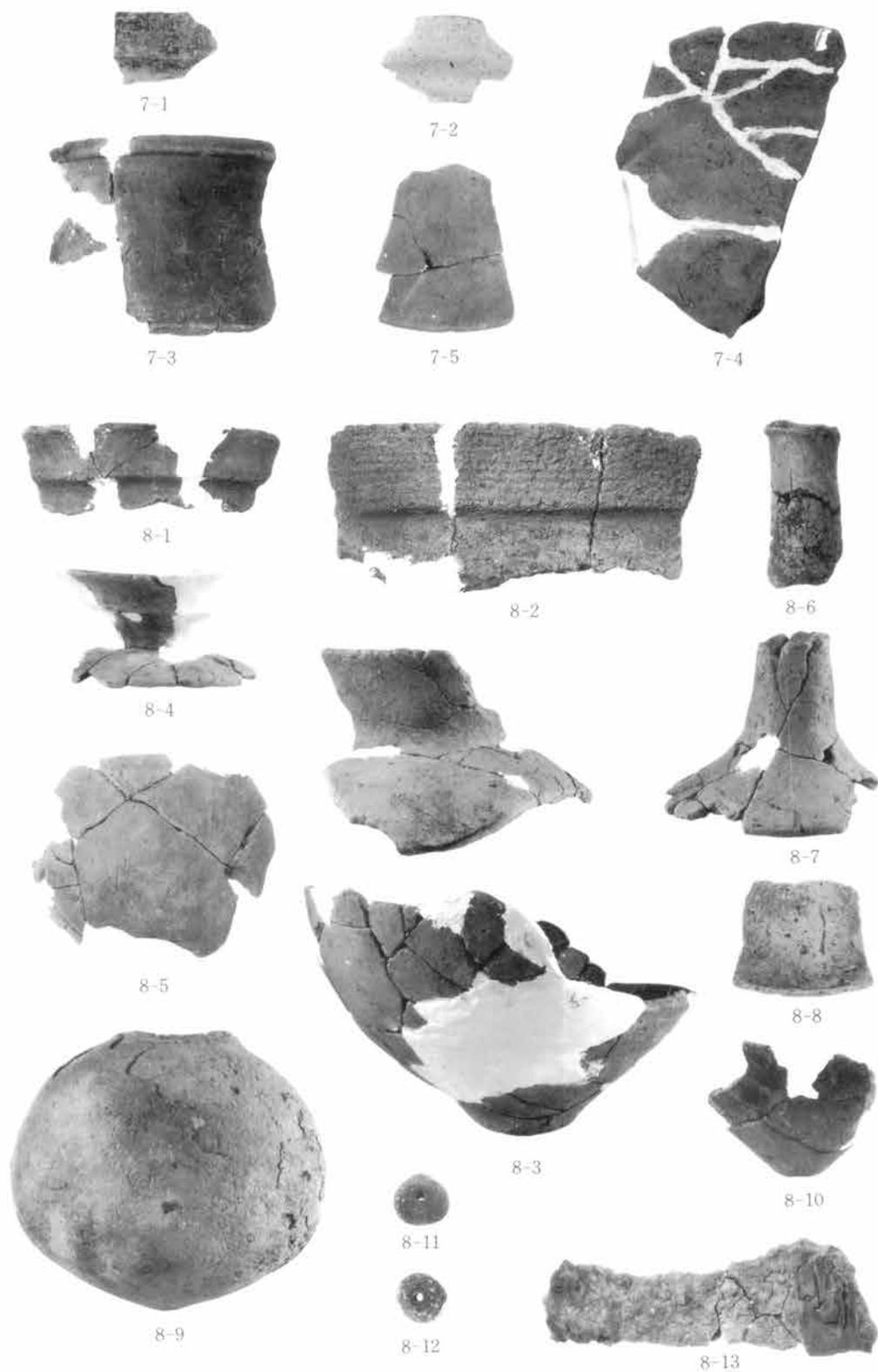
土罟および土罟周溝土層断面図(南から)



調査作業状況



作業員集合写真



1号住、1号土坑出土遺物



10-1



10-3



10-2



10-4



10-5



12-1



12-2



12-3



12-4



12-16



12-5



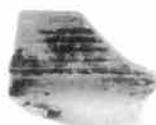
12-6



12-9



12-10



12-11



12-12



12-7



12-13



12-8



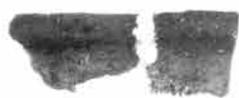
12-14



12-15



12-17



12-18



13-30



13-31



12-19



12-20



12-21



13-29

13-32



13-24



13-26



13-25



13-28



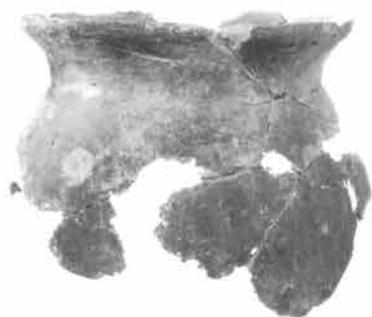
13-27



13-23



13-22



17-1



17-2



17-3



17-6



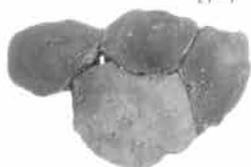
17-7



15-1



17-4



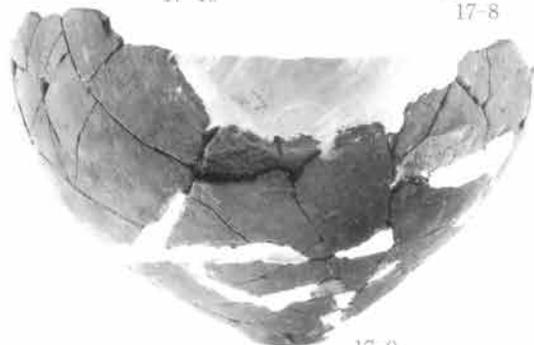
17-10



17-8



17-5



17-9

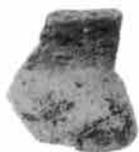


17-11

4、5号住出土土器



18-12



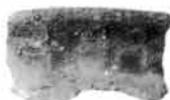
18-15



18-22



18-13



18-16



18-14



18-17



18-18



18-19



18-20



18-21



18-28



18-29



18-30



18-31



18-23



18-24



18-25



18-26



18-27



18-32



18-33



19-1



19-10



19-14



19-4



19-15



19-6



19-3



19-5



19-7



19-9



19-8



19-11



19-2



19-12



19-13



19-16



21-1



21-2



21-3



21-4

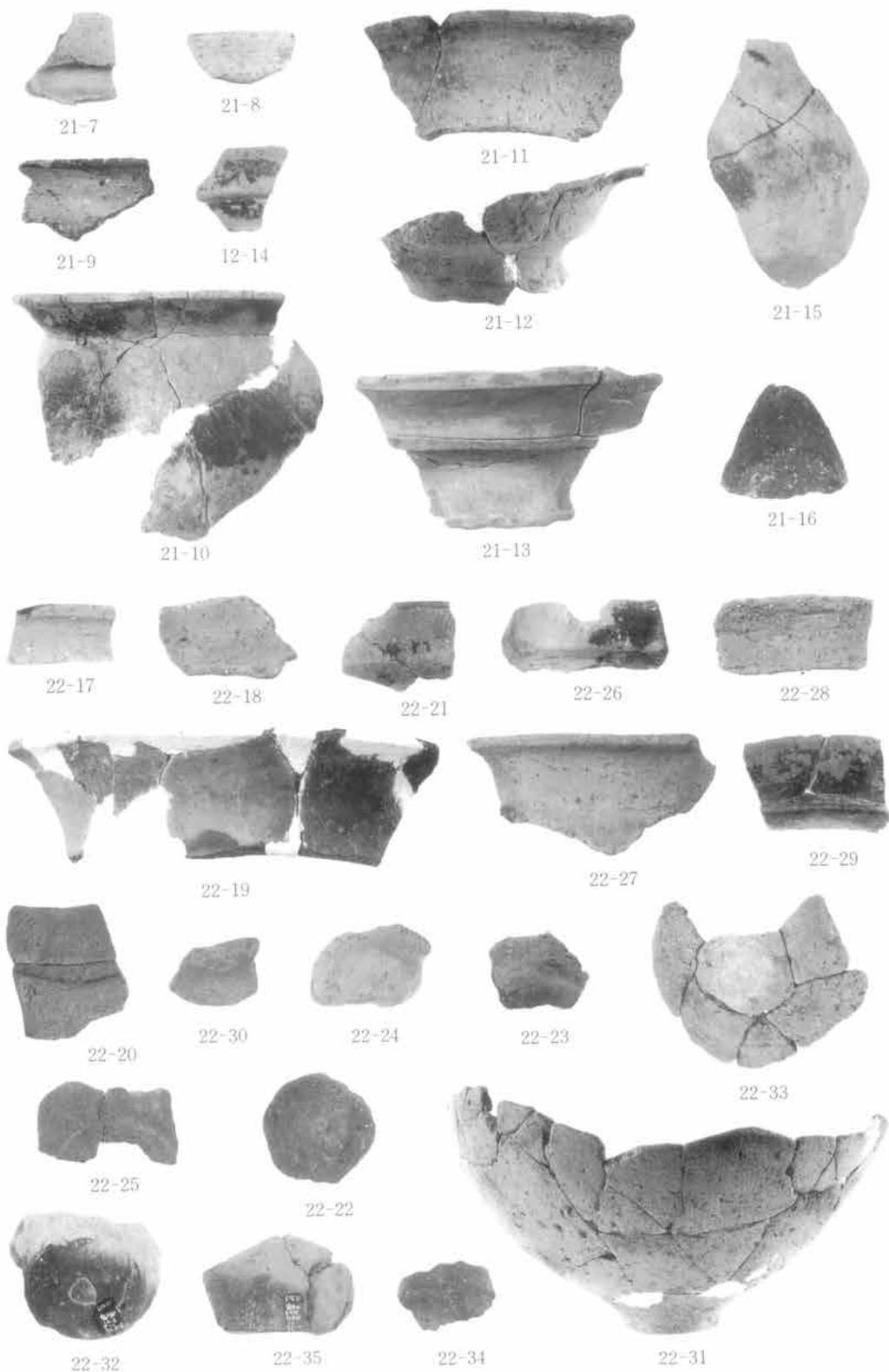


21-5



21-6

5号土坑、6号住出土遗物



6号住出土土器



23-15



23-19



23-1



23-2



23-16



23-3



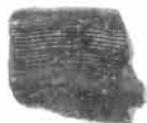
23-4



23-17



23-5



23-6



23-7



23-9



23-10



23-18



23-11



23-12



23-13



23-8



23-20



23-14



24-25



24-30



24-24



24-28



24-21



24-23



24-29



24-22



24-27



24-31



24-26



24-32



24-33



26-1



26-2



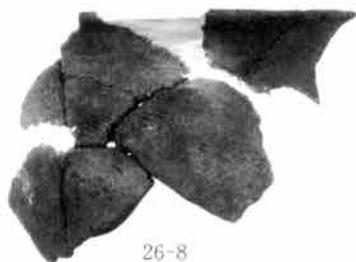
26-3



26-4



26-5



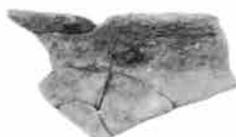
26-8



26-7



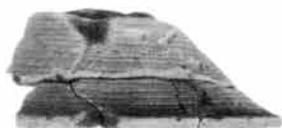
26-6



26-9



26-11



27-12



27-14



27-16



27-15



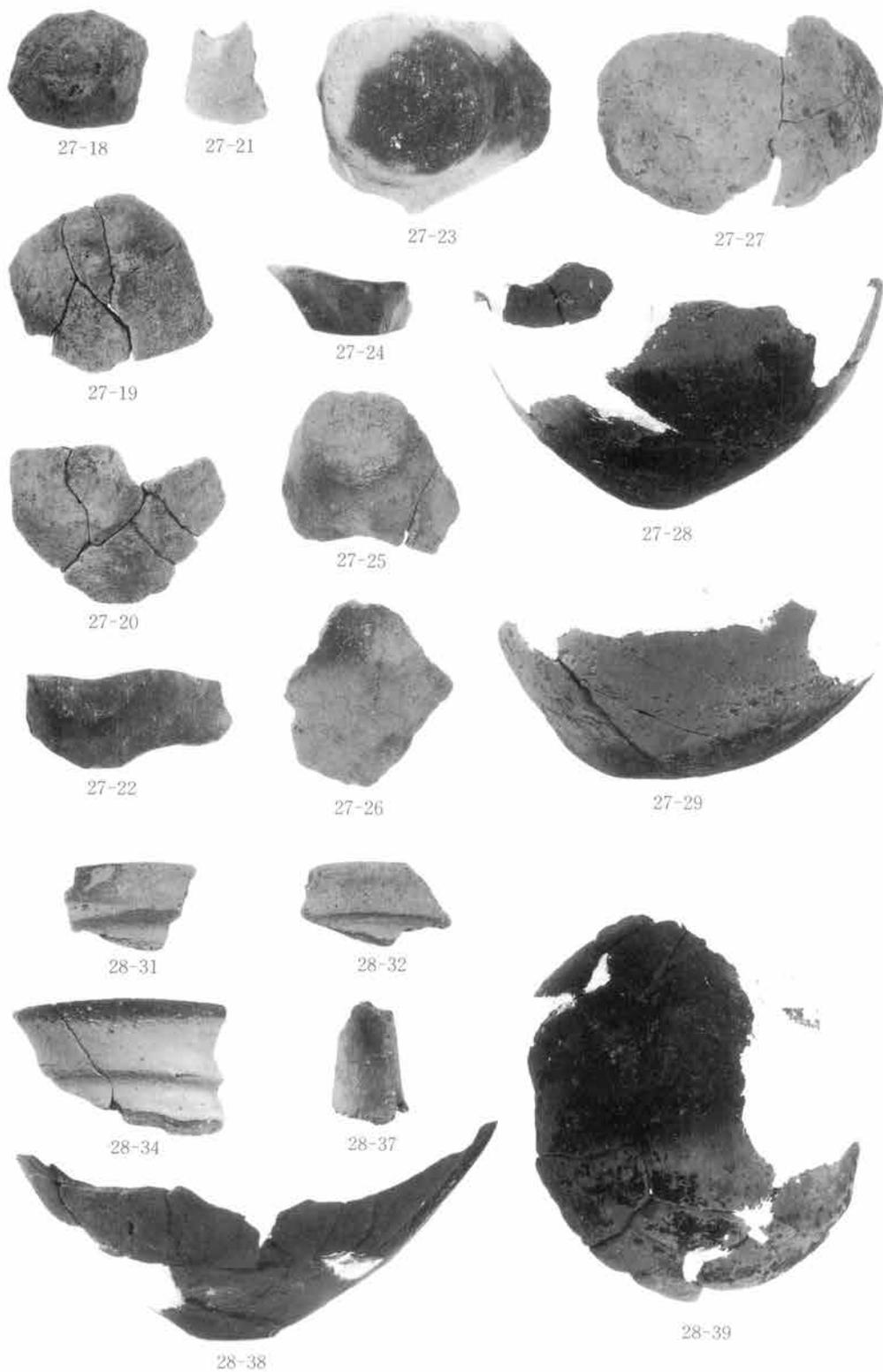
27-13



27-17

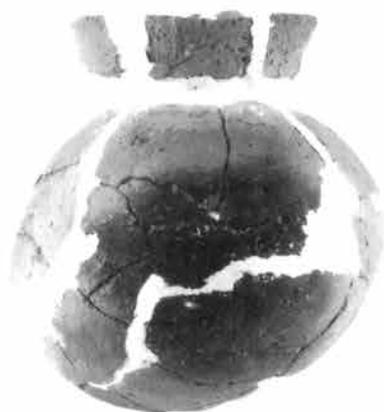


26-10





28-30



28-33



28-35



28-36



29-42



29-40



29-41



29-43



29-44



29-45



29-46



29-50



29-47



29-48



29-49



29-51



29-59



29-60



29-62



29-63



29-61



30-64



30-66



30-67



30-65



30-68



29-52



29-54



29-55



29-53



29-56



29-57



29-58



30-1



30-2



30-5



30-3



30-4



30-6



30-7



30-8



31-12



30-10



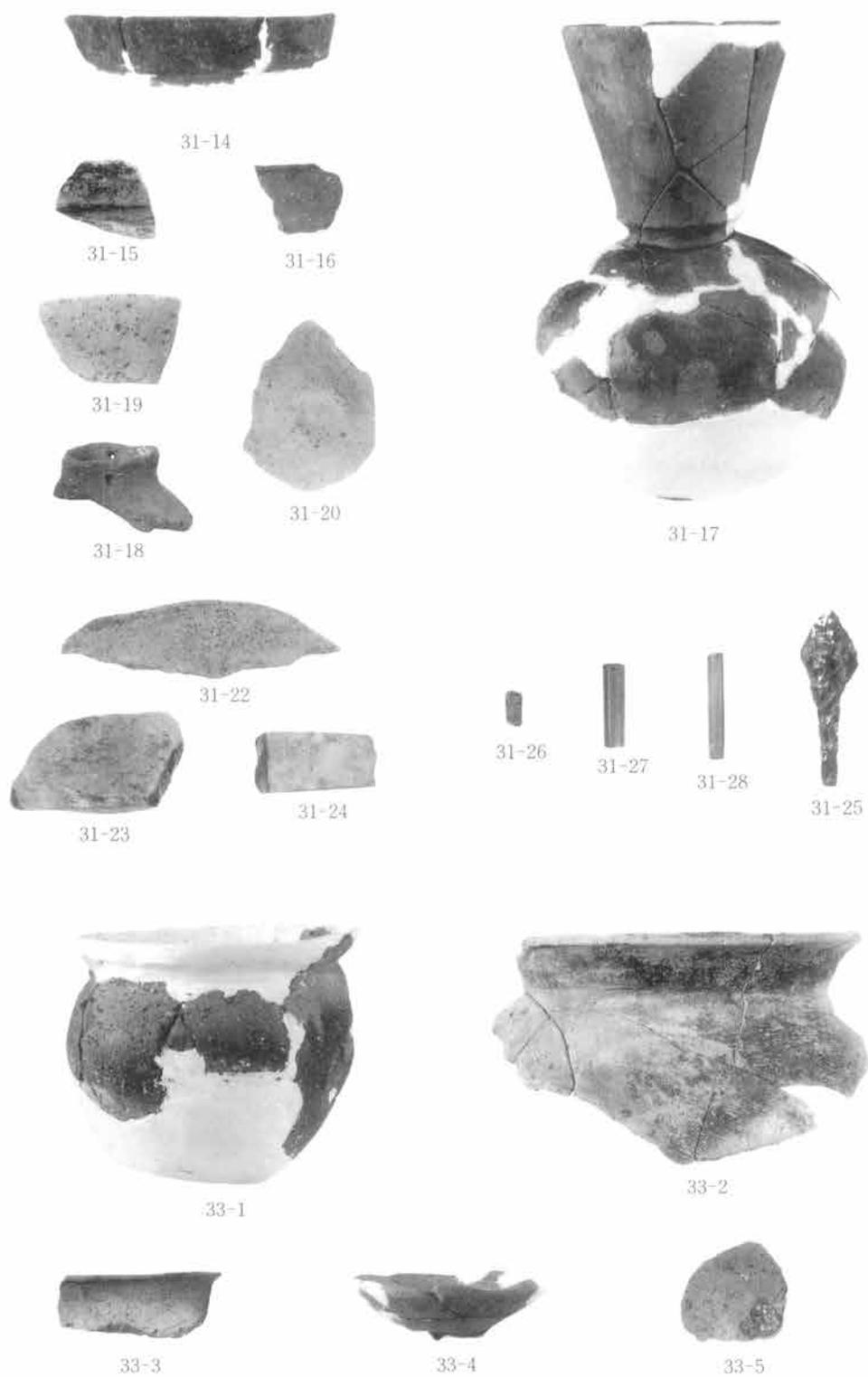
30-9



30-11



31-13



8、9、12号住出土遺物



35-1



35-6



35-2



35-5



35-3



35-4



35-7



35-13



35-15



35-8



35-9



35-16



35-10



35-11



35-12



35-14



35-17



36-25



36-27



36-28



36-26



36-29



36-30



36-31



36-18



36-19



36-20



36-22



36-21



36-23



36-24



39-4



39-3



38-2



39-5



38-1



41-1



41-4



41-9



41-10



41-2



41-3



41-11



41-5



41-6



41-7



41-12



41-8



41-13

13号住、1号溝、2号土坑出土土器



61-1



61-2



61-3



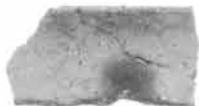
49-1



49-2



49-7



49-3



49-4



49-8



49-5



49-6



49-9



60-1



47-1



44-1



60-2



60-3



60-4



60-6



60-5



55-1

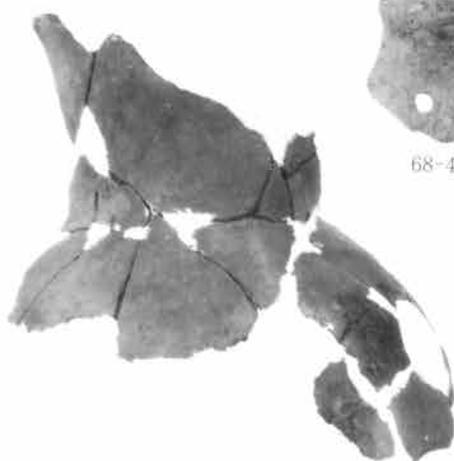
6、7、9、10、13、15号土坑出土土器



68-1



68-2



68-3



68-4



68-6



68-7



68-5



64-1



64-3



64-4



70-1



64-2



64-6



70-2



73-1



73-3



73-2



73-4



73-5

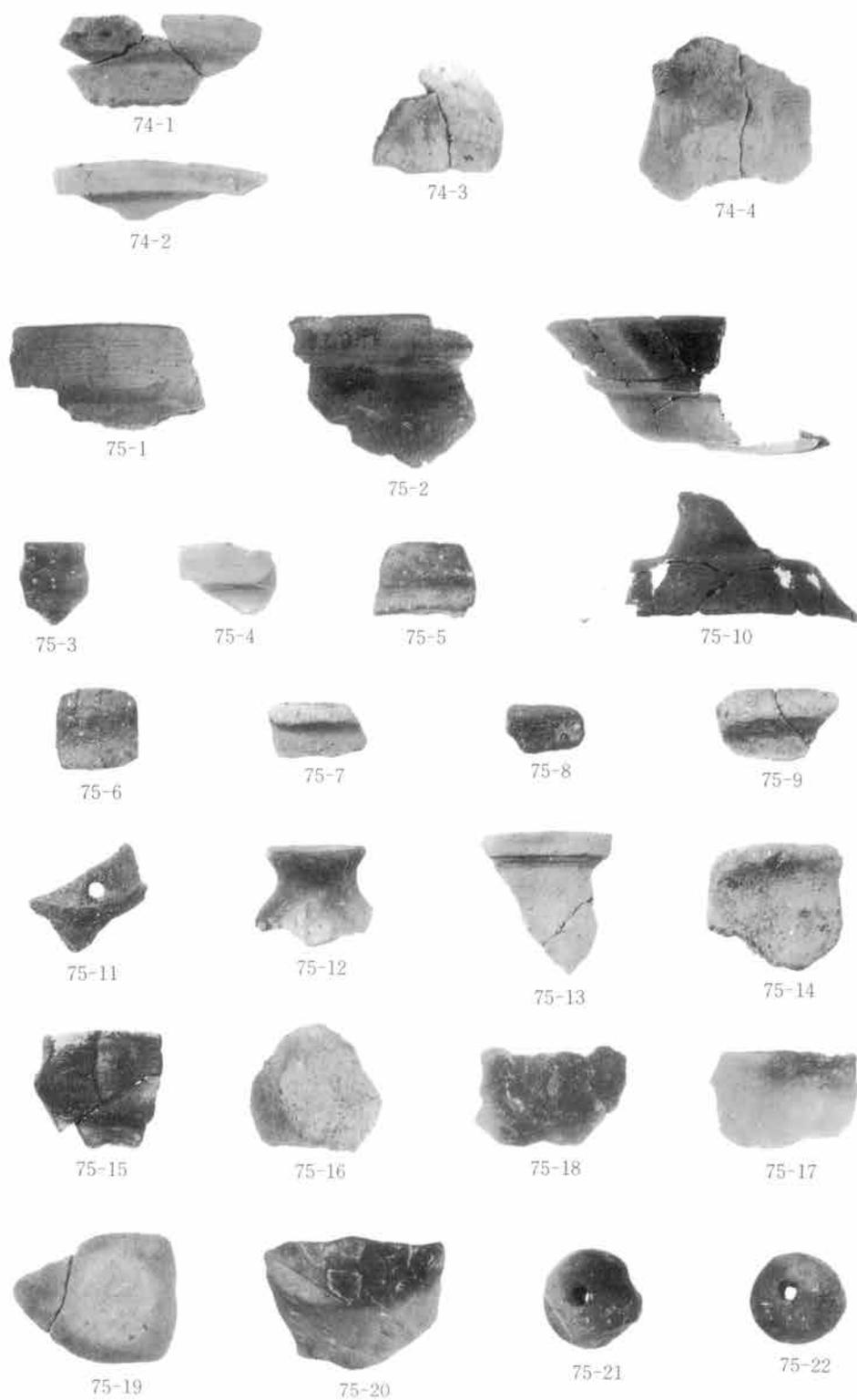


73-6



73-7

20、21、24、25号土坑、8、9号住居址上面遺構出土遺物



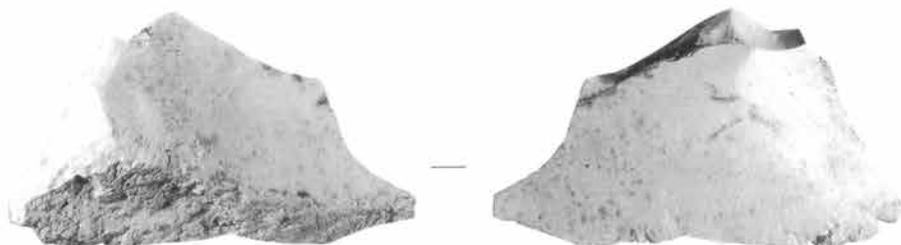
溝、ヒット出土遺物



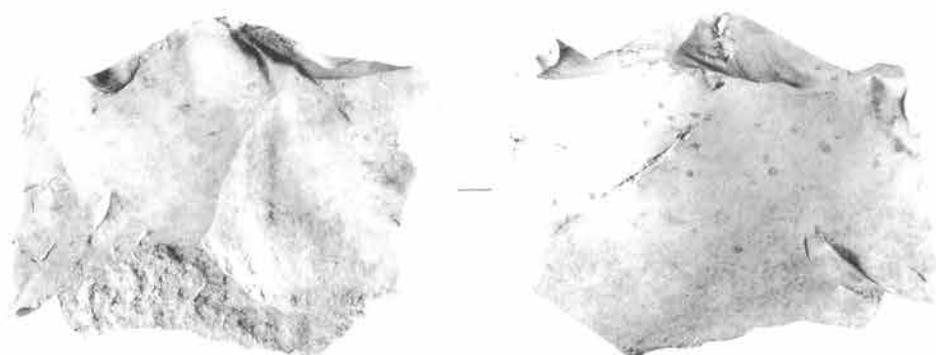
出土用石器



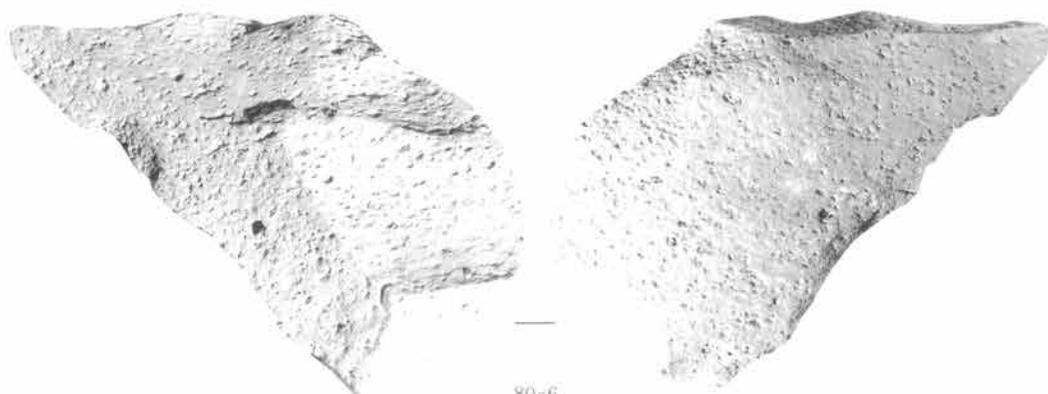
80-3



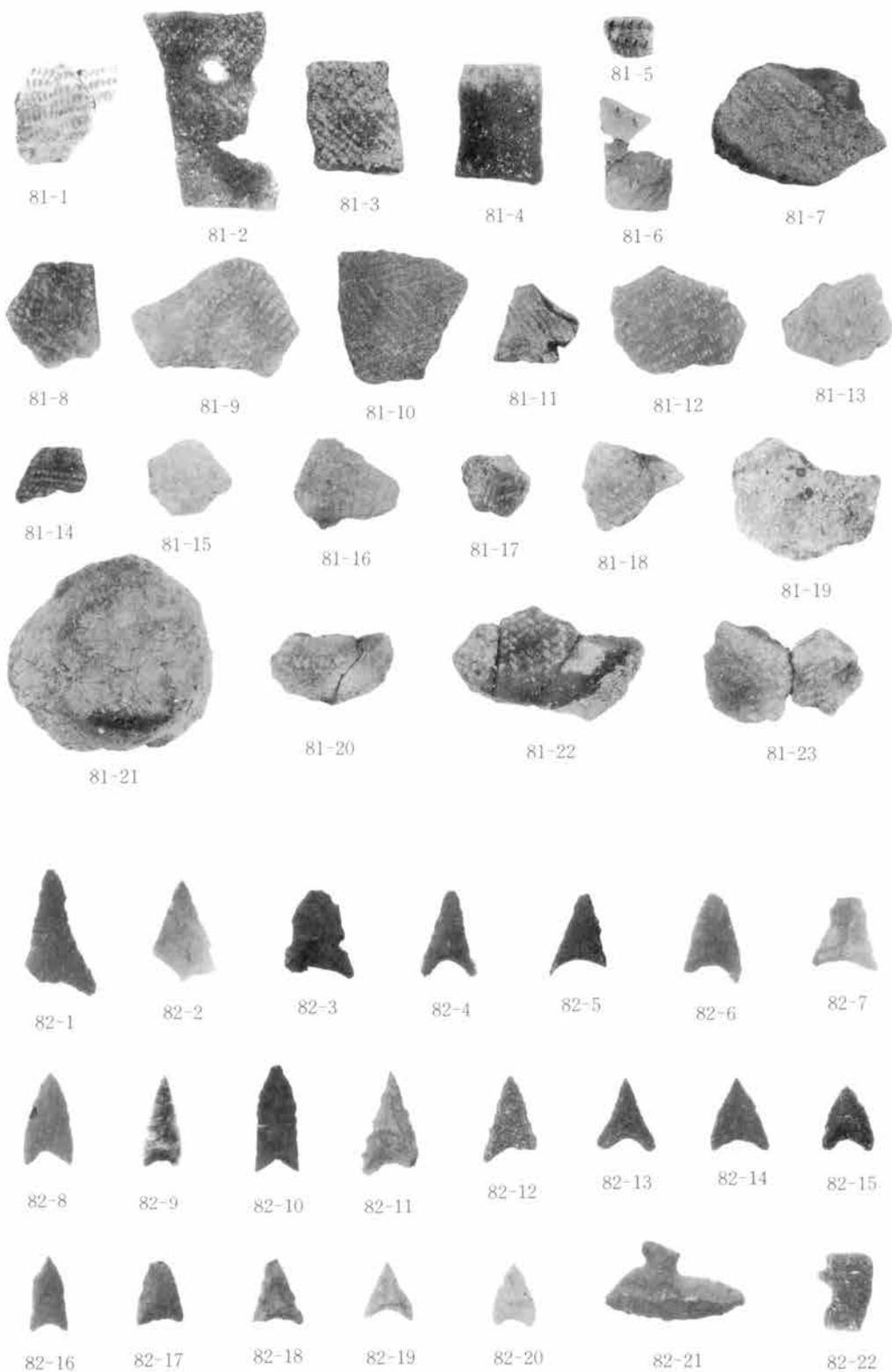
80-4



80-5



80-6



繩文式土器、石器



82-23



82-24



82-25



82-26



84-50



83-41



83-28



83-29



83-30



83-39



83-32



83-36



83-34



83-35



83-33



83-38



83-37



83-31



83-40



83-27



83-42



83-43



83-44



83-45



84-51



84-46



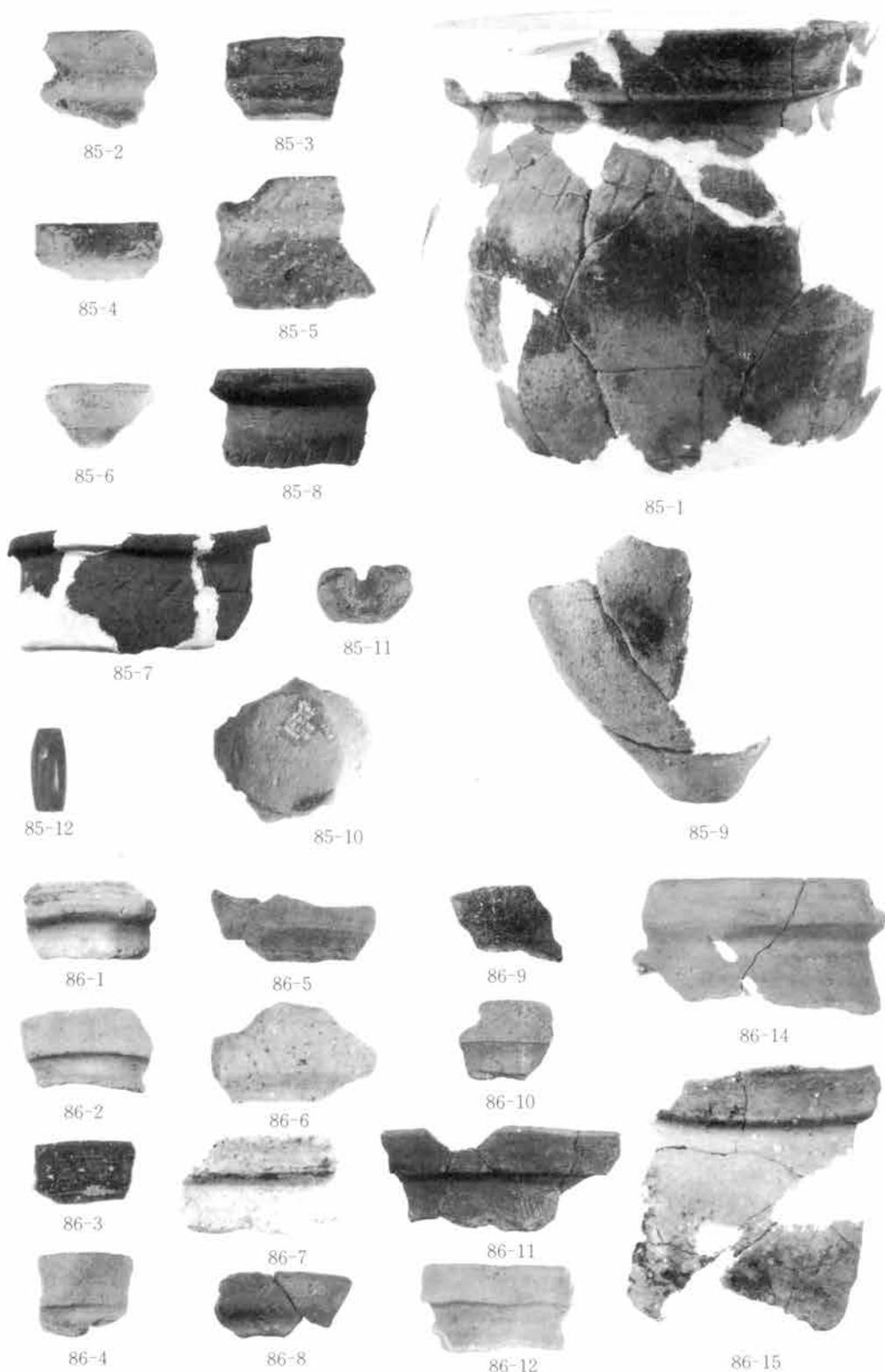
84-47



84-48



84-49



包含層出土遺物



86-13



87-20



86-19



86-16



87-22



86-17



87-24



87-23



86-18



87-25



87-21



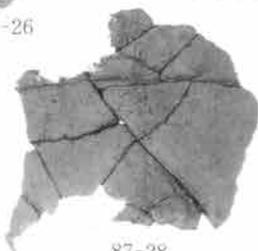
87-26



87-27



87-30



87-28



87-31



87-29



87-32



88-34

88-35

88-36



88-37

88-38



88-39



88-40



88-41



88-42



88-43



88-44



88-45



88-33



88-46



88-47



88-48



88-49



88-50



88-52



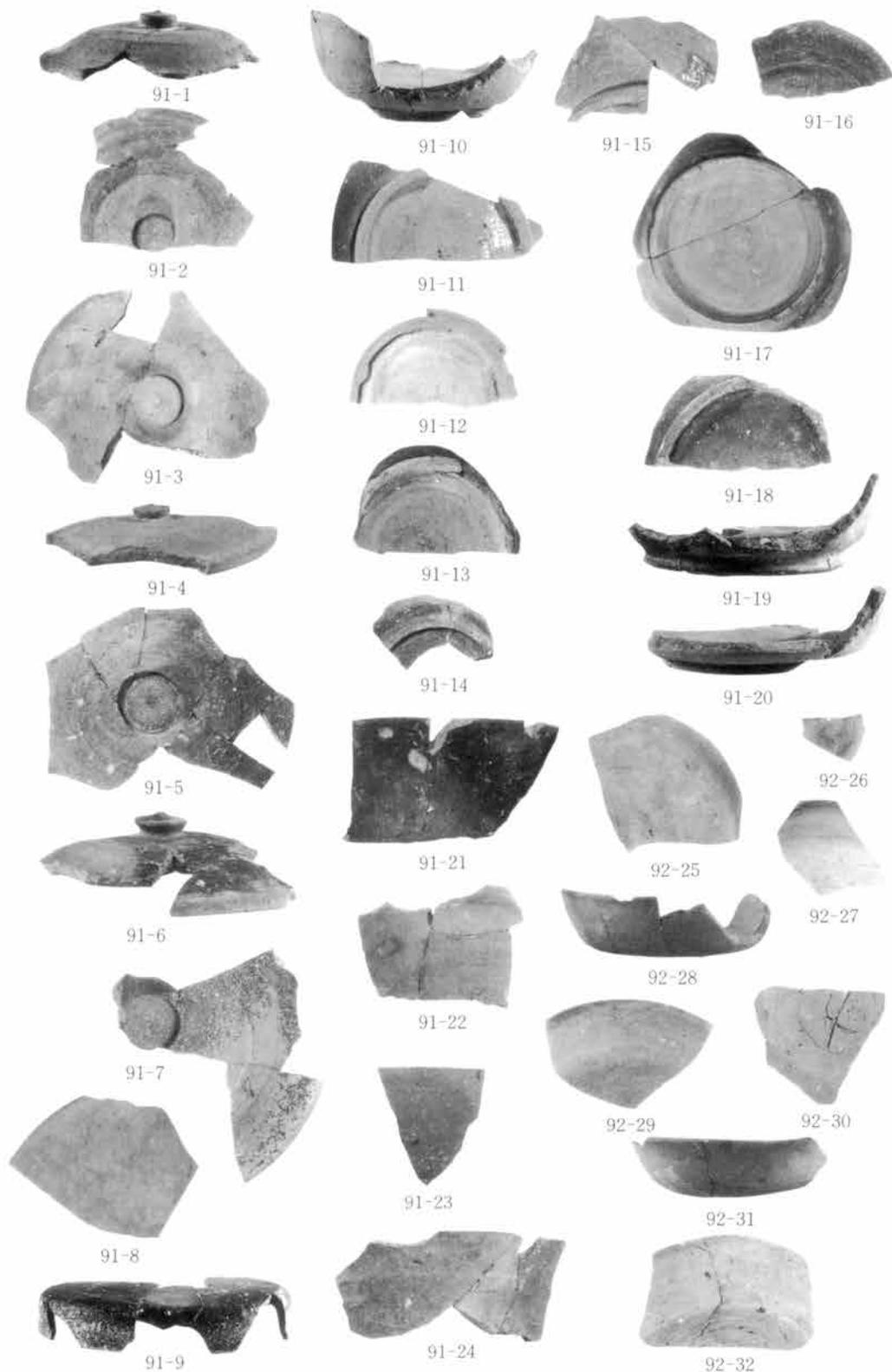
88-51



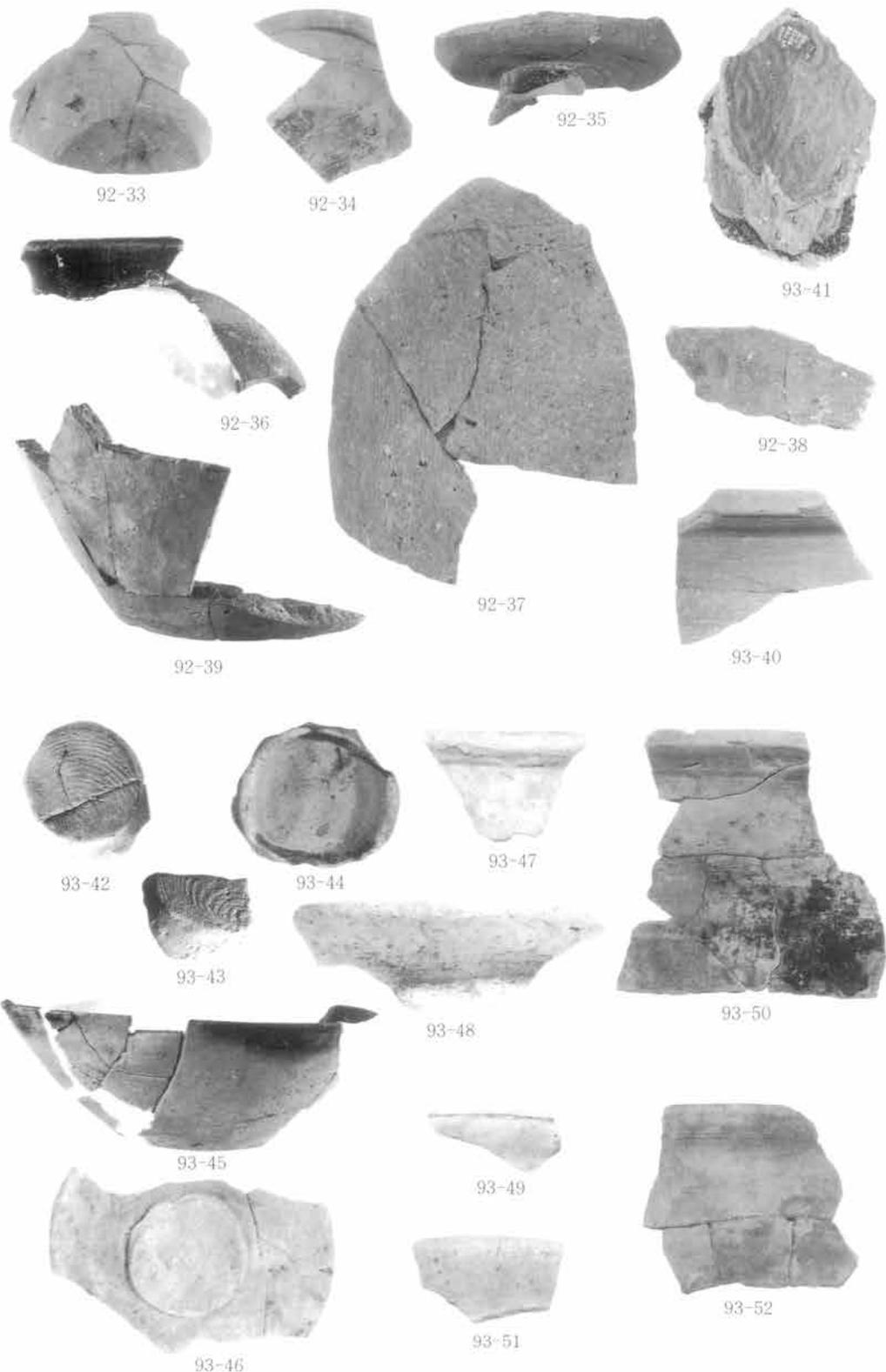
88-53



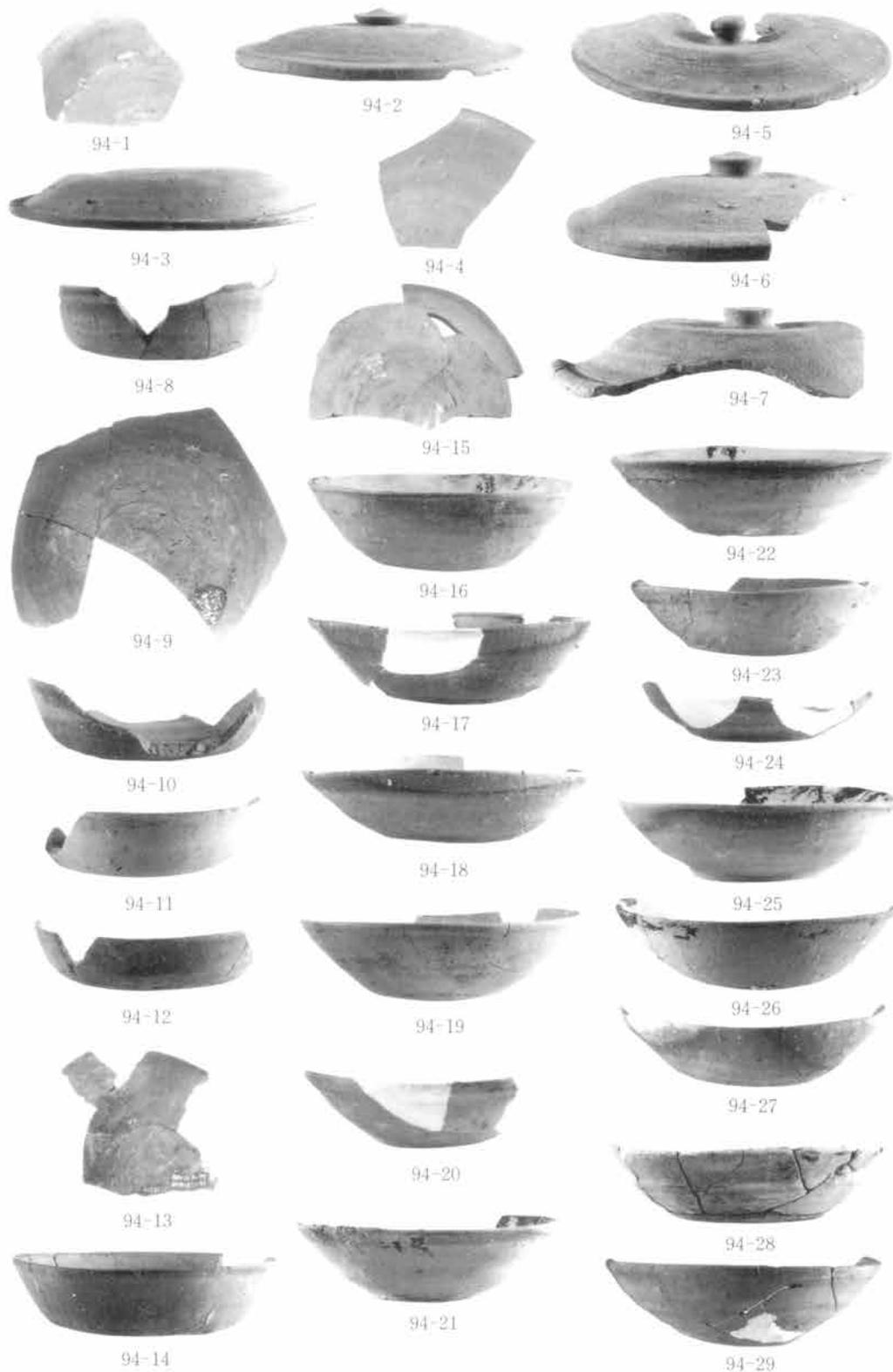
包含層出土遺物



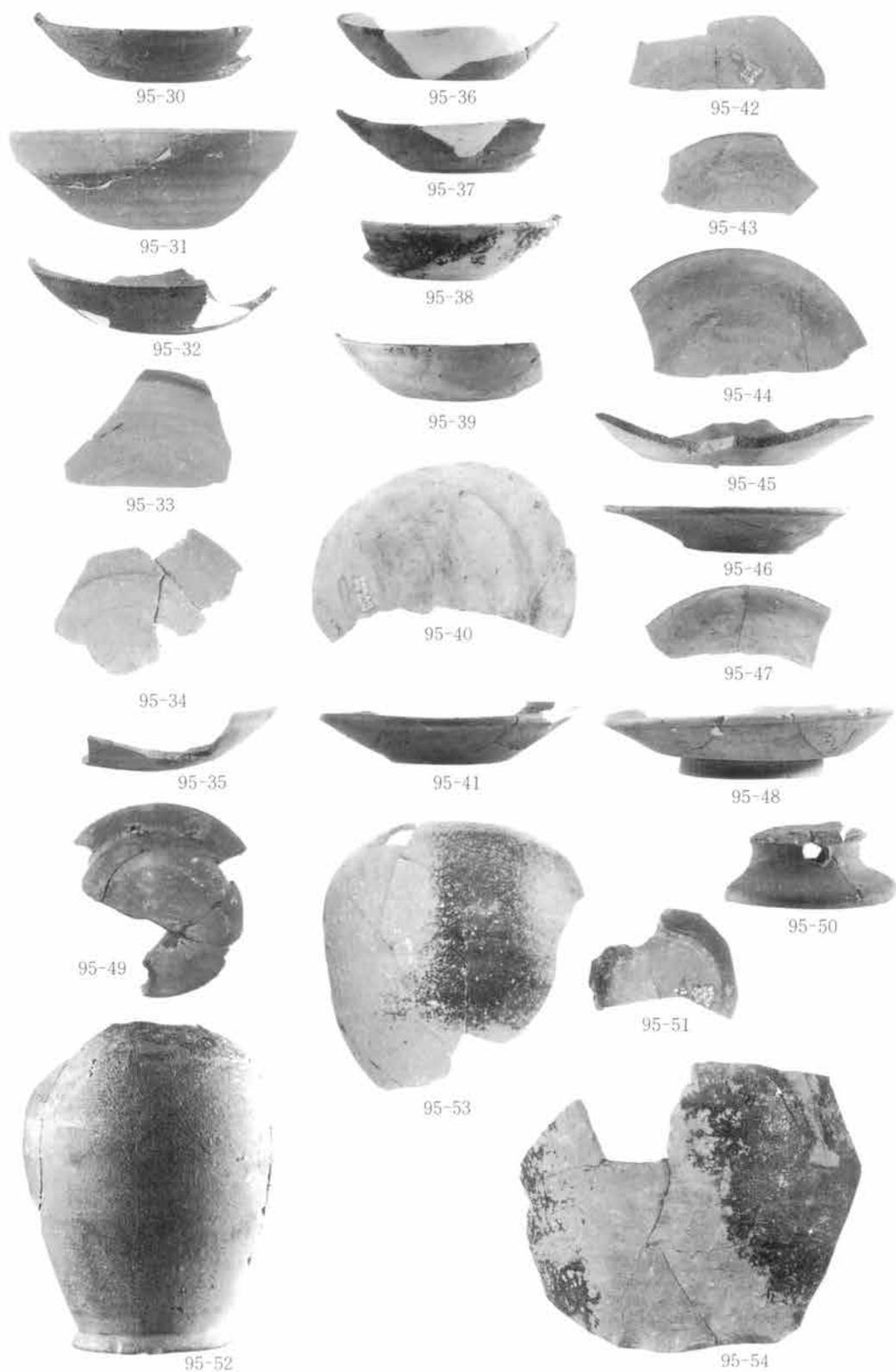
北側調査区出土土器



北側調査区出土土器



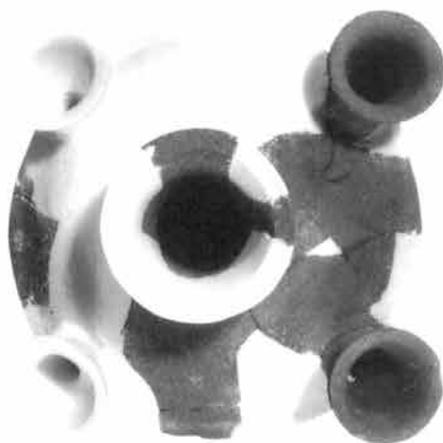
南侧調査区出土土器



南侧調査区出土土器



96-55



96-56



96-57



96-58



96-59



96-60



96-61



96-62



96-63

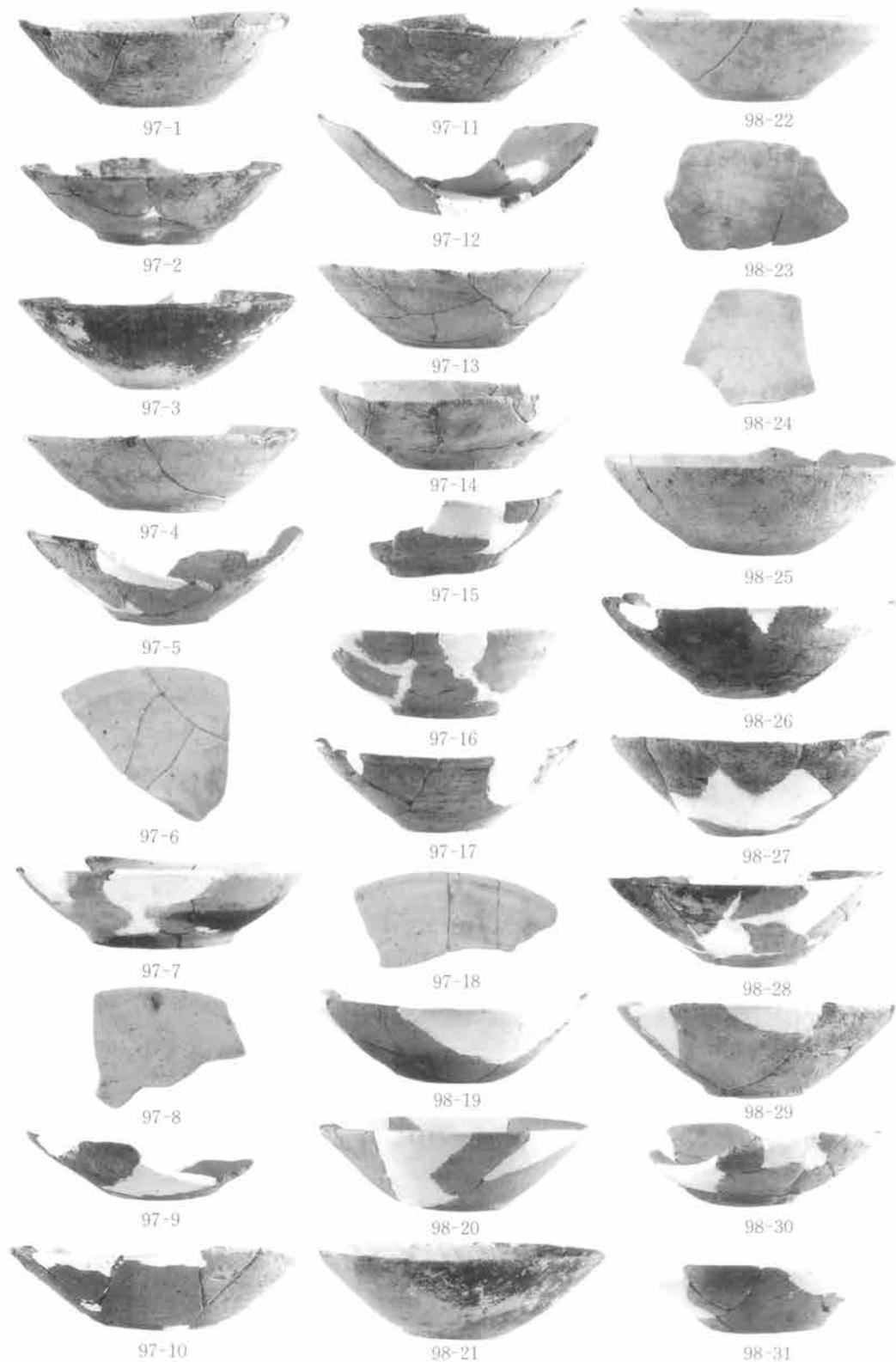


96-64

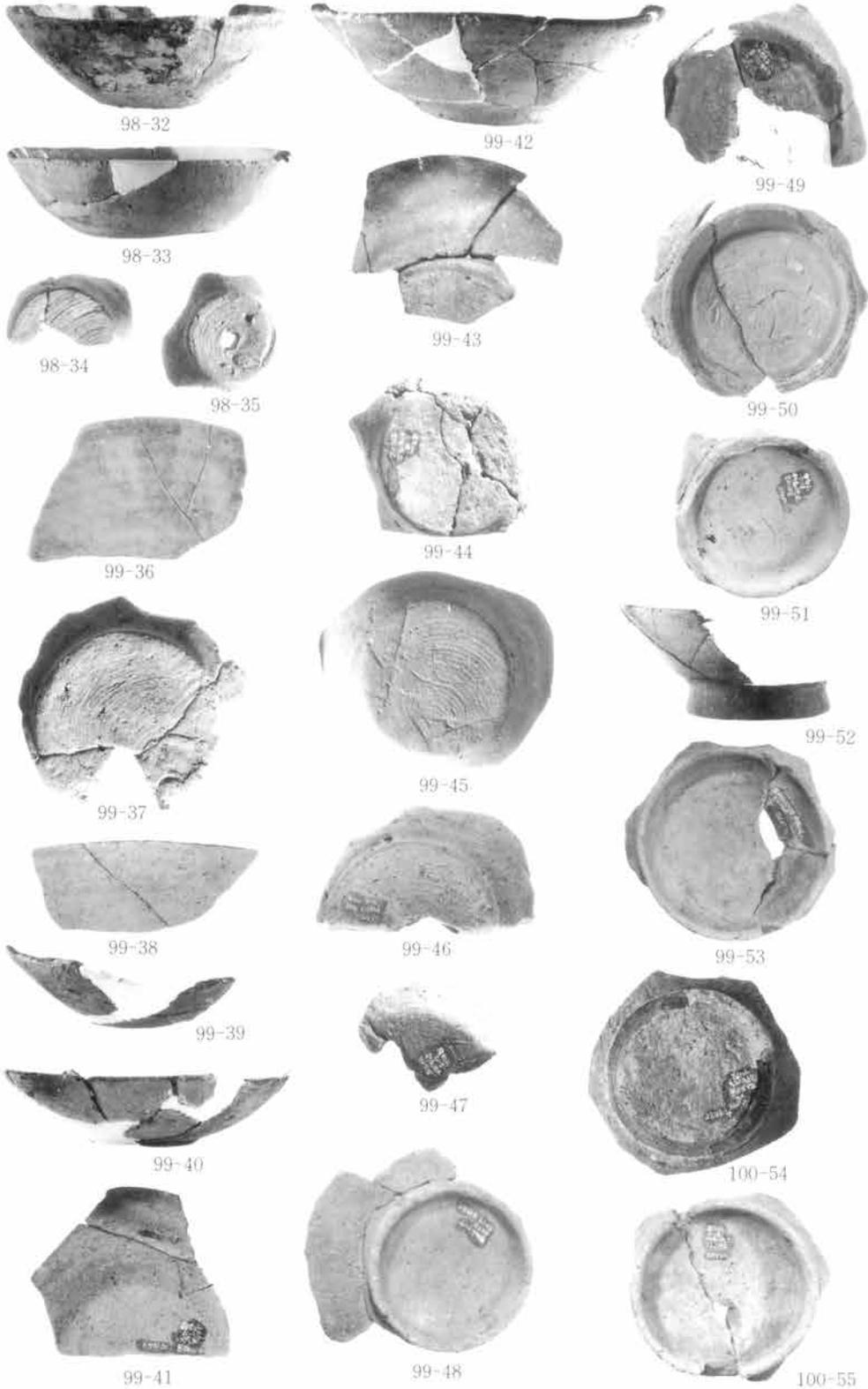


96-65

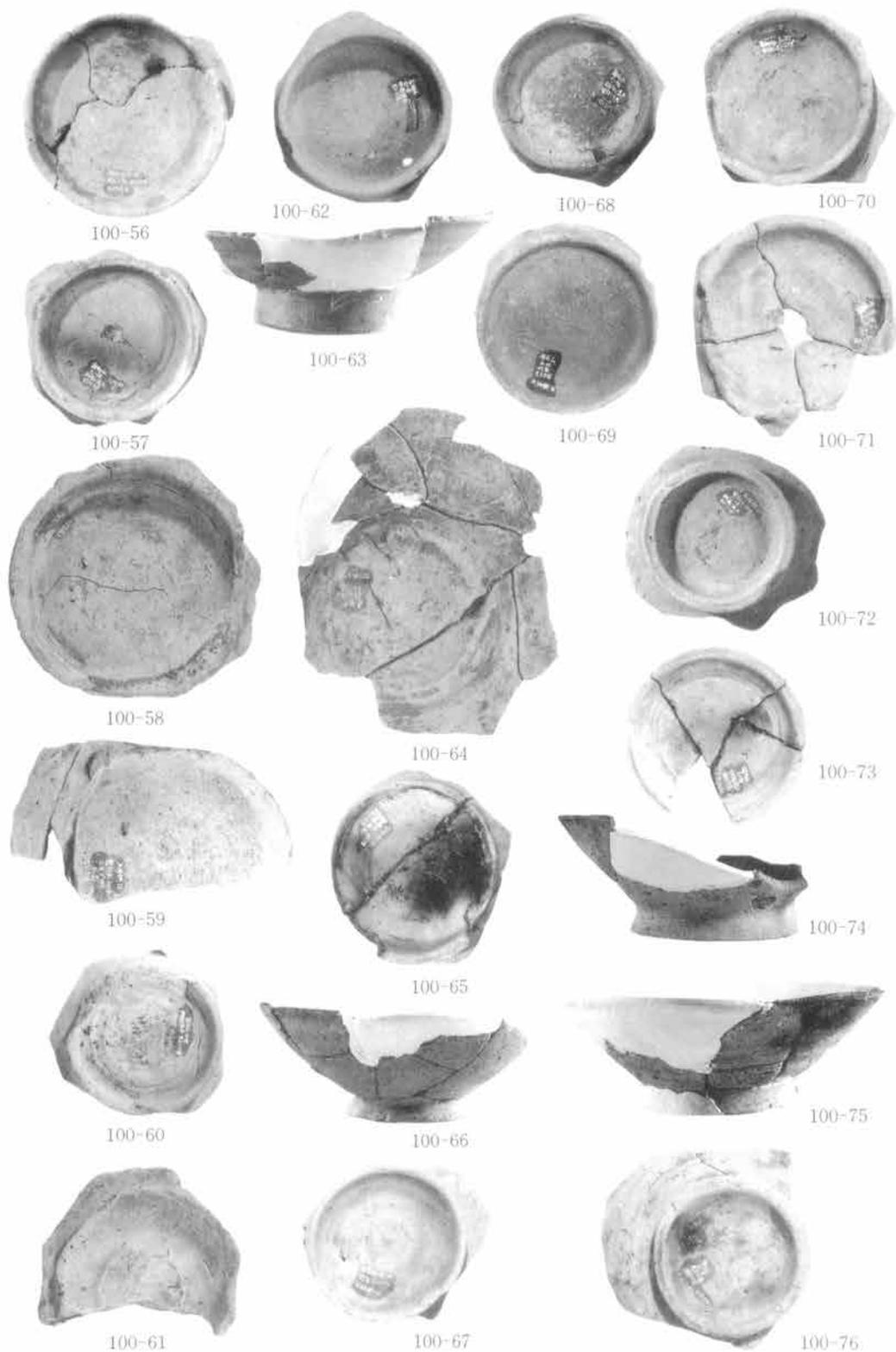
南側調査区出土土器



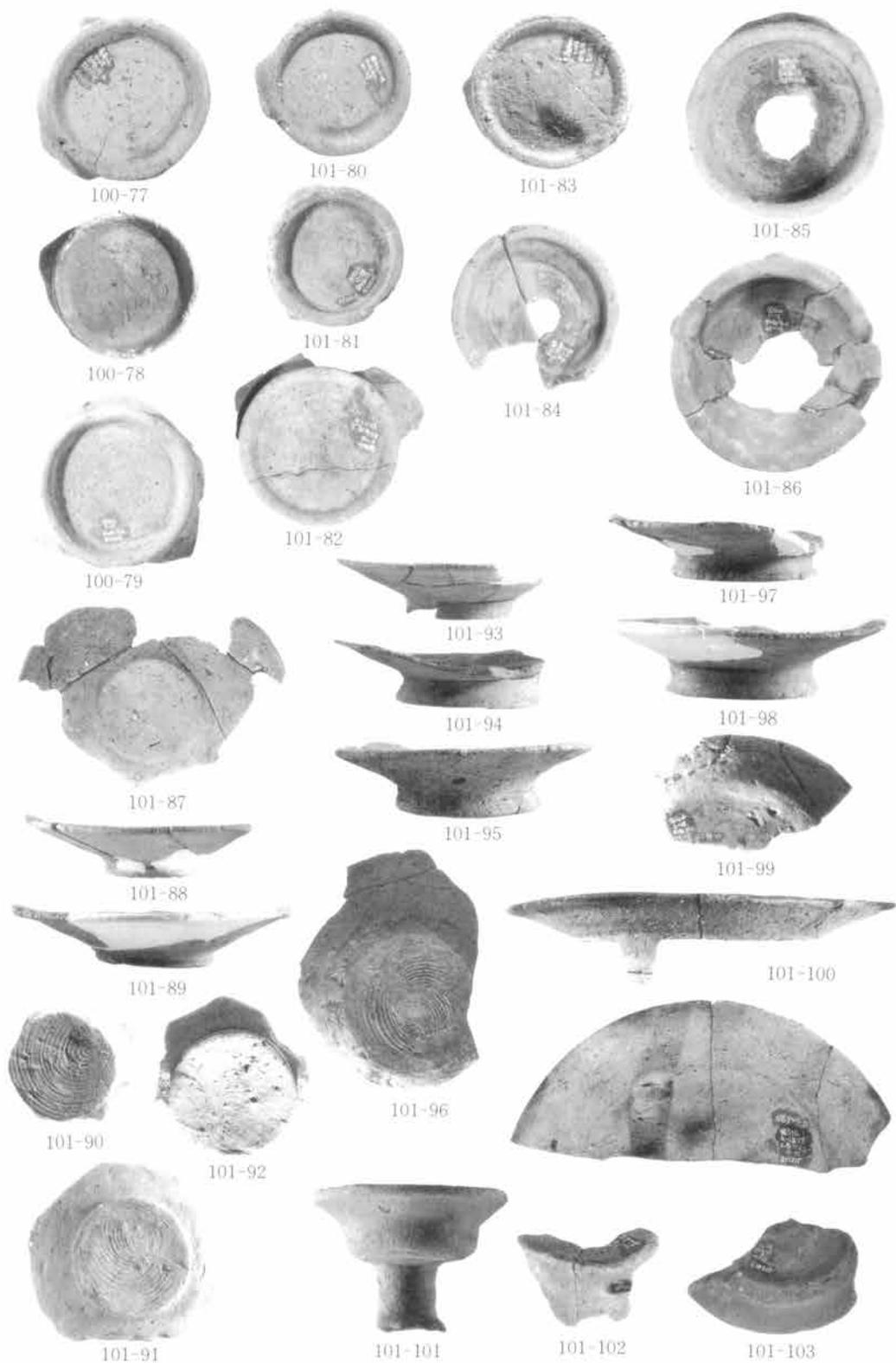
南侧调查区出土土器



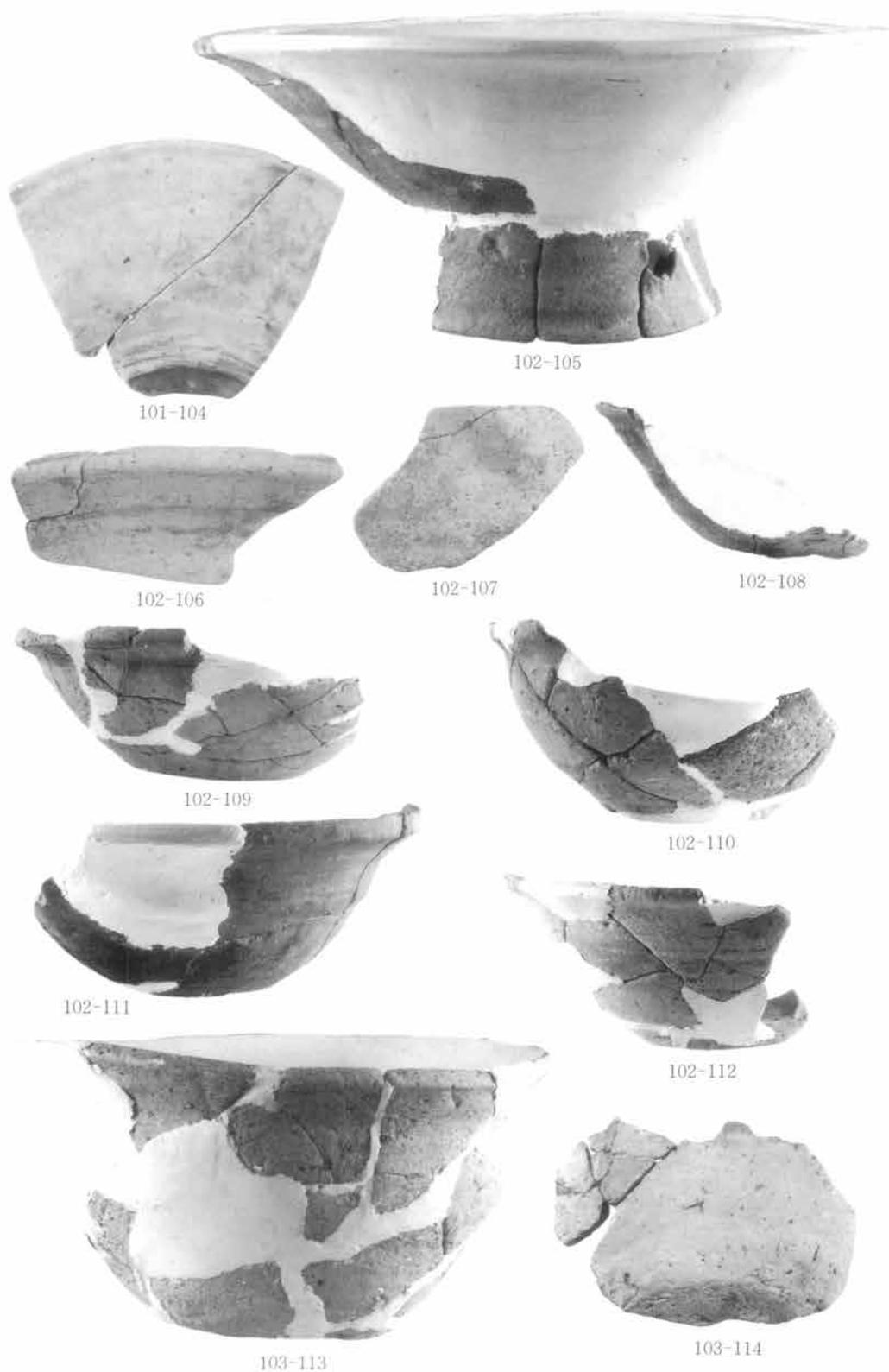
南側調査区出土土器



南関調査区出土土器



南側調査区出土土器



南侧調査区出土土器



103-115



103-116



103-117



103-118



103-119



103-120



103-121



103-122



103-123



103-124



104-125



104-126



104-127



104-128



104-129



104-130



104-131



104-132

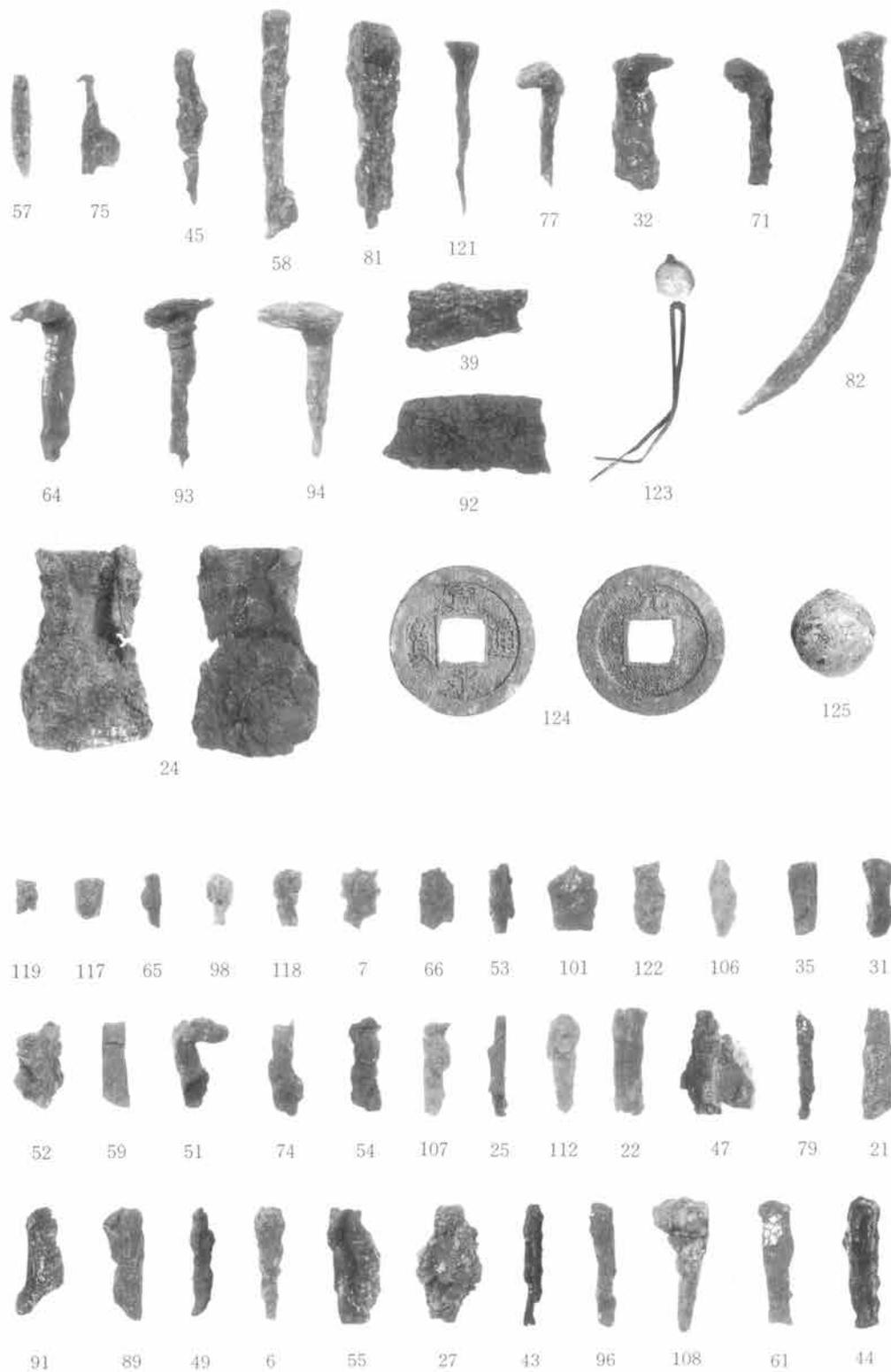


104-133

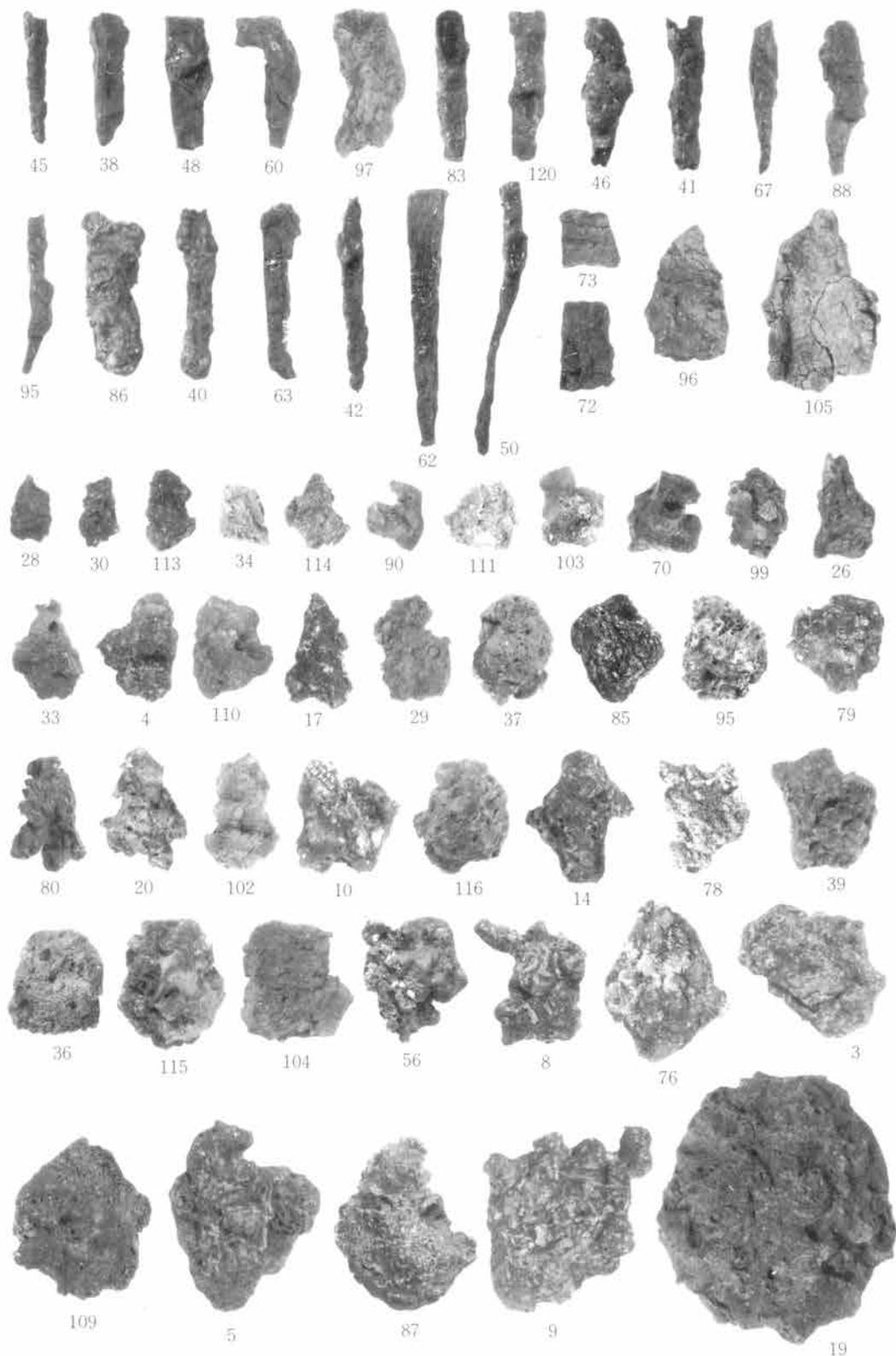


104-134

南侧調査区出土土器



出土金属器



出土鐵器、鐵滓



## 宿向山遺跡

一般国道159号線押水バイパスに係る  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

印刷・発行 1987年3月  
編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
〒921 石川県金沢市米泉町4-133  
印刷 ヨシダ印刷株式会社  
〒921 石川県金沢市御影町19-1



